宮城県文化財調査報告書第187集

名生館遺跡ほか

平成13年3月

宮城県教育委員会

序　　文

近年、高度情報化社会や少子・高齢化の進行など、私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。このような中、「地方の時代」と呼ばれるように、地域住民の間で身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みなどへの気運が急速に高まってきています。

しかし一方では、道路建設や大規模なほ場整備をはじめ、都市化の波が地方にも押し寄せ、宅地造成や住宅建築などの生活関連の各種開発事業が年を追うごとに激化する中で、文化財は破壊・消滅の危機にさらされることが多くなってきております。特に、土地との結びつきが強い埋蔵文化財は、常に各種の開発によって破壊されるおそれがあることから、当教育委員会は関係開発機関との十分な協議を重ねるなど、貴重な埋蔵文化財を積極的に保護し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は、開発関係機関などの間で調整した結果、調査に至ったもののうち、平成12年度に当教育委員会が国庫補助金を得て本発掘調査及び確認調査を実施した名生館遺跡他２遺跡と前年度調査した１遺跡の成果を収録したものであります。この成果が県民の多くの皆様や各地の研究者に広く活用され、それぞれの地域の歴史の解明と文化財保護の理解に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、各遺跡の保存にご理解を示された開発機関の方々をはじめ、調査にあたり多大なご協力をいただきました関係市町村教育委員会に対し、深く感謝申し上げる次第です。

平成13年３月

宮城県教育委員会

教育長　柿　﨑　征　英

平成12年度発掘調査の概要

宮城県教育委員会が平成12年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金(総事業費6,100千円、補助率1/2) を得て実施した発掘調査は5ヶ所、分布調査地域は3町である。

名生館遺跡は古川市北西部、東大崎の台地上に立地している。平成7年度に国指定史跡である名生館官衙遺跡の西側から南側一帯が県営ほ場整備事業計画地内に含まれたのに伴い、平成10年度から発掘調査を進めている。今年度の調査は、昨年度調査した第II工区西側とその北側及び南側の水田・道路敷にかかわる確認調査と水路敷にかかわる事前調査である。調査の結果、古代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡27棟、井戸跡8基、溝跡166条、土壙389基等の他、近世の窯跡1基が検出された。なお、名生館官衙遺跡に近い北東部の調査区から竪穴住居跡や掘立柱建物跡が数多く発見された。

一本柳遺跡・小沼遺跡は、遠田郡小牛田町南東部、鳴瀬川左岸の自然堤防上に立地している。一本柳遺跡は宮城県教育委員会が平成7年度から5ヵ年にわたって、鳴瀬川の堤防改修と中流堰建設に先立って遺跡南側を事前調査した際に、古代から中世にかけての大規模な集落跡・屋敷跡を確認している。一本柳遺跡北側に計画された県営ほ場整備事業に伴い、平成11年度から発掘調査を進めているが、今年度の調査は一本柳遺跡東側の用水路部分・中央部の揚水機部分、小沼遺跡西側の用水路部分の事前調査である。一本柳遺跡では古代の溝跡10条、土壙14基等、小沼遺跡では古代・中世の井戸跡1基、溝跡5条等が発見された。

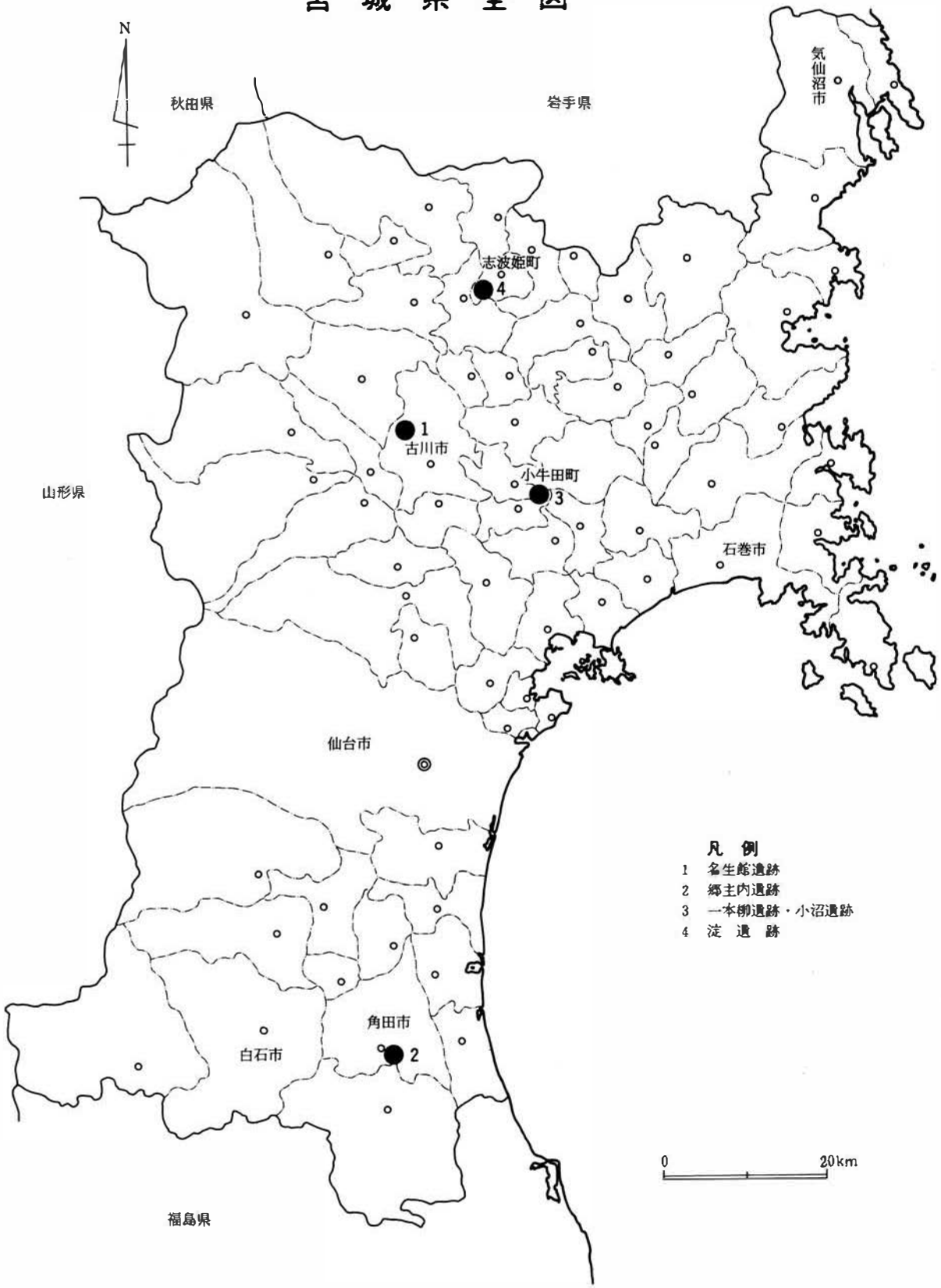
淀遺跡は栗原郡志波姫町北西部、一迫川によって形成された河岸段丘上の北縁部に立地している。この遺跡は当初周知されていなかったが、大規模な宅地造成が計画されていたため、周辺一帯を分布調査したその結果、開発区域で古代の遺物を発見した。このため開発者・町及び県教育委員会の三者で協議し、遺跡の範囲及び遺構の分布状況を把握する確認調査を実施した。調査の結果、31軒の竪穴住居跡をはじめ多数の遺構が対象区域全域で検出された。その後、三者で再協議を行い、工事が遺跡に及ぼす影響を最小限にとどめるよう設計・工法・施設配置等を検討することで合意した。

なおこの他、昨年度3月に県営ほ場整備事業に伴って確認調査した角田市郷主内遺跡も併せて収録した。

平成12年度国庫補助事業一覧

No	遺跡名	所在地	調査の種類	開発事業の種類	開発担当部局
1	名生館遺跡	古川市東大崎	事前調査	県営ほ場整備事業	宮城県古川産業振興事務所
2	一本柳遺跡他	遠田郡小牛田町一本柳	事前調査	県営ほ場整備事業	宮城県古川産業振興事務所
3	淀遺跡	栗原郡志波姫町沼崎字道崎	確認調査	宅地造成	JA栗っこ
4	母子沢遺跡	塩竈市母子沢町	確認調査	宅地造成	個人
5	鵜目館跡	玉造郡岩出山町池月字鵜目	確認調査	農地造成	個人
6	彫堂七館跡地	遠田郡小牛田町他3町	分布調査	土地改良事業	宮城県産業経済部

宮 城 県 全 図


N
秋田県
岩手県
気仙沼市
志波姫町
4
1
古川市
小牛田町
3
山形県
石巻市
仙台市
角田市
白石市
2
福島県
凡 例
1 名生館遺跡
2 郷主内遺跡
3 一本柳遺跡・小沼遺跡
4 淀 遺 跡
0
20km

目　　次

平成12年度調査の概要
名生館遺跡……1
郷主内遺跡……113
一本柳遺跡・小沼遺跡……139
淀遺跡……151

例　　言

1．本書は宮城県が平成12年度の埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査の報告書である。

2．各遺跡の発掘調査から調査報告書にいたる一連の作業は、調査原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。

3．各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、開発担当部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。

4．本書に使用した土色の記述は、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を参照した。

5．本書に使用した各遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の1/25,000もしくは1/50,000の地形図を複製して使用した。

6．本書の図中の座標値は、国家座標第Ｘ系による。

7．本書は調査員全員の協議を経て、下記のものが執筆・編集した。

平成12年度発掘調査の概要	阿部博志
名生館遺跡	須田良平・吉野　武・稲毛英則
郷主内遺跡	岩見和泰
一本柳遺跡・小沼遺跡	引地弘行
淀遺跡	古川一明

8．発掘調査、遺構・遺物の整理、報告書の作成にあたって、次の機関・個人からご協力、ご教示いただいた。（敬称略）

東京国立博物館・京都国立博物館・東北歴史博物館
安達訓仁・安達俊男・吾妻俊典・井口喜晴・遠藤智一・及川　規・笠原信男・小井川和夫・阪田宗彦・佐藤正人・佐藤　優・佐藤芳彦・志間泰治・田中則和・原田敏一・藤沼邦彦・藤原二郎・本田泰貴・松井敏也・水沢幸一・望月幹夫

9．発掘調査で出土した遺物、調査記録類は宮城県教育委員会が保管している。

名生館遺跡

目　　次

第一章　遺跡の概要

Ⅰ．遺跡の位置と地理的環境……1

Ⅱ．遺跡の調査概要……1

Ⅲ．周辺の歴史的環境……3

第二章　調査の経過と調査方法……5

第三章　道路・水路敷の調査

Ⅰ．基本層序……7

Ⅱ．発見された遺構と遺物……8

Ⅲ．考察……70

Ⅳ．まとめ……77

第四章　大崎窯跡の確認調査

Ⅰ．発見された遺構と遺物……85

Ⅱ．考察……93

Ⅲ．まとめ……94

調　査　要　項

遺 跡 名：名生館遺跡（みょうだていせき）（宮城県遺跡地名表登載番号27018、遺跡記号 PJ）
　　大崎窯跡（おおさきかまあと）（宮城県遺跡地名表登載番号27206、遺跡記号 PZ）

所 在 地：宮城県古川市大崎字名生館他地内

調査原因：東大崎地区県営ほ場整備事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　須田良平・吉野　武・稲毛英則・引地弘行

調査期間：平成12年（2000年）4月10日～7月27日、10月2日～12月13日

調査対象面積：16,226㎡

調査面積：名生館遺跡：10,113㎡・大崎窯跡：830㎡

調査協力：宮城県古川産業振興事務所、大崎土地改良区、古川市教育委員会、宮城県農業公社

調査参加者：井上のぶ子、遠藤有一、遠藤とく江、小野克巳、笠原きえ子、笠原すみ子、笠原ましゑ、
　　笠原みよ子、加藤みき子、鹿野喜久子、鹿野しみ子、鹿野まき子、鹿野田雪子、
　　鹿野田洋子、佐々木栄子、佐々木敬子、佐々木善右エ門、佐々木はつえ、佐々木満智子、
　　渋谷恵美子、渋谷芳朗、菅原　剛、菅原　隆、曽根　健、曽根カツエ、高橋昭利、
　　舘野信子、門間友勝（五十音順）

整理参加者：木村奈保美、佐藤悦子、柴田とみ子、中島敦子、林　久子、森　幸子

第一章　遺　跡　の　概　要

Ⅰ．遺跡の位置と地理的環境

名生館遺跡は大崎平野の北西端にあたる古川市大崎字名生館、城内、名生北館・小野柄堂・上代・小館・弥栄に所在する。遺跡はJR陸羽東線東大崎駅の西側に広がり、奈良・平安時代の陸奥国府多賀城の北西約40㎞に位置する。

江合川と鳴瀬川の沖積作用で形成された大崎平野は東西約13㎞、南北約17㎞の広さをもつ。四周は主に丘陵で、東は広淵丘陵が南北に、南と北は各々三本木丘陵、清滝丘陵が西から東に延びる。西は江合・鳴瀬川が形成した扇状地が段丘化した高位段丘面（通称：青木原台地）が発達し、ゆるやかに傾斜（0.7～0.8°）しながら北西から南東に舌状に延びて沖積面下へ没している。高位段丘は第四紀更新世に噴出した浮石凝灰岩(柳沢凝灰岩)を主体とした堆積物で構成される。沖積地との漸移付近は礫・砂等の河岸段丘堆積物から成り、尾花沢－肘折テフラ層を挟むところもある。遺跡はこうした江合川右岸の高位段丘の南東端に立地する。標高は36～47m、沖積地との比高差は3～15mある(第4図)。

Ⅱ．遺跡の調査概要

古代：本遺跡では古代の土器や瓦が出土している。このうち瓦は城内地区と小館地区南東部に集中的に分布する。城内地区の瓦は多賀城創建以前のもの、小館地区の瓦は多賀城創建期のものを主体とする。一方、本遺跡の約1㎞南にある「伏見」の地名は『和名類聚抄』所載の玉造郡俯見郷とみられることから、古代の本遺跡周辺は玉造郡に属していたとみられる。これらのことから本遺跡は『続日本紀』所載の天平の五柵の1つ「玉造柵」の擬定地とされ、昭和55年から宮城県多賀城跡調査研究所が遺跡北東部の発掘調査を行い、その後は昭和61年から古川市教育委員会が調査を引き継いでいる(宮城県多賀城跡調査研究所 1981～1986、古川市教育委員会 1987～1996)。

調査の結果、本遺跡は7世紀後葉～9世紀代の官衙跡で、Ⅳ期の変遷が考えられている(鈴木 1991)。中枢の政庁は第Ⅱ期(7世紀末～8世紀初頭)が城内地区、第Ⅲ期(8世紀前半～後半)が小館地区南東部、第Ⅳ期（8世紀後半～9世紀）が小館地区西部にあり、遺跡内を移動している。政庁自体の構造も第Ⅱ・Ⅳ期が明らかになっている。官衙の性格は城柵ではなく、第Ⅱ期が和銅6年（713）建郡の丹取郡家及び前身の評家、第Ⅲ・Ⅳ期が神亀5年(728)前後成立の玉造郡家とみられる。また、第Ⅰ～Ⅲ期の造営には東北南部や関東地方からの移民の関与が考えられている(進藤 1990、高橋・村田 1996)。

中世：本遺跡は室町・戦国時代に奥州探題大崎氏の居城「名生城」があった場所でもある。遺跡内には「大崎」「名生館」「城内」「小館」等の小字名や「北館」「内館」「大館」「二の構」等の地名が残っている。これまでの調査で遺跡内の各所から堀跡や溝跡、柱列跡等が、内館地区からは名生城期とみられる多量の炭化米が検出されている。主要な建物の配置等はまだ不明だが、最近の調査では城内地区南部で大型の総柱建物跡が確認されており、少しづつ明らかになりつつある。

No	遺跡名	種別	No	遺跡名	種別	No	遺跡名	種別
1	名生館遺跡	官衙(五浦郡衙)・集落 ※	16	目の出山窯跡群	瓦・須恵器窯(多賀城Ⅰ期)	31	新谷地北遺跡	墓 ※
2	伏見廃寺跡	郡衙付属寺院	17	大門遺跡	瓦窯？	32	日光山古墳群小高支群	横穴墓 ※
3	宮沢遺跡	城柵(推定玉造柵跡) ※	18	権現山遺跡	集落 ※	33	〃 成沢支群	横穴墓
4	三輪田遺跡	城柵付属寺院 ※	19	上代遺跡	集落 ※	34	川北横穴墓群	横穴墓 ※
5	杉の下・小寺遺跡	城柵	20	高幌遺跡	集落	35	色麻古墳群	終末墳 ※
6	南小林遺跡	官衙 ※	21	元宿遺跡	集落	36	東原横穴墓群	横穴墓
7	熊野堂遺跡	官衙？	22	地蔵東遺跡	集落 ※	37	根谷地横穴墓群	横穴墓
8	城生柵跡	城柵(推定色麻柵跡)	23	堤根遺跡	集落	38	坂本館山横穴墓群	横穴墓
9	菜切谷廃寺跡	城柵付属寺院	24	舟場・中沢遺跡	集落	39	青山A横穴墓群	横穴墓
10	一の関遺跡	寺院	25	安藤前遺跡	集落	40	青山B横穴墓群	横穴墓
11	大吉山窯跡	瓦窯(多賀城Ⅰ期)	26	小高横穴墓群小高支群	横穴墓	41	寺下横穴墓群	横穴墓
12	合戦原窯跡群	瓦窯、須恵器窯	27	〃 朽木橋支群	横穴墓 ※	42	山畑横穴墓群	横穴墓 ※
13	土器坂窯跡	瓦窯	28	〃 岩崎支群	横穴墓	43	混内山横穴墓群	横穴墓 ※
14	愛宕山窯跡	瓦窯	29	内林古墳群	群集墳	44	多高田横穴墓群	横穴墓
15	官林窯跡	瓦窯	30	塚原古墳群	群集墳 ※			

※印 関東系土師器出土

第1図　名生館遺跡と周辺の遺跡

ところで、本遺跡の範囲は城内地区を中心に東西約800m、南北約800mと従来はされていた。また、政庁跡が確認された城内地区ほかは平成6年に国指定史跡とされ、名生館官衙遺跡として登録されている。だが、本調査に先立つ確認調査(天野1999)や周辺の高幌遺跡(佐藤1996)、上代遺跡(菅原1997)の調査等から、本遺跡の範囲は南と西に広がることが確認された。よって、古代の本遺跡周辺は本遺跡と伏見廃寺跡、高幌・上代遺跡が接しており、相互に強く関わっていたとみられる。

III. 周辺の歴史的環境

本遺跡が官衙として機能した時代、特に7世紀～8世紀前半を中心に周辺の様子を述べる。この時代は律令国家によって大崎地方に建評・郡が行われ、城柵や官衙が多数造営された時代である。また、こうした建評・郡や造営には東北南部や関東地方からの大規模な移民の関与が考えられている。

この頃の本遺跡周辺の遺跡を城柵官衙とその関連遺跡、窯跡、墳墓の順にみてみる。城柵官衙とその関連遺跡はすこぶる多い。まず、本遺跡南1kmに伏見廃寺がある。金堂跡とみられる乱石積み基壇が確認され、周辺から本遺跡第II期郡庁院と同笵、同類の瓦や多賀城跡政庁第I期の瓦が出土しており、名生館官衙の付属寺院とみられる(佐々木 1971、進藤 1990)。また、本遺跡南西4kmに色麻柵跡推定地の城生柵跡と付属寺院の菜切谷廃寺跡があり、さらに西には賀美郡家跡の東山遺跡がある。

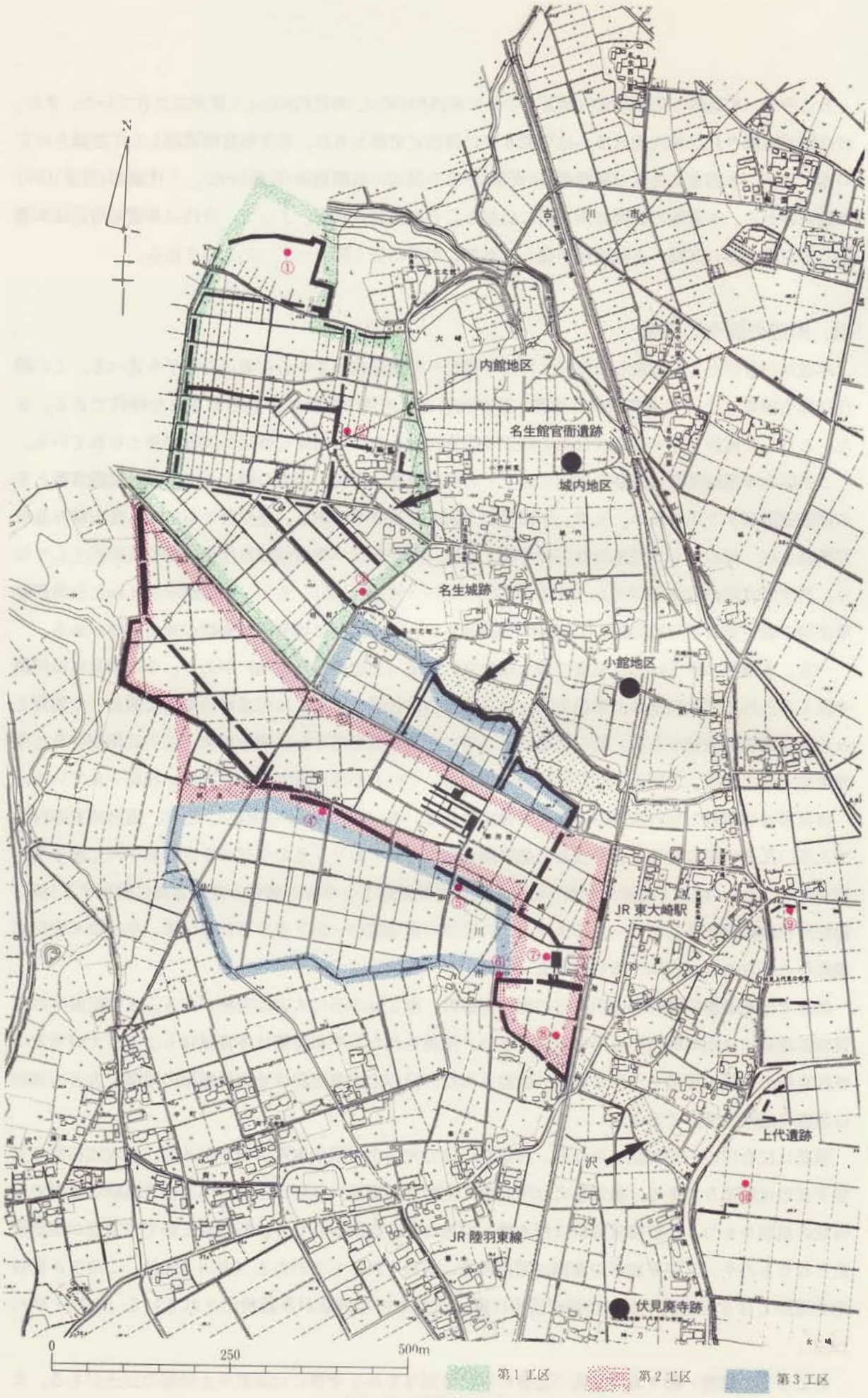
一方、本遺跡の東5kmには城柵で最大級の宮沢遺跡（玉造柵跡推定地）があり、その南東には付属寺院とみられる三輪田遺跡が隣接する。さらに東の小丘陵と裾部には両遺跡の造営に関わった集落とみられる権現山遺跡がある。権現山遺跡は三辺に大溝と柵を巡らし、南を東流する川に接続させた環濠集落とみられる。内部は掘立柱建物を主体とし、それらが柵や溝でブロック毎に区画されている。

官衙跡は本遺跡と宮沢遺跡の中間でも確認されている（杉の下・小寺遺跡)。近年、遺跡南東端付近で大型の瓦葺き総柱建物を含む複数の建物跡が検出されており、その年代は8世紀前半代に遡る可能性がある。また、杉の下遺跡の南東1kmにある南小林遺跡でも今年の調査で東西方向に直列する5棟の総柱建物跡が確認されており、郡家クラスの官衙の倉庫院の一部と考えられている。年代は8世紀初頭前後とみられる（古川市教育委員会 2001)。

窯跡では本遺跡の南10kmの所に日の出山窯跡群、東2kmの所に大吉山窯跡がある。8世紀前半の多賀城創建期には大崎地方の各所に窯が営まれ、生産された瓦や須恵器は多賀城はもとより大崎地方の城柵官衙・寺院・墳墓・一部の集落へ供給された。日の出山窯跡群はその最盛期の段階、大吉山窯跡は最後の段階の窯跡である。

墳墓は江合川の左岸に認められる。群集墳には日光山古墳群や塚原古墳群がある。横穴式石室の玄室平面形は胴張りである。横穴墓には川北横穴墓群や小野横穴墓群がある。川北横穴墓群は県内でも有数の規模をもつ。小野横穴墓群は朽木橋・羽黒など6支群からなり、朽木橋支群では玄室が複室構造となるものや、玄室平面形の類例が関東地方に求められるものがある（古川 1996)。このほか新谷地北遺跡では8世紀前半から10世紀前半以降にかけての木棺墓が多数検出されている（木皿・早川 1992)。

ところで、建評・郡や城柵官衙の造営に移民の関与をみる背景には関東系土師器の出土がある。大


N
内館地区
名生館官衙遺跡
城内地区
名生城跡
小館地区
JR 東大崎駅
上代遺跡
JR 陸羽東線
伏見廃寺跡
0
250
500m
第1工区
第2工区
第3工区

第2図　遺跡周辺の様子

崎地方で関東系土師器が出土する遺跡数のピークは7世紀後葉～8世紀前半で、名生館周辺でも本遺跡をはじめ集落跡の上代遺跡、墳墓の日光山・塚原古墳群、川北・小野横穴墓群、新谷地北遺跡、官衙・寺院跡の南小林・宮沢・三輪田遺跡、それらの造営に関わる権現山遺跡などで出土している。権現山遺跡では7世紀後葉～8世紀前葉の土師器のうち約7割が関東系との指摘もある(高橋・村田 1996)。出土地が墳墓を除くと官衙・寺院跡やその周辺であること、大崎地方でのピークが建評・郡や城柵官衙の造営期と一致することからすると、移民はそれらに深く関与したと考えられる（村田 1995)。

このように大崎地方には7世紀後葉～8世紀前半の城柵官衙跡、寺院跡、生産遺跡などが多く認められる。また、それらのなかには関東系土師器が出土する遺跡もある。冒頭でふれたようにこの時代には律令国家による建評・郡が行われた。それは当地方における律令制的支配の成立と浸透を意味する。とすれば、上記のような遺跡はその実態を知るうえで重要である。そして、城柵官衙跡のなかでも創建が早い本遺跡は極めて重要な遺跡といえる。

第二章　調査の経過と調査方法

本調査は古川市東大崎地区県営ほ場整備事業に伴うものである。この事業に伴う発掘調査は平成8年度の試掘調査をへて、一昨年度から本調査に入り、今年で3年目となる。調査に至る経過と昨年度、一昨年度の調査成果はすでに報告書にまとめられている(天野 1999、村田ほか 2000)。よって、それらの内容についてはここでは省略する。

今年度は第II工区と第III工区北の調査である（第2・3図)。第II工区については昨年度にJR東大崎駅周辺の調査を終了しており、今年はその南側と西側が調査部分となる。調査対象は道路・水路敷で、水路敷は掘削が遺構面に及ぶため事前調査、道路敷は未舗装で掘削も遺構面に及ばないので確認調査に留めた。調査区は細長く、かつ広範囲であるため、昨年度までの調査区A～M、N(1～3)、O（1）区に引き続き、N（4・5)、O（2)、P～V区に分割し、さらに畦畔などを境にP－1区、P－2区などのように細分した。

ところで、平成8年度の試掘調査の際にJR東大崎駅の約200m西方に近世の窯道具や製品が散乱する地点が確認された。道路・水路敷の調査に直接の関わりはないが、付近に窯跡(大崎窯跡)の存在が予想されたので、昨年度に散乱地点を中心に調査区を設定し、窯跡の位置や規模を確認するための調査を行った。しかし、調査区の制約もあり、調査は不十分であったとの認識から、範囲を広げて今年度再び確認調査を行うことにした。

調査は耕作等との関係で4月10日～7月27日（第II工区と窯跡部分）と、10月2日～12月13日（第III工区北）の2度に分けて行った。検出した遺構は国家座標軸を基準線として3×3グリットを設定し、1/20または1/100平面図、1/20断面図を作成した。同時に35㎜、6×7モノクロ・カラーリバーサルによる写真記録も行った。以上の方法で調査を進め、12月13日に今年度の調査を終了した。道路・水路敷の調査対象面積は16226㎡、発掘面積は10113㎡、窯跡部分の発掘面積は827㎡であった。

N
T−2区
T−1区
R−6区
S−3区
S−2区
R−5区
R−4区
R−3区
S−1区
R−2区
R−1区
Q−9区
Q−7区
Q−8区
Q−6区
Q−5区
Q−4区
Q−3区
Q−2区
Q−1区
大崎窯跡調査区
V−6区
V−5区
V−4区
V−3区
V−2区
V−1区
U−3区
U−2区
U−1区
東大崎駅
N−4区
N−5区
P−2区
O−2区
P−1区
本年度調査
昨年度調査
0
100
200m

第3図　調査区の位置

第三章　道路・水路敷の調査

Ⅰ．基本層序（第４図）

本遺跡の層序は地点によって層厚が異なるものの、基本的にⅠ層：耕作土、Ⅱ層：旧表土（黒ボク土）、Ⅲ～Ⅵ層：ローム層、Ⅶ層：岩盤に大別される。以下、各層の特徴を記す。

Ⅰ層：耕作土である。部分的に現代の盛土も含まれる。

Ⅱ層：黒ボク土（旧表土）である。Ⅲ層との境界に部分的に漸移層が認められる。

Ⅲ層：尾花沢ー肘折テフラ層（肘折軽石層）で、遺跡の北西部に主に認められる。

Ⅳ層：ソフト・ローム層（10YR5/4 にぶい黄褐色）で、場所によってしまりのない同色砂質シルト・粘土または白色粘土となる。

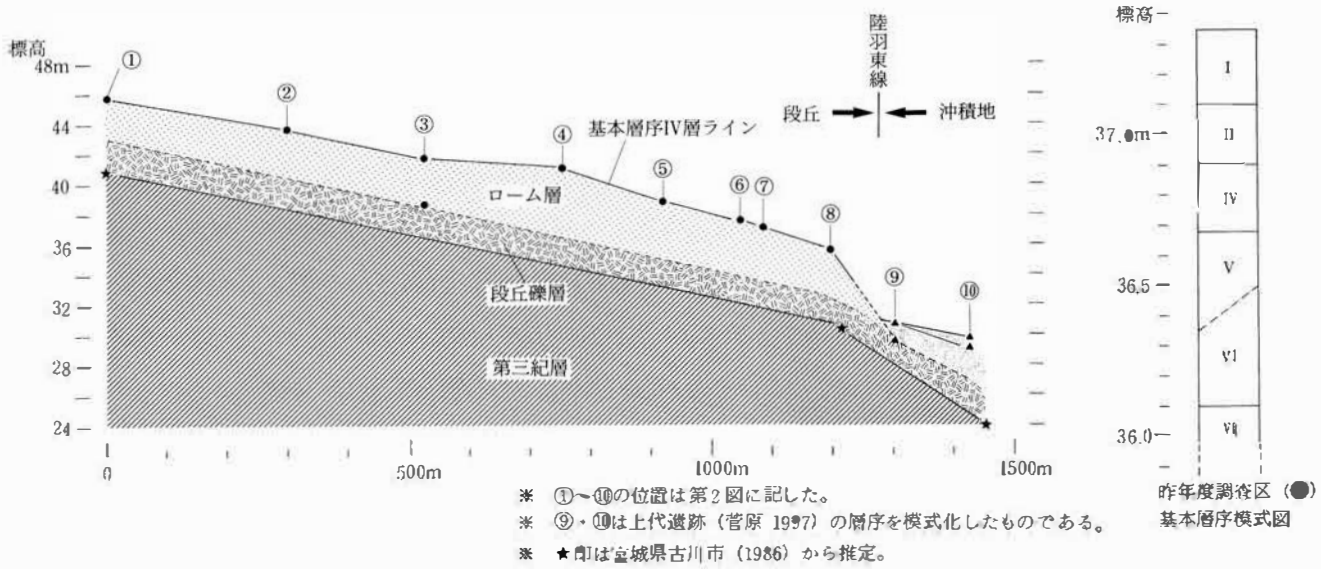
Ⅴ層：ソフト・ローム層（10YR5/4 にぶい黄褐色）。旧石器時代文化層。Ⅳ層よりしまりがある。

Ⅵ層：ハード・ローム層（10YR6/4 にぶい黄褐色）。下位は灰白色（10YR8/2）粘土になるところもある。

Ⅶ層：凝灰岩層（10YR6/6 明黄褐色）。

今回の調査対象である第Ⅱ工区、第Ⅲ工区北ではⅢ層は認められず、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ～Ⅶ層の層序となる。ただし、本工区内では昭和の初め頃から度々大規模な開田が行なわれており、その際にⅣ層付近まで破壊されたところが多い。このためⅡ層の分布範囲は厳密には不明である。

遺構の検出面は基本的にⅣ層である。Ⅳ層は上記のようにソフト・ローム層で、検出面は場所によってはしまりのない同色砂質シルト・粘土または白色粘土となっている。Ⅳ層検出時の標高を比較してみると（第４図地点①～⑩）、遺跡北西端の地点①から緩やかに南東に向かって傾斜し、JR 陸羽東線付近の地点⑨から地点⑩に向かって没している。これをみるとⅣ層も削平は受けているが、そのあり方はおおむね遺跡が立地する高位段丘面の地形を反映しているといえる。なお、以下の記述で地山と記した場合にはⅣ層以下のロームをさす。



第４図　基本層序

II. 発見された遺構と遺物

道路・水路敷で発見した遺構は塀跡２、掘立柱建物跡27、竪穴住居跡10、井戸跡８、溝跡166、土壙389などである。開田時の削平のため全体に残存状況はよくない。遺物は土師器、須恵器を中心に縄文・弥生土器、鉄製品、土製品、石製品が出土しており、総量は整理用平箱で28箱ある。

遺構は調査区全体に認められる。その分布はQ－１区、V－４区から東側で濃密で、特に官衙に近い北側のU・V区では掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが多数検出された。東側では遺物も奈良時代を中心とした土師器や須恵器が多く出土している。一方、西側は全体的に遺構が希薄である。溝跡や土壙は比較的検出されたが、掘立柱建物跡や井戸跡は少なく、竪穴住居跡も検出されなかった。遺物も縄文・弥生土器、土師器、須恵器が極少量出土したのみである。ただ、R・S・T区には落し穴とみられる土壙もある。

以下、調査区順に記述するが、調査区の幅に制限があり、遺構の全容がわかるものが少ないため、調査区ごとの特徴と主要な遺構について記述する。他の遺構の属性は第１表（78～84頁）に示した。

１．N区（第５図）

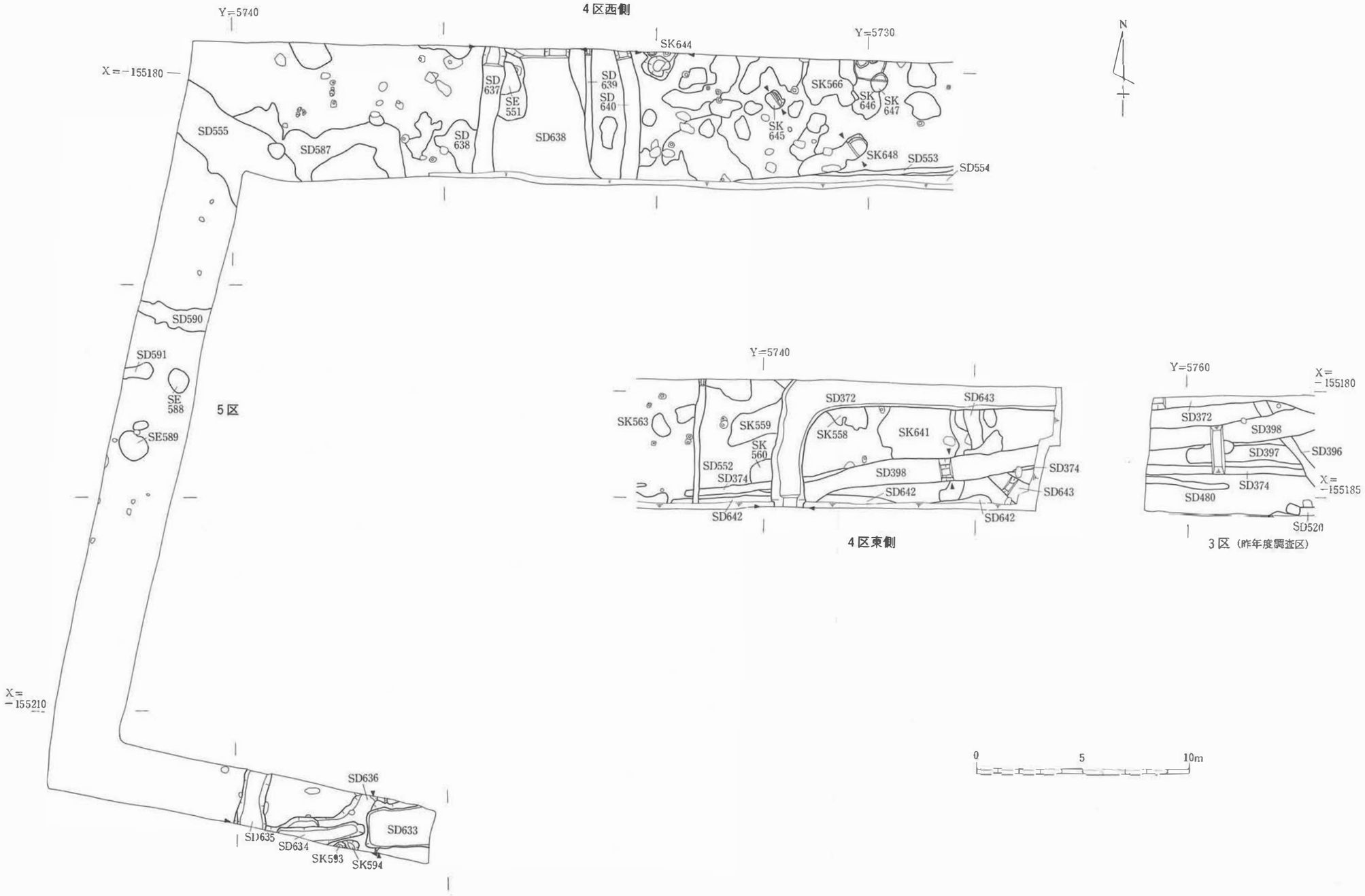
第II工区南東部の調査区である。昨年調査の１～３区に続き、今年は４・５区を調査した。４区は３区西側の東西調査区、５区は4区西端から南のL字状の調査区で、５区南端の東西部分以外は確認調査である。遺構は井戸跡３、溝跡20、土壙44を確認した。その密度は東側が濃密、西側ほど希薄で、５区南西部では遺構は確認されなかった。

(1) 井戸跡（第５図）

４区西側で１基（SE551）、５区南北部分の中央部で２基（SE588・589）確認した。これらは掘下げていないため、構造や深さは不明である。SE551はSD637より古い。平面形は隅丸方形で、規模は東西が1.1m以上、南北が1.5mである。検出面の堆積土は灰白色火山灰をブロック状に含む黒褐色シルトである。SE588・589の平面形は楕円形で、規模は長軸1.2～1.5m、短軸1.1～1.2mである。検出面の堆積土は黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

(2) 溝跡（第５・６図）

20条確認した。５区南西部を除く調査区全体に分布する。４区東側のSD372・374・398（373）は、昨年調査の３区からの延長である。溝跡は東西方向または南北方向のものが多いが、北西から南東へ延びるもの(SD555・643)や湾曲するもの(SD587)もある。規模は①上幅1.5mを越えるのもの(SD372・555・633・636・638)、②上幅0.5～1.5mのもの（SD398・590・591・634・635・637・640・643)、③上幅0.5m未満のもの（SD374・552・553・554・639・642)、④不明（SD587）があり、中・小規模な溝が主体である。断面形は一部を掘り下げたものについてはU字形や皿状が多いが、箱形や逆台形のものもある。堆積土はSD398・633・634・639・643が黒褐色砂質シルトや粘土の人為的な埋土で、その他は黒褐色シルト主体の自然堆積である。遺物は、後述する溝跡以外からは出土していない。


4区西側
Y=5740
Y=5730
X=−155180
SK644
SD637
SE551
SD639
SD640
SD638
SD638
SD587
SD555
SK566
SK646
SK647
SK645
SK648
SD553
SD554
N
SD590
SD591
SE588
SE589
5区
X=−155210
SD636
SD633
SD635
SD634
SK593
SK594
Y=5740
SK563
SK559
SK560
SD552
SD374
SD372
SK558
SD643
SK641
SD398
SD642
SD374
SD643
SD642
SD642
4区東側
Y=5760
X=−155180
SD372
SD398
SD397
SD396
SD374
SD480
X=−155185
SD520
3区（昨年度調査区）
0
5
10m

第5図　N−4・5区平面図

【SD372・374・398(373)溝跡】

いずれも昨年3区で検出した中世の東西溝跡で、延長を4区東側で確認した。SD372は調査区東端から西に12mの地点で南に折れ、そのまま調査区外に延びる。17.0m分を検出した。3区からの総長は65.8mである。SD374・398・642・643、SK558・559・560・641より新しい。SD374は調査区東端から西に17mの地点で途切れる。3区からの総長は61.2mである。SD372・398・552より古く、SK560より新しい。SD398(373)は調査区東端から西に11.5mの地点でSD372に切られる。SD372の西側では確認されなかった。この地点で途切れるか、SD372と同様に南に折れるものと思われる。3区からの総長は43.7mである。SD372より古く、SD374・642・643、SK641より新しい。

これらの溝跡の規模や断面形、堆積土の特徴は昨年と同様である。遺物はSD372の堆積土から土師器坏、須恵器坏・甕、瓦、SD398の堆積土から土師器甕、須恵器坏・甕が少量出土している。

【SD633溝跡】

5区東西部分の東側で確認した東西溝跡で3.3m分を検出した。SD636より古い。上幅は2.0m、下幅は1.6m、深さは50cmある。底面は平坦で、断面形は箱形である。方向はE－8°－Nである。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色砂質シルトで、2層に地山ブロックが多い。人為的な埋土である。

遺物は埋土から須恵器甕が極少量出土している。

【SD634溝跡】

5区東西部分の東側で確認した東西溝跡で4.6m分を検出した。SD636、SK593・594・1157より古い。上幅は0.8m、下幅は0.5m、深さは50cmある。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。方向はE－8°－Nである。堆積土は8層に分けられる。地山ブロックを含む黒色や黒褐色の粘土・砂などで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SD635溝跡】

5区東西部分の東側で確認した南北溝跡で2.6m分を検出した。SD636より新しい。上幅は1.1～1.5m、下幅は0.7～1.1m、深さは40cmある。断面形は逆台形である。方向はN－10°－Eである。堆積土は自然堆積で5層に分けられる。3・5層は地山小ブロックを含む黒褐色粘土で崩落土である。2・4層はにぶい黄褐色粘土で4層は砂を互層に含む。1層は黒褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

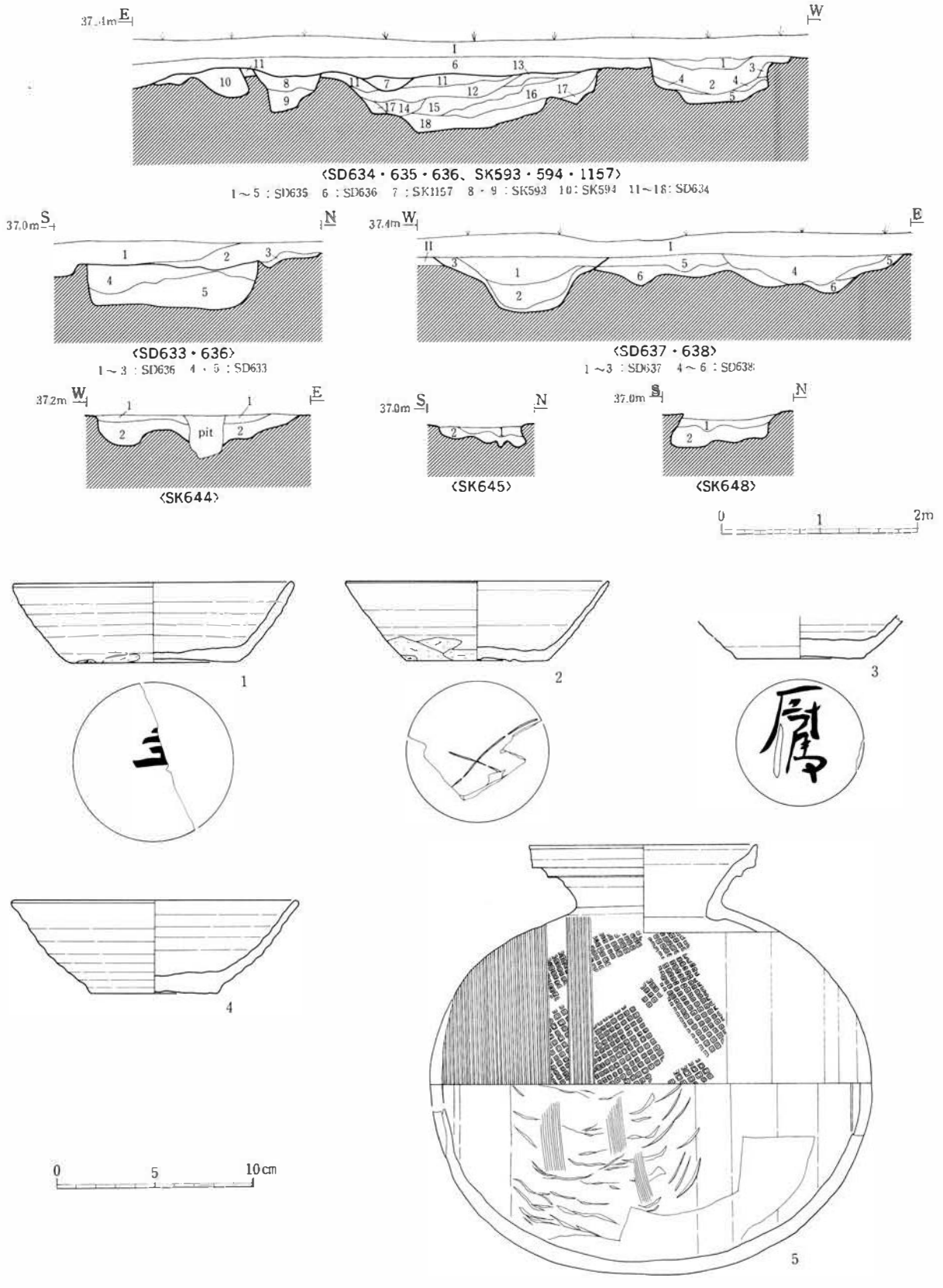
【SD636溝跡】

5区東西部分の東側で確認した東西溝跡である。南側の肩は検出されていない。長さ8.7m分を検出した。SD635より古く、SD633・634、SK593・594・1157より新しい。上幅は3.7m以上、下幅は2.4m、深さは30cmある。断面形は皿状と思われる。方向はE－8°－Nである。堆積土は3層に分けられる。3層は地山ブロックを含む黒褐色粘土で、人為的な埋土である。2層は黒褐色粘土、1層は黒褐色シルト質粘土である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕と須恵器甕が極少量出土している。

【SD637溝跡】

4区の西側で確認した南北溝跡である。P－2区検出のSD632とは一連の溝とみられる。4区で6.2



No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	SD637・堆積土	外面：回転糸切り→手持ちケズリ　底部に墨書「□」	(14.4)	(8.2)	4.1	2/5	8-1、10-6
2	須恵器・坏	SD638・堆積土	外面：ヘラ切り→手持ちケズリ　底部に焼成前の×状の刻書	(13.4)	(7.2)	4.1	1/2	8-2、10-7
3	須恵器・坏	SD638・堆積土	外面：ヘラ切り→ナデ　底部に墨書「厨□」と焼成前の一状の刻書		6.5		一部	10-8
4	須恵器・坏	SD638・堆積土	外面：ヘラ切り　両面に焦ね焼き板	(14.6)	(6.5)	4.8	1/3	
5	須恵器・横瓶	SK641・検出面	外面：格子タタキ→カキ目　内面：無文当て具痕→ナデ・ヨコナデ	11.6		(22.1)	1/2	8-4

第6図　N－4・5区溝跡、土壙断面図及び出土遺物

m分、P－2区で9.5m分を検出しており、総長は70m以上と思われる。SE551、SD638より新しい。上幅は0.7～1.0m、下幅は0.6m、深さは50cmある。断面形はU字形である。方向はN－6°－Eである。堆積土は3層に分けられる。3層が灰色粘土、2層が暗灰色粘土、1層が砂粒や炭化物を少し含む黒褐色シルトで、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦が少量出土している。第6図1は回転糸切りののち手持ちヘラケズリ調整された須恵器坏である。底部に判読できないが墨書が認められる。

【SD638溝跡】

4区の西側で確認した南北溝跡で6.4m分を検出した。堆積土は南側がオーバフロー気味に広がっており、溝の末端部と思われる。SD637より古く、SD639より新しい。上幅は2.3～7.0m、下幅は2.0m、深さは25cmある。断面形は皿状である。方向はN－7°－Wである。堆積土は3層に分けられる。3層が褐灰色シルト質粘土、2層が黒褐色砂質シルト、1層が黒褐色シルトですべて自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・高坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕が出土している。第6図2～4はヘラ切りの須恵器坏で、切り離し後に2は手持ちヘラケズリ調整、3・4はナデ調整が施されている。また、2の底部には×状の刻書(焼成前)、3の底部には「厨□」の墨書が認められる。

(3) 土壙（第5・6図）

43基確認した。4区に多く、特に中央部に集中する。平面形は全体に形が整わないが、①長軸0.8～1.5mの楕円形のもの(SK563・645・647など)、②長さ2.0～4.0m、幅1.0m前後の溝状のもの(SK568・648など)、③長さ3.0m以上、幅2.0m以上と大型で不整形のもの(SK566・641・644・646など)があり、①と③が主体をしめる。一部を掘り下げたものの断面形は皿状(SK644)や一方の壁がオーバーハングする袋状(SK645・648)で、底面は凸凹している。深さは15～35cmである。堆積土はいずれも2層は砂や地山ブロックを多く含む黄灰・オリーブ黒色シルト、1層が砂粒を含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。掘り下げなかったものも検出面の堆積土は、上記の黒褐色シルトまたは黄灰・オリーブ黒色シルトであり、一様である。

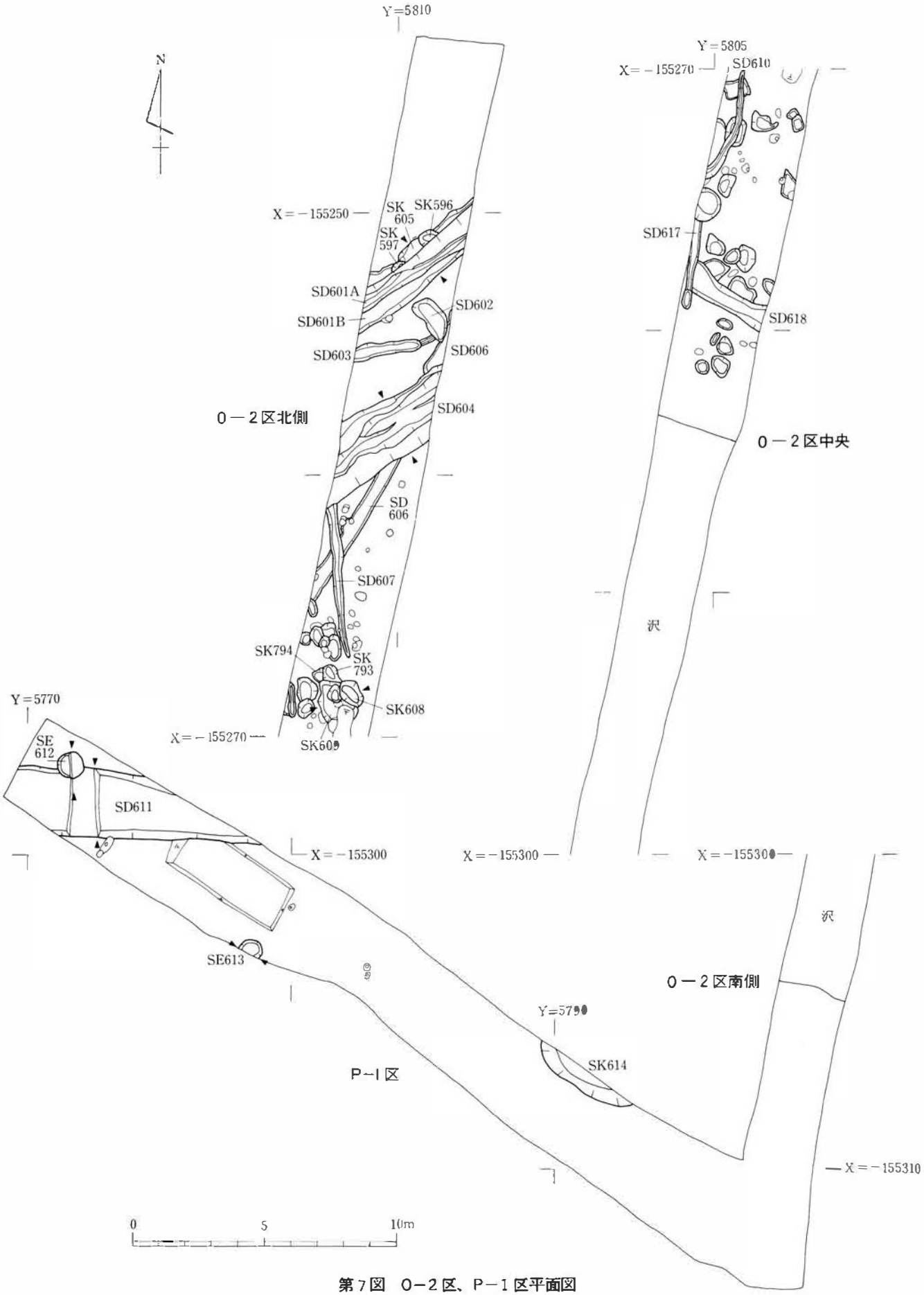
遺物はSK641の検出面から土師器の破片と須恵器の横瓶（第6図5）が出土している。

2．O区（第7図）

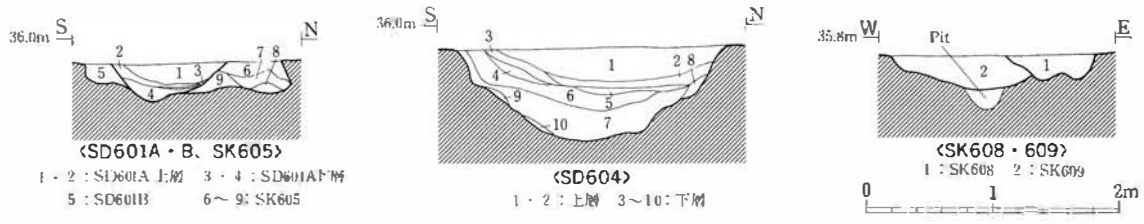
第II工区南東部の調査区である。昨年調査したO区（O－1区とする）に続き、今年は2区を調査した。2区は1区の南側の南北調査区である。調査区南側には東から沢が入っている。この沢はこれまで中世の名生城の掘跡とみてきたが、地形や隣接するN・P区で延長が確認されないことなどから沢と思われる。遺構は調査区北側で、溝跡10、土壙37を確認した。

(1) 溝跡（第7・8図）

10条確認した。調査区北側全体に分布する。おおむね東西溝と南北溝とに分けられるが、その方向



第7図　O−2区、P−1区平面図



第8図　O－2区溝跡、土壙断面図

は真北や真東に対して大きくふれるものが多い。規模は①上幅1.5mを越えるもの(SD604)、②上幅0.5～1.5mのもの（SD601A・B・602・606・618)、③上幅0.5m未満のもの（SD603・607・610・617)があり、中・小規模な溝が主体である。また、①・②は調査区北端近く、③はその南に多い。断面形はU字形、堆積土は黒褐色砂質シルトのものが主体をしめる。後述する溝跡以外で遺物はSD607の堆積土から非ロクロ調整の土師器甕が極少量出土している。

【SD601A・B溝跡】

北端近くで確認した溝跡で5.0m分を検出した。2時期（B→A)ある。SK595・596・597・605より新しい。Aは上幅0.6～1.1m、下幅は0.2～0.4mで、深さは25cmある。断面形はU字形で、方向はE－31°－Nである。堆積土は人為的な埋土の上層（1・2層）と自然堆積の下層（3・4層）に大別される。下層は砂を少し含む黒褐・暗褐色粘土である。上層は地山ブロックを多く含む極暗褐色砂質シルトや褐灰色の粘土質シルトである。

Bは北側がAに壊されている。残存する上幅は0.7mである。下幅は0.5m、深さは20cmである。断面形はU字形とみられる。方向はE－32°－Nである。堆積土は黒褐色の砂質シルトである。

遺物は、Aの上層から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕が少量出土している。

【SD604溝跡】

北端近くで確認した溝跡で4.4m分を検出した。SD606・607より新しい。上幅は2.3m、下幅は0.7mで、深さは75cmである。断面形はU字形で、方向はE－32°－Nである。堆積土は人為的な埋土の上層（1・2層）と自然堆積の下層（3～10層）に大別される。下層は黒色や黒褐色の砂・粘土を主体とする。上層は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。

遺物は下層でロクロ調整の土師器坏、須恵器坏・高台坏・蓋・甕が、上層ではロクロ調整の土師器坏、非ロクロ調整の土師器坏・甕のほか、須恵器坏・甕、砥石が出土している。

(2) 土壙（第7・8図）

37基確認した。調査区北側の南部から沢にかけて集中する。平面形はやや不整な楕円形が多い。規模は①長軸2.0～1.0mのもの（SK608・609・616など）と、②長軸1.0m以下のもの（SK1015・1016など）があり、①は少なく、②が主体をしめる。断面形は一様に皿状で、底面がやや凸凹したものもある。深さは20cmほどが多い。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色粘土・極暗褐色粘土質シルトのものが主体である。遺物は出土していない。

【SK608土壙】

調査区北側の南部で確認した。SK609・793より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.1

m、短軸が0.9mで、深さは20cmである。断面形は皿状で、堆積土は地山ブロックを多く含む極暗褐色粘土質シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SK609土壙】

調査区北側の南部で確認した。SK608より古く、SK793・794より新しい。平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸が1.9m、短軸が1.4mで、深さは25cmである。断面形は皿状で、堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土で、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

3．P区（第7・9図）

第II工区南東部の調査区である。O－2区南端からN－5区東西部分東端に至る調査区で、水路で2区に細分される。遺構は塀跡1、掘立柱建物跡4、井戸跡2、溝跡7、土壙5を確認した。全体に1区西側から2区東側にかけて遺構が集中しており、その他の部分ではまばらである。

(1) 塀跡（第9・10図）

【SA630塀跡】

2区東側の西よりで確認した南北1間以上の一本柱列による塀跡である。柱穴は2ヵ所で検出しており、ともに柱材を確認している。塀跡の規模は2.3m以上で、方向はN－3°－Eである。柱材は径12cmの丸太を2つに割ったもので、丸いほうの面を縦方向に削って整形している。柱穴は楕円形で、長軸が30cm前後、短軸が20cm前後であり、深さは深いもので25cmある。埋土は地山小ブロックを含む黒色シルトである。遺物は出土していない。

(2) 掘立柱建物跡（第9・10図）

4棟確認した。SB631以外は2区東側のSA630塀跡の東に集中する。調査区の制限から全容がわかるものは少ないが、いずれも柱穴が小さく、小規模な建物が多いと思われる。建物の方向は①真北のもの（SB625・631）、②北に対し13°東にふれるもの（SB627）、③19°西にふれるもの（SB629）がある。

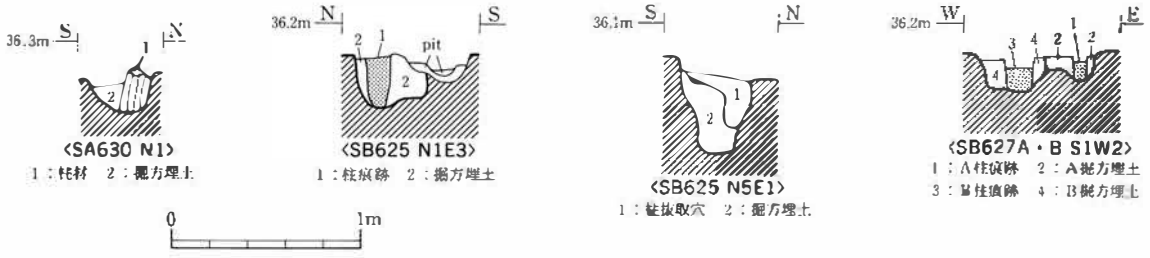
【SB625建物跡】

2区東側で確認した桁行4間、梁行2間の南北棟である。SK622より古い。柱穴は7ヵ所で検出しており、6ヵ所で径15cm前後の柱痕跡、1ヵ所で柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行が東側柱列で総長7.0m、柱間寸法は南から1.4m、1.8m、2.3m、(1.6)m、梁行は北妻で総長4.2m、柱間寸法は西から2.1m、(2.1)mである。方向は東側柱列で真北である。柱穴は隅丸長方形で、長辺が50cm前後、短辺が45cm前後であり、深さは深いもので52cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色または黒褐色の砂質シルトである。

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕が極少量出土している。

【SB627A・B建物跡】

2区東側で確認した東西2間以上、南北1間以上の建物跡で、2時期（B→A）ある。SD621より古



第10図　P区塀・建物跡柱穴断面図

い。Aの柱穴は4ヵ所で検出しており、すべてで径15cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が南側柱列で総長4.4m以上、柱間寸法は西から2.2m等間、南北は西側柱列で総長1.8m以上である。方向は南側柱列でE－13°－Sである。柱穴は隅丸長方形で、長辺が25cm前後、短軸が20cm前後であり、深さは深いもので15cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色のシルトである。

Bの柱穴は4ヵ所で検出しており、3ヵ所で径15cm前後の柱痕跡を確認している。平面規模は東西が南側柱列で総長4.5m以上、柱間寸法は西から2.3m、2.2m、南北は西側柱列で総長1.9m以上である。方向は南側柱列でE－13°－Sである。柱穴は隅丸長方形で、長辺が30cm前後、短軸が25cm前後であり、深さは深いもので20cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色のシルトである。

遺物はAの柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕、Bの柱穴埋土から土師器の破片が極少量出土している。

(3) 井戸跡（第7・11図）

1区で2基確認した(SE612･613)。ともに平面形が円形の素掘りの井戸跡である。SE612はSD611より新しい。規模はSE612が径1.0m、SE613が径0.8mで、深さはSE612が70cm、SE613が60cmである。ともに断面形は箱形で、堆積土は人為的な埋土の上層（SE612の1層、SE613の1・2層）と自然堆積の下層（SE612の2・3層、SE613の3・4層）に大別される。下層は黒色や褐灰色の砂質シルトである。上層は地山ブロックを多量に含む黒色粘土質シルトである。

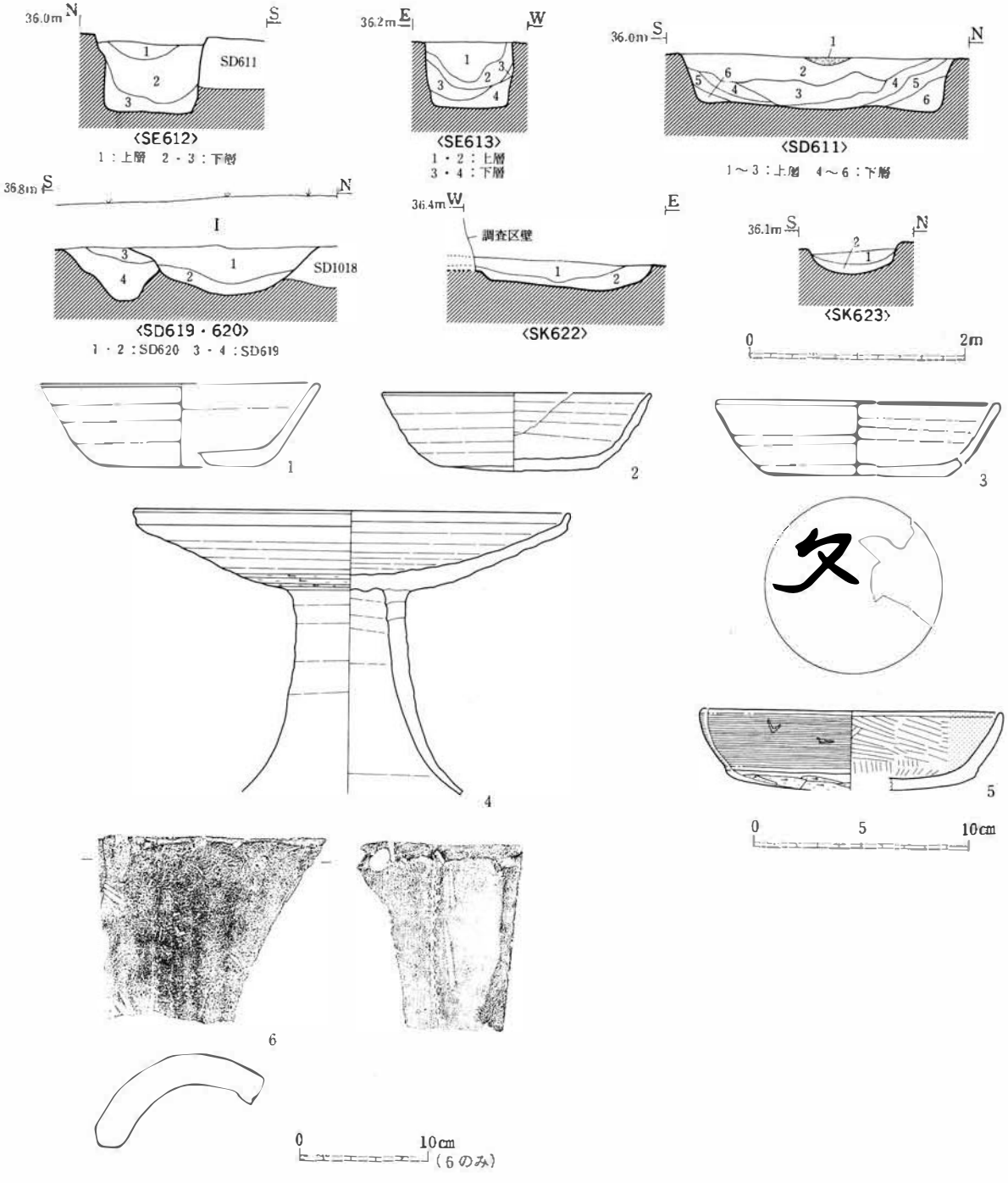
遺物はSE612の上層からロクロ調整の土師器甕、SE613の上層から土師器の破片が極少量出土している。

(4) 溝跡（第7・9・11図）

7条確認した。このうち2区西側の南北溝SD632は、N－4区検出のSD637と一連の溝とみられる。その他の溝跡は1区西側から2区東側にかけて集中する。SD1018以外は東西溝である。規模は①上幅2.6mのもの（SD611）、②上幅0.5～1.0mのもの（SD619・620・621・632）、③上幅0.5m未満のもの（SD1019）があり、SD1018は不明である。後述する溝跡以外の断面形はU字形で、堆積土は黒色シルトの自然堆積である。また、遺物は出土していない。

【SD611溝跡】

1区西側で確認した溝跡で9.7m分を検出した。SE612より古い。上幅は2.6m、下幅は1.4～2.2m



No.	種　別	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	SD611・下層	外面：ヘラ切り→ナデ 全体に火ダスキ	13.0	8.2	3.9	3/5	8-3
2	須恵器・坏	SD611・上層	外面：ヘラ切り→ナデ	12.6	7.5	3.6	3/4	8-7
3	須恵器・坏	SD611・上層	外面：ヘラ切り→ナデ 底部に墨書「□」	(13.2)	8.3	3.5	1/2	8-8、10-9
4	須恵器・高盤	SD611・上層	外面：ロクロナデ→回転ケズリ 内面：ロクロナデ→工具ナデ	20.3			5/6	8-5・6
5	土師器・坏	SD619・2層	有段丸底 外面：ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.1)			1/4	8-9
6	丸瓦	SD611・上層	桶巻き作り 凸面：ケズリ・ナデ 凹面：布目→ケズリ（一部） 側面：ケズリ				一部	10-24

第11図　P区井戸・溝跡、土壙断面図及び出土遺物

で、深さは50cmである。断面形は逆台形で、方向はE－2°－Sである。堆積土は上層（1～3層）と下層（4～6層）に大別される。下層は壁の崩落とみられる地山土と黒色砂質シルトの互層である。上

層は1層が灰白色火山灰の1次堆積層、2・3層は黒色や黒褐色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は上・下層ともに出土している。下層では非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕が出土している。須恵器坏にはヘラ切り後ナデ調整のものがある(第11図1)。上層では非ロクロ調整の土師器坏・高坏・甕・甑、須恵器坏・高台坏・高盤(4)・蓋・甕・壷、瓦(6)が出土している。須恵器坏にはヘラ切り後ナデ調整のものがある(2・3)。また、3の底部には判読できないが、墨書が認められる。なお、上層の遺物は3層からの出土量が多く、図化したもののなかでも2・4は3層出土である。

【SD619 溝跡】

2区東側で確認した溝跡で3.6m分を検出した。SD620より古い。上幅は0.6〜0.8m、下幅は0.3〜0.4mで、深さは45cmである。断面形はU字形で、方向はE−20°−Nである。堆積土は2層が黒色砂質シルトの自然堆積で、1層は地山ブロックを主体とする淡黄色シルトで人為的な埋土である。

遺物は2層から非ロクロ調整の土師器坏・甕が極少量出土している。土師器坏には口縁部が内湾気味に立ち上がる有段丸底の坏がある(第11図5)。

【SD620 溝跡】

2区東側で確認した溝跡で4.0m分を検出した。SD619・1018より新しい。上幅は0.5〜0.8m、下幅は0.3mで、深さは40cmである。断面形はU字形で、方向はE−18°−Nである。堆積土は2層が黒色砂質シルト、1層が黒色シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏が極少量出土している。

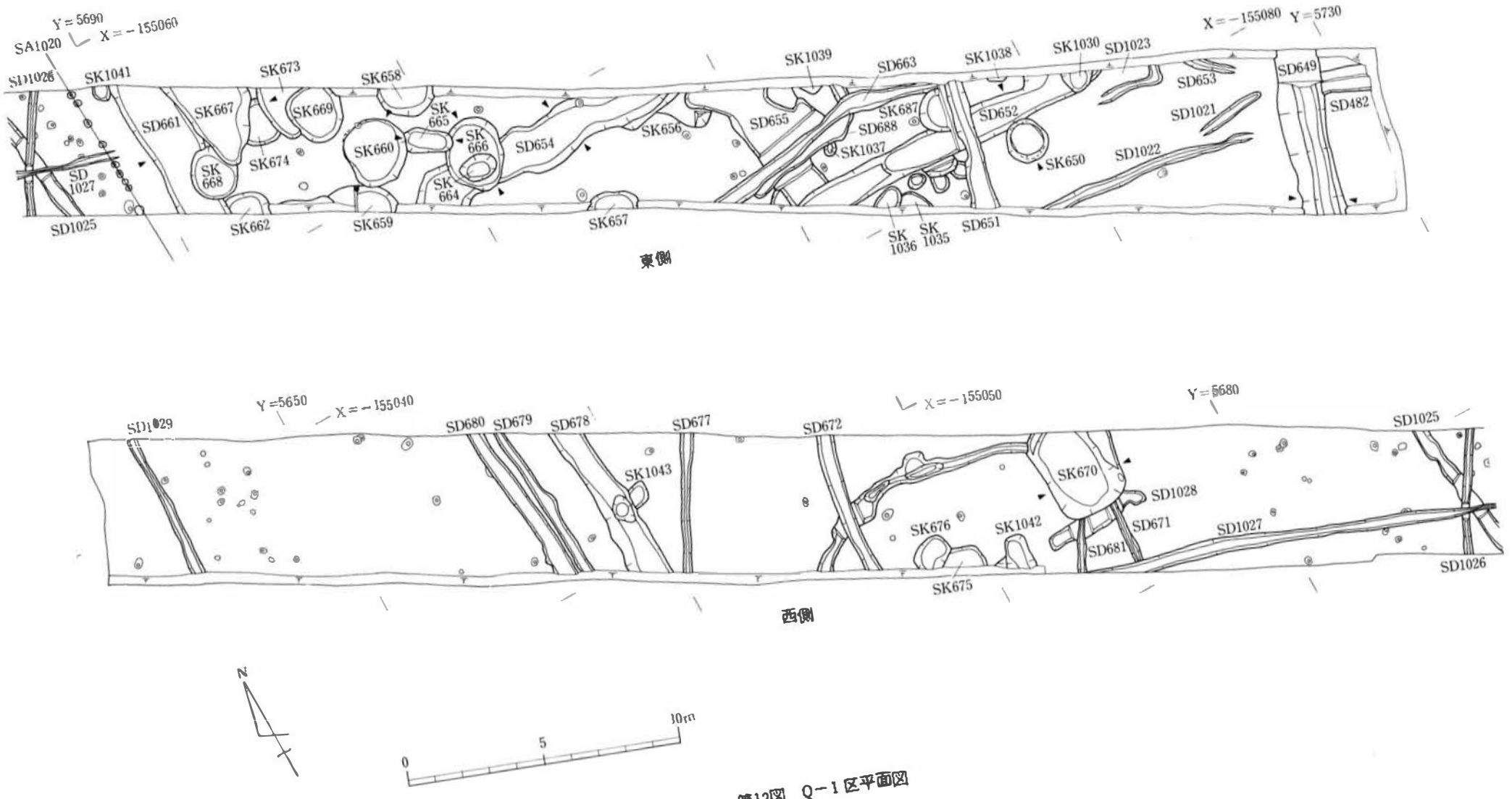
(5) 土壙(第7・9・11図)

5基確認した。1区東側のSK614以外は2区東側に集中する。平面形はすべて楕円形である。規模はSK614が長軸4.1m以上、SK622が長軸1.8m以上と比較的大型だが、その他は長軸0.9m以下と小規模である。断面形はすべて皿状である。深さはSK614が49cmある以外は12〜30cmと浅い。堆積土はいずれも自然堆積である。砂の混じる黒色シルトが主体で、底面付近に黄灰色粘土質シルト(SK622)や灰黄色砂(SK623)が堆積するものもある。

遺物はSK622で土師器甕、須恵器坏、SK624で土師器甕、SK626で土師器坏・甕が各々堆積土から極少量出土している。土師器坏はロクロ調整であるが、土師器甕はすべて非ロクロ調整のものである。

4. Q区(第12・15・17図)

第II工区中央部の調査区である。昨年調査したM区西端から第II工区を北東から南西に横断する舗装道路までの約400mの調査区と、西端付近にある住宅の東と北を巡る調査区とからなる。農道や水路で東から9区に細分される。遺構は塀跡1、溝跡44、土壙42を確認した。このうち7割は1区に集中する。また、1区のなかでも中央部付近にあるSD661南北溝跡より東側で遺構が濃密である。一方、2区から西側では遺構の分布が希薄である。また、4区東側と住宅の東と北を巡る6・7区では遺構は確認されなかった。


Y=5690
X=−155060
SA1020
SD1026
SK1041
SK673
SK658
SK1039
SD663
SK1038
SK1030
SD1023
X=−155080
Y=5730
SD649
SD653
SD482
SD1021
SD661
SK667
SK669
SK665
SK666
SD654
SK656
SD655
SK687
SD688
SK1037
SD652
SK650
SD1022
SK660
SK674
SK668
SD1027
SK664
SD1025
SK662
SK659
SK657
SK1036
SK1035
SD651
東側
SD1029
Y=5650
X=−155040
SD680
SD679
SD678
SD677
SD672
X=−155050
Y=5680
SD1025
SK1043
SK670
SD1028
SK676
SK1042
SD671
SD1027
SD681
SD1026
SK675
西側
N
0
5
10m

第12図　Q−1区平面図

1区（第12図）

(1) 塀跡（第12図）

【SA1020 塀跡】

調査区中央部で確認した柱列による南北塀跡で、5.3m分を検出した。残存状況が悪いため確認できなかったが、本来は柱を密に並べたものと思われる。柱穴は9ヵ所で検出しており、8ヵ所で径12cm前後の円形の柱痕跡を確認している。柱穴は楕円形や隅丸長方形で、長軸が30cm前後、短軸が25cm前後であり、深さは深いもので13cmある。埋土は地山小ブロックを含む黒・黒褐色シルトである。柱列の方向はN－3°－Wである。遺物は出土していない。

(2) 溝跡（第12～14図）

26条確認した。調査区全体に分布する。大きく東西溝と南北溝に分けられるが、なかには弧状に巡る溝（SD671）もある。また、調査区東側に東西溝が多い。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD649・654・655・661）、②上幅0.5～1.5mのもの（SD482・651・652・663・671・672・678～680・688・1025・1027・1028）、③上幅0.5m未満のもの（SD653・677・681・1021～1024・1026・1029）があり、②が13条、③が9条と中・小規模な溝が主体である。後述する溝跡以外の断面形はU字形や皿状、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSD651・671で土師器甕、須恵器坏・甕、SD653・672で須恵器甕、SD655・677で土師器・須恵器甕、SD663で土師器甕、須恵器高台坏・高盤、SD678・680・681で土師器甕、SD679で須恵器高台坏がいずれも堆積土から極少量出土している。土師器にロクロ調整のものはみられない。

【SD649溝跡】

調査区東端で確認した南北溝跡で6.2m分を検出した。SD482より新しい。上幅は1.4～1.8m、下幅は0.3～0.4mで、深さは90cmである。断面形は中段がつくU字形で、方向はN－19°－Eである。堆積土は自然堆積の上層（1層）と人為的な埋土の下層（2・3層）に大別される。下層は地山ブロックを多く含む黒色粘土で、地山ブロックは3層により多い。上層は黒色粘土である。

遺物は上層から非ロクロ調整の土師器坏、須恵器坏・甕が少量出土している。

【SD652溝跡】

調査区東側で確認した東西溝跡で12.2m分を検出した。SK650・687・1030より古く、SD655、SK1032より新しい。上幅は1.1～1.4m、下幅は0.5～0.9mで、深さは30cmである。断面形は皿状で、方向はE－1°－Sである。堆積土は黒色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕、瓦（第14図11）が少量出土している。

【SD654溝跡】

調査区東側で確認した東西溝跡で、12.2m分を検出した。西側では南にやや屈曲する。SK664・666より古く、SK656より新しい。上幅は1.5～2.0m、下幅は0.6～1.4mで、深さは25cmである。断面形は皿状で、方向はE－3°－Sである。堆積土は3層に分けられる。3層が黒褐色砂質シルト、2層が暗

灰黄砂、１層が黒色シルトで、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏、須恵器甕が極少量出土している。

【SD661 溝跡】

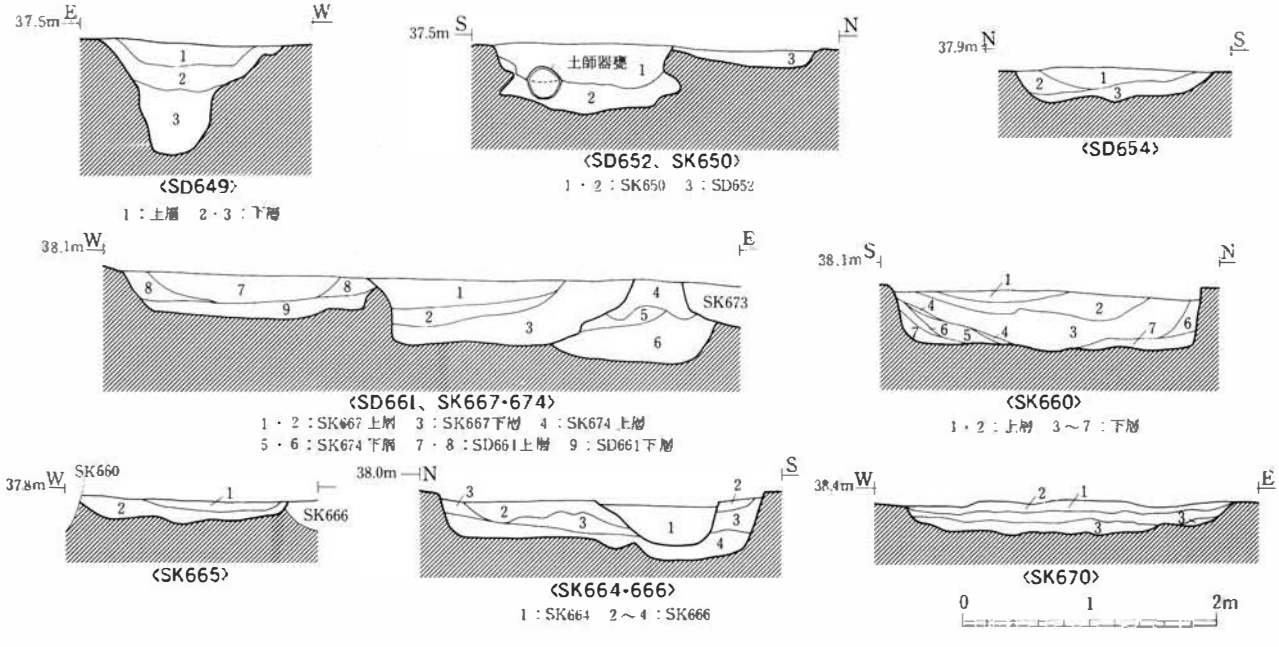
調査区中央部で確認した南北溝跡で5.3m 分を検出した。U－３区で北の延長が確認されており、全体では長さ175m以上に及ぶものとみられる。SD859（U－３区）・860（U－３区）、SK667・668 より古く、SK662 より新しい。以下、本調査区での所見を中心に述べる。

上幅は1.9m、下幅は1.6～1.7m で、深さは35cmである。断面形は逆台形で、方向は真北である。堆積土は上層（１・２層）と下層（３層）に大別される。下層は壁の崩落とみられる褐灰色粘土である。上層は２層が黒褐色砂質シルト、１層が黒色シルトで、自然堆積である。

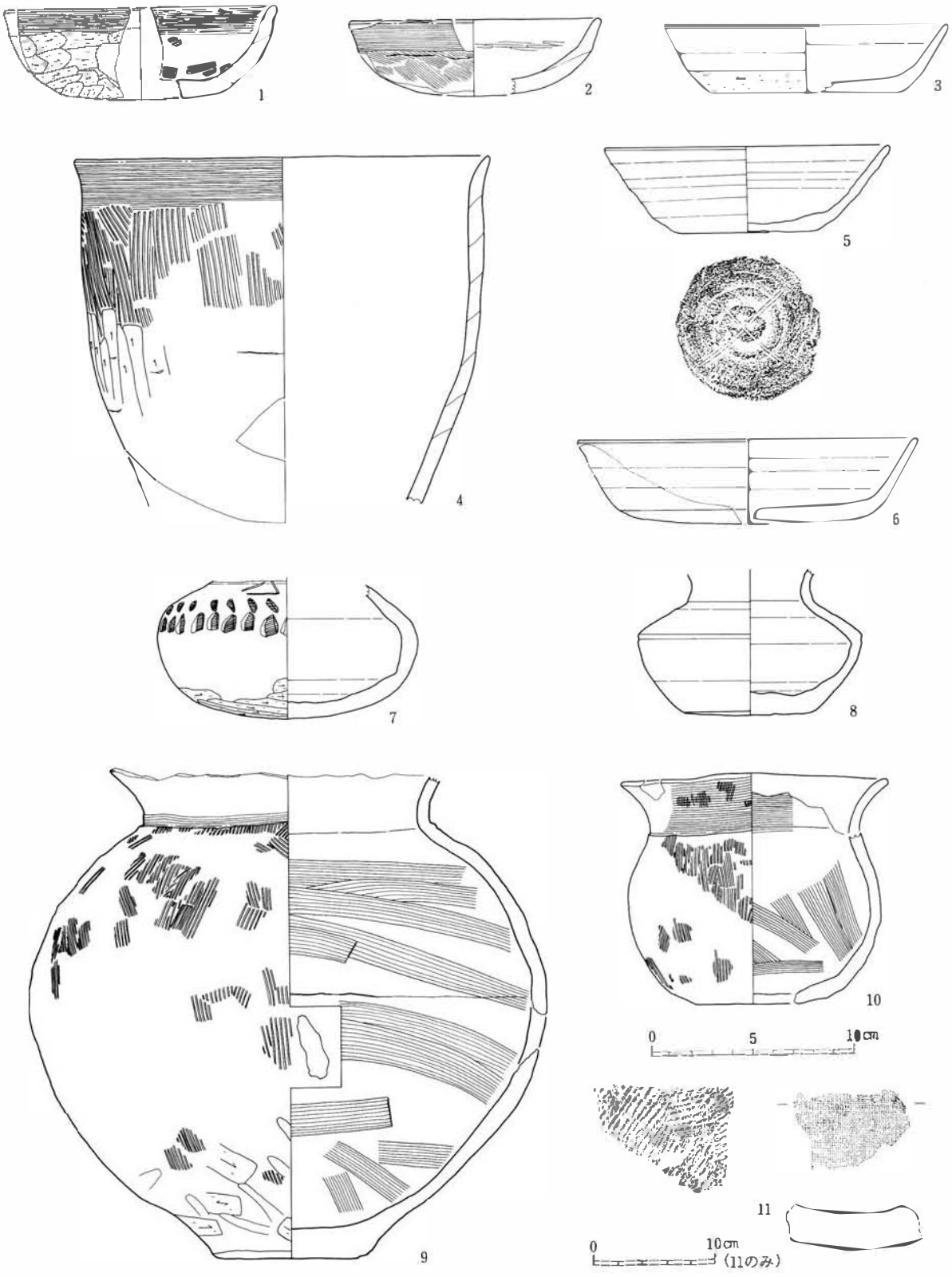
遺物は上・下層ともに出土している。下層では非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏が極少量出土している。須恵器坏には回転ヘラケズリ調整のもの（第14図３）と、静止糸切り後手持ちヘラケズリ調整のものがある。上層では非ロクロ調整の土師器坏・高坏・甕・甑（４）、須恵器坏・甕・壷が出土している。土師器坏には関東系のもの（２）がある。須恵器坏にはヘラ切り後ナデ調整のもの（５）があり、底部には焼成前に施された×状の刻書が認められる。須恵器壷には体部が扁平な球形で肩部に櫛歯状の列点があるもの（７）と、体部が算盤玉状で肩部に沈線が施された広口壷（８）がある。なお、U－３区で遺物は出土しなかった。

(3) 土壙（第12～14図）

33基確認した。調査区東側に多く分布する。平面形は円形や楕円形が主体で、他には隅丸長方形のものなどがある。規模は①長軸（辺）が2.0m を越えるもの（８基）、②長軸（辺）1.0～2.0m のもの（13基）、③長軸（辺）1.0m 未満のもの（12基）があり、全体的にやや大きめなものが多い。後述するもの以外のものの断面形は皿状や逆台形が主体である。堆積土は黒・黒褐色シルト主体の自然堆積



第13図　Q－1 区溝跡、土壙断面図



No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	土師器・坏	SD661・上層	無段丸底 外面:ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ 内面:ハケメ→ヨコナデ	(13.6)		(4.6)	1/4	
2	土師器・坏	SD661・上層	関東系土師器 外面:ナデ→ヨコナデ 内面:マメツ(中央部ヘラミガキ)	(12.6)		(3.8)	1/4	8-10
3	須恵器・坏	SD661・下層	外面:切り離し不明→回転ケズリ	(14.0)	(9.4)	3.4	1/2	8-11
4	土師器・甑	SD661・上層	外面:ヨコナデ→ハケメ→ヘラケズリ 内面:マメツ	(20.6)			1/5	
5	須恵器・坏	SD661・上層	外面:ヘラ切り→ナデ 底部に焼成前の×状の刻書	14.1	7.3	4.3	ほぼ完形	8-12、10-10
6	須恵器・坏	SD661・上層	外面:切り離し不明→手持ちケズリ	(16.8)	(11.0)	4.2	1/3	
7	須恵器・壺	SD661・上層	外面:ロクロナデ→手持ちケズリ 肩部に極面状の列点文 肩部に焼成前の刻書「□」				4/5	8-13
8	須恵器・壺	SD661・上層	外面:ヘラ切り→ナデ 肩部に沈線		6.6		2/3	8-14
9	土師器・甕	SK650・1~3層	外面:ヨコナデ・ハケメ→ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面:ヘラナデ・ヨコナデ 体部に外側から穿孔 本整痕		8.0		ほぼ完形	8-17
10	土師器・甕	SK650・1層	外面:ハケメ→ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ 底部に両側から穿孔	(13.2)	(5.2)	11.5	4/5	8-16
11	平瓦	SD652・堆積土	桶巻き作り 凸面:平行タタキ 凹面:布目				一部	10-25

第14図 Q－1区溝跡、土壙出土遺物

のものと、地山ブロックを含む黒・黒褐色シルト主体の人為的な埋土のものがある。遺物はSK657で曲物の底板、SK658・676で土師器甕、SK668・675で土師器甕、須恵器坏が各々堆積土から極少量出土している。土師器甕は非ロクロ調整のものが主体だが、SK676のものにはロクロ調整のものも含まれる。

【SK650土壙】

調査区東側で確認した。SD652より新しい。平面形は径1.6mの円形である。深さは56cmある。断面形は、底面近くで壁が崩れてオーバーハングしているが、本来は逆台形と思われる。堆積土は地山ブロックを含む黒色粘土質シルトで、地山ブロックは2層により多い。人為的な埋土である。

遺物は埋土から、非ロクロ調整の土師器甕（第14図9・10）が極少量出土している。9は球胴形、10は小型の甕で、ともに口縁部と胴部との境に段のつくものである。また、9は胴部、10は底部に孔が穿たれている。

【SK660土壙】

調査区東側で確認した。SK659・665より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が2.5m、短軸が2.3mで、深さは56cmである。断面形は逆台形である。堆積土は自然堆積の上層（1・2層）と人為的な埋土の下層（3～7層）に大別される。下層は地山ブロックを多く含む黒・黒褐色砂質シルトや暗灰黄粘土などである。上層は2層が暗灰黄粘土と砂の互層、1層がオリーブ黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

【SK664土壙】

調査区東側で確認した。SD666より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.5m、短軸が1.0mで、深さは42cmである。断面形は逆台形である。堆積土は炭粒を少し含む黒色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕が極少量出土している。

【SK665土壙】

調査区東側で確認した。SK660より古く、SD654、SK666より新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が2.0m、短辺が0.9mで、深さは20cmである。断面形は逆台形である。堆積土は2層が黄灰色、1層が黒色のシルトで、ともに地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器甕が極少量出土している。

【SK666土壙】

調査区東側で確認した。SK664・665より古く、SD654より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が3.0m、短軸が2.1mで、深さは56cmである。断面形は逆台形である。堆積土は3層に分けられる。3層が褐灰色、2層が黒色、1層は黒褐色のシルトで、いずれも地山ブロックや砂を多く含む人為的な埋土である。

遺物は静止糸切り後回転ヘラケズリ調整の須恵器坏が出土したのみである。

【SK667土壙】

調査区東側で確認した。SD661、SK668・674より新しい。平面形は溝状で、長さ3.5m分を検出し

た。上幅は2.1m、下幅は1.9mで、深さは52cmである。断面形は逆台形である。堆積土は自然堆積の上層（1・2層）と人為的な埋土の下層（3層）に大別される。下層は地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトである。上層は2層が褐灰色粘土、1層が黒色シルトである。

遺物は上層から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。土師器甕にはロクロ調整のものがある。

【SK670土壙】

調査区西側で確認した。SD671・681・1028より新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が3.6m以上、短辺が3.0mで、深さは28cmである。断面形は皿状である。堆積土は3層に分けられる。いずれも黒色で2・3層が粘土質シルト、1層が砂質シルトであり、自然堆積である。3層には地山ブロックが含まれる。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。土師器坏にはロクロ調整のものがある。

【SK674土壙】

調査区東側で確認した。SK667・673より古い。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.7m、短軸が1.3mで、深さは65cmである。断面形は逆台形である。堆積土は自然堆積の上層（1層）と人為的な埋土の下層（2・3層）に大別される。下層は3層が浅黄色、2層がにぶい黄色の粘土で、ともに地山ブロックを主体とする。上層は黒色シルトである。遺物は出土していない。

2～4区（第15図）

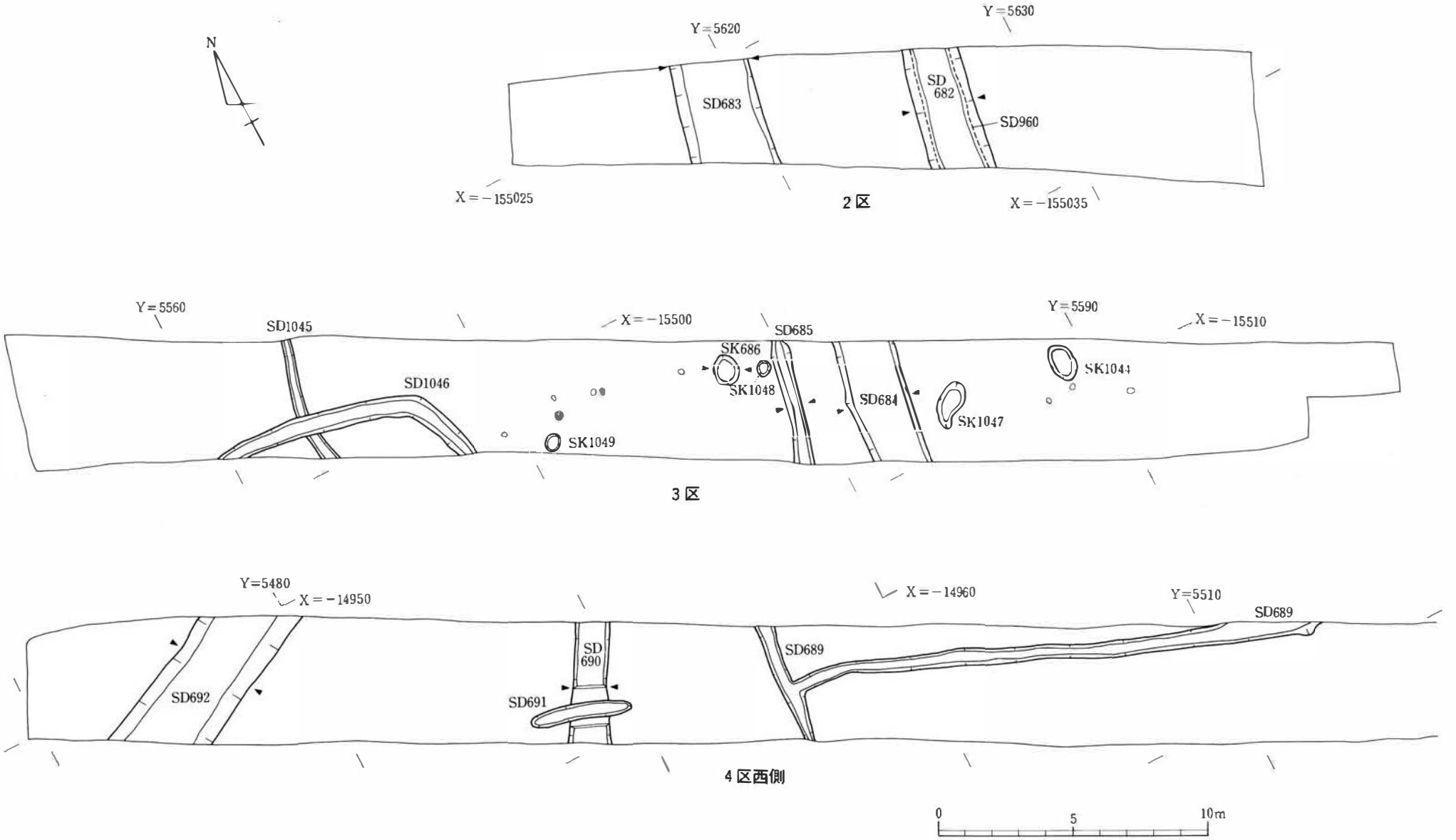
(1) 溝跡（第15・16図）

11条確認した。4区東側以外の調査区全体に分布する。南北溝が多いが、東西溝(SD691・692)、南北溝と東西溝がT字状に連結する溝(SD689)、弧状に巡る溝(SD1046)もある。また、南北溝のうちSD682～684・960は、窯跡調査区やV－4区で北の延長を確認している。規模は①上幅1.5mを越えるもの(SD682～684・690・692・960)、②上幅1.0m未満のもの(SD685・689・691・1045・1046)とがある。断面形は①は逆台形、②はU字形が多い。堆積土は、①はSD960を除き黒・黒褐色の粘土や粘土質シルト、砂質シルトのものが主体である。また、SD682～684・692の堆積土中には灰白色火山灰の一次堆積層が認められる。②は黒・黒褐色のシルトや砂質シルトのものが主体である。遺物は少なく、SD683の堆積土から須恵器甕が1片出土したのみである。なお、SD682・684・960についてはここでは本調査区での断面図を載せるのみとし、V－4区で詳述する。

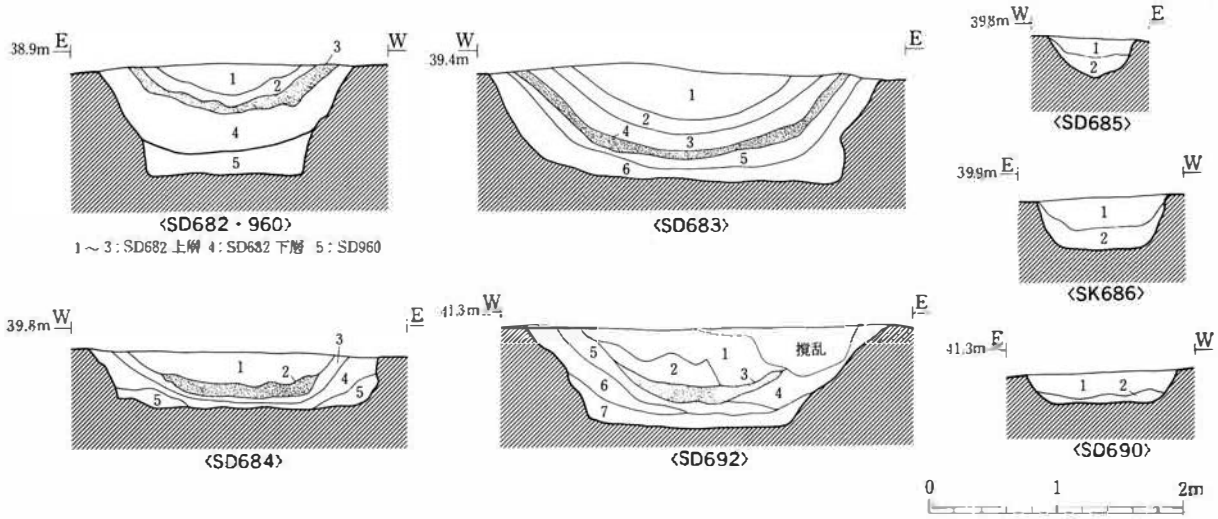
【SD683溝跡】

2区で確認した南北溝跡で4.0m分を検出した。窯跡調査区とV－4区で北の延長が確認されており、全体では長さ230m以上に及ぶものとみられる。SK650・687・975（V－4区）・1030より古く、SD655、SK1032より新しい。以下、本調査区での所見を中心に述べる。

上幅は2.9～3.1m、下幅は2.3～2.6mで、深さは88cmである。断面形は逆台形で、方向はN－15°－Eである。堆積土は6層に分けられる。このうち4層は灰白色火山灰の一次堆積層で、他は黒色や黒褐



第15図　Q−2〜4区平面図



第16図　Q－2～4区溝跡、土壙断面図

色の粘土・粘土質シルトを主体とした自然堆積層である。

遺物は本調査区の堆積土から須恵器甕が1片出土したのみである。

【SD692 溝跡】

4区西端で確認した東西溝跡で5.8m分を検出した。上幅は2.9～3.2m、下幅は1.8～2.2mで、深さは82cmである。断面形は逆台形で、方向はE－28°－Nである。堆積土は7層に分けられる。このうち4層は灰白色火山灰の一次堆積層で、他は黒・黒褐色の粘土や粘土質シルト、黒色砂質シルトを主体とした自然堆積層である。遺物は出土していない。

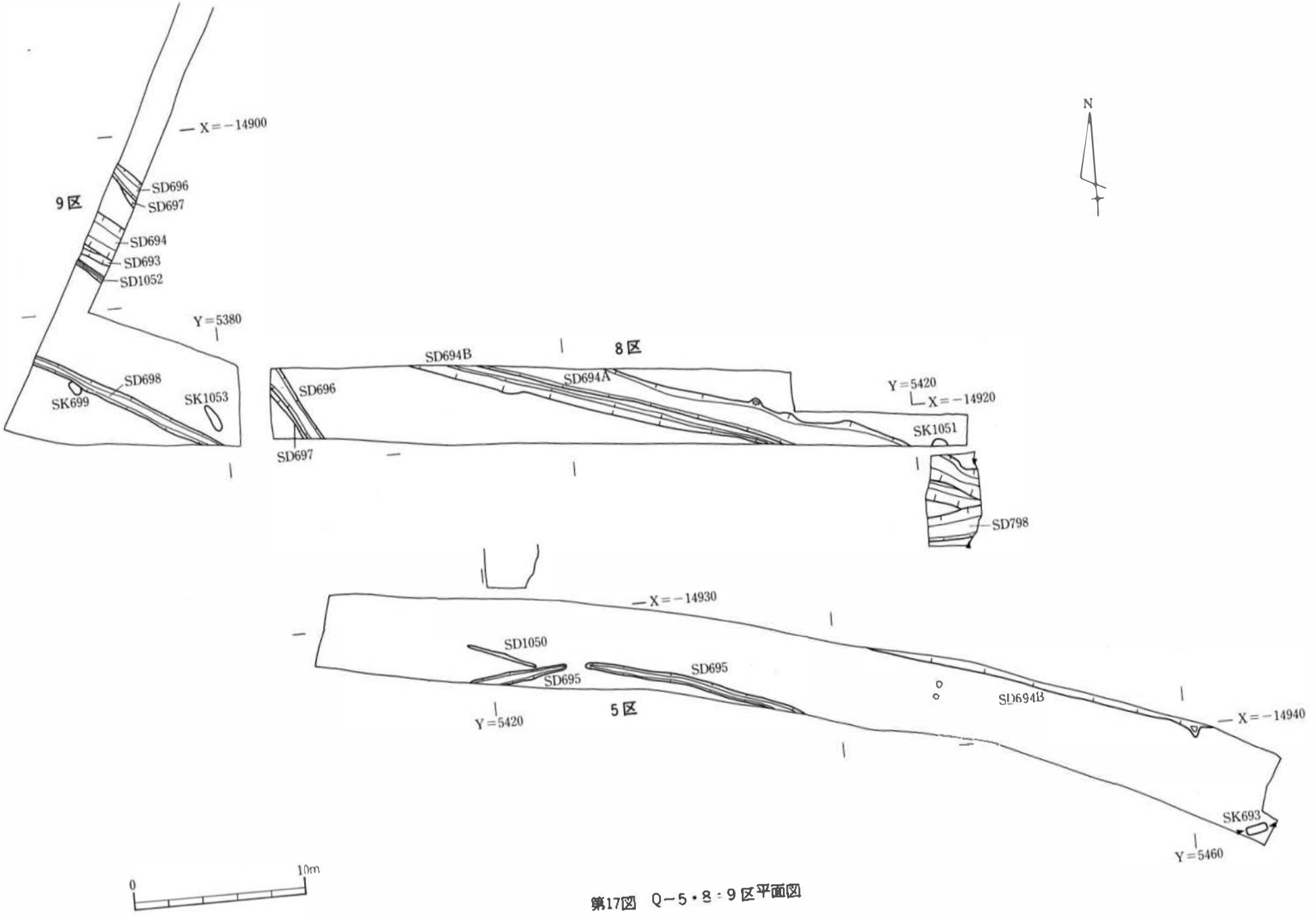
(3) 土壙（第15・16図）

5基確認した。3区中央部だけに分布する。平面形は楕円形や円形である。規模は①長軸2.0～1.0mのもの（SK686・1044・1047）と、②長軸1.0m以下のもの（SK1048・1049）がある。断面形は皿状や逆台形である。堆積土は黒色や黒褐色のシルトを主体とし、底面付近では砂を含むものもある（SK686）。遺物は出土していない。

5・8・9区（第17図）

(1) 溝跡（第17・18図）

8条確認した。調査区全体に分布し、西側に隣接するR・S区も含めて複数の調査区にわたるものが多くみられる。東西溝が主体であるが、南北溝もある。東西・南北溝ともに真東・北に対して方向が大きくふれるものが多い。また、湾曲したり蛇行するとみられるものもある。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD694A・B・798）、②上幅0.5～1.5mのもの（SD695～698）、③上幅0.5m未満のもの（SD1050・1052）がある。断面形はU字形が主体である。堆積土はSD694BとSD696の1層が地山ブロックを多く含む黒・黒褐色のシルトで人為的な埋土である以外は、黒色や黒褐色、灰褐色シル



第17図　Q−5・8・9区平面図

トなどの自然堆積である。遺物は、後述する溝跡のほかにはSD695の堆積土から須恵器甕が極少量出土している。

【SD694A・B溝跡】

5・8・9区で確認した東西溝跡である。西側に隣接するR－1区、S－1区で延長が確認されており、全体では長さ180m以上に及ぶ溝跡とみられる。2時期（B→A）ある。SD798・1056（R－1区）より古く、SK731・732（ともにS－1区）より新しい。Aは上幅1.3～2.0m、下幅0.7～0.8mで、深さは48cmある。断面形はU字形で、方向はE－19～35°－Sである。堆積土は2層が黒褐色、1層が黒色のシルトで、ともに自然堆積である。

Bは北側がAに壊されている。残存する上幅は1.1～1.7m、下幅は0.4～1.0mで、深さは72cmである。断面形と方向はAと同じである。堆積土は2層が黒褐色、1層が黒色のシルトで、ともに地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は、Aの堆積土から須恵器甕が極少量出土している。また、遺構確認時にS－1区で縄文土器(第26図1）が出土している。

【SD696溝跡】

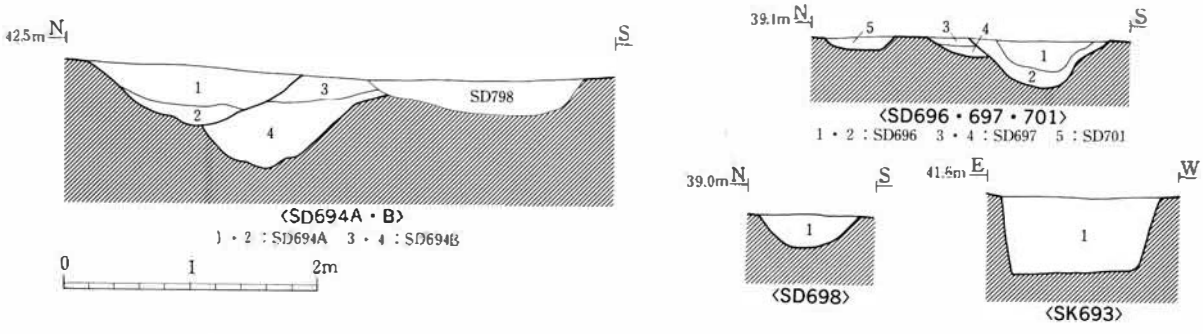
8・9区で確認した溝跡である。西側に隣接するR－1区、S－1区で延長が確認されており、全体では長さ70m以上に及ぶものとみられる。8・9区ではほぼ南東から北西に向かって延びており、R－1区で方向をさらに西向きに転じる。SD697より新しい。上幅は0.4～1.3m、下幅は0.2～0.7mで、深さは38cmである。断面形はU字形で、方向は、N－31°～50°－Wである。堆積土は2層が黒色シルトの自然堆積、1層は地山土の粒を多く含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SD697溝跡】

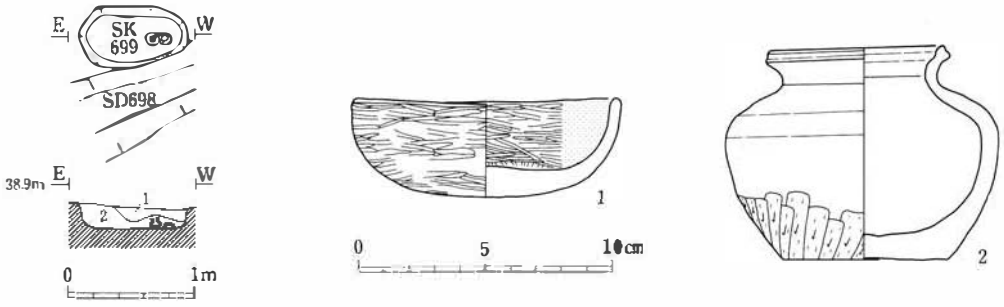
8・9区で確認した南北溝跡である。西側に隣接するR－1区で延長が確認されており、全体では長さ32m以上に及ぶものとみられる。SD696より古い。上幅は0.8m、下幅は0.2mで、深さは16cmである。断面形はU字形で、方向はN－31°－Wである。堆積土は2層が灰褐色砂質シルト、1層が黒褐色シルトで、ともに自然堆積である。遺物は出土していない。

【SD698溝跡】

8・9区で確認した東西溝跡である。西側に隣接するR－1区、S－1区で延長が確認されており、



第18図　Q－5・8・9区溝跡、土壙断面図



No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	土師器・坏	SK699・底面	無段丸底 外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	10.6		3.9	完形	8-15
2	須恵器・壺	SK699・底面	外面：ヘラ切り→手持ちケズリ（ナデ状）全体に降灰	6.8	6.5	8.4	完形	9-1

第19図　SK699土壙

全体では長さ45m以上に及ぶものとみられる。SK699・735～737（S－1区）より新しい。上幅は0.5～1.0m、下幅は0.2～0.5mで、深さは28cmである。断面形はU字形で、方向はE－30°－Sである。堆積土は灰褐色シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。

(2) 土壙（第17～19図）

4基確認した。まばらに分布する。平面形は楕円形や隅丸長方形などで、規模はいずれも長軸(辺)1.0m前後、短軸（辺）0.5m前後である。断面形は箱形や逆台形、皿状などで統一性はない。堆積土は、SK699が地山土を多く含む黒・暗褐色シルトで人為的な埋土であるほかは、黒色シルトの自然堆積である。遺物は後述する土壙以外では出土していない。

【SK693土壙】

5区で確認した。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が1.2m、短辺が0.4mで、深さは62cmである。断面形は逆台形である。堆積土は黒色粘土質シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK699土壙】

9区で確認した。SD698より古い。平面形は楕円形である。規模は長軸が0.9m、短軸が0.5mで、深さは22cmである。断面形は箱形である。堆積土は2層が汚れた地山土や主体とする暗褐色砂質シルト、1層が地山土の粒を多く含む砂質シルトで、ともに人為的な埋土である。遺物は底面から土師器坏と須恵器壺の完形品が出土している（第19図1・2）。土師器坏は底面に伏せられた状態、須恵器壺はその脇に正位に置かれた状態で検出された。土師器坏は非ロクロ調整で、外面に段をもたないものである。この土壙は形状や規模、堆積土の状況、遺物の出土状況からみて墓壙と考えられる。

5．R・S・T区（第20～22図）

第II工区西部の調査区である。南東から北西に延びる調査区のうち南側をS区、北側をR区、R・S区の接点から北をT区とした。各調査区は農道や水路でR－1～6区、S－1～3区、T－1・2区に細分される。遺構は掘立柱建物跡4、井戸跡2、溝跡15、土壙80を確認した。これらは調査区に広く分布するが、比較的南側のS区に濃密である。北側のR・T区では希薄であり、T－2区にいたっ

てはまったく遺構が確認されなかった。

なお、T－1区中央部の遺構検出時に石器(フレーク)が出土した。そこで出土地点を中心に3m四方の範囲を、Ⅵ層（ハードローム層）途中まで掘り下げたが、他に遺物は出土しなかった。

(1) 掘立柱建物跡（第20図）

4棟確認した。R－3区のSB1059以外はR－4区で検出した。いずれも柱穴が小さいことから小規模な建物と思われる。調査区の制限から建物の全容は必ずしも明らかではないが、SB746・747は桁行3間、梁行2間の東西棟、SB745は東西2間以上、南北1間以上、SB1059は東西2～3間、南北1間以上の建物とみられる。

検出した柱穴ではすべてで径10～20cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模はSB746・747でみると、SB746の桁行が北側柱列で総長8.7m、柱間寸法が西から2.8m、3.1m、(2.8)mで、梁行は東妻で総長5.2m、柱間寸法は2.6m等間である。SB747は桁行が北側柱列で総長9.0m、柱間寸法が西から3.1m、3.0m、(2.9)mで、梁行は東妻で総長5.2m、柱間寸法は2.5m等間である。全体に柱間寸法はやや広めである。方向はいずれも北側柱列でSB745～747がE－8～12°－S、SB1059がE－33°－Sである。柱穴は隅丸長方形や楕円形である。SB1059の柱穴がやや大きく長辺(軸)が40cm前後であり、深さは深いもので42cmある。ほかは長辺（軸）が25cm前後と小さく、深さも深いもので34cmである。どの柱穴も埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

(2) 井戸跡（第21・23図）

2基確認した。

【SE764井戸跡】

S－2区で検出した円形の素掘りの井戸跡である。規模は径1.4mで、深さは168cmである。断面形はロート状である。堆積土は3層に分けられる。3層は暗褐色砂質シルト、2層は黄褐色砂質シルト、1層は黒色シルトで、いずれも地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。遺物は出土していない。

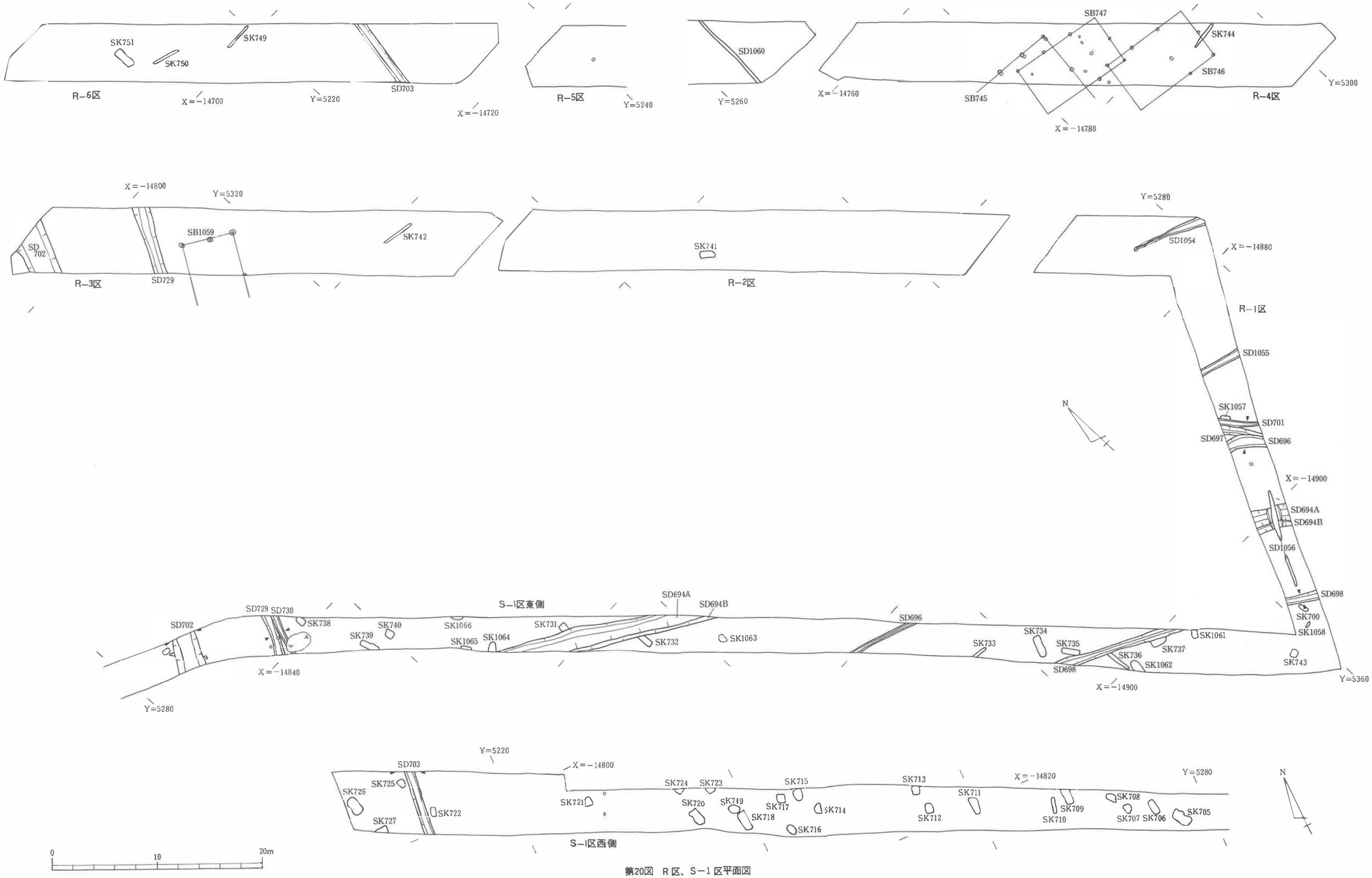
【SE775井戸跡】

S－3区で検出した素掘りの井戸跡である。平面形は円形とみられる。規模は径2.5m以上で、深さは140cmである。断面形は逆台形である。堆積土は自然堆積の上層（1層）と人為的な埋土の下層（2～4層）に大別される。下層は地山ブロックを多く含む黒色シルトで、2・4層は特にブロックが多い。上層は黒色シルトである。遺物は出土していない。

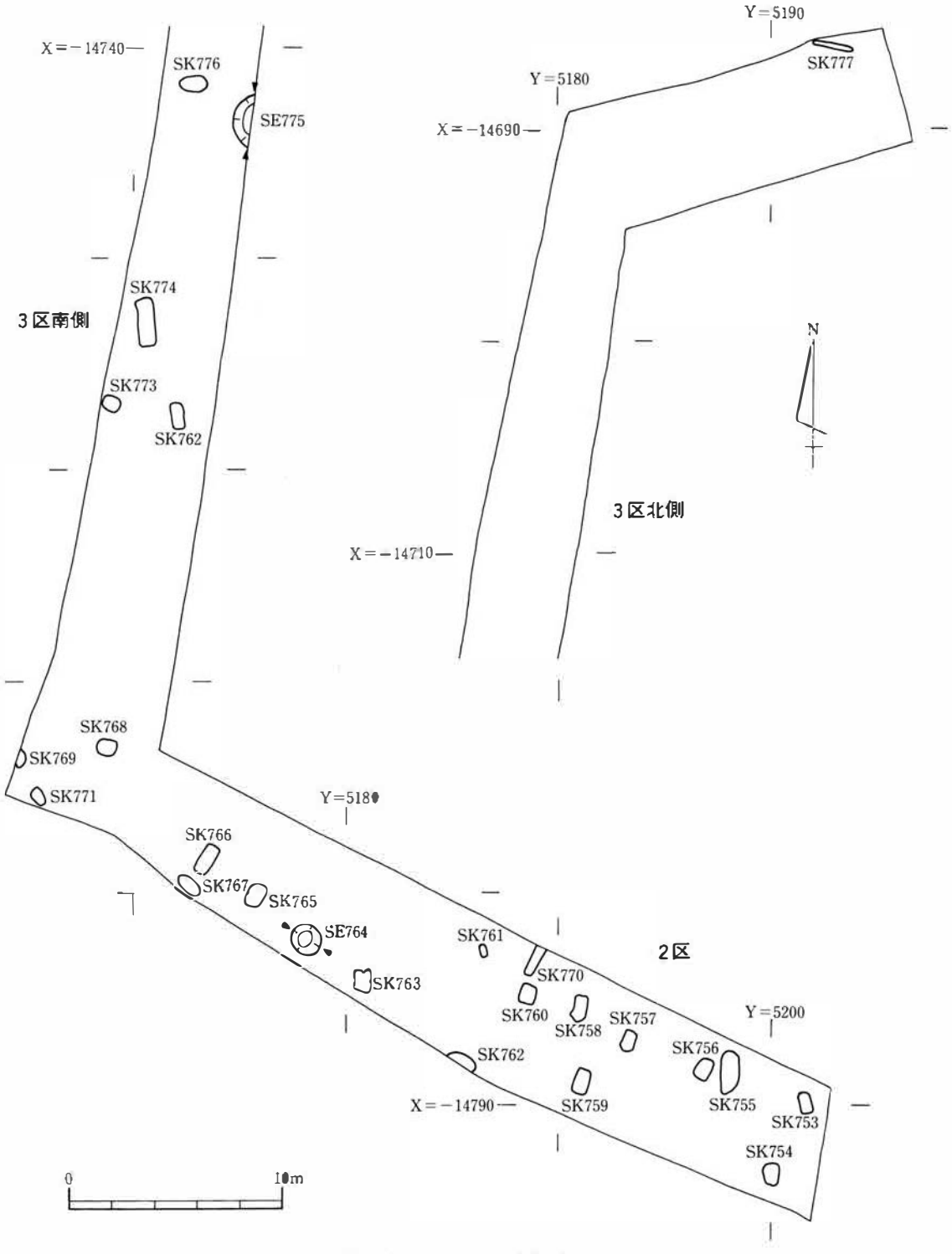
(3) 溝跡（第20・22・23図）

15条確認した。このうちR－1・S－1区の東側に隣接するQ－5・8・9区でも確認したSD694A・B、SD696～698についてはそこで記述したので、以下ではそれら以外のものについて述べる。

SD694A・B、SD696～698以外の溝跡は11条確認した。全体にまばらに分布している。南北溝が多く、また方向が大きく東にふれるものが多い。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD702・729・785)、



第20図　R区、S−1区平面図

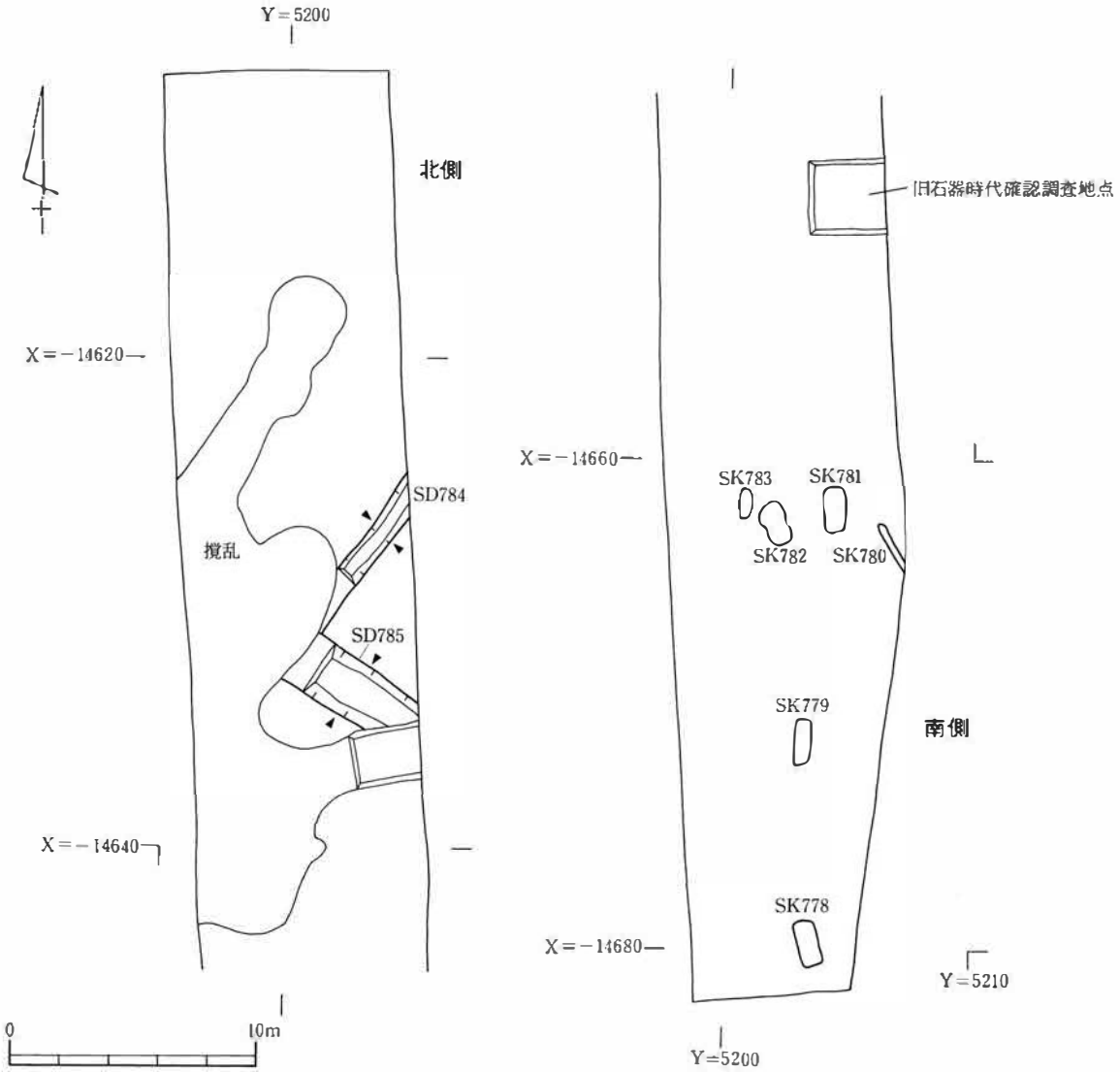


第21図　S−2・3区平面図

②上幅0.5〜1.5mのもの（SD701・703・730・784・1054〜1056）、③上幅0.5m未満のもの（SD1060）がある。断面形は逆台形やU字形が主体で、規模が大きいほど逆台形のものが多い。後述する溝跡以外では、堆積土は黒色や黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物は出土していない。

【SD702溝跡】

R−3区で5.5m分、S−1区で3.4m分を確認した南北溝跡である。全体では長さ45m以上に及ぶも



第22図　T−1区平面図

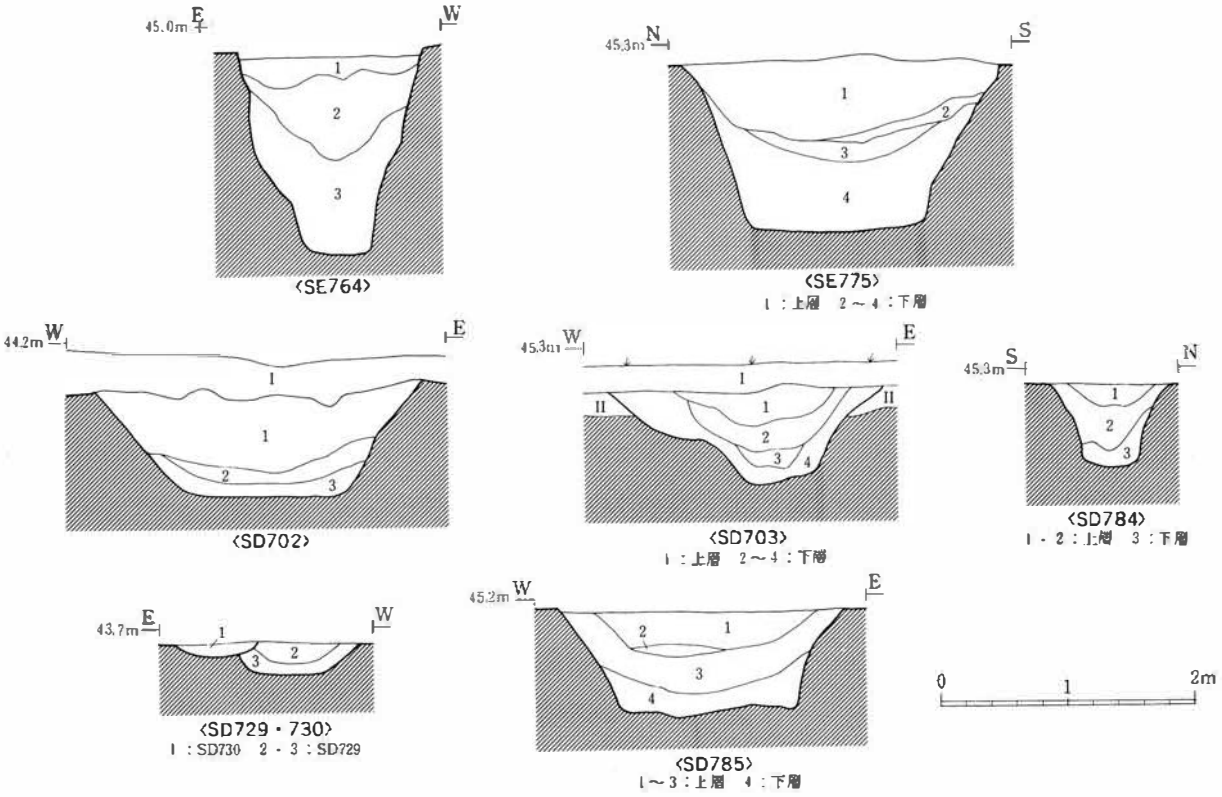
のとみられる。SK728より新しい。上幅は2.2〜3.1m、下幅は1.5〜2.0mで、深さは95cmである。断面形は逆台形で、方向は、N−30°−Eである。堆積土は3層に分けられる。3層がにぶい黄褐色の砂、1・2層は炭粒や地山土粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。

【SD703溝跡】

R−6区で6.8m分、S−1区で6.1m分を確認した南北溝跡である。全体では長さ65m以上に及ぶものとみられる。上幅は検出面で0.8〜1.0m、下幅は0.3〜0.5mで、深さは54cmである。断面形は軽く段のつくU字形で、方向はN−6〜10°−Eである。堆積土は人為的な埋土の上層（1層）と自然堆積の下層（2〜4層）に大別される。下層は黒褐色と黒色のシルトの互層である。上層は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

【SD729溝跡】

R−3区で6.3m分、S−1区で3.8m分を確認した南北溝跡である。全体では長さ45m以上に及ぶものとみられる。SD730より古い。上幅は0.8〜1.6m、下幅は0.4〜0.7mで、深さは38cmである。断面形は逆台形で、方向はN−29〜33°−Eである。堆積土は2層が黒褐色砂質シルト、1層が黒色シルト



第23図　S・R・T区井戸・溝跡断面図

で、ともに自然堆積である。

遺物は堆積土から須恵器甕が極少量出土している。

【SD730 溝跡】

S－1区で確認した南北溝跡で、3.9m分を検出した。SD729より新しい。上幅は0.5～0.7m、下幅は0.3m前後で、深さは13cmである。断面形はU字形で、方向はN－21°－Eである。堆積土は黒色シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整で外面に段のない土師器坏が極少量出土している。

【SD784 溝跡】

T－1区で確認した溝跡で、5.9m分を検出した。調査区西側は撹乱に壊されている。SD785より古い。上幅は1.0m、下幅は0.5mで、深さは66cmである。断面形は逆台形で、方向はN－38°－Eである。堆積土は自然堆積の上層（1・2層）と人為的な埋土の下層（3層）に分けられる。下層は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。上層は地山土の粒を含む黒褐色粘土質シルトである。地山土の粒は1層により多い。遺物は出土していない。

【SD785 溝跡】

T－1区で確認した溝跡で、5.0m分を検出した。調査区西側は撹乱に壊されている。SD784より新しい。上幅は2.2～2.4m、下幅は1.2～1.5mで、深さは88cmである。断面形は逆台形で、方向はE－32°－Sである。堆積土は自然堆積の上層（1～3層）と人為的な埋土の下層（4層）に分けられる。下層は地山ブロックを含む黒褐色砂質シルトである。上層は地山土の粒を含む黒褐色粘土質シルトである。2層は地山土の粒がやや少ない。遺物は出土していない。

(4) 土壙（第20～22・24・25図）

80基確認した。R区、T－1区にもあるが、比較的S－1・2区に多い。形状をみると①平面形が溝状で、横断面形がU字形のもの、②平面形が隅丸長方形で、横断面形が箱形を主体とし、底面にpitのあるもの、③平面形が隅丸長方形で、横断面形が箱形を主体とし、底面にpitのないもの、④平面形が隅丸長方形や方形を基調とし、横断面形は一方の壁がオーバーハングするもの、⑤上記の①～④以外のものがある。このうち①～④は形状だけでなく、分布や規模、堆積土などにもそれぞれまとまりが認められる。よって、以下では①～④について各々まとめて述べることにする。なお、⑤については堆積土は黒・黒褐色シルトが主体で、遺物は出土していない。

【①類】

9基確認した（SK728・733・736・742・744・749・750・777・780）。R－3区からS・T区の接点部分にかけて6基、S－1区東側に3基があり、それぞれまばらに分布する。SK728はSD702より、SK736はSD698より古い。

規模は長さ2.0～3.6m、幅20～36cmで、深さは29～75cmである。SK728の南端はオーバハングしている。長軸方向はR－3区からS・T区にかけてのSK780以外のものは20°までの範囲で東か西にふれた東西方向をとる。S－1区東側のものは東西、南北、南東～北西とバラバラである。堆積土は地山土の粒を含む黒色や黒・暗褐色のシルトで、自然堆積である。地山土粒の混ざる度合いで2～3枚に層が分かれる場合もある。遺物は出土していない。

【②類】

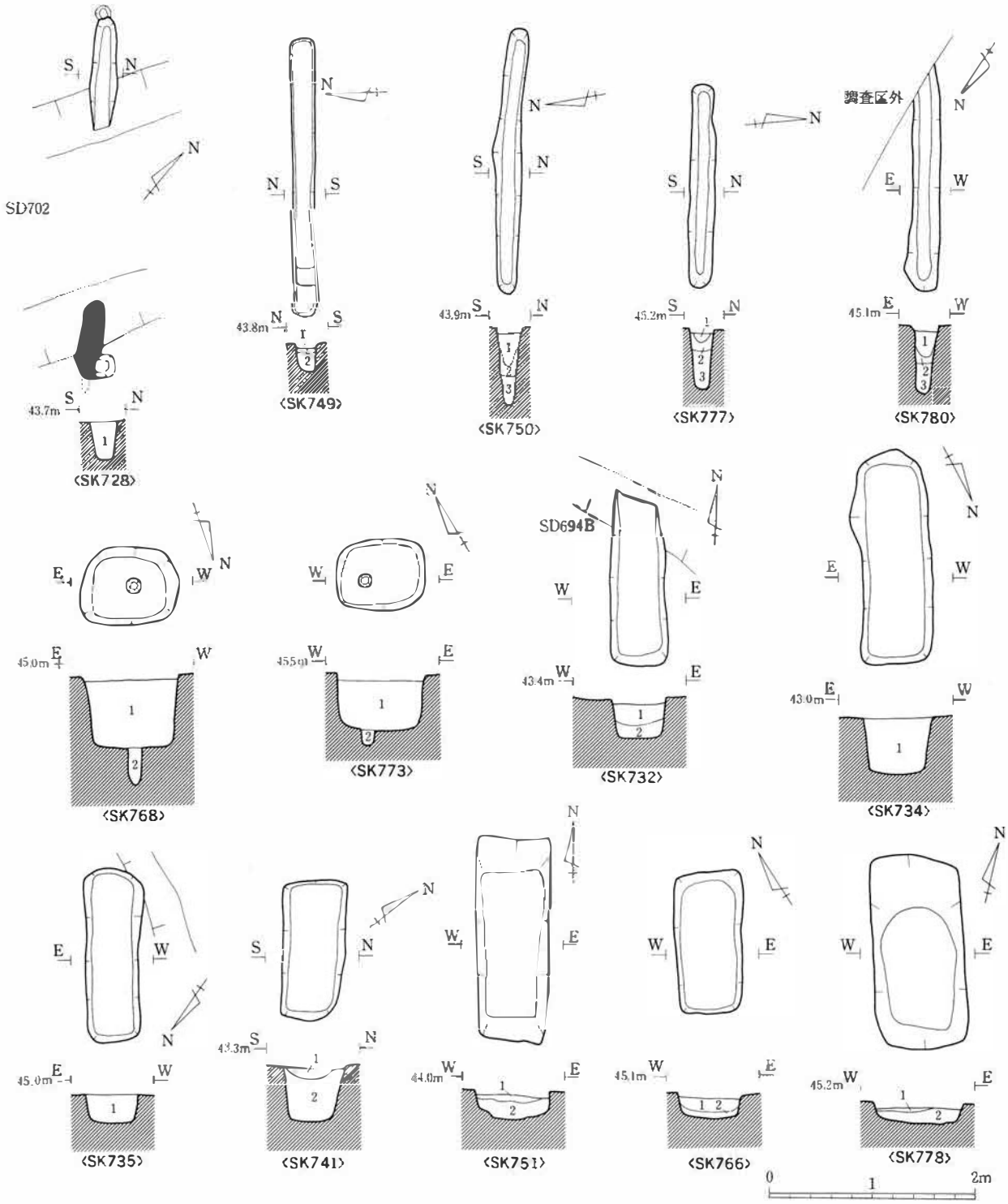
S－3区で2基確認した（SK768・773）。SK768の平面形はやや楕円形に近い。規模は長辺0.9m前後、短辺0.8m前後で、深さは54～70cmである。堆積土は黒色シルトで、自然堆積である。底面のpitは、円形のものがともに1つ確認された。SK768では底面ほぼ中央、SK773では中央からやや西よりにある。径は13cm前後、深さは18～39cmである。堆積土は小さい地山ブロックを少し含み、やや粘性のある黒色シルトで、杭の痕跡と思われる。②類の長軸方向はSK768がE－10°－S、SK773がE－31°－Sで、東に対し南にふれる。遺物は出土していない。

【③類】

15基確認した（SK700・706・731・732・734・735・739・741・751・766・770・772・774・778・780）。R－2区とS－1区東側に9基、S－2・3区接点近くに3基、R－6区とT－1区の接点近くに3基があり、S・R・T区全体でみると南東部に多く分布する。SK731・732はSD694より、SK735はSD698より古い。

規模は長辺が1.0～2.1m、短辺が0.4～0.9mである。深さは16～55cmで、30cm前後のものが多い。横断面形は箱形が主体だが、逆台形のものも少しある。SK741以外の長軸方向は35°までの範囲で東か西にふれた南北方向をとる。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色や黒褐色、褐色のシルトで、人為的な埋土である。地山ブロックは下層ほど多い。

遺物はSK700の埋土から貝殻条痕文が施文された縄文土器が出土している（第26図2）。

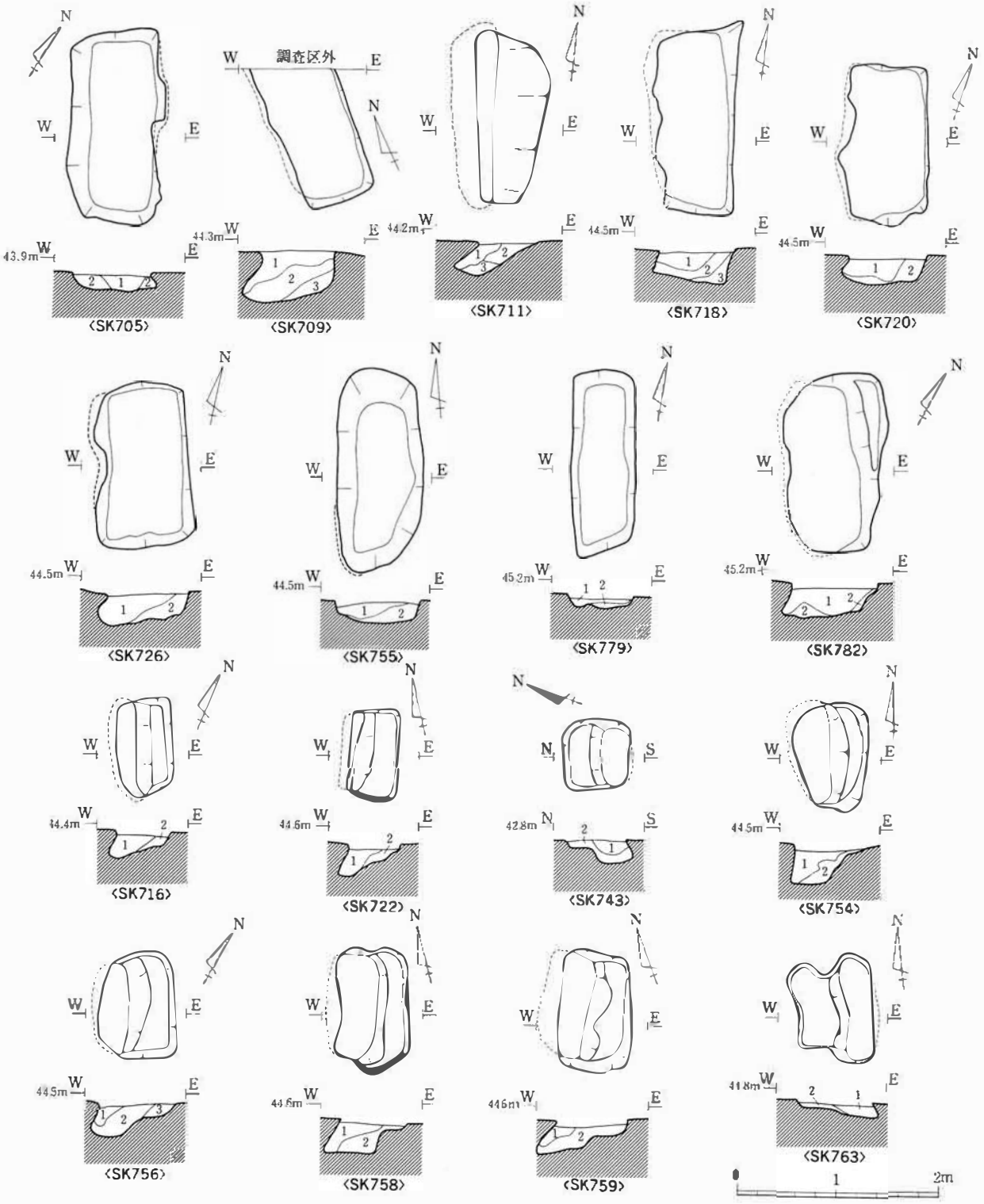


第24図　土壙①～③類

【●類】

39基確認した。(SK704・705・707～718・720～727・738・740・743・753～761・763・765・771・779・782)。R区とS－3区以外に分布し、特にS－1区西側とS－2区に集中する。遺構の全容がほぼわかるものでみると、長軸が1.5m以上の大きいa類と1.5m未満の小さいb類がある。

a類は10基ある。平面形は楕円に近いものや不整な長方形のものもある。規模は長辺(軸)は1.6～2.0mで1.8m前後のものが多く、短辺（軸）は0.4～0.9mで0.8m前後のものが多い。深さは13～37cmである。長軸方向は34°までの範囲で西にふれた南北方向のものが多い。横断面形は一方の壁がオーバー

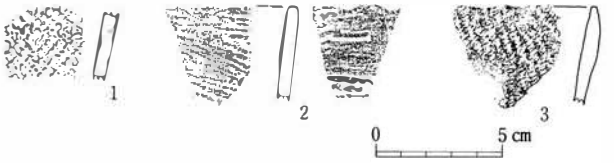


第25図　土壙④類

ハングする袋状または平行四辺形である。a類中最も東で確認されたSK705以外は、すべて西壁がオーバーハングする。

b類は25基ある。平面形は楕円を2つ並べたやや不整なものもある。規模は長辺（軸）は0.6〜1.3mで1.0m前後のものが多く、短辺（軸）は0.3〜0.8mで0.6m前後のものが多い。深さは10〜41cmである。長軸方向はb類中最も東で確認されたSK743以外は、34°までの範囲で東か西にふれる南北方向を

とる。横断面形は一方の壁が袋状や平行四辺形状にオーバーハングする点はａ類と同じだが、反対側が段状のものが多くみられる。また、西壁がオーバーハングするものが主体をしめるが、SK740・743・763・771は東壁がオーバーハングする。



No.	種別	出土遺構・層位	特徴	写真図版
1	縄文土器	SD694・検出面	非結束羽状縄文（LR・RL）	10-16
2	縄文土器	SK700・堆積土	貝殻条痕文	10-17
3	弥生土器	SK720・堆積土	縦走縄文（RL） 天王山式	10-18

第26図　S・R・T区出土遺物

a・b類とも堆積土は、2・3層は地山ブロックを多く含む褐色シルトで人為的な埋土とみられる。1層は地山土の粒を少し含む黒色や暗褐色のシルトである。人為的な埋土か、自然堆積かは判別できなかった。遺物はSK720の1層から縦走縄文が施文された弥生土器が出土している（第26図3）。

6．U区（第28図）

第III工区北の東部の調査区である。東側の南北調査区を1区（昨年調査のL区の北側）、西側の南北調査区を3区、1・3区の間の東西調査区を2区とした。3区は確認調査部分である。2区は北側が東西方向の沢に面しており、調査区全体が沢に向かってゆるやかに下る地形となっている。また、2区西端と3区北端には沢の一部が分岐して入りこんでいる。遺構は掘立柱建物跡5、竪穴住居跡5、井戸跡1、溝跡22、土壙64を確認した。これらは分岐した沢以外の部分に広く分布するが、特に1区北側と、沢に近い2区西側に多い。掘立柱建物跡や竪穴住居跡、井戸跡もその周辺で確認された。

なお、2区北側の東西方向の沢は西隣りのV区に及ぶもので、これまで中世名生城の掘跡とみてきたものである。しかし、これまでの調査をふまえた全体的な地形からみて沢と思われる。

(1) 掘立柱建物跡（第27・28図）

5棟確認した。SB871以外は2区中央から西側の沢までの範囲にある。調査区の制限から全容がわかるものは少ない。柱穴は小さく、長辺（軸）が35cm前後の隅丸長方形や楕円形のものが主体である。また、柱穴の並びは1～3間程度でとまるものが多い。したがって、小規模な建物が主体とみられる。方向は①ほぼ真北のもの（SB855・871）、②北に対し6～17°東にふれるもの（SB844・854・886）がある。遺物は後述するもの以外からは、SB854の柱穴埋土から土師器甕、須恵器甕が極少量出土している。なお、SB854・855は建物としたが、柱穴の形や配置からみて、竪穴住居跡の主柱穴のみが検出されたものである可能性がある。

【SB844建物跡】

2区西側で確認した桁行2間、梁行1間の東西棟である。柱穴はすべて検出しており、各々で径14cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が北側柱列で総長2.6m、柱間寸法は東から1.35m、1.25m、梁行は東妻で総長2.2mである。方向は北側柱列でE－6°－Sである。柱穴は隅丸長方形で、長辺が30cm前後、短辺が25cm前後であり、深さは深いもので24cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトである。

遺物は柱穴埋土から土師器が極少量出土している。

第27図　U区建物跡柱穴断面図

【SB886 建物跡】

2区西側で確認した桁行3間、梁行2間の東西棟である。SI841より古く、SI842より新しい。柱穴は8ヵ所で検出しており、すべてで径20cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が南側柱列で総長5.6m、柱間寸法は東から1.8m、1.85m、1.85m、梁行は西妻で総長3.7m、柱間寸法は北から1.8m、1.9mである。方向は南側柱列でE－17°－Sである。柱穴は隅丸長方形や楕円形で、長辺（軸）が45cm前後、短辺が35cm前後であり、深さは深いもので38cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

(2) 竪穴住居跡（第28～31図）

5軒確認した。SI804が1区で確認された以外は、2区西側に集中する。いずれも残存状況が悪い。床面が残るものはSI804・841のみで、他は周溝や主柱穴が一部確認されたにとどまる。

【SI804 住居跡】

1区中央で確認した。堆積土や壁は残存していない。SD853より古い。

［平面形・規模］東西4.8m、南北4.6mの隅丸長方形である。

［床面］西側拡張部で確認した。地山ブロックを含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

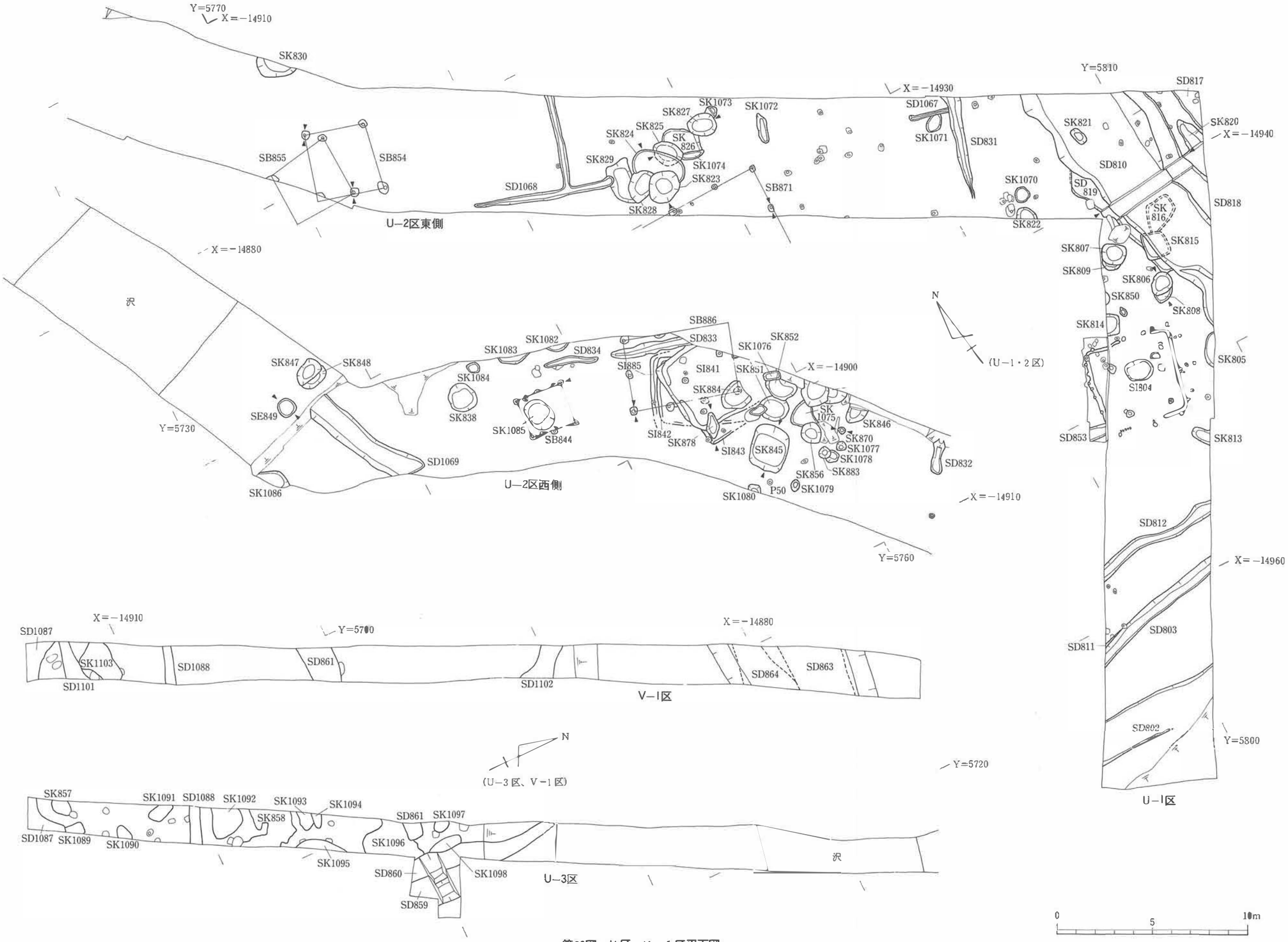
［主柱穴］4ヵ所確認した。掘方は長軸（辺）が30～44cm、短軸（辺）が25～36cmの楕円形や隅丸長方形で、深さは深いもので28cmである。柱痕跡は径15～20cmの円形である。柱間寸法は東西が2.3m、南北が2.5mである。なお、北東の柱は切り取られている。

［壁柱穴］12ヵ所確認した。各辺に3個ずつある。掘方は長軸（辺）が20cm前後の楕円形や隅丸長方形で、深さは深いもので18cmである。柱痕跡は8ヵ所で確認された。径10cm弱の円形を呈している。

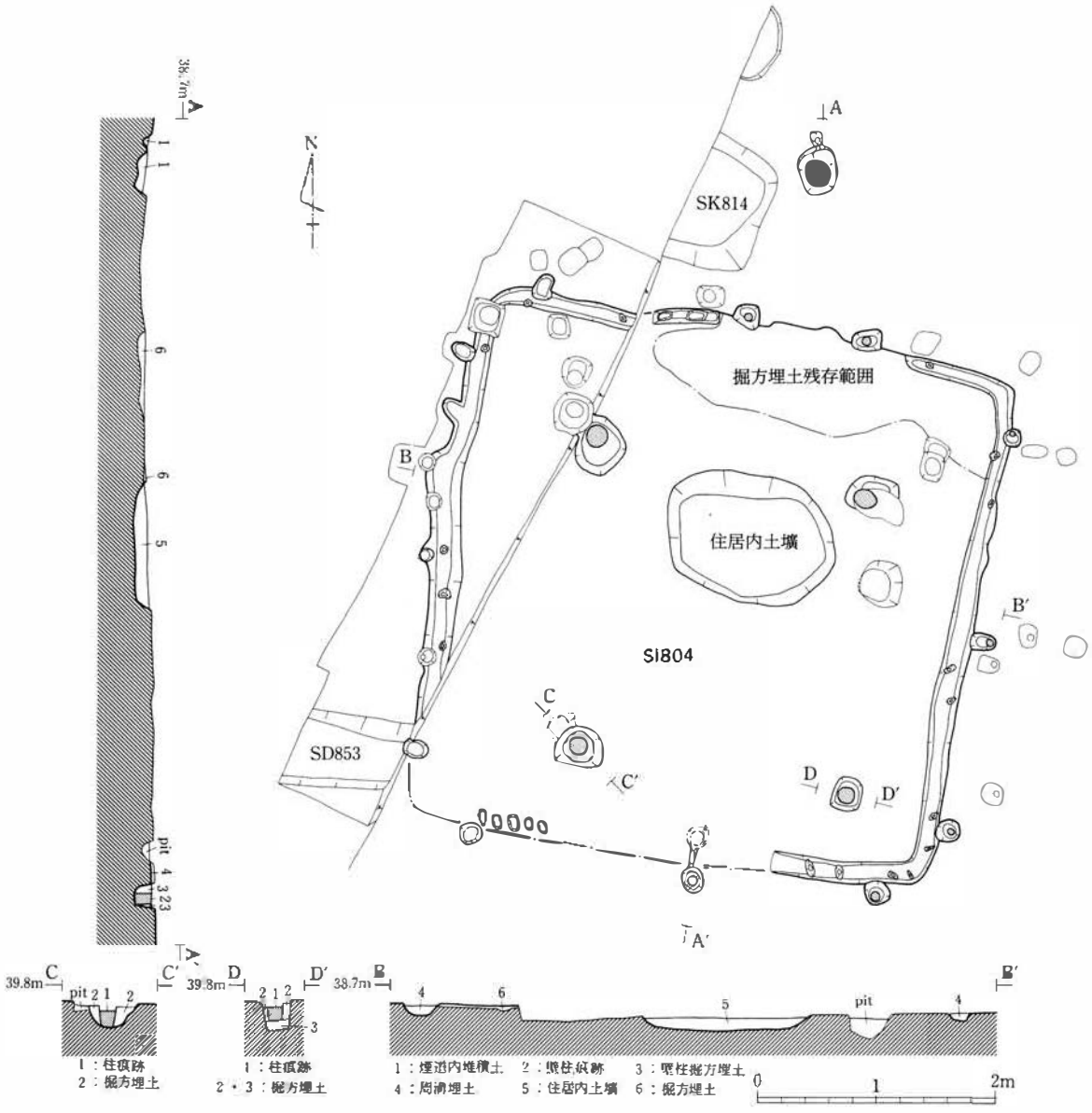
［周溝］全辺で確認された。南辺は残りが悪い。幅は15～30cmで、深さは西辺で15cmある。地山ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。底面には所々に径15cm程の楕円形の凸凹がある。その間隔は南辺の狭いところで10cmである。この凸凹と堆積土の状況からみて、本住居の壁際には丸材または割材等が並べ立てられていた可能性がある。

［カマド］住居内では確認されなかったが、煙道のpitが北側で検出されたこと、周溝が北辺中央の東よりにはないことから、そこに付設されていたとみられる。煙道pitの堆積土は炭粒を含む黒褐色シルトである。

「その他の施設」住居のほぼ中央、カマドの南側で楕円形の土壙を検出した。位置からみて、住居に



第28図　U区、V－1区平面図



第29図　SI804 住居跡

伴うものと思われる。規模は長軸が1.4m、短軸が1.1mで、深さは15cmである。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色砂質シルトで、人為的な埋土とみられる。

［方向］東辺でN－12°－Eである。

［遺物］床面、掘方埋土、煙道pit、住居内土壙から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器蓋が少量出土している。また、柱穴埋土からロクロ調整の土師器片が出土している。

【SI841 住居跡】

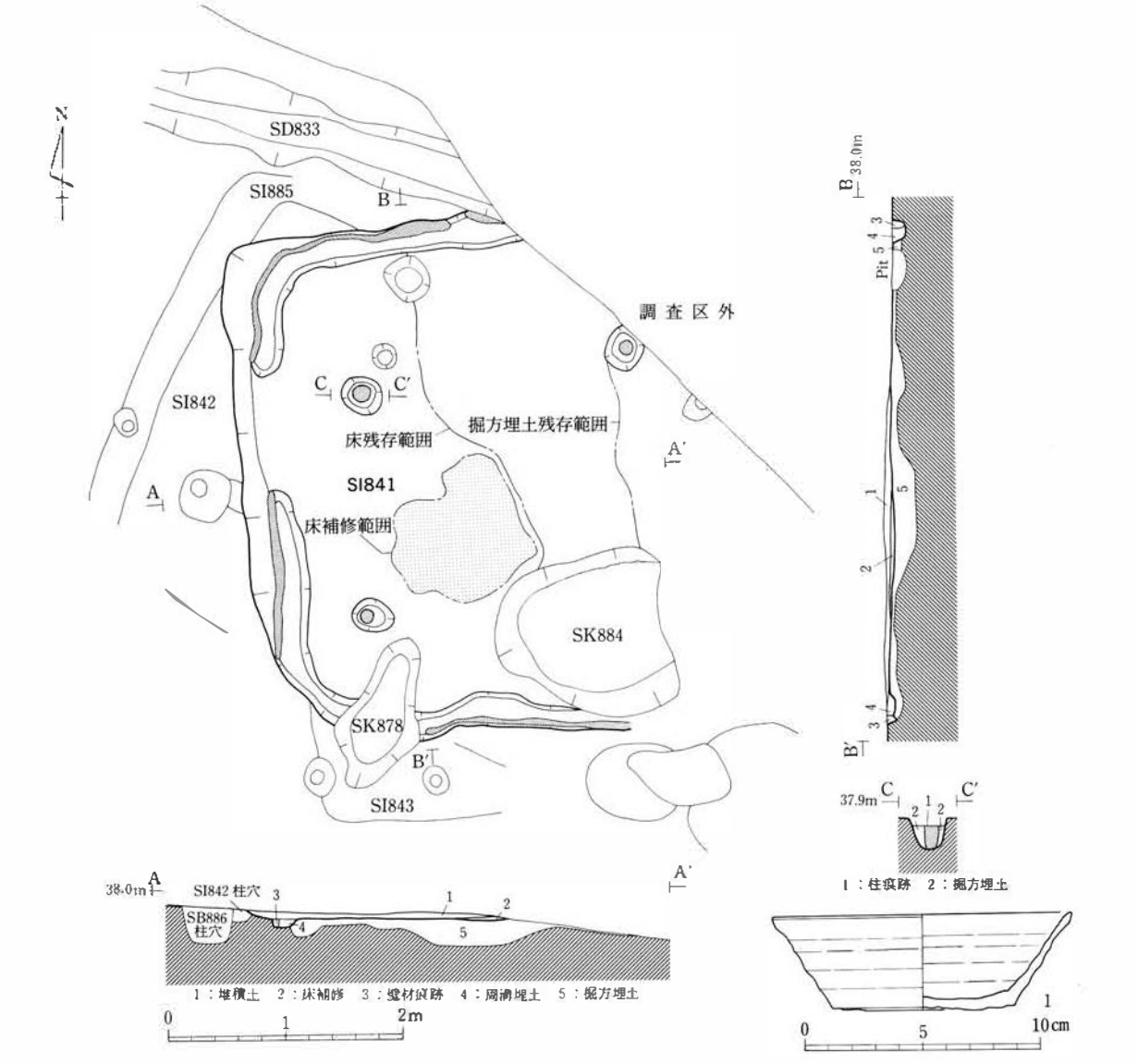
2区西側で確認した。東側は削平されている。SD853、SK878・884より古く、SB886、SI842・843より新しい。

［平面形・規模］隅丸長方形で、南北4.4m、東西は主柱穴の位置から4.5m程と推定される。

［堆積土］地山土の粒を少し含む黒色シルトで、自然堆積である。

［壁］斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい西辺で12cmである。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面とする。中央やや南西よりの部分は



No.	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	SI841・掘方埋土	外面：ヘラ切り 重ね焼き痕跡 産地：大衡窯群	(12.8)	(7.8)	4.1	1/2	9-5

第30図　SI841 住居跡

明黄褐色粘土で一度補修している。全体に平坦だが、補修前は中央付近が窪んでいたとみられる。

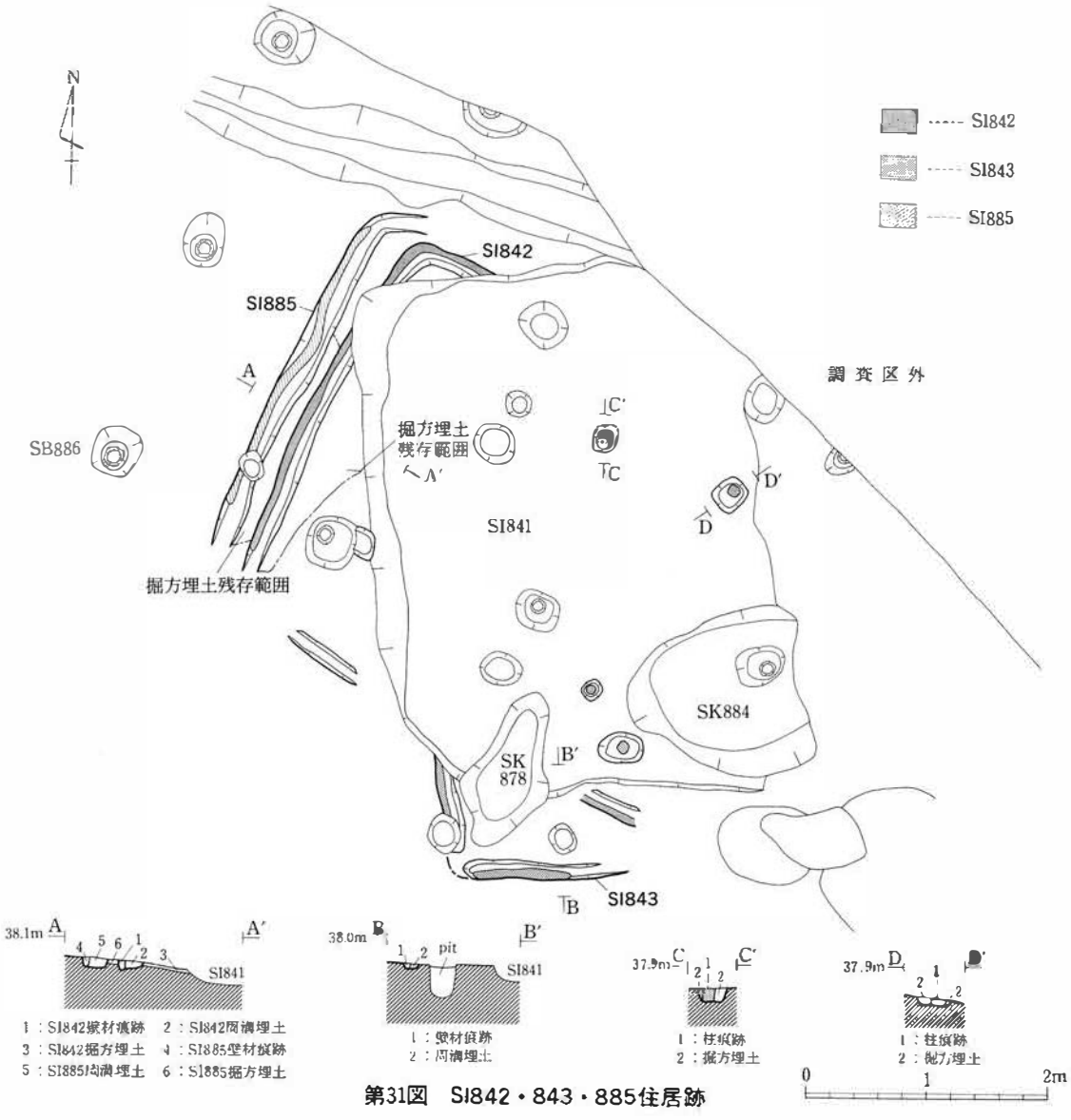
［主柱穴］3ヵ所確認した。配置からみて本来は4個あり、南東主柱穴はSK884に壊されたものと思われる。掘方は長軸（辺）が35cm前後、短軸（辺）が30cm前後の楕円形や隅丸長方形で、深さは深いもので24cmある。柱痕跡は径15cm前後の円形である。柱間寸法は東西が2.3m、南北が1.9mである。

［周溝］北・西・南辺で確認された。西辺は一部途切れている。幅は15～30cm、深さは深いところで15cmある。地山小ブロックを含む黒色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅5～14cm、深さ10cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

［カマド］検出されなかった。

［方向］西辺でN－5°－Wである。

［遺物］堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏、鉄鏃(図版10－30)、掘方埋土から土師器甕、須恵器坏・高盤、周溝埋土から土師器甕が出土している。土師器はいずれも非ロクロ調整である。図化したもの



第31図　SI842・843・885住居跡

はヘラ切り無調整の須恵器坏で、掘方埋土から出土したものである。

【SI842 住居跡】

2区西側で確認した。SI841などにより床面以下まで大幅に削平されており、主柱穴と西側の周溝・掘方埋土が一部残存するのみである。SB886、SI841より古く、SI885より新しい。

［平面形・規模］隅丸長方形で、南北3.5m、東西は主柱穴の位置から4.0m程と推定される。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としていたと思われる。

［主柱穴］3ヵ所確認した。配置からみて本来は4個あり、北西主柱穴はSI841に壊されたものと思われる。掘方は長辺18～28cm、短辺15～25cmの隅丸長方形で、深さは深いもので12cmである。柱痕跡は2ヵ所確認した。径15cm前後の円形をしている。柱間寸法は東西が2.8m、南北が2.3mである。

［周溝］北・西・南辺で確認された。北・南辺は残りが悪い。幅は15～20cm、深さは深いところで6cmである。地山小ブロックを含む黒色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅5～8cm、深さ10cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

［方向］西辺でN－25°－Eである。

［遺物］出土していない。

【SI843 住居跡】

2区西側で確認した。SI841などにより床面以下まで大幅に削平されており、南西隅の周溝と西側の主柱穴が残存するのみである。SI841より古い。

［平面形・規模］周溝と主柱穴の位置から東西1.7m以上、南北4.6m程の隅丸長方形と推定される。

［主柱穴］2ヵ所確認した。配置からみて本来は4個あり、東側主柱穴は削平されたものと思われる。掘方は長辺22～38cm、短辺20～26cmの隅丸長方形で、深さは深いもので12cmある。柱痕跡は径10cm前後の円形をしている。柱間寸法は南北が2.55mである。

［周溝］南西隅の南辺と西辺で確認された。隅部分では途切れている。幅は12～18cm、深さは深いところで5cmである。地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅6～12cm、深さ10cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

［方向］南辺でE－5°－Nである。

［遺物］出土していない。

【SI885 住居跡】

2区西側で確認した。SI841・842などにより床面以下まで大幅に削平されており、西側の周溝と掘方埋土が一部残存するのみである。SI842より古い。

［平面形・規模］周溝のあり方から東西0.5m以上、南北3.2m以上の隅丸長方形と思われる。

［床面］地山小ブロックを含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としていたと思われる。

［周溝］北・西辺の一部が確認された。幅は16～24cm、深さは深いところで10cmである。地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅8cm前後、深さ10cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

［方向］西辺でN－26°－Eである。

［遺物］出土していない。

(3) 井戸跡（第28・32図）

1基確認した。

【SE849 井戸跡】

2区西側で確認した井戸跡である。完掘していないため構造は不明である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.0m、短軸0.9mである。深さは88cm以上、断面形は箱形とみられる。堆積土は4層に分けられる。1・4層は砂ブロックを多く含む黒褐色シルト、3層はオリーブ褐色砂、2層は黒褐色シルト質砂で、すべて人為的な埋土である。遺物は出土していない。

(4) 溝跡（第28・32図）

22条確認した。1区と3区に多く、2区ではまばらである。大きく東西溝と南北溝に分けられるが、

南東から北西に延びるもの（SD1069）や南北・東西の溝がT字状に連結するもの（SD1068）もある。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD802・810・859・860）、②上幅0.5〜1.5mのもの（SD803・812・831〜833・853・1069）、③上幅0.5m未満のもの（SD811・834・1067・1068）、④不明なもの（SD661・817〜819・861・1087・1088）がある。後述する溝跡以外の断面形はU字形や皿状、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体で、SD819の最上層には灰白色火山灰の一次堆積がみられる。また、遺物はSD802で土師器甕、須恵器坏、SD803で土師器と須恵器の坏・甕、SD818で土師器坏、SD819・833・834で土師器甕、SD831で土師器と須恵器の甕、SD859で土師器と須恵器の甕、瓦（第32図8）、陶器がいずれも堆積土から極少量出土している。土師器にロクロ調整のものはみられない。

【SD810溝跡】

1区北側で確認した南北溝跡で15.8m分を検出した。SD818・819、SK815・816・821より新しい。上幅は3.3〜5.1m、下幅は2.9〜3.5mで、深さは36cmである。断面形は皿状で、方向はN−18°−Wである。堆積土は3層に分けられる。3層がにぶい黄橙色粘土質シルト、2層が黒褐色シルト、1層が黒色シルトで、いずれも自然堆積である。

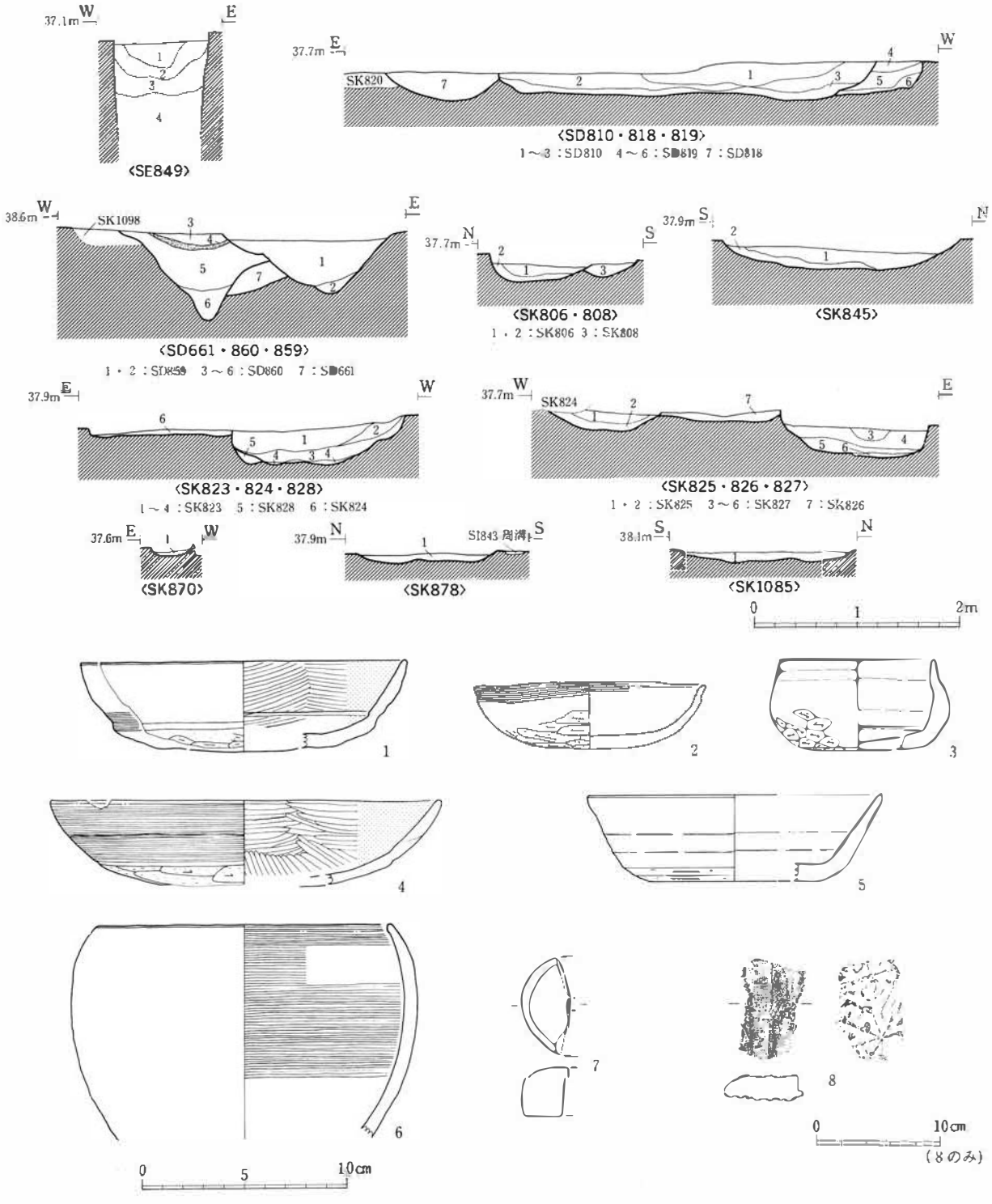
遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕・高坏、須恵器坏・甕が出土している。土師器坏には口縁部が内湾気味に立ち上がる有段丸底の坏（第32図1）のほか、関東系のものもある（2）。また、須恵器坏には器形からみて7世紀代のものとみられるもの（3）もある。ただし、これらの遺物は本溝が灰白色火山灰の一次堆積がみられるSD819より新しいことから、周辺の遺物が流れこんだものと思われる。

【SD860溝跡】

3区中央で確認した南北溝跡で8.1m分を検出した。SD859、SK1098より古く、SD661より新しい。上幅は0.6〜1.6m、下幅は0.3〜0.4mで、深さは88cmである。断面形はU字形で、方向はN−6°−Eである。堆積土は4層に分けられる。4層が暗褐色、3層が黒褐色の砂質シルト、2層が灰白色火山灰の一次堆積層、1層が黒色シルトで、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

(5) 土壙（第28・32図）

64基確認した。その分布は1・2区では建物跡や住居跡の周辺に集中する傾向がある。3区では沢の南側で平均的に分布する。平面形は楕円形が主体で、他に隅丸長方形のものなどがある。規模は①長軸（辺）が2.0mを越えるもの（8基）、②長軸（辺）1.0〜2.0mのもの（38基）、③長軸（辺）1.0m未満のもの（18基）があり、大きいものは少なく、②が多い。後述するもの以外の断面形は皿状や逆台形、堆積土は黒色や黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSK807で土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏、SK809・821・830・836・852・856・884で土師器甕、SK813で土師器と須恵器の甕、SK822で土師器坏・甕、SK835で土師器甕、須恵器坏（第32図5）、SK846で土師器坏・甕、須恵器坏、SK857で土師器坏、須恵器坏・甕、SK883で土師器坏・甕、須恵器甕が各々堆積土から出土している。土師器は非ロクロ調整が主体だが、SK807・857の甕にはロクロ調整が含まれる。



No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	土師器・坏	SD810・堆積土	有段丸底 外面：ヨコナデ・ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.9)		(4.4)	1/4	9-2
2	土師器・坏	SD810・堆積土	関東系土師器 外面：ヨコナデ・ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	(11.4)		3.3	2/5	9-3
3	須恵器・坏	SD810・堆積土	外面：切り離し不明→手持ちケズリ 内面：立上り沈線状	7.6	6.2	4.5	3/4	9-4
4	土師器・坏	SK815・堆積土	有段丸底 外面：ヘラケズリ→ヨコナデ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(19.1)		4.1	1/4	9-6
5	須恵器・坏	SK835・堆積土	外面：切り離し不明→回転ケズリ 口縁部に使用痕	(14.4)	(8.3)	4.2	1/4	
6	土師器・鉢形土器	SK870・堆積土	外面：マメツ 内面：ヨコナデ		(14.4)		1/3	
7	土製品・紡錘車	SK806・堆積土	厚さ2.4cm				1/2	10-27
8	平瓦	SD859・堆積土	桶巻き作り 凸面：タタキ 凹面：布目・模骨痕→指ナデ(一部)				一部	10-26

第32図　U区井戸・溝跡、土壙断面図及び出土遺物

【SK806 土壙】

1区北側で確認した。SD819、SK808より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.3m、短軸が1.0mで、深さは17cmである。断面形は皿状である。堆積土は2層が褐灰色、1層が黒色のシルトで、ともに自然堆積である。

遺物は、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕、土製紡垂車（第32図7）が出土している。土師器坏には関東系のものもある。

【SK815 土壙】

1区北側で確認した。SD810より古く、SD819、SK816より新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が1.4m、短辺が1.3mで、深さは35cmである。断面形は箱形である。堆積土は地山ブロックを含む黒色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。土師器坏には口縁部が内湾気味に立ち上がる有段丸底の坏がある（第32図4）。

【SK823 土壙】

2区東側で確認した。SK824・828より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.9m、短軸が1.6mで、深さは50cmである。断面形は逆台形である。堆積土は4層に分けられる。地山小ブロックや焼土の粒を少し含む黒色や黒褐色のシルト、暗褐色のシルト質砂などで、自然堆積である。

遺物は、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器高盤が少量出土している。

【SK824 土壙】

2区東側で確認した。SK823・828より古く、SK825より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が2.9m、短軸が1.2m以上で、深さは9cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SK825 土壙】

2区東側で確認した。SK824より古く、SK826・1074より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.6m、短軸が1.2mで、深さは20cmである。断面形は皿状である。堆積土は2層が地山小ブロックを含む黒褐色シルト、1層が黒色シルトで、ともに自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK845 土壙】

2区西側で確認した。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が2.4m、短辺が1.9mで、深さは32cmである。断面形は皿状である。堆積土は2層が灰黄褐色シルト、1層が地山小ブロックや焼土の粒を含む黒色シルトで、ともに自然堆積である。

遺物は、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕が少量出土している。

【SK870 土壙】

2区西側で確認した。平面形は楕円形である。規模は長軸が0.4m、短軸が0.35mで、深さは8cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山小ブロックを含む黒色シルトで、人為的な埋土である。遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器甕・鉢形土器（第32図6）が極少量出土している。鉢形土器の外面は摩滅しているが、内面にはナデ調整がみとめられる。

【SK878 土壙】

2区西側で確認した。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.7m、短軸が0.7mで、深さは12cmである。断面形は皿状である。堆積土は炭や焼土の粒、地山小ブロックを含む褐灰色シルトで、人為的な埋土である。遺物は埋土からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏、鉄製品が極少量出土している。鉄製品は小刀で刀身から茎にかけての破片である（図版10－29）。

7．V区（第28・33・43図）

第III工区北の中央部と西部の調査区である。中央部は東側の南北調査区を南から1・2区、西側の南北調査区を5区、2・5区の間の東西調査区を東から3・4区とした。1区は確認調査部分である。また、3・4区は東端から40m西のSD888までを3区、そこから30m西のSD975までを4区東、それより西を4区西とした。一方、西部はU区の北側からのびる沢の沢頭にあたり、大部分が溜池や湿地になっている。このため遺構の存在は考えにくく、標高の高い部分を6区として調査するにとどめた。

遺構は掘立柱建物跡14、竪穴住居跡5、溝跡48、溝の付属施設（橋跡？）1、土壙119を確認した。建物跡や住居跡は4区東までのV区東側に分布する。遺物もその周辺で多い。4区西から西側は、4区西の東側に土壙が密集する以外は、5区南側と6区に溝跡と土壙がまばらにある程度である。4区西の西側と5区北側では遺構は確認されなかった。これらの調査区では遺物も極めて少ない。

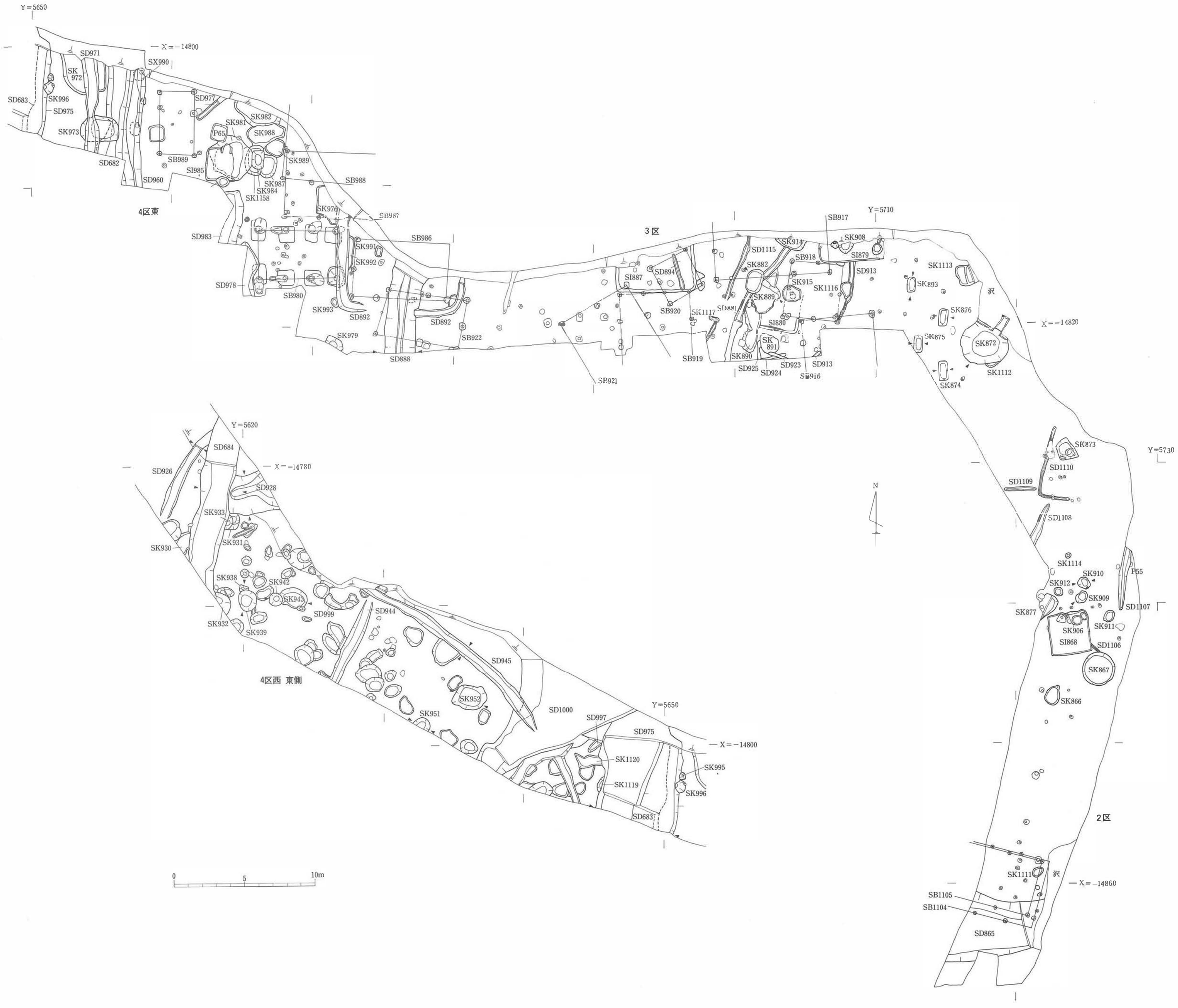
1～3区（第28・33図）

(1) 掘立柱建物跡（第33図）

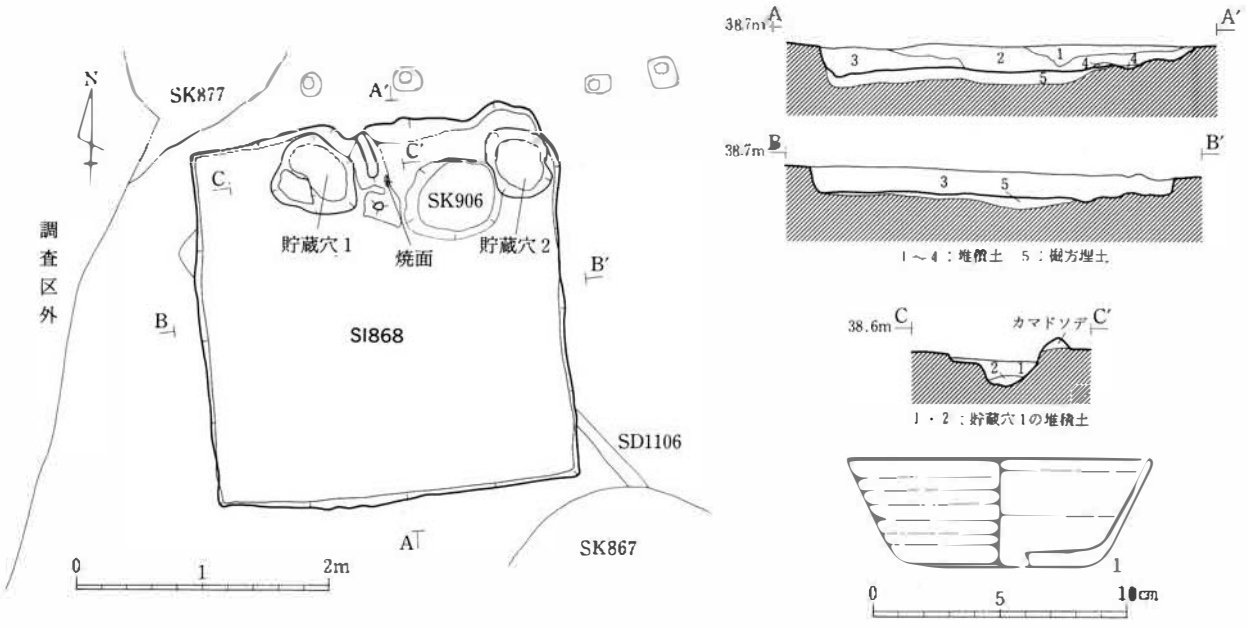
9棟確認した。3区に7棟が集中する。ほかの2棟は2区南側で検出された。調査区の制限から全容がわかるものは少ない。柱穴は長辺（軸）が30cm前後の隅丸長方形や楕円形のものが主体である。また、柱穴の並びは1～3間程度でとまるものが多い。したがって小規模な建物が主体とみられる。方向は①ほぼ真北のもの(SB917)、②北に対し9～15°東にふれるもの（SB918・1104・1105・922)、③4～6°西にふれるもの（SB916・919)、④28～31°西にふれるもの（SB920・921）がある。遺物は後述するもの以外では、SB1105の柱穴埋土から土師器甕、須恵器甕が極少量出土している。なお、SB920は建物跡としたが、柱穴の形や配置から竪穴住居跡の主柱穴のみが検出されたものである可能性がある。

【SB919 建物跡】

3区中央で確認した東西3間、梁行2間以上の建物跡である。SI887より新しい。柱穴は7ヵ所で検出しており、そのうち4ヵ所で径15cm前後の円形の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が北側柱列で総長5.0m、柱間寸法は東から1.8m、1.5m、1.7m、南北は西側柱列で総長3.9m以上、柱間寸法は北から1.9m、1.9m、以下不明である。方向は北側柱列でE－3°－Nである。柱穴は隅丸長方形や楕円形で、長辺(軸)が30～35cm、短辺が25～30cmであり、深さは深いもので18cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。



第33図　V−2〜4区平面図



No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	SI868・堆積土	外面：ヘラ切り→ナデ 両面に火ダスキ	(12.0)	(7.6)	4.3	1/3	

第34図　SI868 住居跡

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕が極少量出土している。

(2) 竪穴住居跡（第33～36図）

4軒確認した。SI868のみ2区で、他は3区にある。SI868以外は残存状況が悪い。

【SI868 住居跡】

2区中央で確認した。SK906より古く、SD1106より新しい。

［平面形・規模］東西2.9m、南北3.1mの隅丸長方形である。

［堆積土］地山ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトや黒褐色シルトなど（1～3層）で、埋め戻されている。

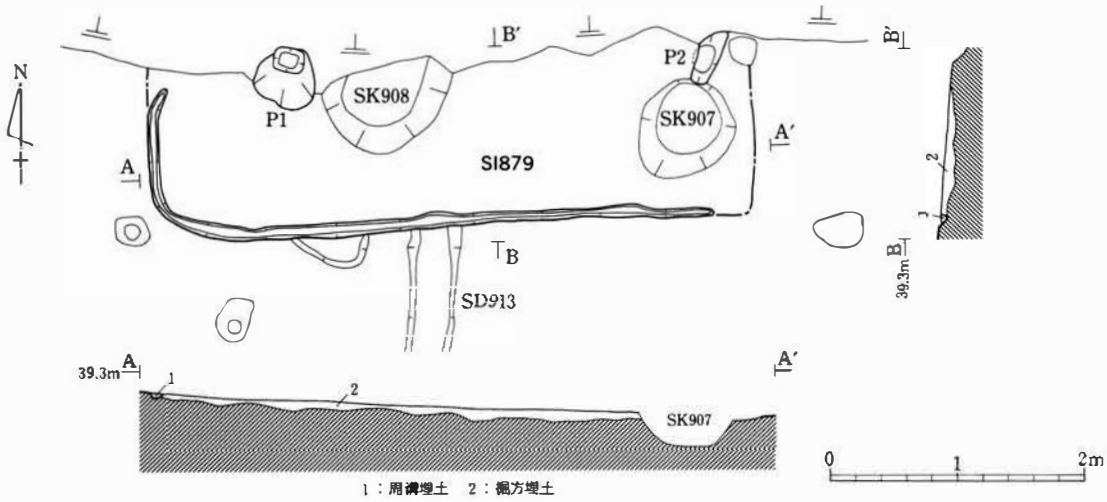
［壁］ほぼ直立する。高さは最も残りのよいところで22cmである。

［床面］地山ブロックを主体とする黄褐色粘土の掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

［主柱穴・周溝］検出されなかった。

［カマド］北辺中央のやや東よりに付設されている。カマド側壁は黄褐色粘土で構築されているが、残存状況が悪く、東の側壁は残っていない。西の側壁は一部壊れつつも長さ70cm、高さ10cmほどが残存しており、焼面もわずかに認められる。西の側壁もそれほど残存がよくないことから、カマドは住居廃絶時に壊されたものと思われる。堆積土は前述の1・2層の下に赤褐色の焼土(4層)が認められる。なお、煙道は検出されなかった。

［貯蔵穴］カマドの両脇にある(貯蔵穴1・2)。1は長軸72cm、短軸66cmの楕円形で、西側には段が付く。深さは28cmである。堆積土は地山ブロックや砂を含む黒褐色や褐色のシルトで、埋め戻されている。2は長軸58cm、短軸48cmの楕円形で、深さは16cmである。堆積土は炭粒や焼土粒を含む暗褐色



第35図　SI879 住居跡

シルトで、埋め戻されている。

［方向］東辺で N－6°－W である。

［遺物］床面からロクロ調整の土師器甕、須恵器坏が極少量出土している。須恵器坏にはヘラ切り無調整のものがある。堆積土からは土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土した。須恵器坏にはヘラ切り後ナデ調整のものがある(第34図1)。そのほか掘方埋土と貯蔵穴2から土師器の破片、貯蔵穴1から須恵器甕が各々極少量出土している。

【SI879 住居跡】

3区東側で確認した。北側は沢に壊されている。また、南側も床面以下まで削平されており、周溝掘方埋土などが残存するのみである。SK907・908より古く、SD913より新しい。

［平面形・規模］東西4.8m、南北1.5m以上の隅丸長方形と思われる。

［床面］地山ブロックや炭化物を多く含む黒色砂質シルトの掘方埋土を床面としていたと思われる。

［周溝］南辺と西辺で確認された。幅は7～13cm、深さは深いところで10cmある。地山小ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

［カマド］検出されなかった。

［その他の施設］pit を2個確認した(P 1・2)。1は検出面で長軸50cm、短軸46cmの楕円形、検出面から20cm下がると長辺24cm、短辺18cmの隅丸長方形となる pit で、深さは52cmある。主柱穴の可能性もあるが、断定できなかった。2は長辺48cm、短辺20cm前後の不整な長方形の pit で、西壁はオーバーハングしている。深さは71cmある。

［方向］南辺で E－4°－N である。

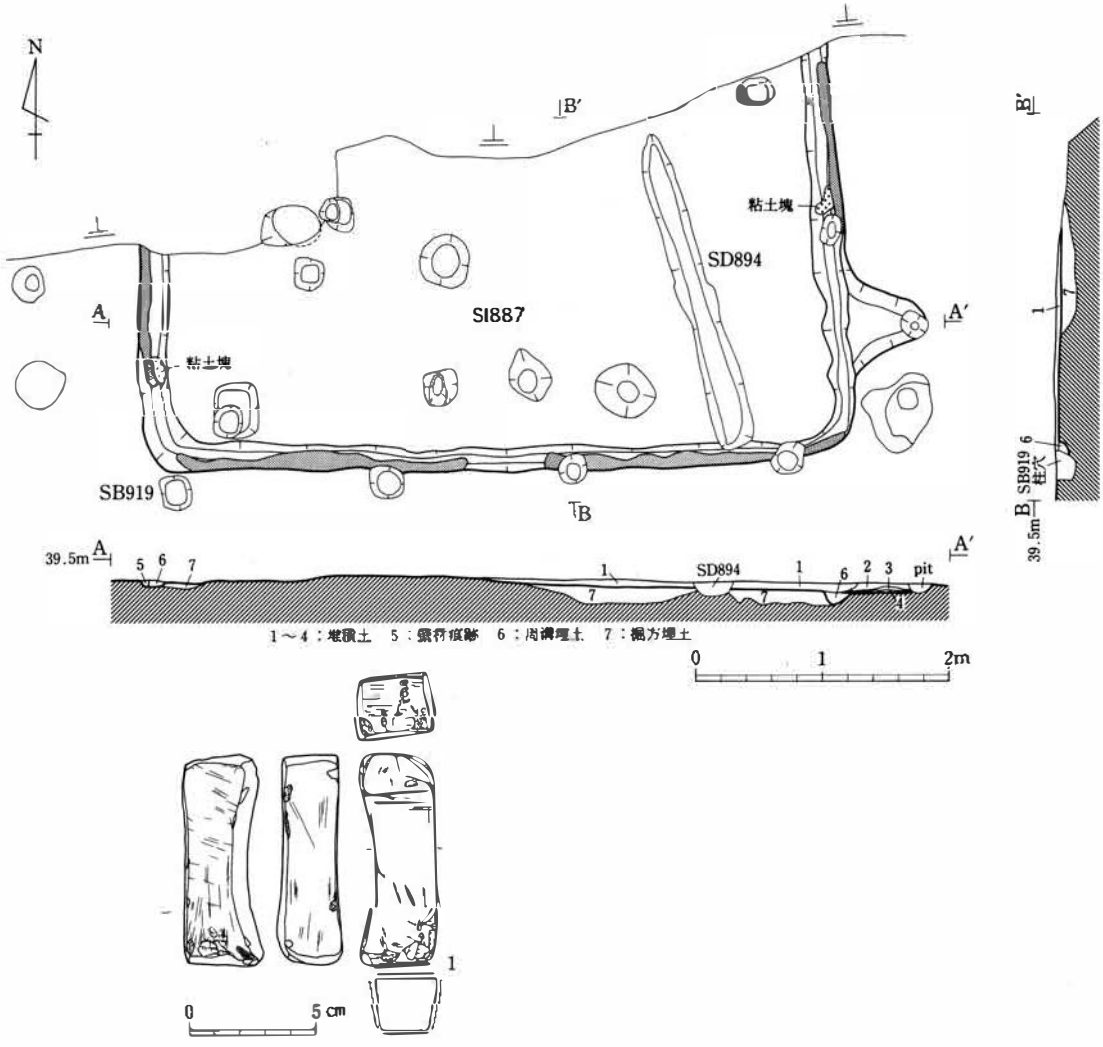
［遺物］掘方埋土とP 1から非ロクロ調整の土師器甕が各々極少量出土している。

【SI887 住居跡】

3区中央で確認した。北側は沢に壊されている。SB919・920、SD894より古い。

［平面形・規模］東西5.6m、南北3.2m以上の隅丸長方形と思われる。

［堆積土］地山土の粒と焼土を含む黒褐色砂質シルト（1層）である。



No	種　別	出土遺構・層位	特　徴	残存率	写真図版
1	石製品・砥石	SI887・1層	頁岩 長さ8.4cm幅3.2cm 厚さ2.6cm 両端部に使用痕	完形	10-28

第36図　SI887 住居跡

［壁］残存状況が悪く不明瞭だが、ほぼ直立する。高さは残りのよいところで6㎝である。

［床面］地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としている。西側がやや高いが、ほぼ平坦である。

［周溝］検出した全辺を一続きに巡る。幅は13～33㎝、深さは深いところで14㎝ある。地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅6～16㎝、深さ4～9㎝の極暗褐色シルトの堆積土が認められる。壁材痕跡はカマドや南西隅では途切れている。その先端では押さえとみられる灰白色粘土塊を2ヵ所で検出した。塊はともに長さ20㎝程、幅10㎝程、高さ4㎝程のものである。

［カマド］南東隅の東壁が外側に掘込まれており、そこに付設されていたとみられる。側壁やその痕跡は残存しない。また、焼面も検出されなかった。堆積土は前述の1層の下に、地山土の粒と焼土、炭化物を多く含む黒褐色砂質シルト（2層）、橙色砂（3層）、黄灰色シルト（4層）があり、3層はカマドの崩落土、4層は機能時の灰層とみられる。

［方向］南辺で真東である。

［遺物］掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。須恵器坏には回転ヘラケズリ調整のものがある。堆積土からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕のほか、砥石（第36図１）と鉄鏃が少量出土している。須恵器坏にはヘラ切り無調整のものがある。

(3) 溝跡（第28・33・37図）

21条確認した。おおむね東西にのびる溝と南北にのびる溝とに分けられ、１区は東西溝、２・３区は南北溝が多い。1区の溝は調査区全体に分布する。このうちSD861・1087・1088はU－３区でも確認しており、前述したものである。２・３区では各々中央部に小規模な溝が集中し、他の部分では2区南端と３区西端にやや大きい溝がある。

規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD863・864・865・888）、②上幅0.5～1.5mのもの（SD881・1101・1102・1106～1108）、③上幅0.5m未満のもの（SD894・913・923～925・1109・1110・1115）があり、全体に小規模な溝が多い。後述するもの以外の断面形はU字形や皿状、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSD881で土師器甕、須恵器坏、剥片石器、SD894で土師器と須恵器の坏・甕、縄文土器、SD913で土師器坏・甕がいずれも堆積土から極少量出土している。土師器はすべて非ロクロ調整である。

【SD863・864溝跡】

ともに１区北側の沢の下で確認した東西溝跡で、2.7m分を検出した。２つの溝は重複しておりSD864が古く、SD863が新しい。確認調査部分のため掘下げはしていない。上幅はSD863が2.7～3.0m、SD864が1.4～2.2mである。方向はSD863がほぼ真東、SD864がE－4°－Nである。検出面での堆積土はともにグライ化した緑黒色粘土で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

【SD865溝跡】

２区南端で確認した東西溝跡で6.2m分を検出した。SB1105より古く、SB1104より新しい。上幅は3.4～5.2m、下幅は1.9～3.4mで、深さは55cmである。断面形は皿状で、方向はE－3°－Nである。堆積土は２層が黄褐色シルト質砂で自然堆積、１層は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は１層から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏（第37図２）・甕が出土している。土師器にはロクロ調整のものが含まれる。須恵器坏にはヘラ切り後ナデ調整のものがある（１）。底部には「□万」の墨書も認められる。

【SD888溝跡】

３区西端で確認した南北溝跡で6.8m分を検出した。SB922・986、SD892より新しい。上幅は2.1～2.7m、下幅は0.5mで、深さは132cmである。断面形はロート状で、方向はN－9°－Eである。堆積土は３層に分けられる。３層は砂を含むオリーブ粘土質シルト、２層は黒褐色シルト、１層は黒色シルトで、いずれも自然堆積である。

遺物は堆積土から須恵器高台坏・甕が極少量出土している。

(4) 土壙（第28・33・37図）

30基確認した。2区北端と建物跡や住居跡のある2・3区の中央部とに集中し、他の部分では少ない。また、2区北端のSK874～876・893と、2区中央部のSK906・909～912には各々形態的に似た特徴がある。平面形は楕円形や隅丸長方形が主体である。規模は①長軸（辺）が2.0mを越えるもの（7基）、②長軸（辺）1.0～2.0mのもの（15基）、③長軸（辺）1.0m未満のもの（8基）があり、②が多い。後述するもの以外の断面形は皿状、堆積土は黒色や黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSK866で須恵器甕、SK877・890で土師器甕、SK873・882・915で土師器と須恵器の甕、SK867・914で土師器の破片が各々堆積土から出土している。土師器にロクロ調整のものはみられない。

【SK872土壙】

2区北側で確認した。SK1112より新しい。平面形は径3.4mの円形である。深さは17cmで、断面形は擂鉢状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器坏・高坏、須恵器甕が極少量出土している。土師器坏には有段丸底の坏がある（第37図5）。高坏は脚部のみの破片である。

【SK874・875・876・893土壙】

2区北端で確認した。これらは形態的に似た特徴を持ち、配置も雁行状で規則性が認められることから一括して述べることにする。平面形はいずれも隅丸長方形である。規模は長辺が1.1～1.4m、短辺が0.6mで、深さは38～82cmである。横断面形は箱形、逆台形のほかU字形もあるが、基本的には箱形を基調とするとみられる。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色や黒褐色シルトなどで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SK882土壙】

3区中央で確認した。SD881、SK889より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.7m、短軸が1.1mで、深さは30cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを少し含む黒色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕が少量出土している。

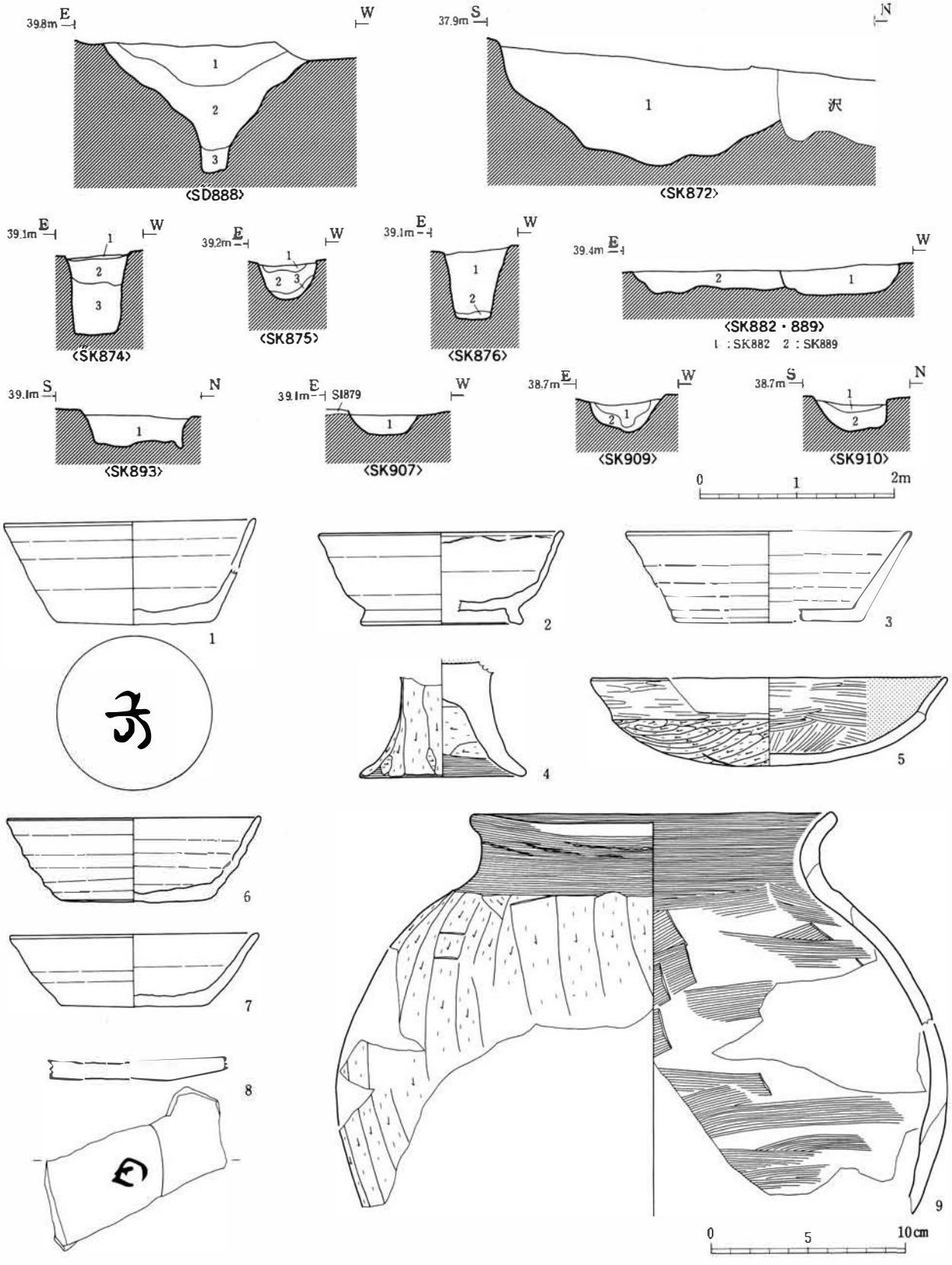
【SK889土壙】

3区中央で確認した。SD881、SK882より古く、SK890より新しい。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸が3.5m、短軸が1.6m以上で、深さは22cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SK906・909・910・911・912土壙】

2区中央で確認した。これらは形態的に似た特徴を持つことから一括して述べることにする。平面形はいずれもやや不整な楕円形である。規模は長軸が0.7～1.0m、短軸が0.6～0.8mで、深さは19～40cmである。断面形は擂鉢状を主体とする。堆積土は地山ブロックと炭粒、土器片を多く含む黒褐色シルトや褐色砂質シルトなどで、人為的な埋土である。

遺物はSK906で土師器甕、須恵器坏・高盤・甕、SK909で土師器甕、須恵器坏・甕、SK910で土師器甕、須恵器坏・蓋・盤、SK911で土師器甕、SK912で土師器甕、須恵器坏・蓋が埋土から出土して



No.	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	SD865・1層	外面：ヘラ切り→ナデ 底部に墨書「上万」	(13.0)	8.0	5.4	1/2	9-8
2	須恵器・高台坏	SD865・1層	外面：ヘラ切り→高台接合後ロクロナデ 内面に火ダスキ・粘土紐巻上げ痕	(12.7)	(8.4)	4.8	1/2	9-9
3	須恵器・坏	SK906・堆積土	外面：ヘラ切り→ナデ（一部）	(14.8)	(9.6)	4.8	1/3	9-10
4	土師器・高坏	SK872・堆積土	脚部外面：ヨコナデ→ヘラケズリ脚部内面：ヨコナデ→ヘラケズリ（ナデ状）	裾部径8.6cm			脚部のみ	
5	土師器・坏	SK872・堆積土	脚部内面：外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理 底部に線刻の×状の刻書	(18.5)		4.6	1/3	9-7
6	須恵器・坏	SK909・堆積土	外面：ヘラ切り→ナデ 内面に火ダスキ	(13.2)	7.7	4.4	1/2	9-11
7	須恵器・坏	SK910・堆積土	外面：ヘラ切り→ナデ	12.9	7.6	3.8	2/3	9-12
8	須恵器・盤	SK910・堆積土	外面：ヘラ切り→回転ケズリ 底部に墨書「内」				一部	10-11
9	土師器・甕	SK1114・堆積土	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ（ナデ状） 内面：ヨコナデ→ナデ・ヘラナデ	19.0			1/3	9-13

第37図 V－2・3区溝跡、土壙断面図及び出土遺物

いる。土師器甕は非ロクロ調整が主体だが、SK906・909・912ではロクロ調整のものも混じる。須恵器坏の底部資料はいずれもヘラ切り後ナデ調整である(第37図6・7)。また、須恵器盤の底部には「内」の墨書が認められる(8)。

【SK907土壙】

3区中央で確認した。SI879より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が0.8m、短軸が0.7mで、深さは20cmである。断面形は擂鉢状である。堆積土は地山ブロックと焼土粒、炭粒を多く含む黒褐色砂質シルトで、人為的な埋土である。

遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏が少量出土している。甕の内面には漆が付着している(図版10−23)。

【SK908土壙】

3区中央で確認した。SI879より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が0.9m以上、短軸が0.8m以上で、深さは25cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山小ブロックや焼土粒、炭粒を含む黒褐色砂質シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕が極少量出土している。甕の内面には漆が付着している(図版10−22)。

【SK1114土壙】

2区中央で確認した。平面形は径0.4mの円形である。深さは45cmで、断面形は擂鉢状である。堆積土は地山小ブロックを含む褐色砂質シルトで、人為的な埋土である。

遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器甕(第37図9)が出土している。

4区東(第39図)

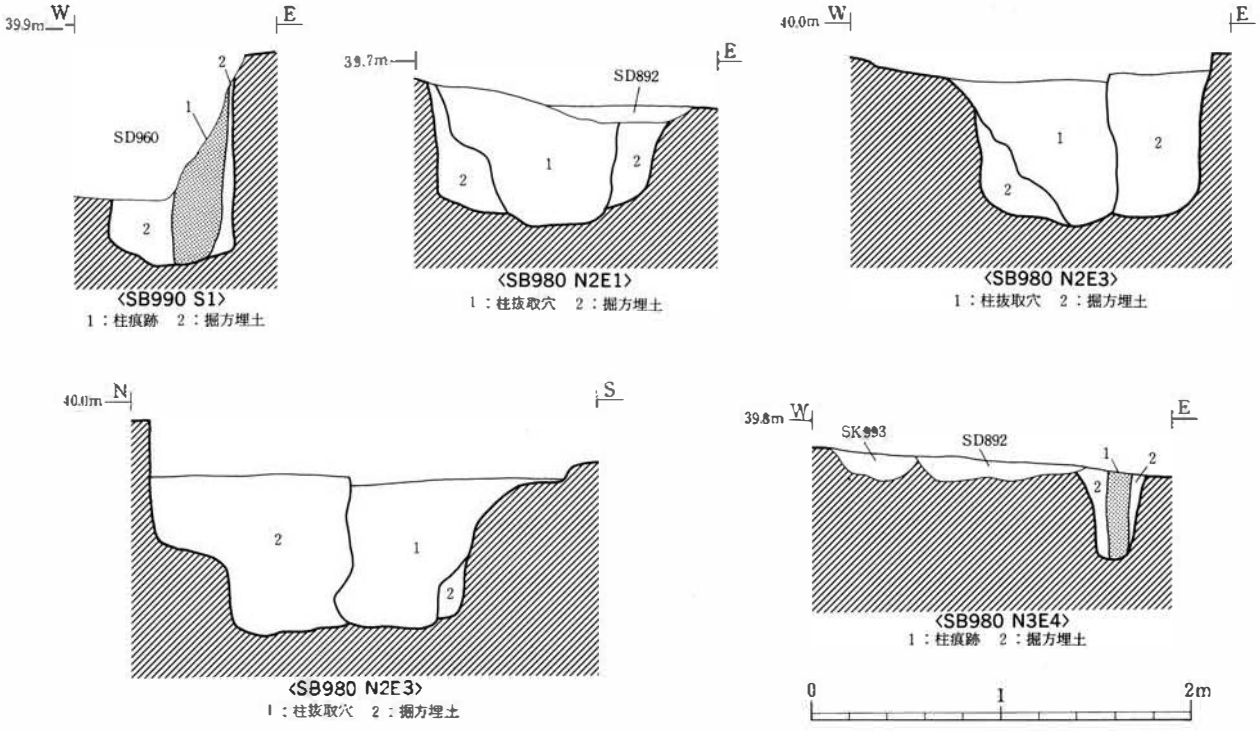
(1) 掘立柱建物跡(第38・39図)

5棟確認した。東側に多い。柱穴が隅丸長方形で長辺(軸)35cm前後のものが主体だが、SB980の柱穴は1mをこえる大きなものである。方向は①ほぼ真北のもの(SB980・987・989)、②北に対し4〜6°東にふれるもの(SB986・988)がある。遺物は、後述するもの以外からは出土していない。

【SB980建物跡】

東側で確認した桁行3間、梁行1間の東西棟である。SD892・978より古い。柱穴は8ヵ所検出しており、すべてで柱の抜取穴を確認した。柱痕跡が残っていないため推測となるが、平面規模は桁行が南側柱列で総長5.6m、柱間寸法は東から1.8m、1.9m、1.9m、梁行は西妻で総長3.5mである。方向は南側柱列でE−1°−Nである。

柱穴は方形に近い隅丸長方形だが、西妻柱穴は長辺が長い。規模は西妻柱穴以外の長辺が1.2m前後、短辺が1.1m前後で、深さは深いもので91cmある。西妻柱穴は長辺が1.4m、短辺が1.0mで、深さは南西隅柱穴で110cmある。また、南西隅柱穴の北側には段がある。埋土は地山ブロックを多く含む黒色シルトである。抜取穴はやや不整な楕円形が主体である。長軸は0.9〜1.3m、短軸は0.6〜1.2mで、深さは深いもので114cmある。地山小ブロックを含む黒褐色または灰黄褐色シルトで埋戻されている。



第38図　Ⅴ－4区東建物跡等柱穴断面図

遺物は抜取穴埋土から非ロクロ調整で外面に段を持つ土師器坏と須恵器坏・甕が極少量出土している。

【SB986 建物跡】

東側で確認した桁行3間、梁行2間の東西棟である。SD888・892より古い。柱穴は6ヵ所で検出しており、そのうち5ヵ所で径10～12cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が南側柱列で総長6.7m、柱間寸法は西から1.9m、2.4m、2.4m、梁行は西妻で総長4.1m、柱間寸法は南から1.9m、2.1mである。方向は南側柱列でE－4°－Sである。柱穴は隅丸長方形や楕円形で、長辺が30～50cm、短辺が30～40cmで、深さは深いもので46cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトである。遺物は出土していない。

【SB987 建物跡】

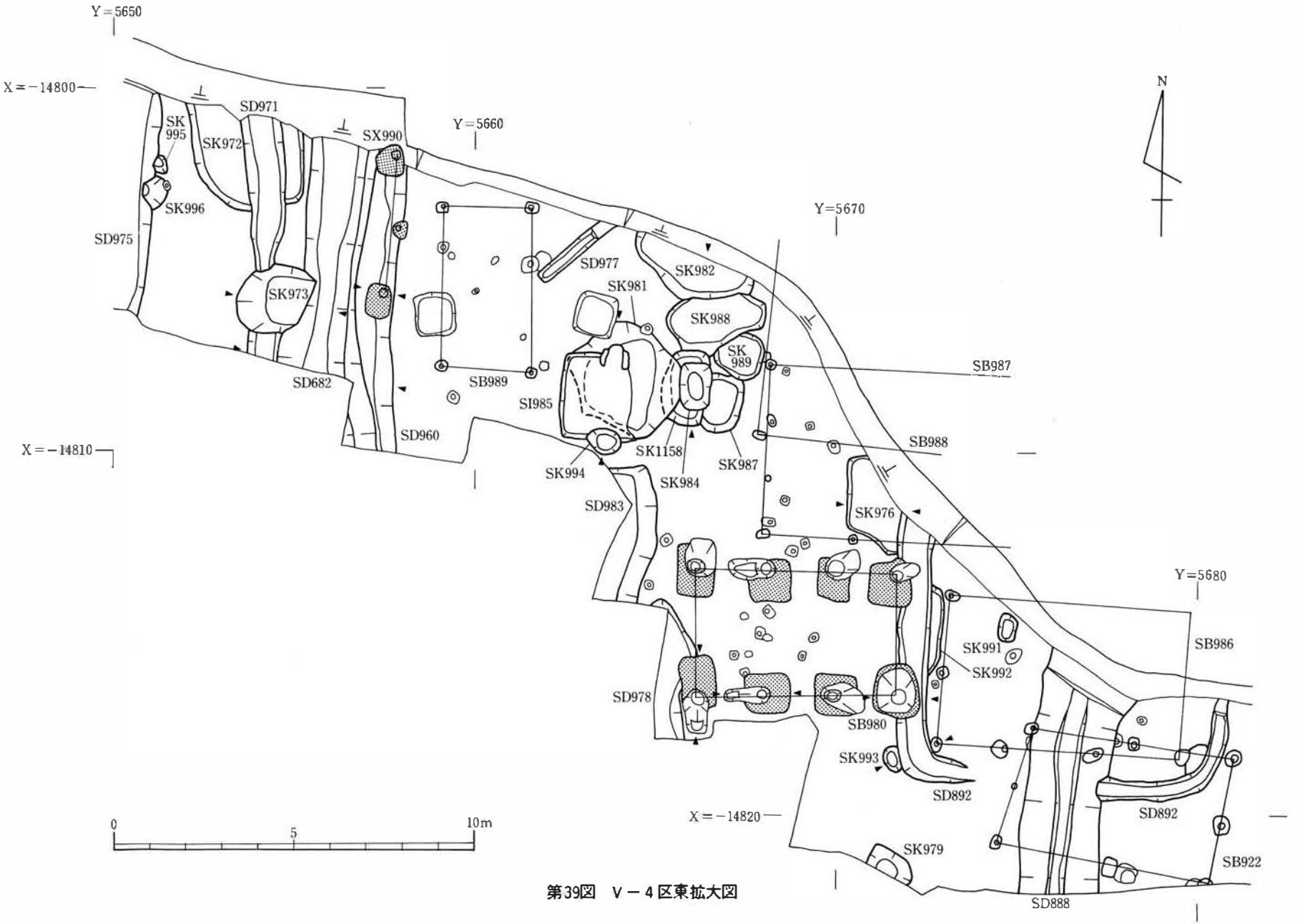
東側で確認した東西1間以上、南北3間の建物跡で、SD892より古い。柱穴は4ヵ所で検出しており、すべてで径12cm前後の円形の柱痕跡を確認した。また、南西隅柱から北に1間目では柱痕跡のみが確認された。平面規模は東西が南側柱列で総長2.5m以上、南北は西側柱列で総長4.7m、柱間寸法は北から1.6m、1.6m、1.5mである。方向は西側柱列でN－3°－Eである。遺物は出土していない。

(2) 竪穴住居跡（第39・40図）

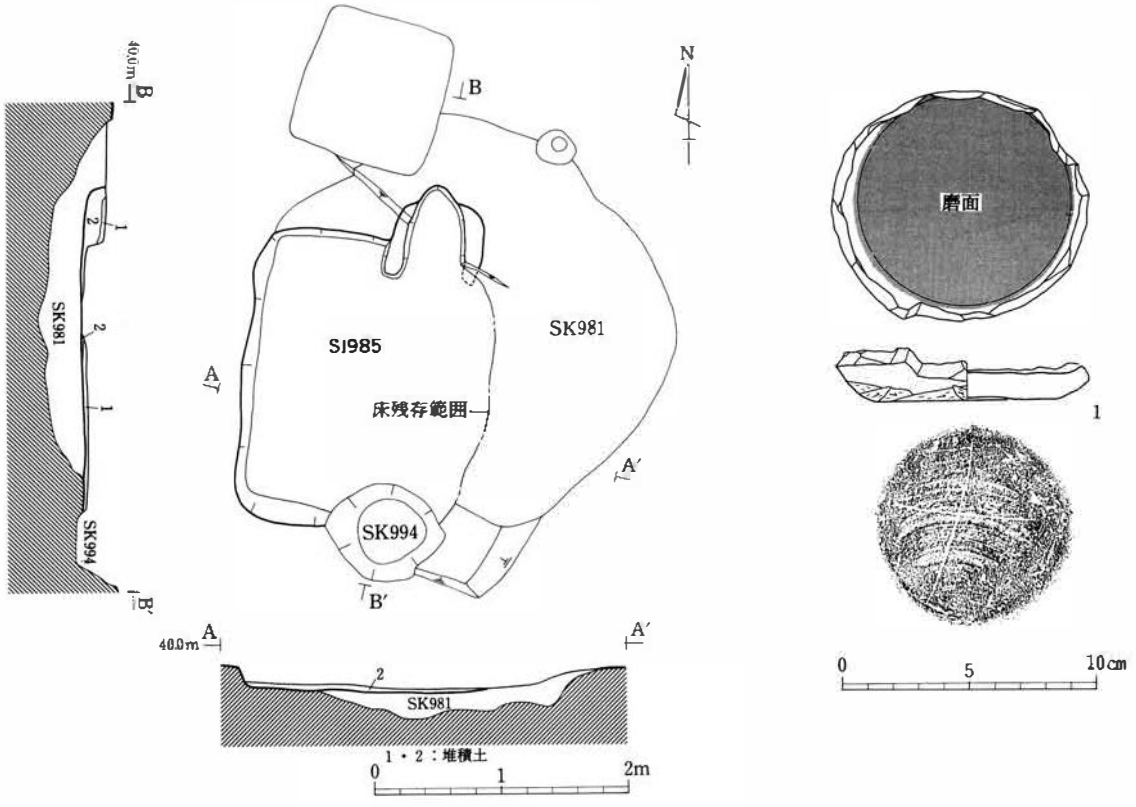
1軒確認した。

【SI985 住居跡】

中央で確認した。東側は削平されている。SK994より古く、SK981より新しい。



第39図　Ⅴ－4区東拡大図



No.	器種	別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	転用硯		SI985・堆積土	須恵器坏内面 外面：静止糸切り→手持ちケズリ 外面に墨？付着 底部に焼成前の×状の刻書		7.2	2.2		10-20

第40図　SI985住居跡

［平面形・規模］カマドの位置からみて東西2.8m前後、南北2.4mの隅丸長方形と推定される。

［堆積土］地山土の粒、焼土粒、炭粒を含む暗褐色シルト（1層）である。

［壁］斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい西辺で20cmである。

［床面］南西部は地山、他はSK981埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

［主柱穴・周溝］検出されなかった。

［カマド］北辺中央に付設されていたと思われる。壁を外側に掘込んでつくられている。側壁は黄褐色粘土で構築されている。粘土は掘込み部の両壁から張りつけられ、住居内に延びる。東の側壁では南端が削平されているが、西の側壁は長さ60cm、高さ7～17cmが残存する。堆積土は前述の1層の下に、焼土と炭粒を含む地山小ブロック主体のにぶい黄褐色シルト（2層）が認められた。カマドの崩落土とみられる。また、その底面では薄い炭層が確認されたが、焼面は検出されなかった。

［方向］西辺でN－5°－Eである。

［遺物］堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏、転用硯、鉄鏃（図版10－31）が少量出土した。転用硯は須恵器坏の転用で、体部を打欠いて整形し、内面を硯に使用する（第40図1）。なお、坏は静止糸切り後に手持ちヘラケズリ調整されたもので、底部には焼成前の×状の刻書が認められる。

(3) 溝跡及び付属施設（第39・41図）

溝跡7条と付属施設（橋？）1基を確認した。溝跡は西端に3条、中央に2条、東端から3区にま

たがって1条あり、東端のもの以外は南北溝である。また、西端のもののうちSD682・960は窯跡調査区とQ－2区で南の延長が検出されている。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD682・960）、②上幅0.5～1.5mのもの（SD892・971）、③上幅0.5m未満のもの（SD977）、④不明なもの（SD978・983）がある。後述するもの以外の断面形は皿状やU字形で、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSD983から土師器の破片が極少量出土している。

【SD682溝跡】

西端で確認した南北溝跡で8.4m分を検出した。窯跡調査区とQ－2区で南の延長が検出されており、全体では長さ235m以上に及ぶものとみられる。SD971、SK973より古く、SD960より新しい。以下、本調査区での所見を中心に述べる。上幅は1.5～2.3m、下幅は0.4～1.0mで、深さは90cmである。断面形はU字形で、方向はN－7°－Eである。堆積土は自然堆積の上層（1～3層）と人為的な埋土の下層（4層）に大別される。下層は地山小ブロックを含む黒色シルトである。上層は3層がにぶい黄褐色砂質シルト、2層が黒褐色シルトで、1層は灰白色火山灰の一次堆積層である。

遺物は本調査区の下層から土師器坏・甕、須恵器坏が極少量出土している。土師器坏・甕にはロクロ調整のものがある（第41図1・2）。また、須恵器坏にはヘラ切り無調整のものがみられる。その他、窯跡調査区の下層から須恵器甕が極少量出土している。

【SD892溝跡】

東端から3区にまたがって確認した溝跡で、4区でL字状に8.0m分、3区で逆L字状に5.1m分を検出した。北側が削平されているので不明だが、4区北端で溝の方向がやや東にふれることから、方形または長方形に巡る溝であった可能性がある。SD888より古く、SB980・986、SK976・992・993・1118より新しい。上幅は0.4～1.0m、下幅は0.3～0.8mで、深さは14～27cmである。断面形はU字形で、方向は西辺で真北である。堆積土は暗褐色シルトで、自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕が出土している。土師器坏・甕にはロクロ調整のものがある（第41図3）。また、須恵器高台坏には焼成前に底部に一状の刻書をしたものがある（4）。

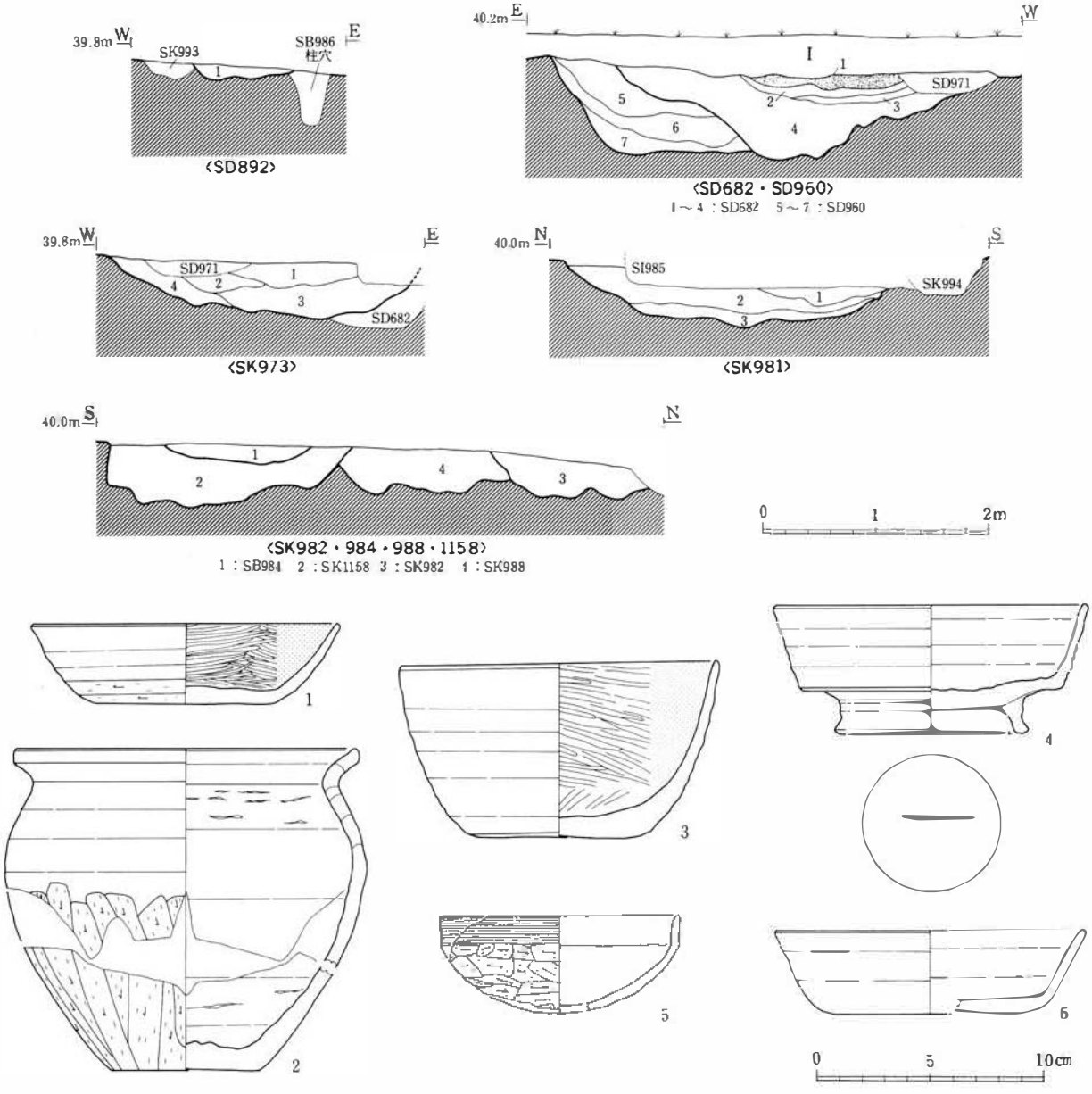
【SD960溝跡】

西端で確認した南北溝跡で8.4m分を検出した。窯跡調査区とQ－2区で南の延長が検出されており、全体では長さ235m以上に及ぶものとみられる。SD682より古い。以下、本調査区での所見を中心に述べる。SD682に西側が壊されているため明確ではないが、上幅は1.8m以上、下幅は1.2m以上ある。深さは86cmである。断面形は逆台形で、方向はN－2°－Eである。堆積土は3層に分けられる。3層が灰黄褐色、2層が黒褐色、1層が黄褐色のシルトで、いずれも地山小ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕が極少量出土している。土師器坏には関東系のものがある（第41図5）。

【SX990付属施設】（第38・39図）

西端にあるSD960溝跡の東壁に沿って確認した3個の柱穴跡である。SD960溝跡の東壁に沿うこ



No	種　別	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	土師器・坏	SD682・下層	外面：切り離し不明→回転ケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.7	7.9	3.7	ほぼ完形	9-17
2	土師器・甕	SD682・下層	外面：手持ちケズリ（ナデ状） 内面：粘土紐積上げ痕 両面にススの付着物	(15.0)	6.5	(14.3)	1/2	9-20
3	土師器・坏	SD892・堆積土	外面：ヘラ切り→手持ちケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.1	8.2	7.7	4/5	9-15
4	須恵器・高台坏	SD892・堆積土	外面：ヘラ切り→高台接合後ロクロナデ 底部に焼成前の一状の刻書	(14.0)	8.6	5.8	3/5	9-14
5	土師器・坏	SD960・堆積土	関東系土師器 外面：ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：マメツ	(10.7)		(4.3)	1/3	9-16
6	須恵器・坏	SK981・堆積土	外面：ヘラ切り→ナデ	(13.8)	(9.4)	3.7	1/3	9-18

第41図　V－4区東溝跡、土壙断面図及び出土遺物

と、北側は不明だが東と南には展開しないこと、西側がSD682に壊された可能性があること、中央の柱穴が小さいことなどから、SD960溝跡に伴う橋跡かと思われる。

東側柱列の総長は3.7mで、柱間寸法は1.85m等間である。柱穴の平面形は隅丸長方形で、南と北の柱穴が長辺80～90cm、短辺70cmで、深さは北の柱穴で98cmある。中央の柱穴は長辺46cm、短辺42cmで、深さは63cmある。埋土は地山小ブロックを含む暗褐色シルトである。柱痕跡は円形で、南と北のものが径25cm前後、中央のものが径16cmある。遺物は出土していない。

(4) 土壙（第39・41図）

17基確認した。住居跡のある中央に多い。平面形は楕円形とやや不整な隅丸長方形が主体である。規模は①長軸（辺）が2.0mを越えるもの（8基）、②長軸（辺）1.0〜2.0mのもの（5基）、③長軸（辺）1.0m未満のもの（4基）があり、①が多い。後述するもの以外の断面形は皿状や逆台形、堆積土は黒色や黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSK976で土師器甕、静止糸切り後回転ヘラケズリ調整の須恵器坏、SK979で須恵器甕、SK987で土師器坏・甕が各々堆積土から極少量出土している。土師器はいずれも非ロクロ調整のものである。

【SK973土壙】

西端で確認した。SD971より古く、SD682より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が2.7m、短軸が1.9mで、深さは56cmである。断面形は皿状である。堆積土は4層に分けられる。4層が黄褐色、1・3層が暗褐色、2層がにぶい黄褐色のシルトで、いずれも地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕が極少量出土している。

【SK981土壙】

中央で確認した。SI985、SK984より古く、SK1158より新しい。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸が3.1m、短軸が3.0mで、深さは60cmである。断面形は皿状である。堆積土は3層に分けられる。1・3層が黒褐色、2層が黒色のシルトで、地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器甕、ヘラ切り後ナデ調整の須恵器坏（第41図6）が極少量出土している。

【SK982土壙】

中央で確認した。SK988より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が3.5m、短軸が1.3m以上で、深さは44cmである。断面形は逆台形である。堆積土は地山ブロックを含む黒色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏が少量出土している。

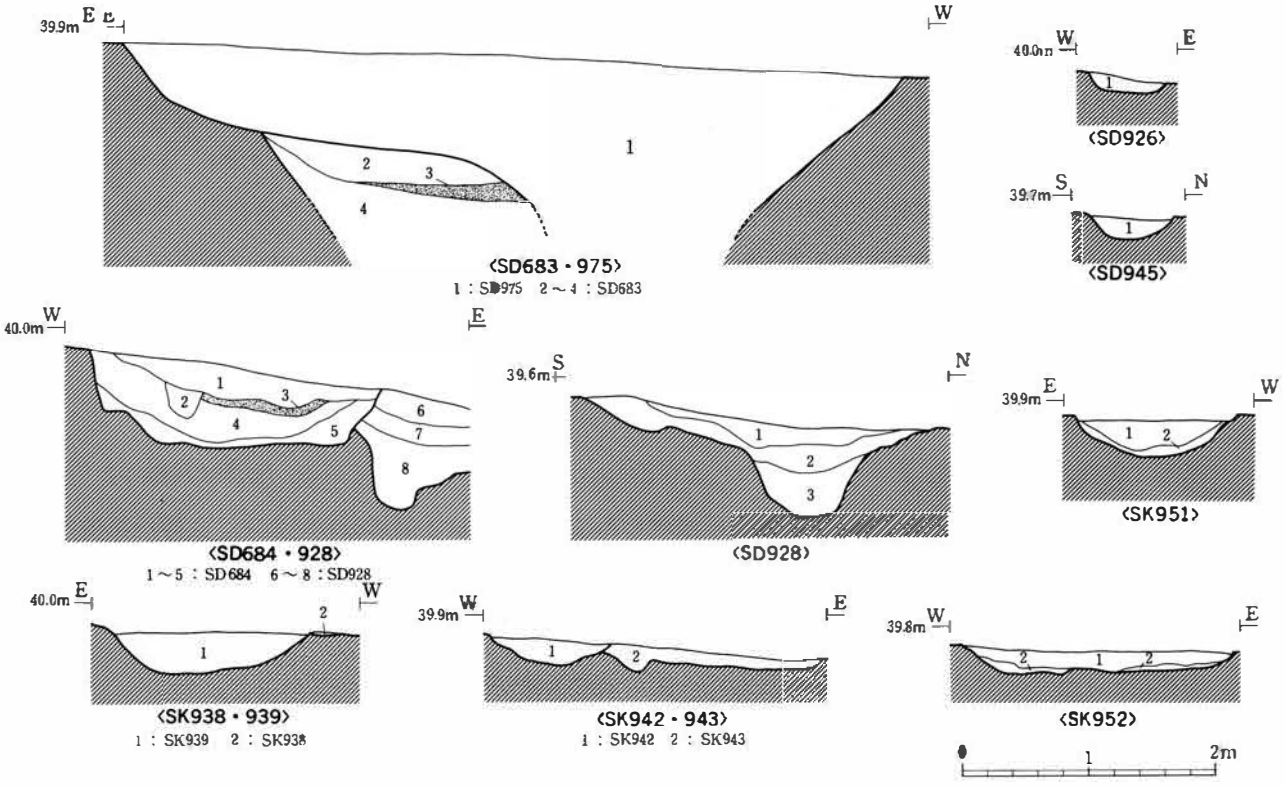
【SK1158土壙】

中央で確認した。SK981・984より古く、SK987・988より新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸が2.2m、短軸が1.3mで、深さは58cmである。断面形は逆台形である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

4区西（第33・42図）

(1) 溝跡（第33・42図）

12条確認した。東側に比較的広く分布する。南北溝が多い。このうちSD683・684は窯跡調査区とQ−2・3区で南の延長が検出されており、SD683については前述した。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD683・684・928・975・1000）、②上幅0.5〜1.5mのもの（SD926・944・945・999）、③上幅0.5m未満のもの（SD997・1151）、④不明なもの（SD998）がある。後述するもの以外の断面形は皿状やU字



第42図　V－4区西溝跡、土壙断面図

形などで、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSD944から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器の破片が極少量出土している。なお、SD1000は形状などから北側の沢の分岐したものと思われる。

【SD684溝跡】

中央で確認した南北溝跡である。12.7m分を検出した。Q－3区で南の延長が検出されており、全体では長さ235mに及ぶものとみられる。SD926・928、SK929～931・933より新しい。上幅は2.2～2.4m、下幅は1.3～1.6mで、深さは78cmである。断面形は逆台形で、方向はN－13°－Eである。堆積土は4層に分けられる。4層がにぶい黄褐色砂質シルト、3層が黒褐色シルト、1層が黒色シルトの自然堆積層で、2層は灰白色火山灰の一次堆積層である。遺物は出土していない。

【SD928溝跡】

中央で確認した。SD684溝跡にT字につながる東西溝跡で、3.7m分を検出した。SD684より古く、SK931より新しい。上幅は2.7～3.0m、下幅は0.5～1.4mで、深さは94cmである。断面形は段をもつU字形で、方向はE－12°－Nである。堆積土は3層に分けられる。3層がにぶい黄褐色砂質シルト、2層が灰黄褐色シルト、1層が黒褐色シルトで、自然堆積である。なお、平面上でSD684溝跡と切り合いが確認できたこと、堆積土の状況からみて、本溝跡はSD684溝跡より早く埋没したとみられる。

遺物は底面から剥片石器が1点出土している。

【SD975溝跡】

東端で確認した南北溝跡で、7.2m分を検出した。安全のため完掘していない。SD683・997、SK995・996・1119・1120より新しい。上幅は5.5～6.0mである。下幅は3.9m未満、深さは135cm以上とみら

れる。断面形は東側に段をもつU字またはV字形と思われる。方向はN－20°－Eである。堆積土は黒色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から土師器甕、須恵器坏・甕が極少量出土している。土師器甕にはロクロ調整のものがある。また、須恵器坏にはヘラ切り後ナデ調整のものがある。

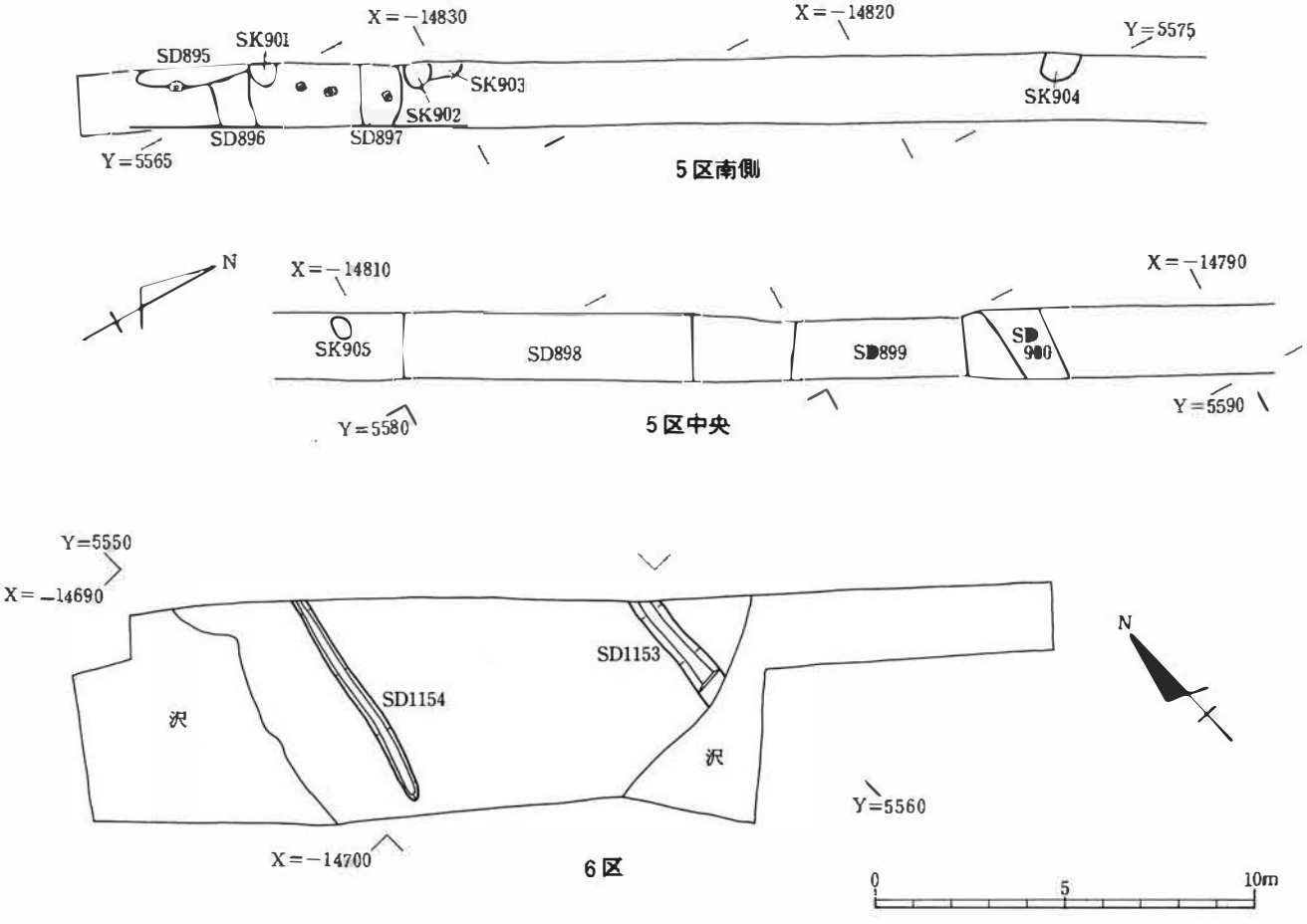
(2) 土壙（第33・42図）

67基確認した。SD975とSD926の間に密集する。平面形は楕円形が主体である。規模は①長軸が2.0mを越えるもの（2基）、②長軸1.0～2.0mのもの（38基）、③長軸1.0m未満のもの（27基）があり、大きいものは少なく、2.0m以下のものが多い。断面形は皿状が主体で、底面が凸凹したものもみられる。深さは10～30cmの浅いものが多いが、なかには64cmあるものもある。堆積土は黒色や黒褐色シルトが主体で、底面付近で灰黄褐色シルトが認められるもの（SK951・952など）もある。いずれも地山ブロックを多く含み、人為的に埋め戻されている。遺物は少なく、SK931で土師器の破片、SK952で縄文土器と土師器の破片、SK953で土師器甕が各々埋土から極少量出土したのみである。

5・6区（第43図）

(1) 溝跡（第43図）

5区で6条、6区で2条確認した。5区のものは南端と中央に分布する。東西溝が主体で、南北溝



第43図　V－5・6区平面図

はSD895のみである。規模は南端のもの（SD895～897）は上幅0.5～1.1mと小規模で、中央のもの（SD898～900）は上幅1.5～7.7mと大きい。確認調査部分であり、掘下げていないため下幅や深さは不明である。検出面で確認された堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。遺物は出土していない。

6区のもの（SD1153・1154）はともに南北溝である。規模は上幅0.3～1.0m、下幅0.2m前後、深さ16～28cmと小規模である。断面形はU字形で、堆積土は黒色シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。

(2) 土壙（第43図）

5区で5基確認した。南側にまばらに分布する。平面形はいずれも楕円形、規模は1.0m程度の小さいものが多い。確認調査部分であり、掘下げていないため深さは不明である。検出面で確認された堆積土は、黒・黒褐色シルトのものが主体である。遺物は出土していない。

8．その他の出土遺物（第44図）

上述した以外にも堆積土やpitなどから遺物が出土している。全体に土師器と須恵器が多い。土師器は非ロクロ調整の坏・甕が主体で、関東系のもの（第44図2）もある。ロクロ調整のものもあるが、数は少ない。須恵器には坏・高台坏・甕のほか、蓋（8）がある。坏は図化したものをみると、ヘラ切り後ナデ調整のもの（3・4・6・10）が多いが、静止糸切り後に手持ちヘラケズリをしたもの（5）や回転糸切り無調整のもの（9）もある。また、高台坏も含めて9～13には底部や体部に墨書や刻書がある。墨書のうち9は「下」、10は「本」、11は「□ﾍｶ」（則天文字）と判読した。刻書は12が焼成前の×状の刻書、13は焼成後の刻書で「太」である。

以上のほかでは縄文土器、弥生土器（1）、瓦、硯、鉄製品、石製品（砥石、剝片石器）が出土しているが、出土量は極少ない。硯には転用硯のほか、円面硯がある（図版10－21、V－3区検出面出土）。

III. 考察

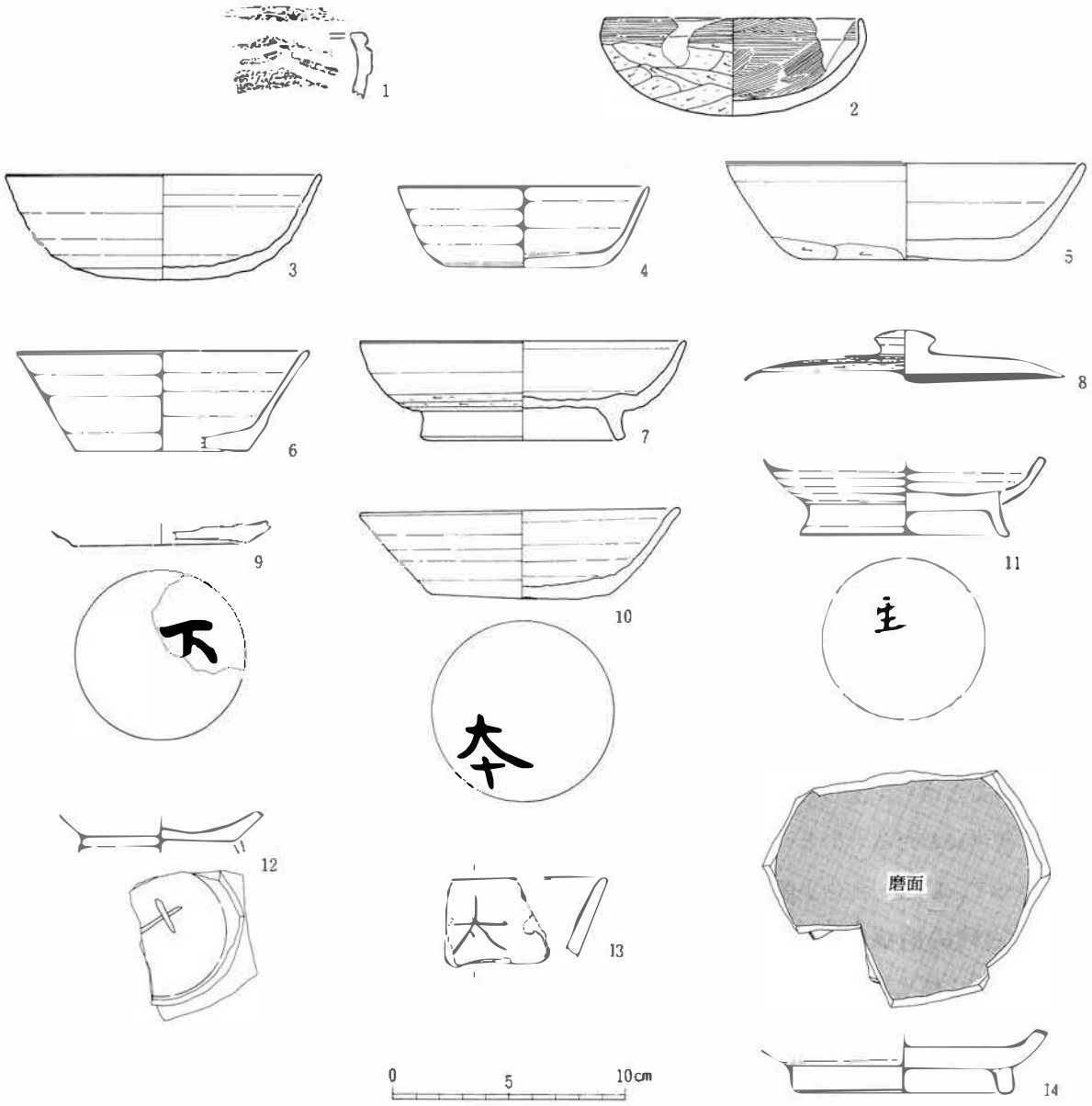
今回の調査区は広範囲に及ぶ。検出遺構は竪跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壙などであり、遺物も土師器、須恵器を中心に多数出土した。遺構・遺物の分布は調査区東側が濃密で、西側では希薄である。そこで以下では東側と西側に分けて検討する。

A．東側調査区（N・O・P・Q－1～4・U・V区）

竪跡2、掘立柱建物跡23、竪穴住居跡10、井戸跡6、溝跡143、土壙307を検出した。また、遺物の大部分がこの東側調査区から出土している。なかでも土師器と須恵器が圧倒的に多い。

1．遺物について

縄文・弥生土器、土師器、須恵器、瓦、硯、鉄・土・石・木製品がある。その大半は東側調査区でもV－4・Q－2区のSD960溝跡の東側で出土しており、特にU－1・2区、V－2～4区東の掘立



No	種　別	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	弥生土器	V-4区・Pit65	刺突文・弧線文 横走縄文（LR）天王山式？				一部	10-19
2	土師器・坏	V-2区Pit55・掘方埋土	関東系土師器 外面：ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ	(11.0)		4.2	1/2	9-19
3	須恵器・坏	N-4区・表採	外面：ヘラ切り→ナデ 両面に火ダスキ	(13.6)	(7.6)	4.6	2/5	10-1
4	須恵器・坏	N-4区・表採	外面：ヘラ切り→ナデ 底部に火ダスキ 内面全体に降灰	(11.8)	6.8	3.6	2/5	10-2
5	須恵器・坏	Q-1区・検出面	外面：静止糸切り→手持ちケズリ	(14.4)	9.8	4.2	3/4	
6	須恵器・坏	U-2区・Pit50	外面：ヘラ切り→ナデ 口縁部に使用痕 産地：大衡窯群	(12.6)	(7.4)	4.35	1/3	10-3
7	須恵器・高台坏	V-2区・表採	外面：ヘラ切り→回転ケズリ→高台接合後ロクロナデ 外体部に自然釉	(14.0)	8.9	4.3	4/5	10-4
8	須恵器・坏蓋	N-4区・検出面	宝珠つまみ(径2.6cm)　外面：回転ケズリ				一部	
9	須恵器・坏	N-4区・表採	外面：回転糸切り無調整 底部に墨書「下」		(7.4)		一部	10-12
10	須恵器・坏	N-5区・検出面	外面：ヘラ切り→ナデ 底部に墨書「本」	13.8	7.7	3.8	ほぼ完形	10-5・15
11	須恵器・高台坏	N-4区・表採	外面：切り離し不明→高台接合後ロクロナデ 底部に墨書「□」（人ヵ）則天文字		(9.0)		一部	
12	須恵器・高台坏	N-4区・表採	外面：切り離し不明→高台接合後ロクロナデ 底部に焼成前の×状の刻書				一部	10-13
13	須恵器・坏	V-3区・検出面	口縁近くの外体部に焼成後の刻書「太」				一部	10-14
14	転用硯	Q-1区・検出面	須恵器高台坏内面 外面：ヘラ切り→高台接合後ロクロナデ 底面に摸付着		9.6			

第44図　その他の出土遺物

柱建物跡と竪穴住居跡周辺に多い。以下、遺物の大部分をしめる土師器と須恵器について述べる。

土師器は坏、高坏、甕、甑、須恵器は坏、高台坏、蓋、高盤、甕、壷などがある。破片資料がほとんどで、量的には坏と甕が多い。以下では特徴をとらえやすい坏を中心に年代的な様相をみてみることにする。なお、土師器坏には関東系のものもあるが、ここでは在地のものについて述べる。

土師器坏には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがある。主体をしめる非ロクロ調整の坏は、有段のものが多い。それらは丸底で、口縁部は内湾気味であり、内面に段や屈曲がないものが主体である（第11図５、第32図４）。一方、ロクロ調整の坏は少なく、底部切り離し後に回転・手持ちヘラケズリが施されるものが主体をしめる（第41図１・３）。以上のような特徴の土師器坏は、東北地方南部や県内の土師器編年（氏家1957、加藤1989）からみて、７世紀末から９世紀前半のものといえる。

須恵器坏には底部切離しが静止糸切りのものとヘラ切りのものがある。前者の器形はほとんどが皿形とみられ、切離しののち手持ち・回転ヘラケズリが施されるものが主体である。後者の器形は皿形のもの（第11図３、第41図６など）と、底径がやや小さく器高も少し高い椀形に近いもの（第34図１、第37図１など）がある。また、切離し後に回転ヘラケズリ・ナデ調整が施されるものと、無調整のものがみられる。以上のような特徴の須恵器坏は、色麻町日の出山窯跡や利府町硯沢・大沢窯跡、築館町伊治城跡SI173竪穴住居跡の須恵器坏などに類例がある（古川1993、宮城県教育委員会1987、菊地1991）。年代的には８世紀～９世紀初頭の須恵器坏の特徴をもつといえる。

なお、須恵器には体部がやや内側にくびれ、口縁部が直立する坏、胴部が算盤玉状の広口壷など７世紀に遡る特徴をもつものが少しある。広口壷は色麻町色麻古墳群に類例があり、年代は７世紀後半とされている（古川1985）。

以上のことから出土した土師器・須恵器坏は８世紀代を中心とし、やや広くみれば７世紀後半から９世紀前半にわたるものといえる。ところで、他の遺物も土師器・須恵器坏と分布状況は同様である。したがって、縄文・弥生土器、剥片石器以外のものは概ね同じ頃のものと思われる。

２．古代の遺構について

①塀・掘立柱建物跡

古代の塀跡は２条、掘立柱建物跡は20棟検出した。Ｖ－４・Ｑ－２区SD960溝跡の東側にある。

《年代》以下のものは遺構の重複・位置関係や方向などから、ある程度限定できる。

【SB625】８世紀代とみられるSD611に近接し、方向（南妻）が揃うことから8世紀代と考えられる。

【SB886】８世紀末～９世紀初頭のSI841竪穴住居跡より古く、それ以前とみられる。

【SB980】SD892より古い。SD892はロクロ調整で手持ちヘラケズリが施された土師器坏(第41図３）が出土したことから９世紀初頭頃のものとみられる。よって、SB980はそれ以前と考えられる。また、近接する７世紀後葉～８世紀のSD960、SX990と方向が揃うので同時期とみられる。

【SB986】SD892より古く、９世紀初頭以前とみられる。

塀や他の建物は遺物や遺構の重複関係が少なく、年代は特定できない。しかし、上記の建物の近くにあり、方向も類似することや、周辺から多く出土する遺物の年代観などから、それらも上記の建物と同じ頃のものと思われる。

《規模・構造・建替・柱穴》調査区の制約のため全容がわかるものは少ない。検出状況から桁行３間、梁行２間程度で、床面積が30㎡以下の小規模なものが主体とみられる。構造は側柱建物のみであり、建替もSB627にあるのみである。柱穴は平面形が隅丸長方形を基調とし、長辺が50cm以下の掘方のものが主体だが、SB980の掘方は長辺1.1～1.4m、短辺0.85～1.2m、深さ1.0m以上あり、本遺跡

の政庁内部の建物のものに匹敵するほど大型である。

《重複関係・方向》掘立柱建物跡同士の重複が少ないことや、竪穴住居跡と重複があることから、竪穴住居跡の項で述べる。

②竪穴住居跡

10軒検出した。すべてSD960溝跡東側のU・V区にある。残存状況はいずれもよくない。

《年代》以下のものは遺物や遺構の重複関係からある程度限定できる。

【SI804】主柱穴の掘方埋土からロクロ調整の土師器が出土しており、9世紀以降と考えられる。

【SI841】住居の掘方埋土から椀形に近いヘラ切り無調整の須恵器坏（第30図1）が出土しており、8世紀末～9世紀初頭とみられる。

【SI842・843・885】8世紀末～9世紀初頭のSI841より古く、それ以前とみられる。

【SI868】床面からロクロ調整の土師器甕、住居を埋め戻した土から椀形に近く、ヘラ切り後ナデ調整の須恵器坏（第34図1）が出土しており、9世紀初頭頃のものと考えられる。

【SI985】皿形で、ヘラ切り後ナデ調整の須恵器坏（第41図6）が出土した8世紀後半のSK981より新しく、それ以降とみられる。

他の住居は遺物や遺構の重複関係が少なく、年代が特定できない。しかし、上記の住居跡と同様にU・V区にあり、方向も類似すること、周辺から多く出土する遺物の年代観などから、それらも上記の住居と同じ頃のものと思われる。

《平面形・規模》残存状況等からすべて隅丸長方形とみられる。規模は一辺が5.0m前後の大きいものと3.0m前後の小さいものがあり、床面積は前者が20㎡前後、後者は10㎡以下である。

《構造》すべて掘方埋土を床面とする。主柱・周溝は小さい住居にはない。大きい住居で主柱がわかるものはいずれも4本である。周溝は全辺に巡るものが多い。壁沿いに板状の壁材痕跡があるものと、丸材または割材を並べていたとみられるものとがあり、前者が主体である。

カマドは北にあるものが3軒、東にあるものが1軒である。残存が悪く詳細は不明であるが、SI887・985のカマドは壁を掘込んで構築されており、関東型のカマドに類似している。関東型のカマドは志波姫町御駒堂遺跡や宮崎町東山遺跡のほか、本遺跡内にも類例があり、壁を掘込む構築法や側壁等の構築材に白色粘土を使用するなどの特徴がある（村田2000）。また、7世紀後葉～8世紀前半に盛行したとみられている。SI985のカマドの構築材が黄褐色粘土である点は、白色粘土を使用する関東型とは異なる。しかし、これはSI985の年代が8世紀後半以降なので年代差によるものかもしれない。よって、ここでは壁を掘込む構築法を重視して、関東型のカマドとみておきたい。

《方向・重複関係》掘立柱建物跡もあわせて検討する。A：北で西に振れるもの、B：ほぼ真北のもの、C：北で東に振れるものに大別できる。数的にはA－2棟と3軒、B－8棟と1軒、C－10棟と5軒でB・Cが多い。また、重複関係はC→B（SB988→SB987）、C→A（SI885→SI842→SB886→SI841、SB918→SI879）という関係が認められる。AとBの関係は不明だが、官衙内部の小館地区では第II期以降にC→B、城内地区ではB→Aの傾向がある（天野ほか2000）ので、大きくはC→B→Aへと変遷すると推定される。

③井戸跡

古代とみられるのは堆積土に灰白色火山灰を含むN－4区のSE551のみである。確認調査部分であり、掘下げてないため詳細は不明である。

④溝跡

古代の溝跡は多数あるが、性格・年代などの詳細がある程度わかるものはSD611・661・682～684・692・960・928のみである。それらは後述するような性格からⅠ類（SD611・661・960）とⅡ類に（SD682～684・692・928）に分けられる。各々について述べる。

《Ⅰ類》SD611は東西溝、SD661・960は南北溝である。今回確認できた範囲では、南北溝は各々長さ175m以上と長い。SD960には橋跡も付属する。ところで、SD661・960ではそれらを境に遺構・遺物の密度が大きく異なる。V－4区のSD960周辺では東に建物・住居があるが、西にはない。遺物も東に多く、西は極めて少ない。Q－1区のSD611と2区のSD960周辺ではSD611の東のL・M区（昨年調査区）に建物が多いが西にはなく、SD960の西では溝や土壙も少ない。遺物量もこれに准じる。なお、Ⅰ類の方向はいずれもほぼ真北・東で整合性が高い。遺物はSD611・661で多い。

これらの溝の性格は長さや方向の整合性、周囲の状況からみて、場を画する溝と考えられる。SD611は南側の状況が不明だが、溝自体の特徴はSD661・960に類似しており、同じ性格と思われる。年代はSD611・661では皿形で回転・手持ちヘラケズリの坏、皿形でヘラ切り後ナデ調整の坏（第11図1～3、第14図3・5・6）が出土しており、8世紀代とみられる。SD960では丸底で口縁部が直立する関東系土師器坏（第41図5）が埋土から出土している。関東系土師器坏の変遷（村田2000）によると、7世紀後葉～8世紀前半の坏とみられる。また、SD960は後述のSD682より古いので7世紀後葉～8世紀代と考えられる。

《Ⅱ類》SD692・928は東西溝、SD682～684は南北溝である。今回確認できた範囲では、南北溝は各々長さ230m以上と長い。いずれもⅠ類で最も西にあるSD960のさらに西側にある。Ⅱ類の溝周辺には建物・住居がなく、Ⅱ類の溝が主要な遺構である。堆積土は基本的に自然堆積である。方向は南北溝が北に対し東、東西溝が東に対し北にふれる。遺物は少ない。

Ⅱ類は長さの点はⅠ類と同じだが、周囲の状況の違いから1類と異なる性格が考えられる。周囲に建物・住居がなく、長さのある溝の類例は、隣接する上代遺跡に430m以上に及ぶ南北溝がある（菅原1997）。場所は本遺跡東側の段丘下の沖積地で、溝の形状・規模・堆積土・遺物出土状況はⅡ類とほぼ一致する。また、溝の性格は周囲が水田であることから基幹水路とみられている。こうした隣接地での類例から、Ⅱ類も水路と考えられる。ただし、今回の調査区は開田時における削平が著しいため、Ⅱ類が水田に伴うものかは不明である。よって、耕作域に伴う水路とみておきたい。年代はSD928以外では灰白色火山灰の一次堆積が認められること、SD928がSD684より古いことから、すべて10世紀前葉以前である。また、SD682では回転ヘラケズリ調整の土師器坏とロクロ調整の土師器甕が出土しており（第41図1・2）、9世紀初頭が上限とみられる。

⑤土壙

古代とみられる土壙は多数ある。その分布に注目してみると①住居近辺に集中するもの（U・V区住

居周辺)、②まわりに建物や住居がないところに密集するもの(N－4区、Q－1区東、V－4区西)、③その他のものがある。このうち②・③については出土遺物も少なく、年代や性格等の詳細は不明とせざるをえない。以下では、①のU・V区の住居近辺に集中する土壙について述べる。これらは分布状況から住居と密接な関わりをもつと考えられる。

住居近辺の土壙は楕円形で径1.0m前後のA類と、A類より大きく、形も不整な楕円形や隅丸長方形のB類がある。A類のうちSK906・909～912・1114はV－2区SI868近辺にある。これらは黒褐色シルトや褐色砂質シルトで人為的に埋め戻されており、埋土には炭粒や土器片が多く含まれる。遺物は土師器にはロクロ・非ロクロ調整のものが共にあり、須恵器坏には埦形に近く、ヘラ切り後ナデ調整のもの（第37図3・6）がある。年代は8世紀末～9世紀初頭と思われる。その性格は住居の近くに分布していること、埋土の状況などからごみ穴の可能性も考えられる。

B類は住居近辺に多いこと以外にこれといった特徴がなく、詳細は不明である。ただし、U－2区SI841近辺のSK845は、形状や規模から竪穴遺構の可能性がある。竪穴遺構の類例は多賀城市山王遺跡にあり、本遺跡でも昨年の調査で7基検出した。その性格については工房や作業所（佐藤ほか1997）に加え、収蔵施設（物置）の可能性も考えられている（村田ほか2000)。

3．奈良・平安時代の官衙外側（南西部）の様子

《官衙南西外側の様子》遺構・遺物のあり方からSD960南北溝を境に大きく東西に分けられる。東側は建物・住居があり、遺物も多いことから集落域と考えられる。西側は建物・住居が認められず、溝や土壙すら少ない調査区もある。遺物も極めて少ない。主要な遺構はII類の溝であり、それらは上代遺跡の例から水路とみられる。よって、西側は耕作域ととらえられる。その場合、東西を分ける位置にあるのがSD960であり、この溝は集落域と外側とを画すものといえる。したがって、官衙南外側の集落の西の広がりはSD960までと考えられる。なお、V－4区のSD960は小館地区政庁のほぼ真西230mに位置する。

ところで、奈良・平安時代の官衙外側の集落で、集落を画す施設をもつ例には大和町一里塚遺跡、古川市権現山遺跡がある。両遺跡では多数の建物や住居が大溝（壕）と塀で囲まれており、環壕集落ととらえられている。大溝（壕）と塀の区画施設は山王遺跡でも検出されている。こうした例と今回検出の遺構を比べるとSD960は長いが、幅や深さは大溝といえるほどではない。塀も未検出である。また、検出されたのは今のところ西側のSD960のみで、他の三方の状況は不明である。よって、一里塚・権現山遺跡のような環壕集落と本遺跡は現段階では同列に論じられない。規模の小ささからみて、むしろ異なるあり方の可能性がある。その位置付けは来年度の調査をはじめ、周囲の調査の進展をまち、今後の課題としたい。

《集落内の様子》昨年の調査の結果、名生館官衙遺跡の南正面が一般集落とは異なり、井戸を伴う建物群が展開すること、そこに郡司や郡家出仕の役人層などの人々が集住していたことが明らかになっている。それに今回の調査成果もふまえ、官衙の南西外側の集落の様子を述べる。

まず、本調査ではV－4区で大型の柱穴をもつSB980建物を検出した。この建物は集落域の西を画すSD960とその入口にあたる橋跡SX990に近接し、方向もほぼ揃うことから、それらと同時期とみら

れる。建物としては3間×1間で、平面規模も約20m²と大きくない。だが、柱穴の規模は昨年検出の郡家役人層の住まいとした建物群の柱穴を上まわり、名生館官衙遺跡の政庁の建物に匹敵するほど大型である。したがって、昨年の建物群とは異なる性格が考えられる。周囲の状況が明確ではなく、その性格も不明とせざるをえないが、政庁建物に匹敵する大型の柱穴や、集落域を画す溝とその橋に近接する位置からみて、官衙集落の入口に設けられた郡家に付属する公的施設の建物の可能性がある。

次に、U・V区で竪穴住居跡が10軒検出されたことから集落内における庶民の生活空間の存在が指摘できる。特筆されるのは関東型とみられるカマドを持つ住居があることである。周辺では関東系土師器も出土しており、居住者には関東出身の移民やその子孫が含まれていたと考えられる。また、今回出土した鉄製品6点のうち4点が住居、1点が住居より新しい土壙から出土しているのも注目される。種類は鏃と小刀であり、それらから軍事に関わる居住者の存在も想定できる。

以上のことから、官衙南側の集落には郡家役人層の住まいのほか、庶民の生活空間もあり、さらに郡家に付属する公的施設が存在した可能性もある。

ところで、集落内の建物群や住居の分布は一様ではない。V－3区、V－4区東では建物や住居が濃密だが、U区やV－2区では建物や住居が点在する。また、昨年の調査したL・M区やN－2・3区では建物や井戸は多いが住居はないのに対して、U・V区では建物と住居が検出され、井戸はほとんど認められない。よって、集落内での場の利用状況は一様ではなく、ある程度使い分けされていたと考えられる。特にL・M区、N－2・3区とU・V区での住居・井戸の有無という違いは、郡家役人層と庶民という居住者の違いを示し、同時に両者の居住域の差を示すとみられる。方格地割が施された多賀城下（山王遺跡）では、東西大路に面した区画に国司ら上級役人の邸宅があり、階層の低い人々はその裏に居住したととらえられている(菅原ほか1996)。遺構のあり方の差からみて、同様のことが名生館遺跡の集落内でも同じことが考えられる可能性がある。

B．西側調査区（Q－5～9・R・S・T区）

検出された遺構は、掘立柱建物跡4、溝跡19、井戸跡2、土壙83である。しかし出土遺物が少なく、年代や性格が分かるものはほとんどない。東側調査区では、SD960南北溝を境に西側は古代の遺構の密度が非常に低くなる。そのさらに西の本調査区では明確に古代の遺構はなく、東側とは時代や性格の異なる遺構が検出されている。以下では、その中でもまとまって検出された土壙について記述する。

①類、②類は落とし穴である。時代を特定できる遺物は出土していないが、同じ調査区から僅かに縄文土器が出土していることや多くの類例から推定すると縄文時代の可能性が高い。

③類は西側調査区の中でも南東部に多く見られる。中でもQ－9区のSK699は人為的に埋め戻され、底面からは須恵器壺が正位で、非ロクロ調整の土師器坏が伏せられた状態で出土しており、墓壙と考えられる。また③類は、多数の木棺墓が検出された古川市新谷地北遺跡（木皿・早川1992）にも類似しており、墓壙と推定できよう。③類からは年代を特定できる遺物は出土していないが、SK699の出土遺物及び新谷地北遺跡の年代より、8～10世紀の可能性を指摘しておく。

④類は、平面形が長方形や方形を基調とし、大きさでa、b類に細分できる。長軸方向を南北にし、

長辺の一方の壁がオーバーハングするという点が最大の特徴であり、その多くは標高の高い西側の壁である。対応する壁は緩やかに立ち上がり、a類の底面は傾斜を持ち、b類は段を持つものが多い。この付近は開田の際に50cm以上削平されており、本来の深さは70〜90cm以上あったと思われる。堆積土は明確に人為堆積と判断できる下層と、自然か人為堆積か判断できない上層に大別でき、いずれもオーバーハングした部分に入り込むように斜めに堆積している。上層は●類土壙の杭状痕跡と堆積土が類似しており、板材痕跡、あるいは板材の抜き取り痕跡の可能性も考えられる。a類、b類と細分されたが、形態や堆積土の類似性、それぞれ重複しないことなどから同じ時期のものである可能性が高い。そして時期はSK720の1層から天王山式土器の破片が出土しており、弥生後期以降と見られる。このような特徴を持つ土壙はこれまでまとまって検出された例がない。今回のような限られた調査区では、時代や性格などについて判断できる資料を十分得ることはできず、類例の増加を待ち今後の検討課題としたい。

IV. まとめ

1．今回の調査区は古代玉造郡家とみられる名生館官衙遺跡の南西外側に位置する。検出遺構は塀跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壙で、遺物は7世紀後半〜9世紀前半の土師器・須恵器を中心に多数出土した。遺構・遺物の分布は調査区東側が濃密、西側は希薄である。

2．東側調査区は遺構・遺物の分布から南北溝SD960を境にさらに東西に分けられ、東側には掘立柱建物跡や竪穴住居跡が多数分布し、遺物も多いことから集落域とみられる。西側は遺構・遺物が少なく、水路が検出されたことから耕作域と考えられる。そしてSD960は官衙南西外側の集落の西を画するものととらえられる。

3．昨年の調査では官衙南外側における郡家役人層の住居域が明らかになった。そして今回の調査では、東側調査区において竪穴住居跡が検出され庶民の居住域の存在が明らかになった。さらには、その中において官衙政庁の建物に匹敵する規模の柱穴を持つ掘立柱建物跡が検出されたことにより、官衙南外側には郡家付属の公的施設も存在した可能性も考えられた。また、掘立柱建物跡・竪穴住居跡・井戸跡などの遺構の構成が昨年と今年の調査区では異なることから、郡家役人層の居住域、庶民の居住域など官衙南外側ではある程度の場の使い分けがなされていたと推定される。

4．西側調査区からは土壙群がまとまって検出された。性格が分かるものでは縄文時代の落し穴と8〜10世紀の墓壙がある。

第１表　遺構属性表

塀・掘立柱建物・（橋）跡属性表

遺構名	区	構造	規模(間)	規模(m)	柱間寸法(m)		柱穴平面形と規模(長軸・短軸・深さ：cm)				柱痕跡(cm)	方向(°)	重複関係
SA630	P2	1本柱列	1間以上	2.3以上	北から不明・2.3・不明		楕円形	35	20～25	25	柵材	N-3°-E	
SA1020	Q1	柱列		5.3以上			楕円形	30	25	13	径12	N-3°-W	
SB625	P2	南北棟	4間×2間	7.0×4.2	南から1.4・1.8・2.3・(1.5)	西から2.1・(2.1)	隅丸長方形	50	40～50	52	径15	真北	SB625 → SK622
SB627A	P2		2間以上×1間以上	4.4以上×1.8以上	西から2.2・2.2	南から1.8	隅丸長方形	35	20	15	径15	E-13°-S	SB627 → SD621
SB627B	P2		2間以上×1間以上	4.5以上×1.9以上	西から2.3・2.2	南から1.9	隅丸長方形	30	25	20	径18	E-13°-S	SB627 → SD621
SB629	P2		1間以上×1間以上	2.2以上×2.0以上	西から2.0	南から2.2	隅丸長方形	28	25	18	径13	N-19°-W	
SB631	P2		1間以上×1間以上	2.1以上×1.6以上	北から1.6	東から2.1	隅丸長方形	23～30	20～25	15	径10	真北	
SB745	R4		2間以上×1間以上	5.3以上×4.1以上	東から2.6・2.7	北から4.1	隅丸長方形	25～30	34	34	径12～16	E-8°-S	
SB746	R4	東西棟	3間×2間	8.8×5.2	西から2.8・3.1・(2.8)	南から2.6・2.6	隅丸長方形	20～30	25	24	径10～18	E-12°-S	
SB747	R4	東西棟	3間×2間	9.0×5.0	西から3.1・3.0・2.9	南から(2.5)・2.5	隅丸長方形	20～30	22	22	径10～16	E-10°-S	
SB1059	R3		2間×1間以上	5.0×4.2以上	東から2.3・2.7	北から4.2	隅丸長方形	30～50	30～40	42	径20	E-33°-S	
SB844	U2	東西棟	2間×1間	2.6×2.2	東から1.35・1.25	北から2.2	隅丸長方形	24～32	22～30	24	径14	E-6°-S	
SB854	U2		1間×1間	3.6×3.2	西から3.2	南から3.6	隅丸長方形	50～70	40～60	20	径15	N-10°-E	SB855
SB855	U2		1間×1間	3.9×3.3	西から3.9	北から3.3	隅丸方形	45	40	11	径10～15	N-1°-W	SB854
SB871	U2		2間以上×1間以上	4.7以上×2.3以上	東から2.2・2.5	北から2.3	隅丸長方形	25～45	20～32	23	径15	真東	
SB886	U2	東西棟	3間×2間	5.6×3.7	東から1.8・1.85・1.85	北から1.8・1.9	隅丸長方形	45	35	24	径20	E-17°-S	SI842 → SB886 → SI841
SB1104	V2		2間×2間以上	4.8×4.1以上	北から(2.4)・(2.5)	東から (2.0) 2.1	楕円形	30	20	14	径8	N-15°-E	SB1104 → SD865
SB1105	V2		2間×1間以上	3.9×2.4以上	北から1.9・2.1	東から2.3	楕円形	30	20	41	径10	N-15°-E	SB1105 → SD865、SK1111
SB916	V3		2間×1間以上	5.1×1.6以上	西から2.6・2.5	北から1.6	隅丸長方形	25～53	20～40	18	径10～20	E-6°-N	SB916 → SD913
SB917	V3		3間×1間以上	7.9×2.1以上	西から3.4(2間分)・2.5	南から2.1	隅丸長方形	35	25	15	径10～15	E-4°-N	SB917 → SI879、SD881・1115、SK882・889
SB918	V3	東西棟	2間×2間	3.9×3.8	西から2.1・1.7	南から2.0・1.9	楕円形	35～45	25	17	径10	N-9°-E	SB918 → SK915
SB919	V3		3間×2間以上	5.0×3.9以上	東から1.8・1.5・1.7	北から1.9・1.9	隅丸長方形	30～35	25～30	21	径12	E-3°-N	SI887 → SB919
SB920	V3		1間×1間	3.0×2.7	南2.7	西3.0	楕円形	30～60	20～45	20	径12～15	N-28°-W	SI887 → SB920
SB921	V3		2間×1間以上	5.5×2.6以上	西から2.9・2.6	北から2.6	隅丸長方形	45	30	21	径15	E-31°-N	SI887 → SD921
SB922	V3	東西棟	2間×2間	5.5×3.4	西から2.8・2.7	北から1.8・1.6	楕円形	40～55	30～40	13～37	径10～25	E-10°-S	SB922 → SK1118 → SD892 → SD886
SB980	V4	東西棟	3間×1間	5.6×3.5	東から1.8・1.9・1.9	西3.5	隅丸長方形	110～140	85～120	110	径30～40	E-1°-N	SB980 → SD892・978
SB986	V4	東西棟	3間×2間	6.7×4.1	西から1.9・2.4・2.4	南から1.9・2.1	隅丸長方形	30～50	30～40	46	径10～12	E-4°-S	SB986 → SD892・888
SB987	V4		3間×1間以上	4.7×2.5以上	北から1.6・1.6・1.5	西から2.5	隅丸長方形	30～35	20～25	34	径12	N-3°-E	SB987 → SD892
SB988	V4		1間以上×1間以上	2.2以上×2.1以上	南から2.2	西から2.1	隅丸長方形	35	20～30	19	径12	N-6°-E	
SB989	V4	東西棟	1間×1間	4.5×2.5	西4.5	南2.5	隅丸長方形	25～35	30	29	径10～15	N-1°-E	SB989 → P64
SX990	V4	橋	2間×不明	3.8×不明	1.85等間		隅丸長方形	80～90	70	98	径25・15	N-4°-E	SX990 → SD960B

竪穴住居跡属性表

遺構名	区	平面形	規模(m)	壁(cm)	主柱穴	周溝	カマド	方向	その他	重複関係
SI804	U1	(隅丸長方形)	4.8×4.6 横長	－	4本	ほぼ全周	北辺中央	N-12°-E	壁柱穴有り	SI804 → SD853
SI841	U2	(隅丸長方形)	(4.5)×4.4	12	(4)本	西・南・北辺、壁材痕跡有り		N-5°-W	中央部床補修	SI842・843、SD886 → SI841、SD882、SK884・978
SI842	U2	(隅丸長方形)	(4.0)×3.5	－	(4)本	西・南・北辺、壁材痕跡有り	〃	N-25°-E		SI885 → SI842 → SD886、SI841
SI843	U2	(隅丸長方形)	(4.6)×1.7以上	－	(4)本	西・南辺、壁材痕跡有り		E-5°-N		SI843 → SI841
SI885	U2	(隅丸長方形)	3.2以上×0.5以上	－		西・北辺、壁材痕跡有り		N-26°-E		SI885 → SI842
SI868	V2	隅丸長方形	3.1×2.9	22	無し	無し	北辺中央	N-6°-W	貯蔵穴2個有り	SD1106 → SI868 → SK906
SI879	V3	(隅丸長方形)	4.8×1.5以上	－		西・南辺		E-4°-N		SD913 → SI879 → SK908・907
SI880	V3	(隅丸長方形)	(3.8)×2.7以上	－	(4)本	東・南辺		E-11°-S		
SI887	V3	(隅丸長方形)	5.6×3.2以上	6		東・西・南辺、壁材痕跡有り	東辺南端、関東型	真東	壁材の押さえに白色粘土使用	SI887 → SD894、SB919・980
SI985	V4	(隅丸長方形)	(2.8)×2.4	20	無し	無し	北辺中央、関東型	N-5°-E		SK981 → SI985 → SK994

井戸跡属性表

遺構名	区	平面形	断面形	規模(長軸×短軸m)	深さ(cm)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SE551	N4	隅丸方形		1.5×1.1以上		SE551 → SD637	灰白色火山灰ブロックを含む黒褐色シルト主体
SE580	N5	楕円形		1.2×1.1			黒褐色シルト主体
SE589	N5	楕円形		1.5×1.2			黒褐色シルト主体
SE612	P1	円形	箱形	径1.0	70	SD611 → SE612	上層－地山ブロックを多量に含む黒色粘土質シルト(人為)、下層－黒色・褐灰色砂質シルト(自然)
SE613	P1	円形	箱形	径0.8	60		上層－地山ブロックを多量に含む黒色粘土質シルト(人為)、下層－黒色・褐灰色砂質シルト(自然)
SE764	S2	円形	ロート状	径1.4	168		地山ブロックを多く含む黒色シルトと黄褐色・暗褐色砂質シルト(人為)
SE775	S3	円形	逆台形	径2.5以上	140		上層－黒色シルト(自然)、下層－地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SE819	U2	楕円形	箱形?	1.0×0.9	88以上		1・4層－砂ブロックを多く含む黒褐色シルト、2層－黒褐色シルト質砂、3層－オリーブ褐色砂(人為)

溝跡属性表１

遺構名	区	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	断面形	方向(°)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SD372	N4	1.4～2.1	0.6	40～60	逆台形	真東	SD374・398・642・643、SK558・559・560・641 → SD372	黒色シルト主体(自然)
SD374	N4	0.4			逆台形	E-7°-N	SK560 → SD374 → SD372・398・552	黒色砂質シルト主体(自然)
SD398	N4	0.7～1.1	0.3	40	U字形	E-9°-N	SD374・642・643、SK641 → SD398 → SD372	地山ブロックを含む黒色シルト主体(人為)
SD553	N4	0.2～0.3		45		E-3°-N	SK648 → SD554 → SD553	黒色シルト主体(自然)
SD554	N4	0.2～0.5		51		E-1°-N	SK648 → SD554 → SD553	黒色シルト主体(自然)
SD555	N4	2.3～3.4		38		N-39°-W	SD557 → SD555	黒色粘土質シルト主体(自然)
SD587	N4	0.8～2.2		36		E-18°-N	SD587 → SK584・586 → SD555	黒褐色シルト主体(自然)
SD637	N4	0.7～1.0	0.6	50	U字形	N-6°-E	SD638、SE551 → SD637	1層－砂粒や炭化物を少し含む黒褐色シルト、2層－暗灰色粘土、3層－灰色粘土(自然)
SD638	N4	2.3～7.0	2.0	25	皿状	N-7°-W	SD639 → SD638 → SE551 → SD637	1層－黒褐色シルト、2層－黒褐色砂質シルト、3層－褐灰色シルト質粘土(自然)
SD639	N4	0.2～0.4	0.2	20	U字形	N-2°-W	SD639 → SD638	地山ブロックを多く含む黄灰色砂質シルト(人為)
SD640	N4	0.7～0.8	0.4	70	逆台形	N-3°-W	SK580 → SD640	黒褐色粘土主体(自然)
SD642	N4	0.2～0.4	0.3	50		真東	SD552・372・398 → SD642	黒褐色シルト主体(自然)
SD643	N4	0.5～1.1	0.4	30	U字形	N-34°-W	SK557 → SD643 → SK1156 → SD398	地山ブロックを含む黒褐色粘土主体(人為)
SD552	N4	0.2～0.4	0.2	55	U字形	N-3°-E	SK561・562、SD374・642 → SD552	黒色粘土質シルト(自然)
SD633	N5	2.0	1.6	50	箱形	E-8°-N	SD633 → SD636	地山ブロックを含む黒褐色砂質シルト(人為)
SD634	N5	0.8	0.5	50	逆台形	E-8°-N	SD643 → SK593・594・1157、SD636	地山ブロックを含む黒・黒褐色の粘土と砂(人為)

溝跡属性表 2

遺構名	区	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	断面形	方向(°)	重複関係	埋積土などその他の特徴
SD635	N5	1.1～1.5	0.7～1.1	40	逆台形	N-10°-E	SD636→SD635 1層－黒褐色シルト質粘土、2・4層－によい黄褐色粘土、3・5層－地山小ブロックを含む黒褐色粘土(自然)	
SD636	N5	3.7	2.0以上	30	皿状	E-8°-N	SD633・634、SK593・594・1157→SD636→SD635	1・2層－黒褐色粘土主体(自然)、3層－地山ブロックを含む黒褐色粘土(人為)
SD590	N5	0.5～1.1				E-12°-S		黒褐色シルト主体
SD591	N5	0.5～0.8				E-5°-N		黒褐色シルト主体
SD600	O2	22.0				E-19°-S		黒色粘土主体(自然)、沢
SD601A	O2	0.6～1.1	0.2～0.4	25	U字形	E-31°-N	SK595・596・597・605→SD601A・B	上層－地山ブロックを多く含む褐色砂質シルトと褐灰色粘土質シルト(人為)、下層－砂を少し含む黒褐・暗褐色粘土(自然)
SD601B	O2	0.7	0.5	20	U字形	E-32°-N	SK595・596・597・605→SD601A・B	黒褐色砂質シルト
SD602	O2	0.7～0.9	0.6	10	U字形	N-45°-W	SD606・603→SD602	黒褐色砂質シルト主体
SD603	O2	0.4～0.5	0.2～0.3	7	U字形	E-10°-N	SD603→SD602	黒褐色砂質シルト主体
SD604	O2	2.3	0.7	75	U字形	E-32°-N	SD606・607→SD604	上層－地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト(人為)、下層－黒・黒褐色砂・粘土主体(自然)
SD606	O2	0.5～0.6	0.4	13	U字形	N-29°-E	SD606→SD607、SK598→SD604・602	黒褐色砂質シルト主体
SD607	O2	0.2～0.4	0.1～0.2	16	U字形	N-7°-W	SD606→SD685→SD604	黒褐色砂質シルト主体
SD610	O2	0.2～0.4	0.1～0.2	30	U字形	N-20°-E	SK797・799・1001→SK615→SD610	黒褐色砂質シルト主体
SD617	O2	0.2～0.3	0.1～0.2	13	U字形	N-6°-E	SD618→SD617→SK616	黒褐色砂質シルト主体
SD618	O2	0.7～1.2	0.3～1.0	14	U字形	E-26°-S	SK1010・1011→SD618→SD617	黒褐色砂質シルト主体
SD611	P1	2.6	1.4～2.2	50	逆台形	E-2°-S	SD611→SE612 1層－灰白色火山灰層、2・3層－黒・黒褐色粘土質シルト、4～6層－地山土と黒色砂質シルトの互層(自然)	
SD619	P2	0.6～0.8	0.3～0.4	45	U字形	E-20°-N	SD619→SD620	1層－地山ブロック主体の淡褐色シルト(人為)、2層－黒色砂質シルト(自然)
SD620	P2	0.5～0.8	0.3	40	U字形	E-16°-N	SD619・1018→SD620	1層－黒色シルト、2層－黒色砂質シルト(自然)
SD621	P2	0.4～0.6	0.2～0.4	10	U字形	E-8°-S	SB627A・627B、SB625→SD621	黒色シルト主体(自然)
SD1018	P2	0.2～0.3	0.1	17	U字形	E-30°-S	SD1018→SK622、SD620	黒色シルト主体(自然)
SD1019	P2	0.5	0.3	5	U字形	N-17°-W	SB627A・627B→SD1019	黒色シルト主体(自然)
SD632	P2	0.6～0.7	0.3	20	U字形	N-3°-E		暗灰色粘土主体(自然)
SD482	Q1	0.8～1.0	0.4	11	U字形	E-21°-W	SD482→SD649	黒色シルト主体
SD649	Q1	1.4～1.8	0.3～0.4	90	段付U字形	N-19°-E	SD482→SD649	上層－黒色粘土、下層－地山ブロックを多く含む黒色粘土(自然)
SD651	Q1	0.5～1.0	0.2～0.8	27	U字形	N-13°-E	SD663・652、SK1081→SK687→SD651	黒色シルト主体
SD652	Q1	1.1～1.4	0.5～0.9	15～30	皿状	E-1°-S	SD655、SK1022→SD652→SK650・687・1030、SD651	黒色粘土質シルト(自然)
SD653	Q1	0.2～0.4	0.1	6	U字形	E-42°-S		黒色シルト主体
SD654	Q1	1.5～2.0	0.6～1.4	25	皿状	E-3°-S	SK656→SD654→SK664・666	1層－黒色シルト、2層－暗灰黄砂、3層－黒褐色砂質シルト(自然)
SD655	Q1	1.6～2.9	1.2～2.5	19	皿状	N-10°-W	SK1040・668→SD655→SD1024・668・688	黒褐色シルト主体
SD661	Q1・V1	1.9	1.6～1.7	35	逆台形	真北	SK662→SD661→SK668→SK667	上層－黒色シルト、黒褐色砂質シルト(自然)、下層－褐灰色粘土
SD663	Q1	0.3～0.8	0.1～0.5	16	U字形	真東	SD665・688→SD663→SK687・651	黒色シルト主体
SD671	Q1	0.2～1.0	0.1～0.6	25	U字形	E-28°-S	SD1028→SD671→SD1027・672、SK670	黒褐色砂質シルト主体
SD672	Q1	0.5～0.6	0.2～0.4	12	U字形	N-10°-E	SD671→SD672	黒色シルト主体
SD677	Q1	0.3～0.5	0.1～0.3	16	U字形	N-29°-E		黒色シルト主体
SD678	Q1	0.9～1.3	0.6～0.9	35	U字形	N-3°-W	SK1043→SD678	黒色粘土質シルト主体
SD679	Q1	0.3～0.6	0.2～0.4	13	U字形	N-3°-W		黒褐色シルト主体
SD680	Q1	0.5～0.8	0.3～0.6	9	U字形	N-4°-W		黒色シルト主体
SD681	Q1	0.2～0.3	0.1～0.2	20	U字形	N-29°-E	SD1028→SD681→SD1027、SK670	黒色シルト主体
SD688	Q1	0.2～0.7	0.1～0.6	17	U字形	E-23°-N	SD655、SK1037→SD688→SD663	黒褐色シルト主体
SD1021	Q1	0.2～0.4	0.2	5	U字形	E-5°-N		黒色シルト主体
SD1022	Q1	0.2～0.5	0.1～0.2	14	U字形	E-9°-S		黒色シルト主体
SD1023	Q1	0.3～0.5	0.1～0.2	9	U字形	E-5°-N		黒色シルト主体
SD1024	Q1	0.3	0.1	8	U字形	N-29°-E	SD635→SD1024	黒色シルト主体
SD1025	Q1	0.3～0.6	0.2～0.5	18	U字形	N-6°-W	SD1025→SD1026→SD1027	黒褐色シルト主体
SD1026	Q1	0.3	0.1	12	U字形	N-30°-E	SD1025→SD1026→SD1027	黒褐色シルト主体
SD1027	Q1	0.1～0.6	0.3	5	U字形	E-19°-S	SD1025→SD1026→SD1027	黒褐色シルト主体
SD1028	Q1	0.4～0.9	0.3～0.5	20	逆台形	E-1°-S	SD1028→SD681・671→SK670	地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)
SD1029	Q1	0.2～0.5	0.1～0.2	14	U字形	N-3°-E		黒色シルト主体
SD683	Q2・V4	2.9～3.1	2.3～2.6	88	逆台形	N-15°-E		1～3・5・6層－黒・黒褐色粘土・粘土質シルト主体、4層－灰白色火山灰層(自然)
SD685	Q3	0.4～0.7	0.2～0.4	34	U字形	N-15°-E		1層－黒色粘土質シルト、2層－黒色砂質シルト(自然)
SD1045	Q3	0.3～0.5	0.2～0.3	10	U字形	N-7°-E	SD1045→SD1046	黒色シルト主体
SD1046	Q3	0.6～0.8	0.2～0.5	22	U字形	E-27°-S	SD1045→SD1046	黒褐色シルト主体
SD689	Q4	0.4～0.7	0.2～0.6	23	逆台形	E-20°-S		黒色砂質シルト主体
SD690	Q4	1.3～1.6	1.1～1.2	34	逆台形	N-28°-E	SD690→SD691	黒色砂質シルト主体
SD691	Q4	0.6	0.4	23	U字形	E-17°-S	SD690→SD691	黒色シルト主体
SD692	Q4	2.9～3.2	1.8～2.2	82	逆台形	E-28°-N		1～3・5～7層－黒・黒褐色粘土・粘土質シルト・砂質シルト主体、4層－灰白色火山灰層(自然)
SD695	Q5	0.3～0.6	0.2～0.4	19	U字形	E-10°-S		黒色シルト主体(自然)
SD1050	Q5	0.1～0.3	0.1	2	U字形	E-22°-S		黒色シルト主体 (自然)
SD789	Q8	1.3～1.7	0.7～1.0	30	皿状	E-3°-N	SD694→SD789	黒色シルト(自然)
SD1052	Q9	0.3	0.1～0.2	9	U字形	E-42°-S		黒色シルト(自然)
SD694A	Q～S	1.3～2.0	0.7～0.8	32	U字形	E-19°～35°-S	SK731・732→SD694→SD1056・789	1層－黒色シルト、2層－黒褐色シルト(自然)
SD694B	Q～S	1.1～1.7	0.4～1.0	72	U字形	E-19°～35°-S	SK731・732→SD694→SD1056・789	1層－地山ブロックを多く含む黒・黒褐色シルト、2層－黒褐色シルト(人為)
SD696	Q～S	0.4～1.3	0.2～0.7	36	U字形	N-31°～50°-W	SD697→SD696	1層－地山土の粒を多く含む黒褐色シルト(人為)、2層－黒色シルト(自然)
SD697	Q～S	0.8	0.2	16	U字形	N-31°-W	SD701→SD697→SD696	1層－黒褐色シルト、2層－灰褐色砂質シルト(自然)
SD698	Q～S	0.5～1.0	0.2～0.5	28	U字形	E-29°～31°-S	SK689・735・736・737→SD698	灰褐色シルト(自然)
SD701	R1	0.3～0.7	0.2～0.4	9	皿状	N-41°-W	SD697→SD701	黒褐色シルト主体 (人為)
SD1054	R1	0.2～0.9	0.1～0.6	21	U字形	E-22°-S		黒色シルト主体
SD1055	R1	0.5～0.8	0.3～0.5	11	U字形	E-17°-S		黒色シルト主体
SD1056	R1	0.3～0.6	0.1～0.4	27	U字形	N-31°-E	SD694A・694B→SD1056	黒色シルト主体
SD702	R3・S1	2.2～3.1	1.5～2.0	95	逆台形	N-30°-E	SK728→SD702	1・2層－炭粒や地山土粒を含む黒褐色シルト、3層－によい黄褐色砂(自然)
SD729	R3・S1	0.8～1.6	0.4～0.7	38	逆台形	N-29°～33°-E	SD729→SD730	1層－黒色シルト、2層－黒褐色砂質シルト(自然)
SD1060	R5	0.2～0.3	0.1～0.2	14	U字形	N-4°-E		黒色シルト主体
SD703	R6・S1	0.8～1.0(1.65)	0.3～0.5	54	段付U字形	N-6°～10°-E		1層－地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)、2～4層－黒・黒褐色シルトの互層(自然)
SD730	S1	0.5～0.7	0.3～0.4	13	U字形	N-21°-E	SD729→SD730	黒色シルト(自然)
SD784	T1	1.0	0.5	66	逆台形	N-38°-E	SD784→SD785 1・2層－地山土粒を含む黒褐色粘土質シルト (自然)、3層－地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト(人為)	
SD785	T1	2.2～2.4	1.2～1.5	88	逆台形	E-32°-S	SD784→SD785 1～3層－地山土粒を含む黒褐色粘土質シルト(自然)、4層－地山ブロックを含む黒褐色砂質シルト(人為)	
SD802	U1	1.9～2.1	1.8～2.0	18	皿状	真東		黒褐色シルト主体
SD803	U1	0.7～0.8	0.6以上	16	U字形	E-13°-N	SD811→SD803	黒色シルト(自然)
SD810	U1	3.3～5.1	2.9～3.5	36	皿状	N-18°-W	SD818・819、SK815・816・821→SD810	1・2層－黒・黒褐色シルト、3層－によい黄褐色粘土質シルト(自然)
SD811	U1	0.4		12		E-12°-N	SD811→SD803	黒色シルト(自然)

溝跡属性表3

遺構名	区	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	断面形	方向(°)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SD812	U1	0.4~0.8	0.2~0.5	5	皿状	E-5°-N		黒色シルト主体
SD817	U1	1.2以上	1.1以上	14	皿状	N-9°-W		黒褐色シルト主体
SD818	U1	1.2以上	0.7以上	29	U字形	N-8°-W		地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SD819	U1	0.3~1.2	0.3以上	30	逆台形	N-18°-W	SD819→SK806·815→SD810	1層ー灰白色火山灰層、2·3層ー黒褐·黄褐色シルト(自然)
SD853	U1	0.6~0.7	0.4~0.5	17	U字形	真東	SI804→SD853	黒色シルト主体
SD831	U2	0.4~1.0	0.2~0.4	4	皿状	N-15°-E	SD1067→SD831	黒色シルト主体
SD832	U2	0.4~0.6	0.2~0.4	42	U字形	N-36°-E		黒色シルト(自然)
SD833	U2	0.3~0.6	0.1~0.3	16	U字形	E-17°-S	SI811→SD833	黒色シルト(自然)
SD834	U2	0.2~0.4	0.1~0.3	13	U字形	E-20°-S		黒色シルト(自然)
SD1067	U2	0.2~0.3	0.1以上	3	U字形	E-16°-S	SK1071→SD1067→SD831	黒色シルト主体
SD1068	U2	0.2~0.5	0.1~0.3	9	U字形	E-17°-S	SK629→SD1068	暗褐色シルト主体
SD1069	U2	1.2~1.5	0.7~1.0	20	U字形	E-26°-N		黄灰色シルト質粘土(自然)
SD859	U3	1.7	0.6	56	U字形	N-7°-E	SD860→SD859	黒褐色シルト主体(自然)
SD860	U3	0.6~1.6	0.3~0.4	88	U字形	N-6°-E	SD860→SD859→SK1096·1098	1層ー黒色シルト、2層ー灰白色火山灰層、3·4層 黒褐·暗褐色砂質シルト(自然)
SD861	U3·V1	1.6				真西	SK1096→SD861	黒色シルト主体
SD862	U3·V1	7.2~8.0	5.3	46	皿状	E-10°-S	SD863·864→SD862	上層ー黒色粘土質シルト、下層ー灰白色火山灰(自然) 沢
SD1087	U3·V1	1.5以上				N-41°-W		黒色シルト主体
SD1088	U3·V1	0.7以上				E-23°-S		黒色シルト主体
SD863	V1	2.7~3.0				真東	SD864→SD863→SD861	グライ化した緑黒色粘土(自然)
SD864	V1	1.4~2.2				E-4°-N	SD864→SD861·863	グライ化した緑黒色粘土(自然)
SD1101	V1	0.5~1.2				E-6°-S	SK1103→SD1101	黒色シルト主体
SD1102	V1	1.1~1.7				N-45°-W		黒色シルト主体
SD865	V2	3.4~5.2	1.9~4.3	55	皿状	E-3°-N	SB1104→SD865→SB1105	1層ー地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)、2層ー黄褐色シルト質砂(自然)
SD1106	V2	0.9~1.3	0.3~0.5	6	U字形	N-41°-W	SI868、SK867→SD1106	黒褐色シルト主体
SD1107	V2	0.4~0.6	0.2~0.3	10	U字形	N-11°-E		黒褐色シルト主体
SD1108	V2	0.2~0.6	0.1~0.3	16	U字形	N-29°-E		黒褐色シルト主体
SD1109	V2	0.3	0.2	4	U字形	E-2°-S		黒褐色シルト主体
SD1110	V2	0.2~0.3	0.1	9	U字形	N-16°-E		黒褐色シルト主体
SD881	V3	0.4~0.6	0.3~0.4	14	皿状	N-27°-E	SB917→SK690→SD881→SK882·914	黒色シルト主体
SD888	V3	2.1~2.7	0.5	130	ロート状	N-9°-E	SB922·986、SD892→SD888	1層ー黒色シルト、2層ー黒褐色シルト、3層ー砂を含むオリーブ粘土質シルト(自然)
SD894	V3	0.2~0.3	0.1~0.2	6	U字形	N-14°-W	SB920、SI897→SD894	黒褐色砂質シルト
SD913	V3	0.2~0.4	0.2~0.3	12	皿状	N-22°-E	SB916→SD913→SI879、SK1116	黒色シルト主体
SD923	V3	0.2				E-23°-S	SK891、SD924→SD923	黒色シルト主体
SD924	V3	0.2				E-8°-N	SD924→SD925·923	黒色シルト主体
SD925	V3	0.2~0.3				N-6°-E	SD924→SD925→SK891	黒色シルト主体
SD1115	V3	0.1~0.4	0.1~0.2	10	皿状	N-22°-E	SB917→SD1115→SK1117	黒色シルト主体
SD692	V4·V3	0.4~1.0	0.3~0.8	14~27	U字形	真北·E-3°-S	SB980·986、SK976·992·993·1112→SD892→SD688	暗褐色シルト(自然)
SD682	V4·Q2	1.5~2.3	0.4~1.0	90	U字形	N-7°-E	SD990→SD682→SK973、SD971	1層ー灰白色火山灰層、2層ー黒褐色シルト、3層ーにぶい黄褐色砂質シルト(自然)、4層ー地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SD684	V4·Q3	2.2~2.4	1.3~1.6	78	逆台形	N-13°-E	SD926·928、SK929·930·931·933→SD684	1層ー黒色シルト、2層ー灰白色火山灰層、3層ー黒褐色シルト、4層ーにぶい黄褐色砂質シルト(自然)
SD926	V4	0.7~0.9	0.4~0.6	23	U字形	N-31°-E	SD926→SD684	黒褐色シルト(自然)
SD928	V4	2.7~3.0	0.5~1.4	94	段付U字形	E-12°-N	SK931→SD928→SD684	1·2層ー黒褐·灰黄褐色シルト、3層ーにぶい黄褐色砂質シルト(自然)
SD944	V4	0.7~1.0	0.3~0.6	23	U字形	N-23°-E	SK957·958·1139→SD944	暗褐色シルト(自然)
SD945	V4	0.5~1.0	0.3~0.7	36	U字形	E-35°~65°-S	SK959·967·1122·1121·1124·1127·1137·1138→SD945	暗褐色シルト(自然)
SD960	V4·Q2	1.8以上	1.2以上	86	逆台形	N-2°-E	SX990→SD960→SD682	地山ブロックを多く含む黄褐·黒褐·灰黄褐色シルト(人為)
SD971	V4	0.4~1.0	0.2~0.6	29	皿状	N-1°-W	SK972·973→SD971	黒褐色シルト(自然)
SD975	V4	5.5~6.0	3.9未満	135以上	段付U字形	N-20°-E	SD983·997、SK995·996·1119·1121→SD975	黒色粘土質シルト(自然)
SD977	V4	0.4	0.2	26	U字形	E-36°-N		黒色シルト主体
SD978	V4	1.1以上	0.8以上	32	逆台形	N-5°-E	SB980→SD978	黒色シルト主体
SD983	V4	1.3以上	0.7以上	40	逆台形	N-5°-E		黒色シルト主体
SD997	V4	0.3~0.5	0.2~0.3	12	皿状	E-43°-N		黒色シルト主体
SD998	V4	0.3以上	0.2以上	5	皿状	N-8°-W	SD990→SK937·939	黒色シルト主体
SD999	V4	0.4~0.9	0.3~0.8	35	U字形	E-5°-N	SD990→SK953	地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SD1000	V4	2.3以上	1.2以上	37	U字形	E-40°-N	SD1000→SD945	黒色シルト(自然) 沢
SD1151	V4	0.2~0.3	0.1~0.2	5	U字形	E-23°-N	SK1150→SD1151	黒色シルト主体
SD895	V5	0.5以上				N-21°-E	SD896→SD895→SK901	黒色シルト主体
SD896	V5	1.1				E-10°-S	SD896→SD895→SK901	黒色シルト主体
SD897	V5	1.1				E-32°-S		黒色シルト主体
SD898	V5	7.7				E-30°-S		黒色シルト主体
SD899	V5	4.7				E-30°-S		黒色シルト主体
SD990	V5	1.5				E-6°-N		黒色シルト主体
SD1153	V6	0.7~1.0	0.3以上	28	U字形	N-7°-E		黒色シルト主体
SD1154	V6	0.3~0.5	0.1~0.3	16	U字形	N-14°-E		黒褐色シルト主体

主要土壙属性表1

遺構名	区	平面形	断面形	規模(長軸×短軸m)	深さ(cm)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SK558	N4	不整形		1.9以上×1.1以上		SK558→SD372	砂粒を含む黒褐色シルト(人為)
SK559	N4	隅丸長方形		2.5×1.4		SK559→SD372	砂粒と地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)
SK560	N4	円形		1.5×1.0以上		SK560→SD372	砂粒を含む黒褐色シルト(人為)
SK563	N4	不整楕円形		1.1×0.7			砂粒を含む黒褐色シルト(人為)
SK566	N4	不整形		2.2以上×1.5		SK646→SK566	砂粒·地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)
SK641	N4	不整形		3.9×2.3以上	30	SK641→SD398	砂粒·地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)
SK644	N4	不整形	皿状	1.5以上×1.5以上	15~30		1層ー砂粒を含む灰オリーブシルト、2層ー地山ブロックを含むオリーブ黒色シルト(人為)
SK645	N4	不整楕円形	袋状	0.9×0.7	25		1層ー黒褐色砂質シルト、2層ー黄灰色砂質シルト(人為)
SK646	N4	不整形	皿状	2.3以上×1.5	8	SK646→SK617·566	砂粒と地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)
SK647	N4	楕円形	皿状	0.9×0.8	24	SK646→SK617	砂ブロックを含む黒褐色シルト(人為)
SK648	N4	不整溝状	袋状	3.5×1.0	35	SK566→SK648	1層ー砂粒と地山ブロックを含む黒褐色シルト、2層ー地山ブロックを含む黄灰色シルト(人為)
SK593	N5	楕円形	擂鉢状	0.6以上×0.3以上	36以上	SK594→SK593	黒褐色砂質シルト
SK591	N5	楕円形	袋状	0.6以上×0.4以上	26以上	SK594→SK593	黒褐色砂質シルト
SK1157	N5	不明	皿状	2.0以上×0.5以上	34以上	SX636→SK1157→SD634	黒褐色砂質シルト
SK596	Q2	楕円形	皿状	0.8×0.6	43	SK605→SK596→SD601	地山ブロックを含む黒褐色粘土

主要土壙属性表2

遺構名	区	平面形	断面形	規模(長軸×短軸m)	深さ(cm)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SK597	O2	楕円形	皿状	0.6×0.4	43	SK605→SK597→SD601	地山ブロックを含む黒褐色粘土
SK665	O2	楕円形	袋状	1.0以上×0.5以上	25	SK605→SK596・597→SD601	地山ブロックを含む黒褐色粘土
SK665	O2	楕円形	皿状	1.1×0.9	20	SK609・793→SK665	地山ブロックを多く含む極暗褐色粘土質シルト(人為)
SK609	O2	楕円形	皿状	1.9×1.4	25	SK793・794→SK609→SK608	地山ブロックを多く含む黒褐色粘土(人為)
SK793	O2	不整楕円形	皿状	0.6×0.6	33	SK794→SK793→SK609→SK608	地山ブロックを多く含む極暗褐色粘土質シルト(人為)
SK794	O2	不整楕円形	皿状	0.5以上×0.4以上	7	SK793→SK793→SK609	地山ブロックを多く含む極暗褐色粘土質シルト(人為)
SK614	P1	楕円形	皿状	4.1以上×0.7以上	49		黒色砂質シルト主体(自然)
SK622	P2	楕円形	皿状	1.8以上×1.2	25	SD1018→SK622	1層－砂を含む黒色シルト、2層－黄灰色粘土質シルト(自然)
SK623	P2	楕円形	皿状	0.9×0.5	30		1層－砂を含む黒色粘土質シルト、2層－灰黄色砂(自然)
SK624	P2	楕円形	皿状	0.9×0.8	24		黒色砂質シルト(自然)
SK626	P2	楕円形	皿状	0.7×0.6	12		黒色シルト主体(自然)
SK638	Q1	円形	逆台形	1.6×1.6	56	SD652→SK650	地山ブロックを含む黒色粘土質シルト(人為)
SK636	Q1	不整形	皿状	1.3以上×0.9以上	21	SK656→SD654・655	黒色シルト主体
SK637	Q1	楕円形	逆台形	1.7×0.6以上	37		上層-黒色シルト(自然)、下層－地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK638	Q1	円形	逆台形	1.1以上×2.0	62		上層-黒色シルト(自然)、下層－地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK639	Q1	不明	逆台形	2.5以上×0.9以上	62	SK659→SK666	上層－黒色シルト(自然)、下層－地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK660	Q1	楕円形	逆台形	2.5×2.3	56	SK659・665→SK660	上層－オリーブ黒色粘土質シルト及び暗灰色粘土と砂の互層(自然)、下層－地山ブロックを多く含む黒・黒褐色砂質シルトと暗灰黄粘土(人為)
SK662	Q1	不明	逆台形	1.4以上×0.8以上	93	SK662→SD661	黒色シルト主体
SK664	Q1	楕円形	逆台形	1.5×1.0	42	SK666→SK664	炭粒を少し含む黒色粘土質シルト(自然)
SK665	Q1	隅丸長方形	逆台形	2.0×0.9	20	SK666→SK665→SK660	地山ブロックを多く含む黒・黄灰色シルト(人為)
SK666	Q1	楕円形	逆台形	3.0×2.1	56	SD654→SK666→SK664・665	地山ブロックと砂を多く含む黒・黒褐・褐灰色シルト(人為)
SK667	Q1	楕状	逆台形	3.5以上×2.1	52	SD661、SK668・674→SK667	上層－黒色シルトと褐灰色粘土(自然)、下層－地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルト(人為)
SK668	Q1	円形	箱形	1.9×1.7	85	SD661→SK665→SK667	地山ブロックを含む黒・黒褐色粘土主体 (人為)
SK669	Q1	楕円形	逆台形	2.1×1.9	51	SK673→SK669	黒色シルト主体
SK670	Q1	隅丸長方形	皿状	3.6以上×3.0	28	SD671・681・1028→SK670	1層－黒色砂質シルト、2・3層－黒色粘土質シルト主体(自然)
SK673	Q1	不明	逆台形	2.0以上×1.5以上	40	SK674→SK673→SK669	砂と地山ブロックを含む黒・灰黄色シルト(人為)
SK674	Q1	楕円形	逆台形	1.7×1.3	65	SK674→SK667・673	上層－黒色シルト(自然)、下層－地山ブロック主体のにぶい黄・浅黄色粘土(人為)
SK675	Q1	不明	皿状	1.1以上×0.7以上	13	SK675→SK676	黒褐色シルト主体(自然)
SK676	Q1	楕円形	皿状	1.4×1.1	22	SK675→SK676	黒色シルト主体(自然)
SK687	Q1	円形	皿状	0.8以上×1.6	38	SD652・663→SK687→SD651	黒色シルト主体(自然)
SK1030	Q1	楕円形	皿状	0.8以上×1.2	45	SD652→SK1030	黒色粘土質シルト主体(自然)
SK1031	Q1	楕円形	皿状	0.6以上×0.6	30	SK1031→SK1032・SD651	黒色シルト主体
SK1032	Q1	隅丸長方形	皿状	1.2×0.5以上	35	SK1031・1031→SK1032→SD652	黒色シルト主体(自然)
SK1033	Q1	楕円形	皿状	0.6以上×0.6	12	SK1033→SK1032	黒褐色シルト主体
SK1034	Q1	楕円形	皿状	0.7×0.6	22		黒色シルト主体
SK1035	Q1	不明	皿状	1.1以上×0.5以上	17	SK1035→SK1036	黒褐色シルト主体
SK1036	Q1	楕円形	皿状	0.8以上×0.9	16	SK1035→SK1036	黒色シルト主体
SK1037	Q1	楕円形	皿状	0.5以上×0.4	31	SK1037→SD688	黄灰色粘土質シルト主体
SK1038	Q1	不明	皿状	0.7以上×0.1以上	5		黒色シルト主体
SK1039	Q1	不明	皿状	0.8以上×0.3以上	5		黒色シルト主体
SK1040	Q1	不明	皿状	0.8以上×0.5以上	7	SK1040→SD655	黒色シルト主体
SK1041	Q1	楕円形	皿状	0.6以上×0.6	17	SD661→SK1041	黒色シルト主体
SK1042	Q1	不整形	皿状	1.2以上×1.1	24		黒褐色砂質シルト主体
SK1043	Q1	隅丸長方形	皿状	0.7以上×0.7	35	SK1043→SD678	黒褐色砂質シルト(自然)
SK686	Q3	楕円形	逆台形	1.2×1.0	48		1層－黒色砂質シルト、2層－黄褐色砂質粘土(自然)
SK1046	Q3	楕円形	皿状	1.4×0.9	34		黒色シルト主体
SK1047	Q3	楕円形	皿状	1.8×0.9	16		黒褐色シルト主体
SK1048	Q3	円形	皿状	0.5	4		黒色シルト主体
SK1049	Q3	楕円形	皿状	0.6×0.5	9		黒色シルト主体
SK693	Q5	隅丸長方形	逆台形	1.2×0.4	62		地山土粒を下部に多く含む黒色粘土質シルト(自然)
SK1051	Q8	円形	皿状	0.9以上×0.4以上	31		黒色シルト主体
SK699	Q9	楕円形	箱形	0.9×0.5	22	SK699→SD698	1層-地山土粒を多く含む砂質シルト、2層－地山土主体の暗褐色砂質シルト(人為)　底部から土器出土
SK1053	Q9	楕円形	皿状	1.6×0.4	7		黒褐色砂質シルト
SK700	R1	隅丸長方形	箱形	1.0×0.4	16		⑥類　黒褐色砂質シルト主体
SK1057	R1	隅丸長方形	逆台形	0.9以上×0.4以上	8	SK1037→SD701	⑤類　黒色シルト主体
SK1058	R1	楕円形	逆台形	0.7×0.2	13		⑤類　黒色シルト主体
SK741	R2	隅丸長方形	箱形	1.4×0.6	55		③類　地山土粒・地山ブロックを含む黒色砂質シルト (人為)
SK742	R3	楕状	U字形	3.1×0.2	45		①類　1層－地山ブロックを含む褐色粘土質シルト、2・3・4層－黒・褐色砂質シルトと暗褐色粘土(自然)
SK744	R4	楕状	U字形	2.8×0.4	60以上		⑥類　1層－地山土粒を含む黒色砂質シルト、2・3・4層－地山ブロックを主体とする褐・黒色シルト(自然)
SK749	R6	楕状	U字形	2.7×0.2	29		①類　1層－黒褐色シルト、2層－地山土主体の黄褐色粘土(自然)
SK750	R6	楕状	U字形	2.6×0.2	75		⑥類　地山土粒を含む黒色シルト(自然)
SK751	R6	隅丸長方形	箱形	2.0×0.7	30		⑤類　地山ブロックを下部に多く含む黒褐色砂質シルト(人為)
SK704	S1	隅丸長方形	逆台形	0.8×0.4	15		④類　地山ブロックを含む褐色粘土質シルト(人為)
SK705	S1	隅丸長方形	袋状	1.9×0.9	18		④類　上層－地山土粒を多く含む暗褐色粘土質シルト、下層－地山ブロックを含む褐色粘土質シルト(人為)
SK706	S1	隅丸長方形	箱形	1.4×0.7	33		⑥類　上層－黒色砂質シルト(自然)、下層－地山ブロック主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK707	S1	隅丸長方形	袋状	0.9×0.7	13		④類　上層－地山土粒を多量に含む暗褐色粘土質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK708	S1	隅丸長方形	袋状	1.2×0.6	26		④類　上層－地山土粒・ブロックを含む暗褐色粘土質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK709	S1	隅丸長方形	袋状	1.4以上×0.8	30		④類　上層－地山ブロックを含む黒色粘土質シルト、下層－地山ブロックを含む褐色粘土質シルト(人為)
SK710	S1	隅丸長方形	箱形	1.6×0.4	13		⑥類　地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK711	S1	隅丸長方形	平行四辺形	1.8×0.6	35		④類　上層－黒色粘質シルト、下層－地山土主体の褐・暗褐色粘土質シルト(人為)
SK712	S1	隅丸長方形	袋状	1.0×0.7	15		④類　上層－暗褐色粘土質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK713	S1	隅丸長方形	袋状	0.9以上×0.8以上	30		④類　上層－地山土粒を含む黒色粘土質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK714	S1	隅丸長方形	袋状	1.0×0.7	22		④類　上層－地山土粒を含む黒色粘土質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK715	S1	隅丸長方形	袋状	1.1×0.8	30		④類　上層－地山土粒を多く含む暗褐色粘土質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK716	S1	隅丸長方形	袋状	1.0×0.6	28		④類　上層－地山土粒を多く含む暗褐色シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK717	S1	隅丸方形	箱形	0.9×0.8	13		④類　地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK718	S1	隅丸長方形	平行四辺形	1.9×0.8	35		④類　上層－暗褐色粘土質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK719	S1	楕円形	ロート状	1.2×0.8	110		⑤類　上層－地山土粒を含む黒色砂質シルト(自然)、下層－地山土主体の褐色砂質シルト(人為)
SK720	S1	隅丸長方形	袋状	1.6×0.8	32		④類　上層－地山土粒を多量に含む暗褐色粘土質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK721	S1	隅丸長方形	袋状	0.8×0.6	18		④類　上層－地山土粒を多く含む暗褐色砂質シルト、下層－地山土主体の褐色シルト(人為)

主要土壙属性表 3

遺構名	区	平面形	断面形	規模(長軸×短軸m)	深さ(cm)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SK722	S1	隅丸長方形	袋状	1.0×0.5	34		④類　上層－地山土粒を含む黒色砂質シルト、下層－地山土主体の褐色砂質シルト(人為)
SK723	S1	不明	袋状	0.8以上×0.7以上	35		④類　上層－地山土粒を多く含む暗褐色粘土質シルト、下層－地山ブロックを含む褐色粘土質シルト(人為)
SK724	S1	不明	袋状	1.0以上×0.6以上	35		●類　上層－地山土粒を多く含む暗褐色シルト、下 層－地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK725	S1	隅丸方形	箱形	0.8×0.7	10		●類　地山土主体の褐色粘土質シルト(人為)
SK726	S1	隅丸長方形	袋状	1.7×0.9	37		④類　上 層－地山ブロックを含む褐色砂質シルト、下層－地山土主体の褐色粘質シルト(人為)
SK727	S1	隅丸長方形	逆台形	1.2以上×0.7以上	23		●類　上層－地山ブロックを含む黒色粘土質シルト、下 層－地山ブロックを含む褐・暗褐色粘土質シルト(人為)
SK728	S1	楕状	U字形	3.6×0.3	39	SK728→SD702	①類　地山小ブロックを多く含む黒褐色シルト(自然)
SK731	S1	隅丸長方形	箱形	1.4以上×0.7	35	SK731→SD694A	③類　地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK732	S1	隅丸長方形	逆台形	1.7以上×0.5	40	SK732→SD694B	③類　1層－地山ブロックを含む褐色粘土質シルト、2層－褐色シルト質粘土(人為)
SK733	S1	楕状	U字形	1.7以上×0.3	33		①類　1層－地山土粒・ブロックを含む黒色シルトと褐色粘土質シルト(自然)
SK734	S1	隅丸長方形	箱形	2.1×0.7	55		●類　地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK735	S1	隅丸長方形	箱形	1.7×0.5	29	SK735→SD698	④類　地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK736	S1	楕状	U字形	2.7×0.4	33	SK736→SD698	①類　地山小ブロックを少し含む黒色シルト(自然)
SK737	S1	隅丸方形	箱形	1.4×1.5	36	SK737→SD698	⑤類　地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK738	S1	隅丸長方形	箱形	1.0×0.6	15		●類　地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK739	S1	隅丸長方形	箱形	1.9以上×0.6	34		③類　地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK740	S1	隅丸方形	箱形	0.9×0.7	14		④類　上層－地山ブロックを含む黒色シルト、下層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK743	S1	隅丸方形	袋状	0.8×0.6	25		④類　上層－地山ブロックを含む黒色シルト、下層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK1061	S1	隅丸長方形	逆台形	0.8以上×0.5	16		⑤類　黒色シルト主体
SK1062	S1	楕円形	皿状	1.2以上×0.8	9		③類　黒色シルト主体
SK1063	S1	円形	袋状	0.6以上×0.9	32		⑤類　黒色シルト主体
SK1064	S1	楕円形	皿状	0.9以上×0.8以上	31		⑤類　黒色シルト主体
SK1065	S1	隅丸長方形	箱形	1.1以上×0.4以上	18		⑤類　黒色シルト主体
SK1066	S1	不明	逆台形	1.1以上×0.2以上	36		●類　黒色シルト主体
SK753	S2	隅丸長方形	袋状	1.1×0.5	23		④類　上層－地山土粒を含む黒色シルト、下層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK754	S2	楕円形	袋状	1.1×0.8	41		④類　上層－黒色シルトとにぶい黄橙色粘土質シルト、下層－地山ブロックを含む黒・褐色粘土質シルト(人為)
SK755	S2	隅丸長方形	袋状	2.0×0.9	24		●類　上層－地山ブロックを少し含む黒色シルト、下層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK756	S2	隅丸長方形	袋状	1.1×0.8	35		④類　上層－地山ブロックを少し含む黒色シルト、下層－地山ブロックを含む黄・褐色粘土質シルト(人為)
SK757	S2	隅丸長方形	平行四辺形	1.0×0.6	23		④類　上層－地山ブロックを少し含む黒色シルト、下層－地山ブロックを含む黄・褐色粘土質シルト(人為)
SK758	S2	不整長方形	袋状	1.3×0.7	34		●類　上層－地山ブロックを含む黒色シルト、下層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK759	S2	隅丸長方形	袋状	1.3×0.7	33		●類　上層－地山ブロックを含む黒色シルト、下 層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK760	S2	隅丸方形	袋状	0.9×0.8	23		④類　上層－地山土粒を少し含む黒色シルト、下層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK761	S2	隅丸長方形	袋状	0.6×0.3	19		●類　上層－地山土粒を少し含む黒色シルト、下層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK762	S2	楕円形	逆台形	1.4以上×0.4以上	70		⑤類　地山砂を含む黒・黒褐色砂質シルト(自然)
SK763	S2	不整長方形	袋状	1.1×0.8	19		④類　上層－地山土粒を少し含む黒色シルト、下 層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK765	S2	隅丸長方形	ロート状	1.2×0.8	28		④類　地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK766	S2	隅丸長方形	箱形	1.4×0.7	27		③類　1層－地山土粒を少し含む黒色シルト、2層－地山ブロックを多く含む褐色土シルト(人為)
SK767	S2	楕円形	ロート状	1.2×0.6	89		⑤類　上層－地山土粒を含む黒・黒褐色シルト(自然)、下 層－地山砂を含む黄褐色砂質シルト(自然)
SK768	S2	隅丸長方形	箱形	1.0×0.9	70(109)		②類　地山土粒・地山小ブロックを含む黒色シルト(自然)
SK769	S2	楕円形	箱形	0.8以上×0.4以上	27		③類　1層－地山土粒を少し含む黒色シルト、2層－地山ブロックを含む褐色粘質シルト(自然)
SK770	S2	隅丸長方形	逆台形	1.5以上×0.5以上	27		③類　地山土粒・地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK771	S2	不整長方形	袋状	0.9×0.6	22		④類　上層－地山土粒を少し含む黒色シルト、下層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK772	S3南	隅丸長方形	逆台形	1.3×0.6	18		③類　1層－地山土粒を少し含む黒色シルト、2層－地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルト(人為)
SK773	S3南	隅丸長方形	箱形	0.9×0.7	54(72)		②類　地山土粒・地山小ブロックを含む黒色シルト(自然)
SK774	S3南	隅丸長方形	逆台形	2.3×0.8	39		③類　1層－地山小ブロックを含む黒色シルト、2層－地山ブロックを多く含む褐色粘質シルト(人為)
SK776	S3南	楕円形	逆台形	1.3×0.8	60		⑤類　1層－地山土粒を少し含む黒色シルト、2層－地山砂を含む褐色砂質シルト(自然)
SK777	S3	楕状	U字形	2.0×0.3	54		①類　1層－地山土粒・地山ブロックを含む黒・褐色シルト(自然)
SK778	T1	隅丸長方形	箱形	1.9×0.9	19		③類　1層－地山土粒を含む黒色砂質シルト、2層－地山ブロックを多量に含む褐色砂質シルト(人為)
SK779	T1	隅丸長方形	箱形	1.9×0.7	15		④類　上層－地山土粒を少し含む黒色砂質シルト、下層－地山ブロックを含む褐色砂質シルト(人為)
SK780	T1	楕状	U字形	2.2以上×0.3	66		①類　地山土粒・地山ブロックを含む黒・褐色シルト(自然)
SK781	T1	隅丸長方形	箱形	1.8×0.9	27		③類　1層－地山土粒を含む黒色砂質シルト、2層－地山土主体の褐色粘土(人為)
SK782	T1	隅丸長方形	平行四辺形	1.8×0.9	37		④類　上層－地山ブロックを含む暗褐・黒色砂質シルト、下層－地山土主体の褐色粘土(人為)
SK786	T1	楕円形	浅鍋形	1.2×0.5	8		③類　地山土粒・地山ブロックを含む黒色砂質シルト(人為)
SK805	U1	楕円形	皿状	1.8×0.5以上	36		黒褐色シルト主体
SK806	U1	楕円形	皿状	1.3×1.0	17	SD819、SK808→SK806	1層－黒色シルト、2層－褐灰色シルト(自然)
SK807	U1	楕円形	皿状	1.3×1.1	17	SK809→SK807	黒色シルト主体(自然)
SK808	U1	楕円形	皿状	1.1×0.4以上	13	SK808→SK666	地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK809	U1	楕円形	皿状	1.0×0.9	21	SK809→SK807	黒色シルト(自然)
SK813	U1	楕円形	箱形	1.0×0.7	30		黒色シルト主体
SK814	U1	楕円形	皿状	1.2×0.7以上	21		黒色シルト主体
SK815	U1	隅丸長方形	箱形	1.4×1.3	35	SD819、SK816→SK815→SD810	地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK816	U1	不整長方形	箱形	1.5×1.1	12	SD819→SK816→SK815→SD810	地山ブロックを含む暗褐色シルト主体
SK820	U1	不整楕円形	皿状	1.7×0.9	12		地山ブロックと焼土粒を含む黒色シルト(人為)
SK821	U1	隅丸長方形	箱形	0.9×0.5	19		黒褐色シルト主体
SK850	U1	楕円形	皿状	0.7×0.2以上	6		黒色シルト主体
SK822	U2	楕円形	皿状	1.1×0.6以上	30		地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK823	U2	楕円形	逆台形	1.9×1.6	50	SK824・828→SK823	地山小ブロックや焼土粒を少し含む黒色・黒褐色シルト、暗褐色シルト質砂(自然)
SK824	U2	楕円形	皿状	2.9×1.2以上	9	SK825→SK824→SK828・823	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SK825	U2	楕円形	皿状	1.6×1.2	20	SK826・1074→SK825→SK824	1層－黒色シルト、2層－地山小ブロックを含む黒褐色シルト(自然)
SK826	U2	楕円形	皿状	2.2×1.2以上	9	SK826→SK1074→SK825・827	黒褐色シルト(自然)
SK827	U2	楕円形	皿状	1.6×1.3	36	SK826・1073→SK827	1・2層－黒・黒褐色シルト、3・4層－灰黄褐・にぶい黄色砂質シルト(自然)
SK828	U2	楕円形	皿状	1.8×1.4	55	SK824・829→SK828→SK823	黄褐色砂質シルト(人為)
SK829	U2	不整楕円形	皿状	2.4×1.2以上	24	SK829→SD1068、SK828	褐灰色シルト主体
SK830	U2	楕円形	皿状	2.1×0.9以上	60		地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK835	U2	楕円形	皿状	1.5×1.2以上	57	SK869・1075→SK835	黒色シルト主体(自然)
SK838	U2	楕円形	皿状	1.6×1.5	17		黒色シルト(自然)
SK845	U2	隅丸長方形	皿状	2.4×1.9	32		1層－地山小ブロック・焼土粒を含む黒色シルト、2層－灰黄褐色シルト(自然)
SK846	U2	楕円形	皿状	1.0×1.0以上	36		黒色シルト(自然)
SK847	U2	楕円形	皿状	1.5×1.0	36	SK848→SK847	1層－黒色シルト、2層－灰色砂質シルト(自然)
SK848	U2	楕円形	皿状	1.5×0.4	38	SK848→SK847	1層－黒色砂質シルト、2層－暗灰黄色シルト質砂(自然)
SK851	U2	楕円形	皿状	1.5×1.5	22	SK851→SK852・1081	黒色シルト主体(自然)

主要土壙属性表 4

遺構名	区	平面形	断面形	規模(長軸×短軸m)	深さ(cm)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SK852	U2	楕円形	皿状	1.7×1.0	28	SK851→SK852→SK1076	黒色シルト主体
SK856	U2	楕円形	皿状	1.1×1.0	30	SK1075→SK856	地山ブロックを含む暗褐・にぶい黄褐色シルト
SK869	U2	楕円形	皿状	1.1×0.9以上	60	SK869→SK835	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SK870	U2	楕円形	皿状	0.4×0.4	8		地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK878	U2	楕円形	皿状	0.7×1.7	12	SI841・843→SK878	炭・焼土粒・地山ブロックを含む褐灰色シルト(人為)
SK883	U2	円形	皿状	0.6×0.6	10	SK1078→SK883	黒色シルト主体(自然)
SK1070	U2	楕円形	皿状	0.8×0.8	33		黒色シルト主体
SK1071	U2	楕円形	皿状	1.1×0.8	16	SK1071→SD1067	黒色シルト主体
SK1072	U2	溝状	皿状	1.6×0.5	15		黒色シルト主体(自然)
SK1073	U2	楕円形	皿状	0.6×0.5	21	SK1073→SK827	黒色シルト主体(自然)
SK1074	U2	楕円形	箱形	1.2×0.4	29	SK826→SK1074→SK825	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK1075	U2	不整楕円形	皿状	1.1×1.3	18	SK1075→SK835・856	黒褐色シルト主体(自然)
SK1076	U2	隅丸長方形	皿状	0.8×0.5	22	SK852→SK1076	黒色シルト主体
SK1077	U2	楕円形	皿状	0.5×0.5	18		黒色シルト主体
SK1078	U2	楕円形	皿状	0.7×0.6以上	12	SK1078→SK883	黒色シルト主体
SK1079	U2	楕円形	皿状	0.6×0.5	9		黒褐色シルト主体
SK1080	U2	方形	皿状	0.7×0.4以上	6		黒褐色シルト主体
SK1081	U2	不整楕円形	皿状	0.9×0.6	24	SK851→SK1081	褐灰色シルト主体
SK1082	U2	不整楕円形	皿状	1.2×0.4以上	15		黒色シルト主体
SK1083	U2	不整楕円形	皿状	1.7×0.4以上	19		黒色シルト主体
SK1084	U2	不整楕円形	皿状	0.7×0.6	5		黒色シルト主体(自然)
SK1085	U2	不整楕円形	皿状	1.8×1.3	12		黒色シルト(自然)
SK1086	U2	不整楕円形	皿状	1.7×1.3以上	45		黒色シルト主体
SK857	U3	楕円形		1.0×0.8			黒色シルト主体
SK1089	U3	不整楕円形		1.0×0.6以上			黒色シルト主体
SK1090	U3	不整楕円形		0.9×0.7以上			黒色シルト主体
SK1091	U3	不整楕円形		1.0×1.4以上			黒色シルト主体
SK1092	U3	不整楕円形		1.6×1.6以上			黒色シルト主体
SK1093	U3	不整楕円形		0.8×1.0以上		SK1093→SK1084	黒色シルト主体
SK1094	U3	不整楕円形		0.5×0.8以上		SK1093→SK1094	黒色シルト主体
SK1095	U3	不整楕円形		2.9×0.5以上			黒色シルト主体
SK1096	U3	不整楕円形		3.2×2.5以上		SD860→SK1096→SD861	黒色シルト主体
SK1097	U3	不整楕円形		0.9×0.6以上			黒色シルト主体
SK1098	U3	不整楕円形		1.8×0.7		SD860→SK1098	黒色シルト主体
SK1103	V1	不整長方形		2.1×1.3		SK1103→SD1101	黒色シルト主体
SK866	V2	不整楕円形	皿状	1.5×1.0	23		黒色シルト主体
SK867	V2	円形	箱形	径2.3	50	SD1106→SK867	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK872	V2	円形	擂鉢状	径3.4	130	SK1112→SK872	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SK873	V2	不整方形	皿状	1.6×1.1	43		黒色シルト主体
SK874	V2	隅丸長方形	箱形	1.4×0.6	82		地山ブロックを多く含むにぶい黄褐・黒褐色シルト(人為)
SK875	V2	隅丸長方形	U字形	1.2×0.6	42		地山ブロックを多く含む黒色・暗褐色シルト(人為)
SK876	V2	隅丸長方形	箱形	1.2×0.6	76		地山ブロックを多く含む黒色・黒褐色灰オリーブシルト(人為)
SK877	V2	隅丸長方形	皿状	2.0以上×1.0以上	11		黒色シルト主体
SK893	V2	隅丸長方形	箱形	1.1×0.6	38		地山ブロックを多く含む黒色・黒褐色シルト(人為)
SK906	V2	楕円形	箱形	0.7×0.6	22	SI868→SK1→SK906	地山ブロック・炭粒・土器片を多く含む黒褐色粘土質シルトや褐色粘土(人為)
SK909	V2	楕円形	擂鉢状	1.0×0.8	40		地山ブロック・炭粒・土器片を多く含む黒褐色シルト(人為)
SK910	V2	楕円形	擂鉢状	0.9×0.8	36		地山ブロック・炭粒・土器片を多く含む黄褐色シルトや褐色砂質シルト(人為)
SK911	V2	不整楕円形	擂鉢状	0.9×0.7	27		地山ブロック・炭粒・土器片を多く含む黒褐色シルトや褐色砂質シルト(人為)
SK912	V2	楕円形	擂鉢状	0.7×0.6	19		地山ブロック・炭粒・土器片を多く含む黒褐色シルトや褐色砂質シルト(人為)
SK1111	V2	楕円形	皿状	0.8×0.6	23	SB1104・1105→SK1111	黒色シルト主体
SK1112	V2	不明	皿状	1.0以上×0.3以上	16	SK1112→SK872	黒色シルト主体
SK1113	V2	不整方形	段付皿状	1.5×1.3以上	34		黒色シルト主体
SK1114	V2	円形	擂鉢状	径0.4	45		地山小ブロックを含む褐色砂質シルト(人為)
SK882	V3	楕円形	皿状	1.7×1.1	30	SK889→SD881→SK882	地山ブロックを少し含む黒色シルト(人為)
SK889	V3	不整楕円形	皿状	3.5×1.6以上	22	SK890→SK889→SD881→SK882	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK890	V3	溝状	皿状	4.0以上×1.0	14	SI880－SK890→SK889→SD881	地山ブロックを含む黒褐色シルト
SK891	V3	不整形		1.4×1.2		SD925→SK891→SD923	黒色シルト主体
SK907	V3	楕円形	擂鉢状	0.8×0.7	20	SI879→SK907	地山ブロック・焼土粒・炭粒を多く含む黒褐色砂質シルト(人為)
SK908	V3	楕円形	皿状	0.9以上×0.8以上	25	SI879→SK906	地山ブロック・焼土粒・炭粒を含む黒褐色砂質シルト(人為)
SK914	V3	不明	皿状	2.2以上×0.8以上	35	SB917、SD881→SK914	黒色シルト主体
SK915	V3	楕円形	皿状	1.3×1.2	6	SB918→SK915	黒色シルト主体
SK1116	V3	不整形	皿状	1.2×0.8	5	SD913→SK1116	黒色シルト主体
SK1117	V3	隅丸長方形	皿状	0.8×0.3	19	SD1115→SK1117	黒色シルト主体
SK1118	V3	隅丸長方形	箱形	1.0×0.6	39	SB922、SK1118→SD892	黒色シルト主体
SK930	V4	楕円形	皿状	1.6×1.1	21	SK930→SD684	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK931	V4	楕円形	皿状	1.4×0.9	27	SK931→SD928、SK933	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK932	V4	楕円形	皿状	1.9×0.6	22	SK934→SK932→SD684	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK933	V4	方形	皿状	1.1×0.8	58	SK931→SK933→SD927	地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK938	V4	楕円形	皿状	0.7×0.6	11	SK938→SK939	地山ブロックを含む暗灰黄粘土質シルト(人為)
SK939	V4	楕円形	皿状	1.5×0.9	38	SK938、SD998→SK939	地山ブロックを多く含む黒色シルト (人為)
SK942	V4	楕円形	皿状	1.0×0.9	33	SK943・940→SK942	地山ブロックを含む黒褐色シルト(人為)
SK943	V4	不整楕円形	皿状	1.9×1.6	30	SK943→SK942、SK1140	地山ブロックを多く含む黒色シルト(人為)
SK951	V4	楕円形	U字形	1.2×0.8	33		1層－地山ブロックを含む黒色シルト、2層－地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルト(人為)
SK952	V4	不整楕円形	逆台形	2.2×1.8	22		1層－地山ブロックを含む黒褐色シルト、2層－地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルト(人為)
SK972	V4	不整方形	皿状	3.0以上×2.8以上	17	SK972→SD971	黒褐色シルト主体
SK973	V4	楕円形	皿状	2.7×1.9	56	SD682→SK973→SD971	地山ブロックを多く含む暗褐・にぶい黄褐・黄褐色シルト(人為)
SK976	V4	不整方形	箱形	2.6×1.5以上	38	SB987→SK976→SD892	黒褐色シルト主体(自然)
SK979	V4	楕円形	皿状	1.4以上×0.6以上	9		黒色シルト主体
SK981	V4	不整楕円形	皿状	3.1×3.0	60	SK1158→SK981→SI985、SK984	地山ブロックを多く含む黒・黒褐色シルト(人為)
SK982	V4	楕円形	逆台形	3.5×1.3以上	44	SK982→SK988	地山ブロックを含む黒色シルト(人為)

主要土壙属性表５

遺構名	区	平面形	断面形	規模(長軸×短軸m)	深さ(cm)	重 複 関 係	堆積土などその他の特徴
SK984	V4	楕丸長方形	皿状	1.3×0.9	13	SK981・987・1158 → SK984	白色粘土ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SK987	V4	隅丸長方形	逆台形	1.6×0.9以上	51	SK987 → SK989・1158 → SK984	黒色シルト主体
SK988	V4	不整形	逆台形	2.7×1.3以上	33	SK982・989 → SK988 → SK1158	地山土と白色粘土をブロック状に含む黒色シルト(人為)
SK989	V4	方形	逆台形	1.4以上×1.3以上	28	SK867 → SK989 → SK988	黒色シルト主体
SK991	V4	隅丸長方形	皿状	0.8×0.5	7	SK986 → SK991	黒色シルト主体
SK992	V4	溝状	皿状	2.5以上×0.3以上	1	SK992 → SD892	黒褐色砂質シルト主体
SK993	V4	楕円形	皿状	0.7×0.5	16	SK993 → SD892	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SK994	V4	不整方形	皿状	1.0×0.8	29	SK985 → SK994	地山ブロックを含む黒色シルト(人為)
SK995	V4	楕円形	皿状	0.9以上×0.7以上	44	SK995 → SD925	黒色シルト主体
SK996	V4	楕円形	皿状	0.5以上×0.4以上	12	SK996 → SD975	黒色シルト主体
SK1119	V4	楕円形	皿状	1.3×0.3	17	SK1119 → SD975	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SK1120	V4	不整方形	皿状	1.7×0.9	9	SK1121 → SK1120 → SD975	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SK1158	V4	隅丸長方形	逆台形	2.2×1.3	58	SK987・988 → SK1158 → SK981・984	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(人為)
SK901	V5	楕円形		0.7以上×0.8		SD896 → SD895 → SK901	黒色シルト主体
SK902	V5	楕円形		0.7以上×0.7		SK903 → SK902	黒色シルト主体
SK903	V5	楕円形		0.5以上×0.8		SK903 → SK902	黒褐色シルト主体
SK904	V5	楕円形		0.8以上×1.0			黒色シルト主体
SK905	V5	楕円形		0.7×0.5			黒色シルト主体

第四章　大崎窯跡の確認調査

Ⅰ．発見された遺構と遺物

窯は廃窯後の幾度かの開田によって完全に削平されており、畦や水路に多量に散乱する破片や窯道具によってのみその存在が知られていた。今回、近世以降の遺構として、窯跡１基、溝、土壙多数、井戸跡２基などを検出した。しかし調査の性格上平面を確認したにとどまり、掘り下げ等の精査は行っていないため詳細は不明である。また、遺物のほとんどは、開田時に形成された、窯跡周辺に分布する焼土、窯壁破片、窯道具、陶器破片などを多量に含む二次堆積土中から出土している。したがって遺物の記述は、その中から器形、器種などを推定できるもののみ抽出して行った。

【SR01 窯跡】

燃焼室を確認した。平面形は半円形を呈し、最大幅は奥壁の部分で3.75m、奥行きは1.3m である。外壁及び焼成室との間の奥壁は長さ24～27cm、幅15～20cmの煉瓦で構築されている。煉瓦の厚さは上部が削平されているため不明であるが残存高で最大約20cmである。煉瓦は深さ約15cmの掘方の上に積み上げられており、外壁の煉瓦の隙間には黄褐色の粘土が詰められている。外壁の中央には煉瓦の途切れる部分が認められ焚き口と推定される。推定される焚き口の幅は最大60cmである。焚き口と外壁付近には焼けて硬く締まった床面が残存しており、床面には暗緑灰色のシルト質砂の土が６cm程の厚さで敷き詰められている。燃焼室や焼成室など窯の上部構造は全く不明であり、周囲からは覆い屋などの存在を示す柱穴なども検出されなかった。

出土遺物

今回、窯跡及び付近から出土したものは、素焼き段階のものも含めた多量の陶器、磁器、瓦質土器、土器、窯道具、窯壁、土製品等の近世以降のものの他に、土師器や須恵器などの古代の遺物がある。ここでは近世以降の遺物について説明する。

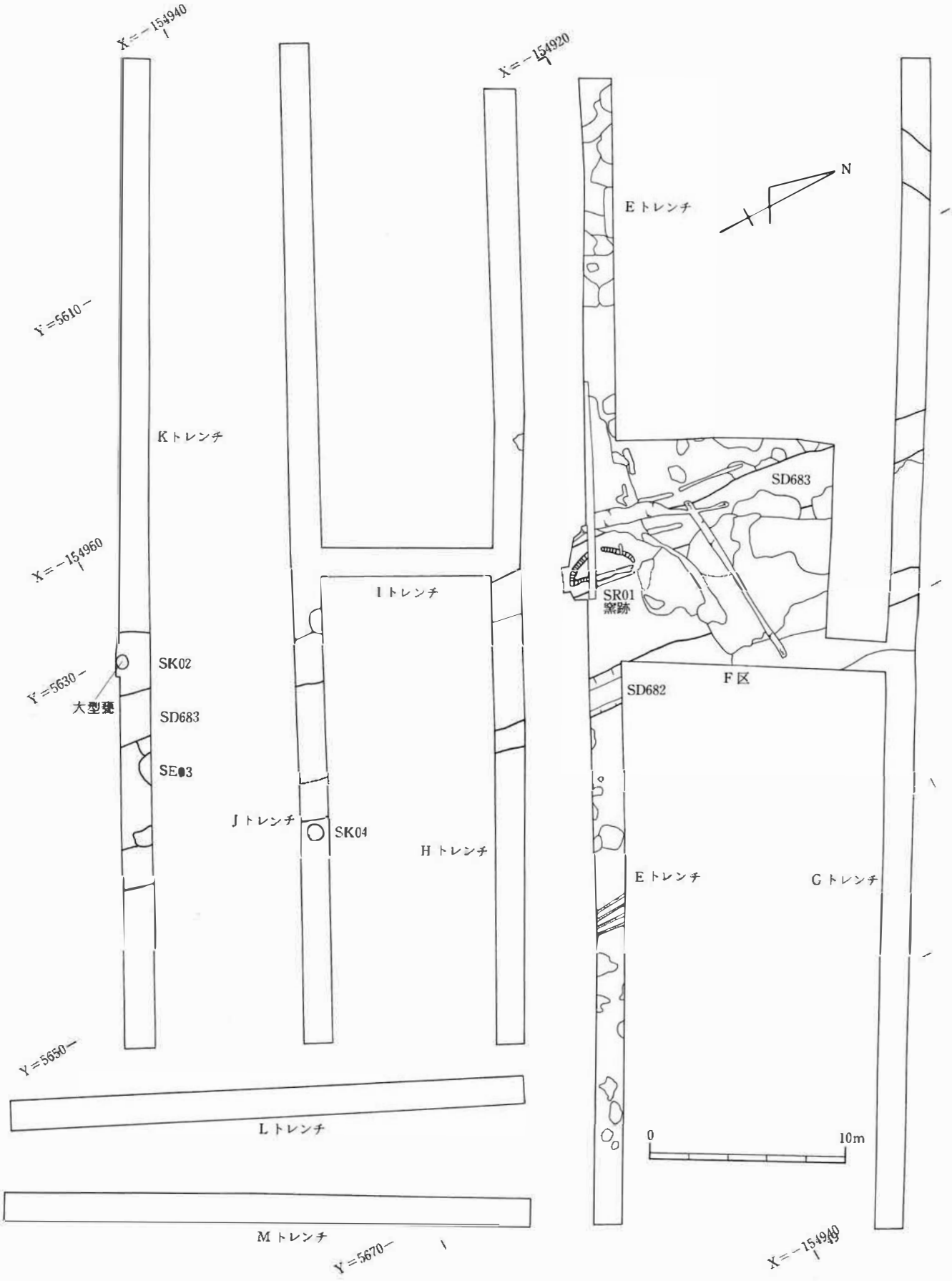
本窯では陶器および土器が生産されているが、出土した陶器には搬入されて使用されたものもある。磁器や搬入品であることが明らかな陶器については別に記述した。

【生産された陶器類】（第47・48図）

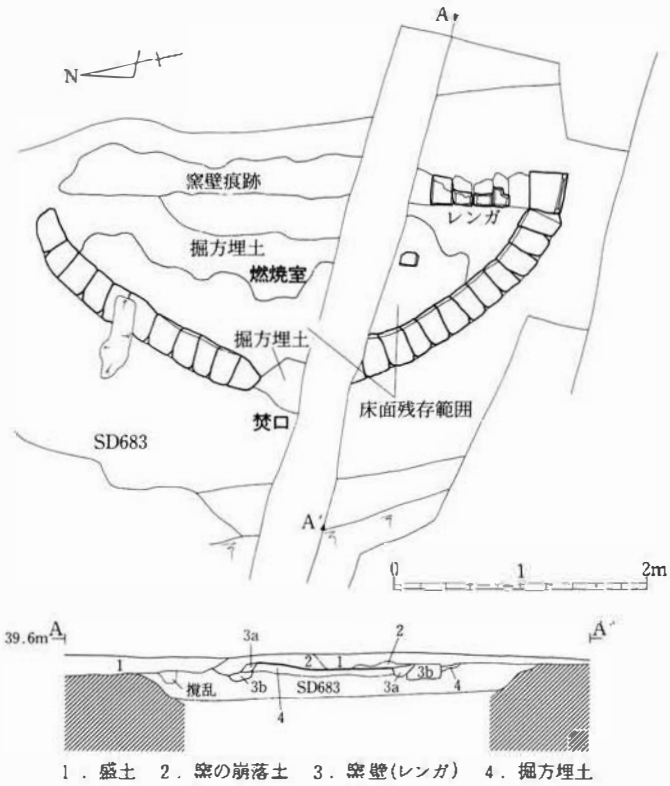
皿類（高台付丸皿、灯明皿、盤）、椀類（椀、小坏、仏飯器）、鉢類（高台付鉢、捏鉢、片口、香炉、火入れ？、火鉢、焜炉、蚊遣りもしくは風炉、植木鉢、すり鉢）、甕類（甕、切立）、鍋類（土鍋、焙烙）、瓶類(徳利、油壷)、水注類(土瓶)、お歯黒壷？、蓋、湯通し、卸金、瓦、土管などが出土した。

皿には高台付丸皿と灯明皿、盤がある。高台付丸皿は口径13cm以下の小皿だけである。内面に白釉の流し掛けによる文様が描かれたものや陶胎磁器で染付文様の認められるものもある。灯明皿は高台が付き体部下部で屈曲するものには鉄釉が施され、平底で体部が内湾するものは素焼きもしくは瓦質である。盤は破片で全体形は不明であるが、外側に「切込土半□」のヘラ書き文字がある。

７は端反り口縁の椀、９は丸形の小坏で片口状の刻みをもつ。



第45図　大崎窯跡確認トレンチ平面図



第46図　SR01 窯跡平面図・断面図

高台付鉢には(Ⅰ)口径20cm以上の大鉢、(II)口径20cm前後の中鉢、(III)口径15cm前後の小鉢がある。大鉢は捏鉢も含む。片口は(Ⅰ)口径15cm以上の大型品、(II)口径15cm前後の中型品、(III)口径12cm前後の小型品がある。火鉢は素焼きで、松竹梅が型押しによって表現されている。一部浮彫部分が剝がれている。15の焜炉は素焼きで内面に煤が付着し、使用されていたことが分かる。瓦質の焜炉の破片も認められる。また、蚊遣りもしくは風炉と推定される、素焼きで非常に脆い破片も出土している。植木鉢は口径20cm、高さ15cmほどで底部中央に孔が開けられ、口縁内部から体部外面にかけて鉄釉が施される。すり鉢は(Ⅰ)口径40cm以上の大型品と(II)口径30cm強の小型品がある。Ⅰは口唇部直下に二条、IIは一条の粘土紐を貼り付けている。

甕には（Ⅰ）口径40cm以上の大甕、(II) 口径25cm前後の中甕、(III) 口径12〜18cmの小甕、(IV) 口径5cmの極小甕がある。多くは頸部をもたないが、21のように口縁部直下が直立して頸部の認められるものがある。また、体部の膨らみの強い球胴形を呈するもの (19) があり、ケズリ出しの高台をもつ。極小型甕を除いて白釉が施される。4号土壙から直立して発見された大甕は、高さ70cmで素焼きである。内面に付着物が認められ、使用されていた可能性がある。切立は高台を持ち、甕と同様に大・中・小があり、大にはタガを模した隆帯を数重巡らせたものも認められる。

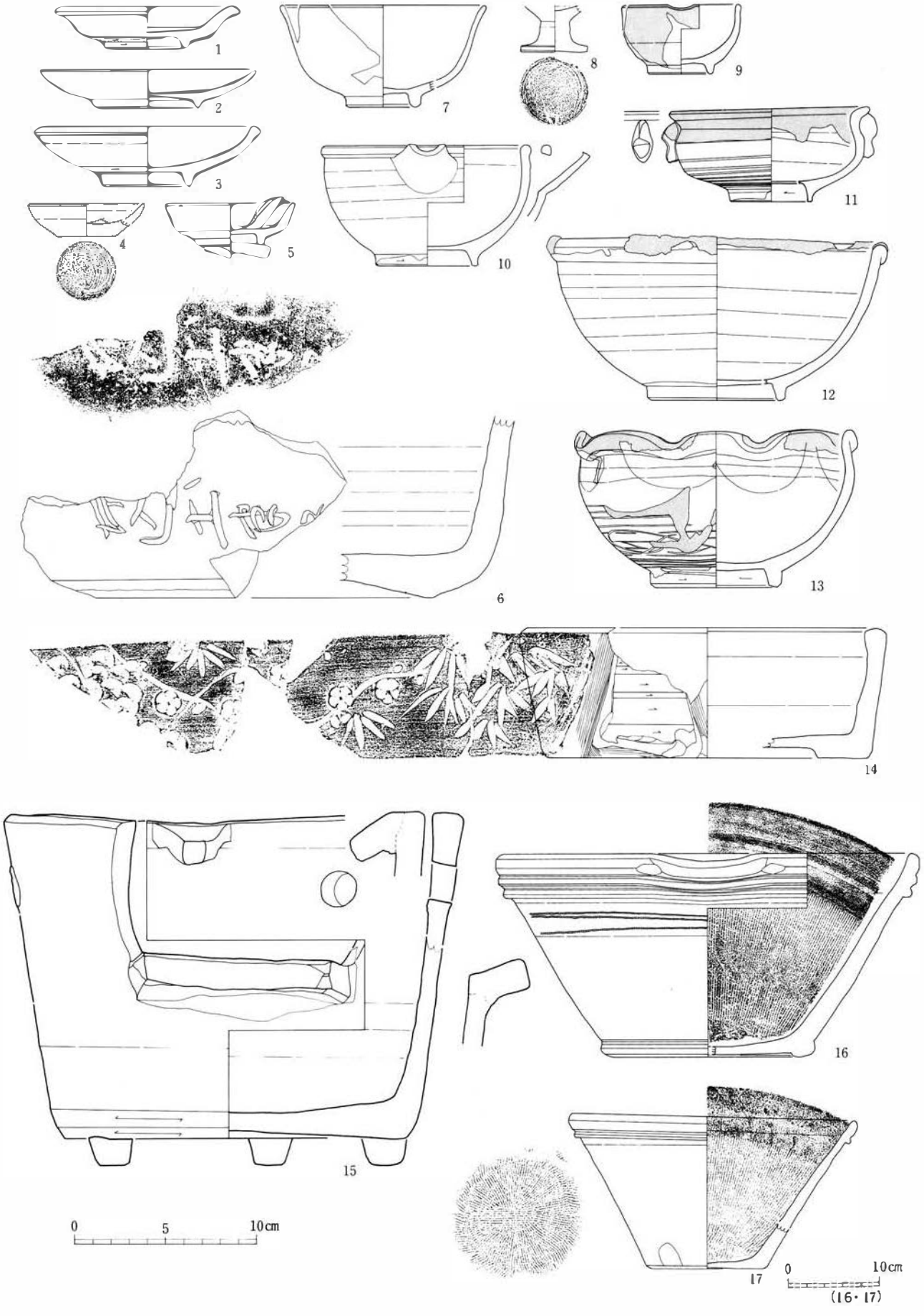
土鍋には、外面の無釉部に煤が付着する使用痕跡が明確なものがかなりの割合で認められる。焙烙には明茶色の飴釉が施されている（写真図版13−15・16)。

徳利には飛鉋文の施されるものと白釉で装飾されるものなどがある。前者は32の他に肩の張るタイプも認められる(写真図版11−2)。後者は全体が復元できるものがないため詳細は不明であるが、28のような注口部は体部に注口をもつ注口付徳利に伴う可能性がある。この他、体部が一部へこむ、いわゆるへそ徳利などがある。また素焼きの、膨らみをもつ急須？の把手も出土している。

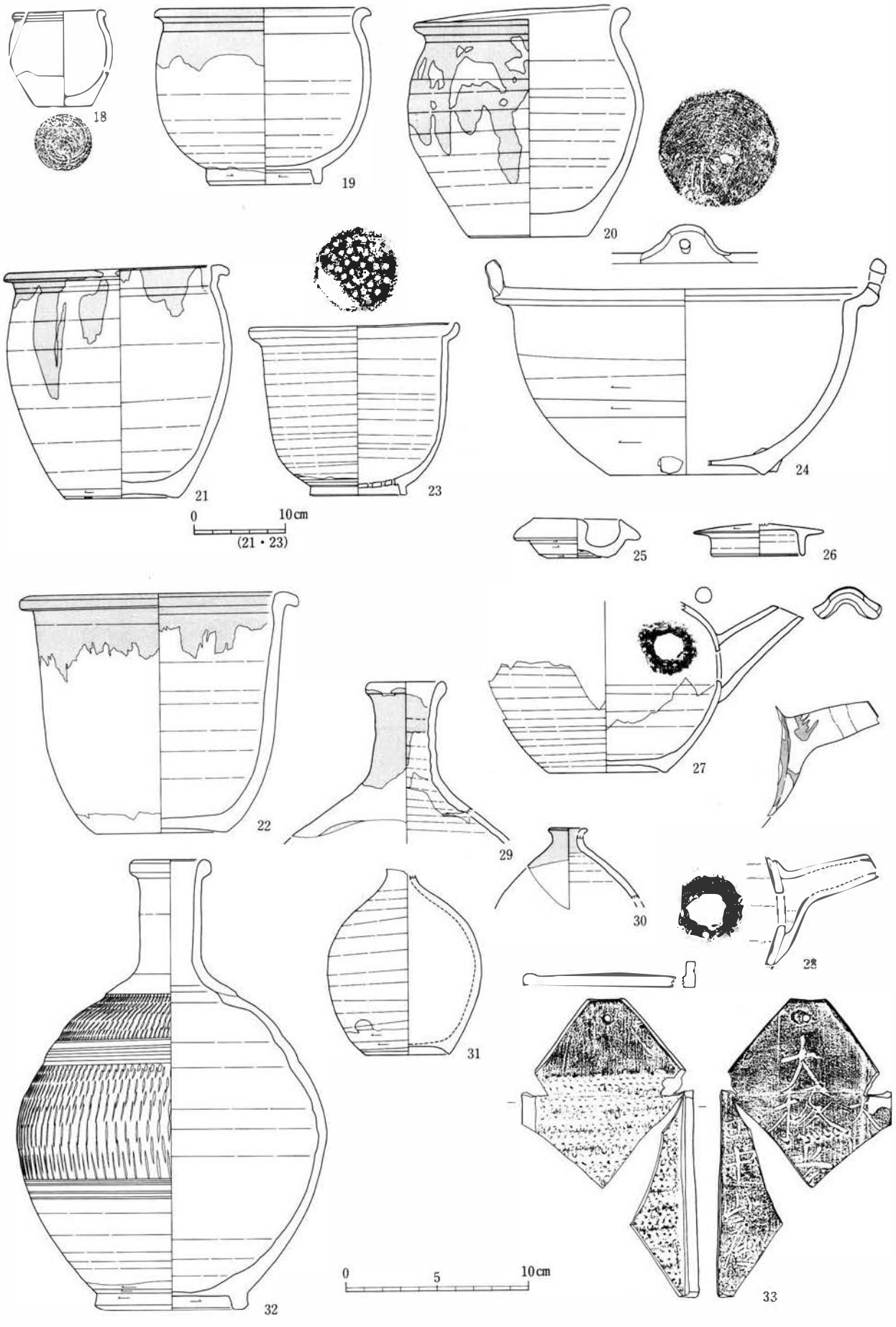
蓋類は土瓶類の蓋（25・26）の他に、中型の甕（写真図版11−2）や壺の蓋、飛鉋文の施された小型の蓋物蓋も出土している。

卸金は、頂部を除いて全面に櫛状工具によって棘状の卸面が作出され、裏面に「大極上□」「田中山□（荘ヵ)」「大□」のヘラ書き文字がある。

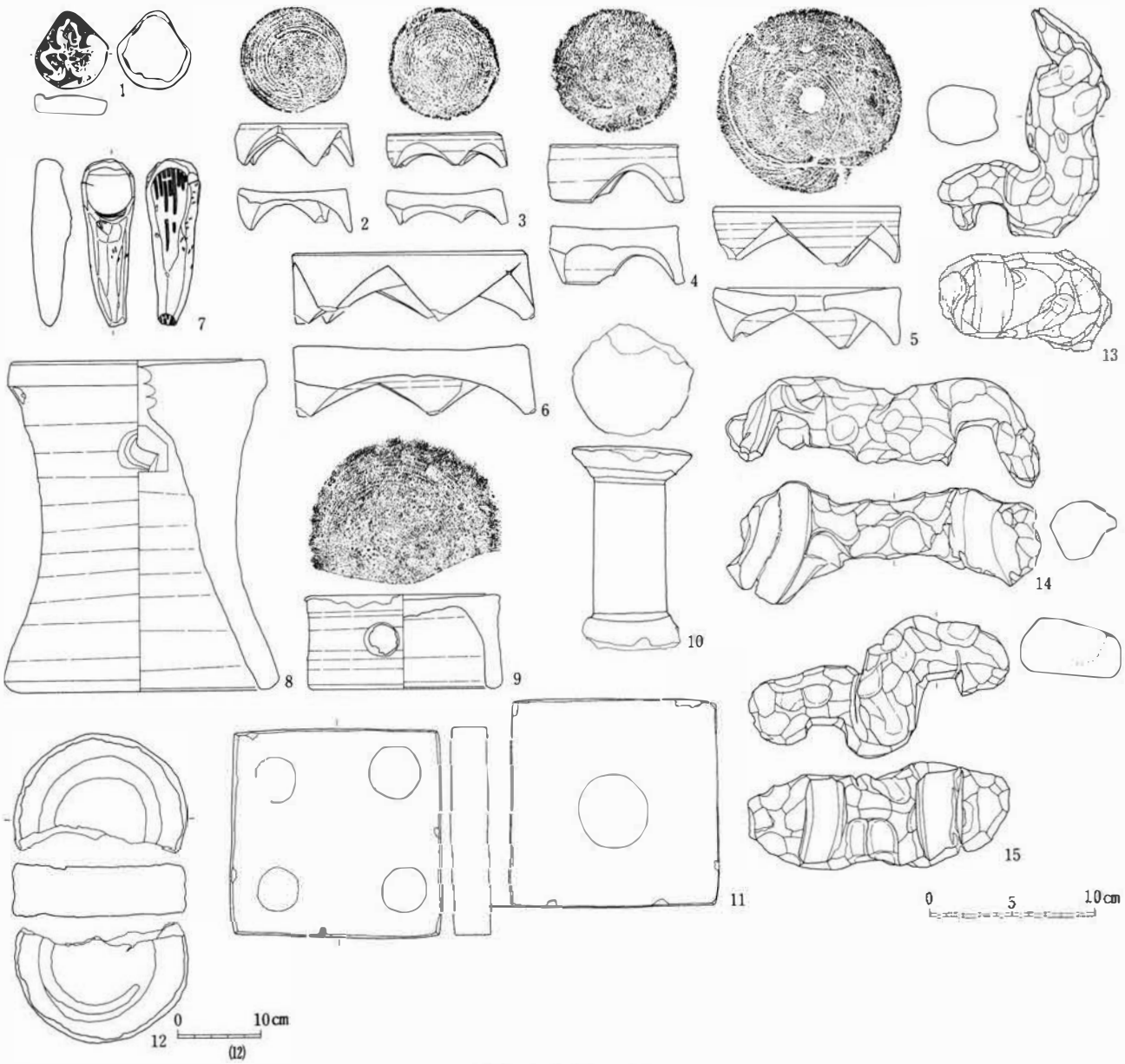
この他、湯通しの底部には径5mm程の棒状工具で不規則に40個余りの孔が内面側から開けられ、底部外面にも鉄釉が施されている。また、素焼きと鉄釉の施された土管（写真図版14−5・7）や鉄釉の施された桟瓦（写真図版14−6）が出土している。



第47図　出土陶器 (1)



第48図　出土陶器 (2)



第49図　出土窯道具

【窯道具】（第49図）

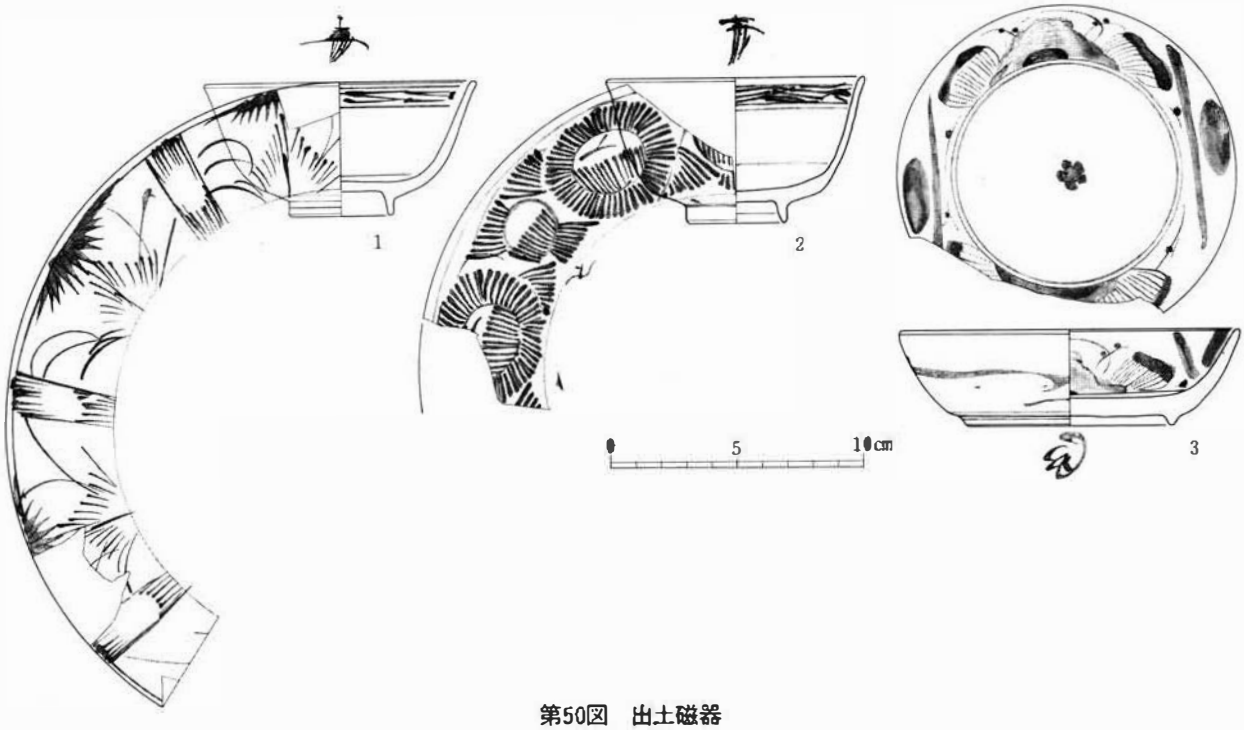
［型］

木の桑文を施すための押し型（1）と恵比寿の後ろ半分の原型（写真図版14－4）が出土している。いずれも素焼きである。

［焼き台］

A類：円形の台に3～6つの脚がつくもので、a：中央に穴の開くもの（5）とb：ないもの（2・3・4・6）がある。桔梗形、梅花などと呼ばれる。脚の数でⅠ：3脚　Ⅱ：5脚　Ⅲ：6脚に分類できる。Ⅱが圧倒的に多く、その中でもaが7割を占める。脚を作り出すための抉りは直線と曲線があり、前者が多い。直径は数の多いⅡで見ると、大型…①15cm以上、②14cm、③11cm、中型…④9.5cm、⑤8.5cm、⑥7cm、小型…⑦6cm、⑧5cmに分類できる。

B類：円筒形のもの。上面もしくは側面に孔をもつものや上面に放射状の溝がつくものがある。Ⅰ：直



第50図　出土磁器

径18～20cmのもの（8）とII：12cm前後のもの（9）がある。Iは高さ9～20cmと幅があり、体部の中央が内湾し下部が広がる。IIは高さ6cmで体部が直立する。

C類：中実の円筒状のもの。いわゆるトチンと呼ばれるものである。両端が円盤状を呈する。高さ21cm、直径11cm前後のものと高さ12cm、直径7cm前後のもの（10）がある。

D類：方形板状のもの。12cm四方で厚さ2cmのもの（11）と14cm以上四方で厚さ3.3cmの大型のものがある。本類と次に記すE類はいわゆるサヤと呼ばれるものである。

E類：円板状のもの。I：直径20～22cm、厚さ6cmの厚手のもの(12)、II：直径16～20cm、厚さ2～4cmで中央に孔の開き、放射状に3本の溝がつくもの、III：手づくねで作られた直径8～10cm、厚さ1cmの薄手のドーナッツ状を呈するものがある。

F類：製品の破片を転用したもの。高台痕跡と焼成室床面に敷かれた砂が付着していることで認識できる。片口もしくは鉢の口縁部破片を利用したものが多く、底部破片を利用したものも僅かにある。

G類：籾入りの、一端がすぼまる棒状のもの（7）。長さは8～11cmである。

その他：籾入りの「C」字状の扁平なものや断面が台形を呈する楕円形（？）の破片などがある。

［その他］

H類：長さ10～20cm、直径3～5cmの棒状製品のI：一端（13）もしくはII：両端に「コ」字状の抉りの入るもの。手づくねで作られた痕跡が明瞭である。IIはさらにa：両端の「コ」字状部が水平なもの（14）とb：段差があるもの（15）に分けられる。

【その他】

［磁器］（第50図）

瀬戸・美濃系、肥前系、在地産の茶碗や皿が出土している。いずれも18世紀後半から近代のものである。

第2表　陶器観察表

番号	器類	器種	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　　　徴	登録	写真図版
1	皿類	小皿	Jトレンチ	10.2	4.6	2.4	鉄釉 外内面：ロクロ 削出し高台　内面に白釉で模様あり 底部にひび割れ	9	12－5
2	皿類	小皿		12.0	5.8	2.1	鉄釉 外内面:ロクロ　削出し高台 外面に籾殻付着　内面に五脚の桔梗台痕跡 ゆがみ潰し	6	11－2
3	皿類	小皿	SK02	(12.5)	(5.0)	3.3	鉄釉 外内面：ロクロ 削出し高台	3	12－1
4	皿類	灯明皿	Lトレンチ	(6.4)	3.2	1.8	素焼き 外内面：ロクロ 底部回転糸切り 芯欠損	16	11－1
5	皿類	灯明皿	Lトレンチ	7.2	3.8	2.4	鉄釉外内面：ロクロ 削出し高台　底部に鉢?の破片の焼き台付着	11	12－2
6	皿類	盤	Kトレンチ	—	—	(10.4)	鉄釉 外内面：ロクロ 底部無釉 内面に桔梗台痕跡 表面にヘラ書き文字 「切込土半□」	84	12－7
7	埦類	埦		(11.4)	4.2	5.6	鉄釉 外内面：ロクロ 削出し高台	1	12－3
8	埦類	仏飯器	Lトレンチ	—	3.7	(2.6)	素焼き 外内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	83	11－1
9	埦類	小坏	Jトレンチ	6.6	3.6	3.8	鉄釉・白釉 外内面：ロクロ 口縁に片口状の刻み有り 削出し高台 底部にひび割れ	18	12－4
10	鉢類	片口	表採	11.6	5.7	6.7	鉄釉 外内面：ロクロ 削出し高台底部にひび割れ	28	13－1
11	鉢類	香炉	SK04	11.1	4.5	5.3	鉄釉・白釉 外面：ロクロ 内面：ロクロ→ナデ 削出し高台 内面無釉	72	13－3
12	鉢類	中鉢	SK02	18.7	7.6	9.0	鉄釉・白釉 外内面：ロクロ 口縁部折り曲げ 削出し高台 釉の発色不良 内面に五脚の桔梗台痕跡	20	11－3
13	鉢類	中鉢	SK02	(15.6)	(7.2)	8.7	鉄釉・白釉 外内面：ロクロ 口縁部折り曲げ 削出し高台 内面に五脚の桔梗台痕跡 [illegible]・膨らみあり	30	13－4
14	鉢類	火鉢	Lトレンチ	(19.6)	(17.6)	7.2	素焼き 外面：ロクロ→回転ヘラケズリ 内面：ロクロ→ナデ [illegible] 削出し高台	70	13－7
15	鉢類	焜炉	SK04	25.4	18.8	19.5	素焼き 外内面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ→ロクロナデ 口縁内側に突起3つ その間に円孔2対 三足 外内面に一部釉付着	69	13－6
16	鉢類	すり鉢	Jトレンチ	46.6	23.6	22.5	素焼き 外内面：ロクロ 体部上部に [illegible] 内面に使用による摩耗あり	33	13－17
17	鉢類	すり鉢	Jトレンチ	(31.8)	12.2	16.9	鉄釉 外内面：ロクロ　底部：手持ちケズリ 外面に6ヶ所の焼き台痕跡	35	11－4
18	壺類	極小壺	Kトレンチ	(5.1)	3.1	5.2	鉄釉外面：ロクロナデ 内面：ロクロ 底部：回転糸切り 体部にひび割れ	55	11－1
19	壺類	小壺	EFトレンチ	11.8	6.0	9.7	鉄釉・白釉 外内面：ロクロ 削出し高台 内面に五脚の桔梗台痕跡	54	13－8
20	壺類	小壺	SK02	11.9	6.6	12.7	鉄釉（全面）→白釉（内面～外面上半） 外面：ロクロ、回転ケズリ 底部：回転糸切り [illegible]	53	13－9
21	壺類	中壺	Jトレンチ	24.6	12.3	25.1	鉄釉（全面）・白釉（口縁部・内面底部） 外面：ロクロ、回転ケズリ 内面：ロクロ 内面に五脚の桔梗台痕跡	46	13－10
22	壺類	切立	Jトレンチ	13.3	15.4	7.2	鉄釉・白釉 外面：ロクロ、ナデ 内面：ロクロ 底部：回転糸切り→ナデ 内面に五脚の [illegible]	67	13－11
23	その他	湯通し	SK04	23.1	10.6	18.9	[illegible] 外面：ロクロ、回転ケズリ 内面：ロクロ 底部：削出し高台 高台内側無釉 内面に五脚の [illegible]	71	13－19
24	鍋類	土鍋	Jトレンチ	21.9	8.5	11.9	[illegible] 外面：ロクロ、回転ケズリ 内面：ロクロ 底部：削出し 外面体部下半以下無釉で [illegible] 内面に五脚の桔梗台痕跡	38	13－12
25	香類	蓋	Lトレンチ	—	3.4	2.2	鉄釉 外面：ロクロ、回転ケズリ 内面：ロクロ	77	11－1
26	蓋類	蓋	SK02	7.1	—	(1.8)	素焼き 上面：回転ケズリ 下面：ロクロナデ つまみ部欠損	87	11－1
27	水注類	土瓶	Jトレンチ	—	6.6	(9.4)	鉄釉（全面）・白釉（外面上部） 外面：ロクロナデ 内面：ロクロ 底部：削出し	73	13－13
28	水注類	注口部	Lトレンチ	—	—	—	鉄釉（全面）・白釉（外面） 外内面：ロクロ 注口長5.4cm	75	11－2
29	瓶類	徳利	Mトレンチ	4.4	—	(9.0)	鉄釉・白釉 外内面：ロクロ	60	11－2
30	瓶類	油壺	Hトレンチ	(2.2)	—	(4.5)	鉄釉・白釉外内面：ロクロ	65	11－1
31	瓶類	徳利	Jトレンチ	—	4.6	(10.2)	鉄釉 外面：ロクロ、回転ケズリ 内面：不明 削出し高台 最大径8.5cm	64	13－14
32	瓶類	徳利	Jトレンチ	4.5	8.5	24.9	鉄釉（内面全面） 白釉 外面：ロクロ、回転ケズリ 内面：ロクロ 削出し高台 飛鉋文 最大径17.1cm	58	13－18
33	その他	御金	SK04	—	—	—	鉄釉(表面) 長さ16.3cm 幅9.4cm 厚さ1.5cm 裏にヘラ書き文字「大極上□」「田中山□(荘カ)」「大□」	81	14－1

第3表　窯道具観察表

番号	類型	出土位置	長・口径(cm)	幅・底径(cm)	厚・器高(cm)	特　　　　徴	登録	写真図版
1	型	表採	4.8	4.5	1.3	素焼き 木の葉文	85	14－3
2	A II b	表土	6.5	7.3	2.6	抉り直線的		14－12
3	A II b	表土	6.8	7.6	2.1	抉り曲線的		14－12
4	A I b	表土	7.8	8.4	3.5	抉り曲線的		14－12
5	A II a	Kトレンチ	11.2	11.0	3.6	抉り直線的		14－12
6	A II b	表土	14.3	14.6	4.3	抉り直線的		14－12
7	G	表土	10.3	3.3	2.4	表面上半と下端に筋目の圧痕あり		14－13
8	B I	溝	15.4	16.6	20.2	上部に穿孔(2ヶ所) 上面に径13cmの痕跡		14－11
9	B II	表土	11.8	11.8	5.8	穿孔(2ヶ所か) 上面に径8.8cmの痕跡		14－11
10	C	表土	7.2		12.4	中実		14－11
11	D	Kトレンチ	12.7	12.7	2.2	表面に径2.5～3cm、裏面に径4cmの痕跡あり		14－13
12	E	Hトレンチ	21.0		6.6	中実 側面に径14～15cmの高台痕跡・釉付着		14－11
13	H I	表土	13.9	9.8				14－14
14	H II a	Fトレンチ	19.1	7.5	5.2			14－14
15	H II b	表土	15.9	6.5				14－14

第4表　磁器観察表

番号	器種	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産地	特　　　　徴	登録	写真図版
1	中碗	Kトレンチ	10.8	4.2	5.4	瀬戸	染付 外面：垣に笹文 内面口縁：四方襷文 見込み：寿 削出し高台	89	14－9
2	中碗	Aトレンチ	10.3	4.2	5.8	瀬戸	染付 外面：牡丹文 内面口縁：四方襷文 見込み：寿 削出し高台	90	14－10
3	中皿	Lトレンチ	13.4	8.0	3.8	肥前	染付 外面：唐草文 内面：草花文 見込み：五弁花（コンニャク判） 蛇ノ目釉剥ぎ 18c	91	14－8

［陶器］

相馬大堀焼の、色絵山水文土瓶の破片が出土している。

［土製品］（写真図版14－2）

素焼きの女性像が出土している。産地、意匠などは不明である。

II. 考察

1．窯の構造

窯の一部を確認しただけで全体の構造は不明であるが、燃焼室の形態や窯道具に認められる傾斜をもつ床面の痕跡などから登窯であった可能性が高い。長軸はほぼ東西方向で燃焼室は西側である。自然地形が東に高くなっていた痕跡は認められず、平坦地に何らかの構造をもって登窯を構築していたと推定される。しかし、窯壁以外、窯の構造を推定する資料は周囲からは検出できなかった。窯道具には砂が付着しているものが多く認められ、焼成室にも砂が敷かれていたと思われる。

2．製品

本窯跡では多種の製品が生産されており、その多くは日常雑器である。遺物全てを定量的に分析していないのでどれが中心的な製品であったかは明確ではない。ただし、今回の調査における出土量は、甕など大・中型品も比較的多く出土しているが、土鍋と徳利など小型品が非常に多い。

器はロクロで整形されているものがほとんどで、型打ちや手づくねで作られたものは出土していない。しかし、以前の採集品には型打ちの小角皿が出土している。器具によって文様が施されるものは少なく、鉢や香炉に沈線文、徳利に沈線文と飛鉋文の他、火鉢には型押しによる浮彫と彫去状の文様が認められる。また皿、盤、鉢、小坏、香炉、徳利、油壺、土瓶、甕、切立には白釉が掛けられているが、これらの中でも深さ2cm以下の浅い皿や小型の鉢などには掛けられていない。また、皿の内面に白釉の流し掛けによる文様も認められる。

本窯は、鉄釉に白の化粧釉を流したなまこ釉の甕や切立、捏鉢などの仙台の堤焼きの系譜を引く大型品と共に、薄い作りで鉄釉の施された埦や皿、鉢、土鍋、片口、香炉、徳利、土瓶などの小型品が特徴的である。胎土は、前者はやや粗いもののいずれも緻密である。これらの特徴をもつ製品を生産した窯は県北地方を中心に多く分布している。文様として特徴的なのは、飛鉋文と白釉の流し掛けであり、近くでは上野目焼や平清水焼などに類例があり、当窯の製品には近隣の様々な要素が認められる。

盤の外面のヘラ書きは、全文が明らかでないため詳細は不明であるが、宮崎町切込（焼）の土を半分用いて焼いたという意味であろうか。切込焼との関係を知る上でも興味深い資料である。

3．製品と窯道具の関係

窯道具は焼台A類が圧倒的に多く、重ね焼きを駆使して製品を生産していたことは製品の内面に残された焼台痕跡（目跡）からも見て取れる。内面に焼台A類の痕跡の認められる器種は、皿、盤、片口、鉢、甕、切立、湯通し、土鍋などである。これらの中でも内面に痕跡のないものは小型皿の一部のみで、ほとんどすべての製品に焼台痕跡が認められる。製品内面の焼台痕跡や焼台A類、焼台上面に残された製品の高台痕跡のそれぞれの直径から重ね焼きの様相を推定すると、内面に焼台A類の痕跡が認められる最小の製品は皿である。小型の焼台II⑦⑧類が重ねられ、その上面の高台痕跡から灯明皿や小坏、極小型甕などの小型品が乗せられていたことがわかる。中型の焼台II③～⑥類の痕跡が

付いた片口、土鍋、甕（III類）、鉢、切立（小）にはそれぞれ各製品と同じ径、もしくはやや小さい径の高台痕跡の付いた焼台痕跡が認められる。また、土鍋や片口、甕などには、数少ない釉着している例の中でも同じ器種が釉着している例が高い比率で見られる。すり鉢も焼台G類を用いて重ねて焼かれている。以上より、同じ製品を何重にも重ねて窯詰めを行っていたと推定できる。中型品の中でも大型に類する甕（II類）や湯通し、切立（中）には、それよりもやや径の小さな高台痕跡の付いた焼台痕跡が認められる。それらにはより小型のものが重ねられたと推定される。大型品や中型品の中でも大型のものは焼台B･E（I・II）類の上に乗せられて焼成室の床面に固定されていたと推定される。灯明皿などの小型品は、皿などに重ねられた他に、焼台F類や、焼台C類に重ねられた焼台D類などに乗せられていた。焼台F類は下面に砂が付着しており、焼成室の床面に固定されていたと推定される。焼台G類はすり鉢専用である。H類は土管を固定したものと思われる。素焼きの土管にH類によって固定された痕跡が認められ、窯の中で立てて焼成するときに不安定な土管を固定したものであろう。土管の縁の痕跡が片側にしかないもの（I）は一方を窯の壁に固定したと思われる。土管はかなり多く立てて焼かれていたと推定されることから、焼成中の倒壊の危険性を少しでも少なくする工夫であったのであろう。

4．窯の操業年代

当窯についての文献はほとんどなく、近在の言い伝えにも残っていない。ただ、大崎焼と伝えられるすず徳利が1点紹介されているにすぎない(本田1989)。県内において、当窯のような陶器の日常雑器を焼いた窯は20カ所あまり知られている（藤沼1997)。中でも代表的な堤焼は江戸時代の元禄年間（1688～1703）に開窯されたといわれている。しかし、日常雑器の需要が急速に高まり県内各地で窯が盛んに造られるようになるのは幕末から明治にかけてであり、当窯もそのころに操業していたと推定される。窯跡周辺から19世紀の陶磁器が採集されていることはそれを裏付けていよう。地元には全く窯の伝承がないことから、遅くとも大正頃には操業をやめていた可能性が高い。

III．まとめ

1．窯の一部（燃焼室）を確認した。登窯形式であったと推定されるが、開田による削平のため窯の全体像は不明である。

2．本窯で生産された製品は、皿類(高台付丸皿、灯明皿、盤)、椀類(椀、小坏、仏飯器)、鉢類(高台付鉢、捏鉢、片口、香炉、火入れ、火鉢、焜炉、蚊遣りもしくは風炉、植木鉢、すり鉢)、甕類(甕、切立)、鍋類（土鍋、焙烙)、瓶類（徳利、油壺)、水注類（土瓶)、お歯黒壺？、蓋、湯通し、卸金、瓦、土管など、日常雑器が主体であった。

3．窯詰めに当たっては、焼台を駆使して重ね焼きを行い、大量生産をはかっていたと推定される。

4．本窯は幕末から明治にかけて操業していたと推定されるが、開窯および閉窯の時期については不明である。

引用・参考文献

天野順陽(1999)：「名生館遺跡」『名生館遺跡・下草古城本丸跡ほか』宮城県文化財調査報告書第181集
氏家和典(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
加藤道男(1989)：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』
菊地逸夫(1991)：『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第４集
木皿直幸・早川英紀(1992)：「新谷地北遺跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第146集
佐々木茂禎(1971)：「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』56－3
佐々木尚見(1988)：「宮城県北部及び岩手県南部のやきもの」『栗原郷土研究　20』
佐藤　優(1996)：「高幌遺跡」『平成８年度宮城県遺跡調査成果発表会　要旨』
佐藤則之ほか(1997)：『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第174集
佐藤広史・伊藤裕：『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書第３集
新宿区内藤遺跡調査会編：『内藤町遺跡』東京都建設局　新宿区内藤遺跡調査会
進藤秋輝(1990)：「多賀城創建以前の律令支配の様相」『考古学古代史論攷』
菅原弘樹(1997)：「上代遺跡」『舟場遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第173集
菅原弘樹ほか(1996)：『山王遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第171集
鈴木勝彦(1991)：「名生館官衙遺跡」『第23回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
芹沢長介ほか(1981)：『日本やきもの集成（１）北海道　東北　関東』平凡社
芹沢長介(1987)：『東北の近世陶磁』東北陶磁文化館
高橋栄一ほか(1999)：『平貝遺跡　平貝窯跡』本吉町文化財調査報告書第３集
高橋誠明・村田晃一(1996)：「陸奥国における７世紀の様相」『飛鳥・白鳳時代の諸問題１』国際古代史シンポジウム実行委員会
東北歴史資料館(1995)：『仙台・堤のやきもの』
藤沢敦・関根達人・奈良佳子(1999)：『東北大学埋蔵文化財調査年報11』東北大学埋蔵文化財調査研究センター
藤沼邦彦(1997)：「宮城県」『国立歴史民俗博物館研究報告　第73集』
藤村博之(1995)：「上野瓦焼場窯跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第166集
古川一明(1985)：「色麻古墳群」『香ノ木遺跡　色麻古墳群』宮城県文化財調査報告書第103集
古川一明(1993)：『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第１集
古川一明(1996)：「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護』
古川市教育委員会(1987～1996)：『名生館官衙遺跡Ⅶ～ⅩⅥ』古川市文化財調査報告書第6～13・19・21集
古川市教育委員会(2000)：「名生館官衙遺跡、杉の下八幡先・南小林地区確認調査」『第26回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
古川市教育委員会(2001)：「南小林遺跡」『第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
本田泰貴(1989)：「東北近世陶磁資料１　名生館焼」『陶磁館ニュース　no.１』中新田町立東北陶磁文化館
宮城県教育委員会(1987)：「硯沢・大沢窯跡」『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集
宮城県多賀城跡調査研究所(1981～1986)：『名生館遺跡１～Ⅵ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第6～11冊
宮城正俊(1982)：『新説　切込焼』宝文堂
村田晃一(1995)：「宮城県における６・７世紀の土器様相」『東国土器研究』第４号
村田晃一(2000)：「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺」『宮城考古学』第２号
村田晃一ほか(2000)：「名生館遺跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第183集

写　真　図　版

N－4区全景（東から）

N－5区南北部分全景（南から）

N－5区東西部分全景（東から）

O－2区北側全景（南から）

O－2区　SD601・604溝跡(北から)

P－1区全景（西から）

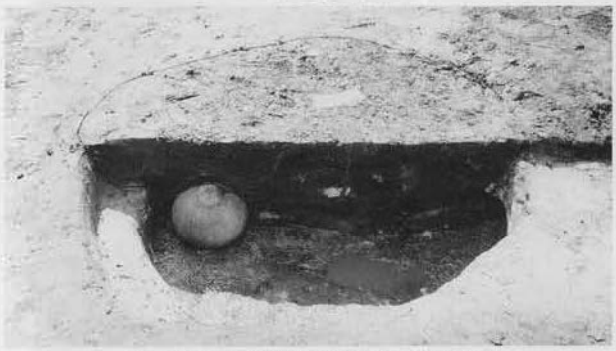
P－2区東側全景（東から）

P－1区　SE613井戸跡断面（北から）

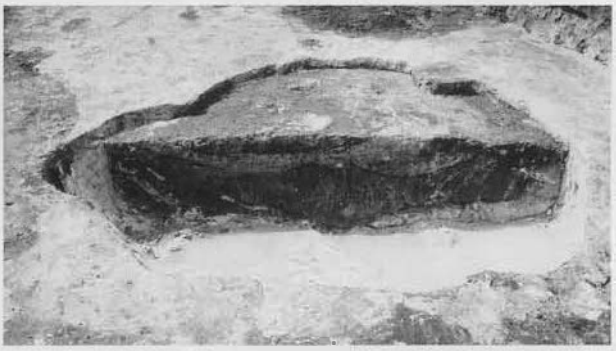
図版1

Q－1区全景（西から）

Q－1区東側全景（西から）



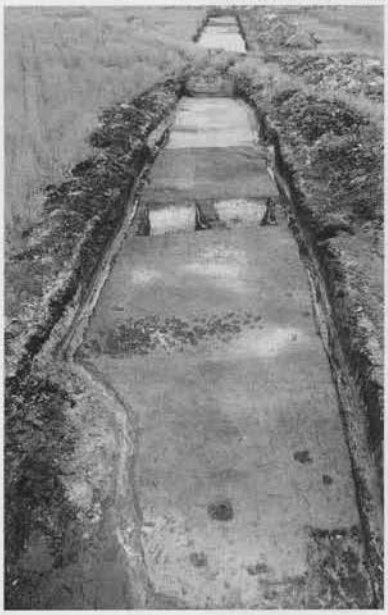
Q－1区　SK650土壙断面（東から）



Q－1区　SK660土壙断面（東から）

Q－1区　SD661溝跡（南から）

Q－2区　SD682溝跡断面（北から）



Q－2区全景（東から）

Q－3区全景（東から）

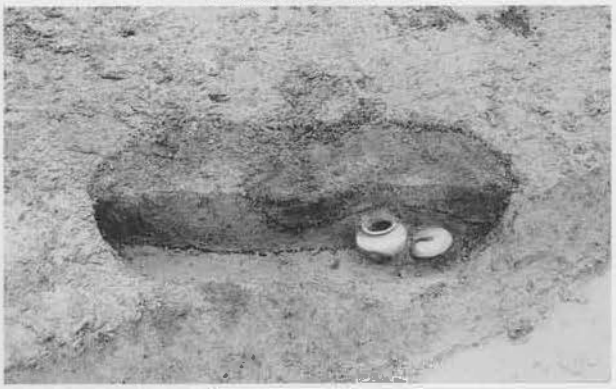
Q－4区全景（西から）

図版2

Q－8区全景（西から）

Q－9区東西部分全景（西から）

Q－5・8区間　SD694溝跡断面（西から）



Q－9区　SK699土壙断面（東から）

R－1区全景（南から）

R－2～6区全景（西から）

S－1区東側全景（西から）

S－1区西側全景（東から）

SK①類（SK750　西から）

図版3

S－2区全景（西から）

S－3区全景（南から）

S－2区　SE764井戸跡断面（北から）

SK④a類検出状況（SK720　南から）

SK④類検出状況（S－2区東端　南から）

SK④a類断面（SK711　南東から）

SK④b類断面（SK759　南東から）

T－1区全景（南から）

図版4

U－1区全景（北から）

U－3区全景（南から）

V－1区全景（南から）

U－2区東側全景（東から）

U－1区　SI804住居跡（南から）

U－2区　SI841～843・885住居跡（西から）

U－2区　SB886建物跡、SI841～843・885住居跡（北西から）

U－3区　SD661・859・860溝跡（南から）

V－2区南側全景（南から）

図版5

Ⅴ－3区全景（東から）

Ⅴ－3区全景（西から）

Ⅴ－2区　SI868住居跡（南から）

Ⅴ－3区　SI879住居跡（東から）

Ⅴ－3区　SI887住居跡（東から）

Ⅴ－4区全景（南東から）

Ⅴ－2区　SK874土壙（北から）

Ⅴ－4区西全景（東から）

図版6

Ⅴ－４区東　SB980建物跡（東から）

Ⅴ－４区東　SB980建物跡南西隅柱検出状況（西から）

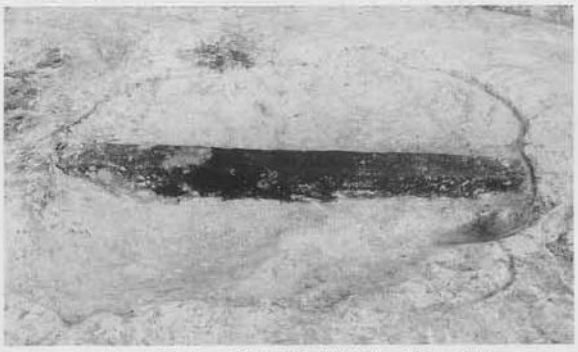
Ⅴ－４区東　SB980建物跡南西隅柱断面（西から）

Ⅴ－４区東　SD682・960溝跡断面（北から）

Ⅴ－４区西　SD927・928溝跡（南から）

Ⅴ－４区西　SK939土壙断面（東から）

Ⅴ－５区全景（南から）



Ⅴ－４区西　SK952土壙断面（南から）

Ⅴ－６区全景（東から）

図版７

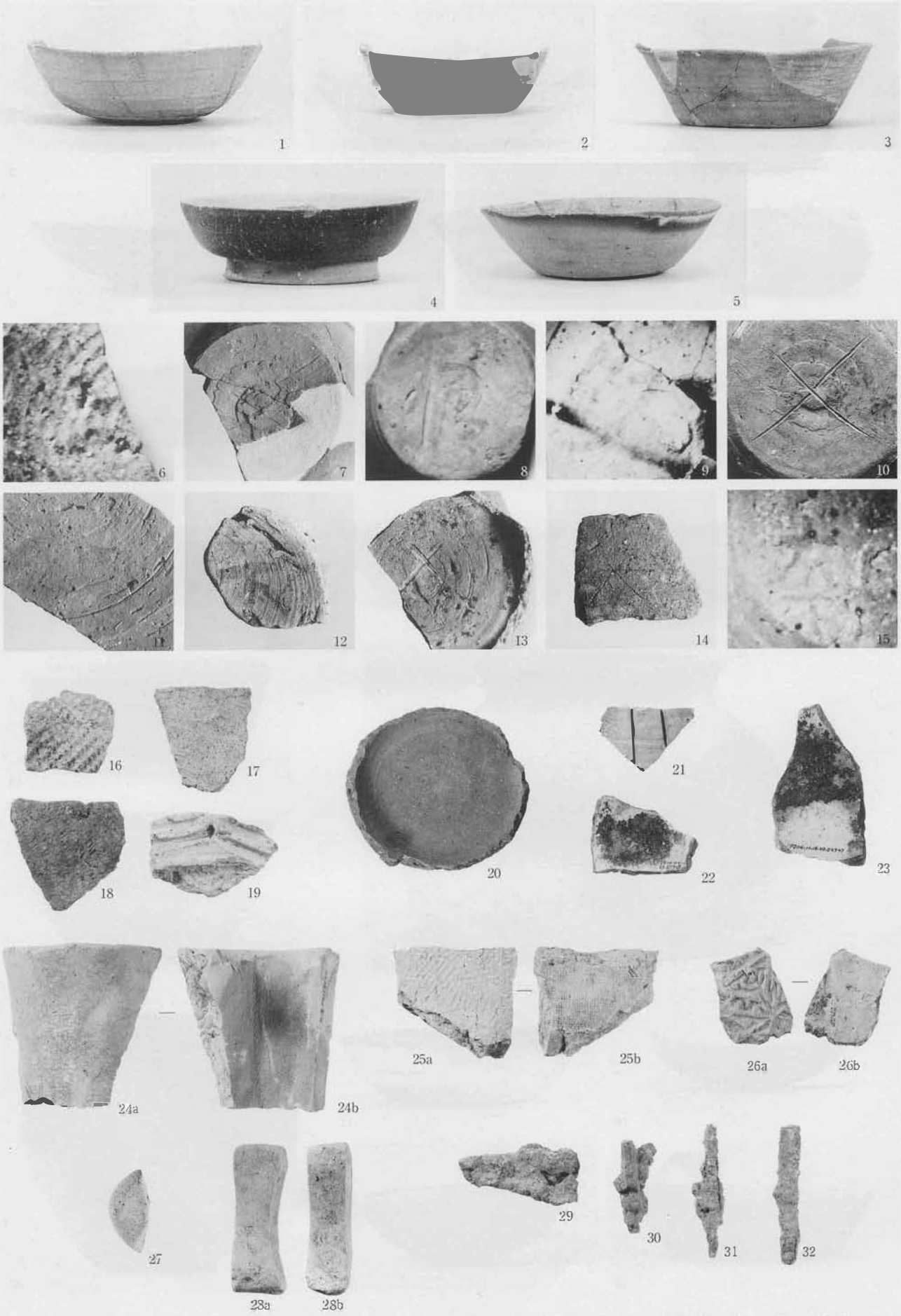
1：6－1（挿図番号－挿図内番号）　2：6－2　3：11－1　4：6－5　5：11－4　6：11－4　7：11－2　8：11－3　9：11－5
10：14－2　11：14－3　12：14－5　13：14－7　14：14－8　15：19－1　16：19－10　17：14－9
（縮尺1～3・6～16：1/3、1・5・17：1/4）

図版8　　出土遺物(1)

1：19－2（挿図番号－挿図内番号）　2：32－1　3：32－2　4：32－3　5：30－1　6：32－4　7：37－5　8：37－1　9：37－2
10：37－3　11：37－6　12：37－7　13：37－9　14：41－4　15：41－3　16：41－5　17：41－1　18：41－6　19：44－2　20：41－2
（縮尺1～12・14～20：1/3、13：1/4）

出土遺物(2)

図版9



1：44－3（挿図番号－挿図内番号）　2：44－4　3：44－6　4：44－7　5：44－10　6：6－1　7：6－2　8：6－3　9：11－3　10：14－5　11：37－8　12：44－9　13：44－12　14：44－13　15：44－10　16：26－1　17：26－2　18：26－3　19：44－1　20：40－1　21：V－3区検出面　22：V－3区SK908　23：V－3区SK907　24：11－6　25：14－11　26：32－8　27：32－7　28：36－1　29：V－2区SK878　30：U－2区SI841　31：V－4区SI985　32：U－2区SI841　（縮尺1～5・16～23・27～32：1/3、24～26：1/5、6～15：任意）

図版10　　出土遺物(3)

1

2

3

4

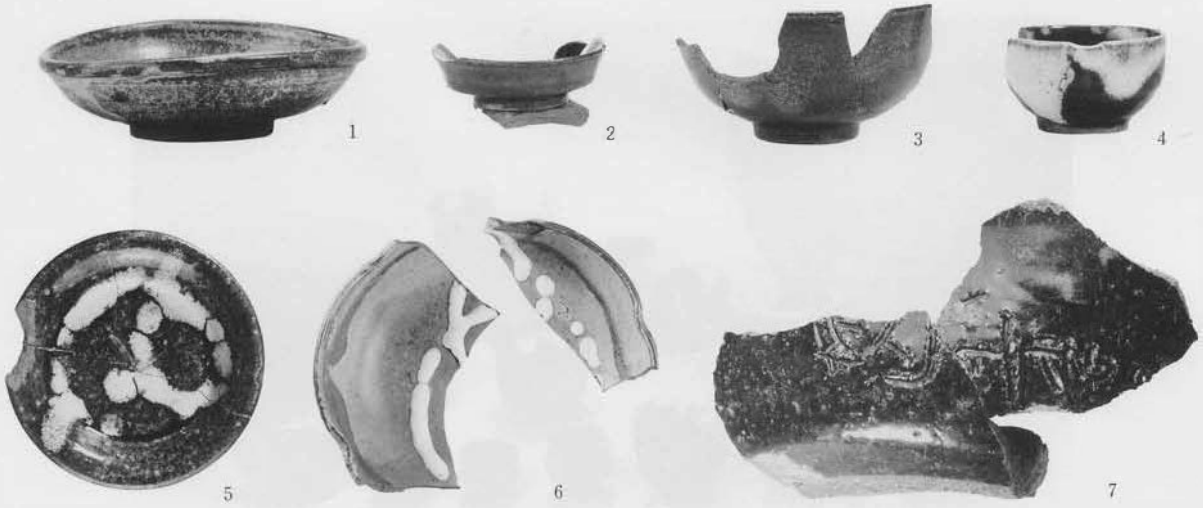
陶器

図版11

F区全景
（北西から）

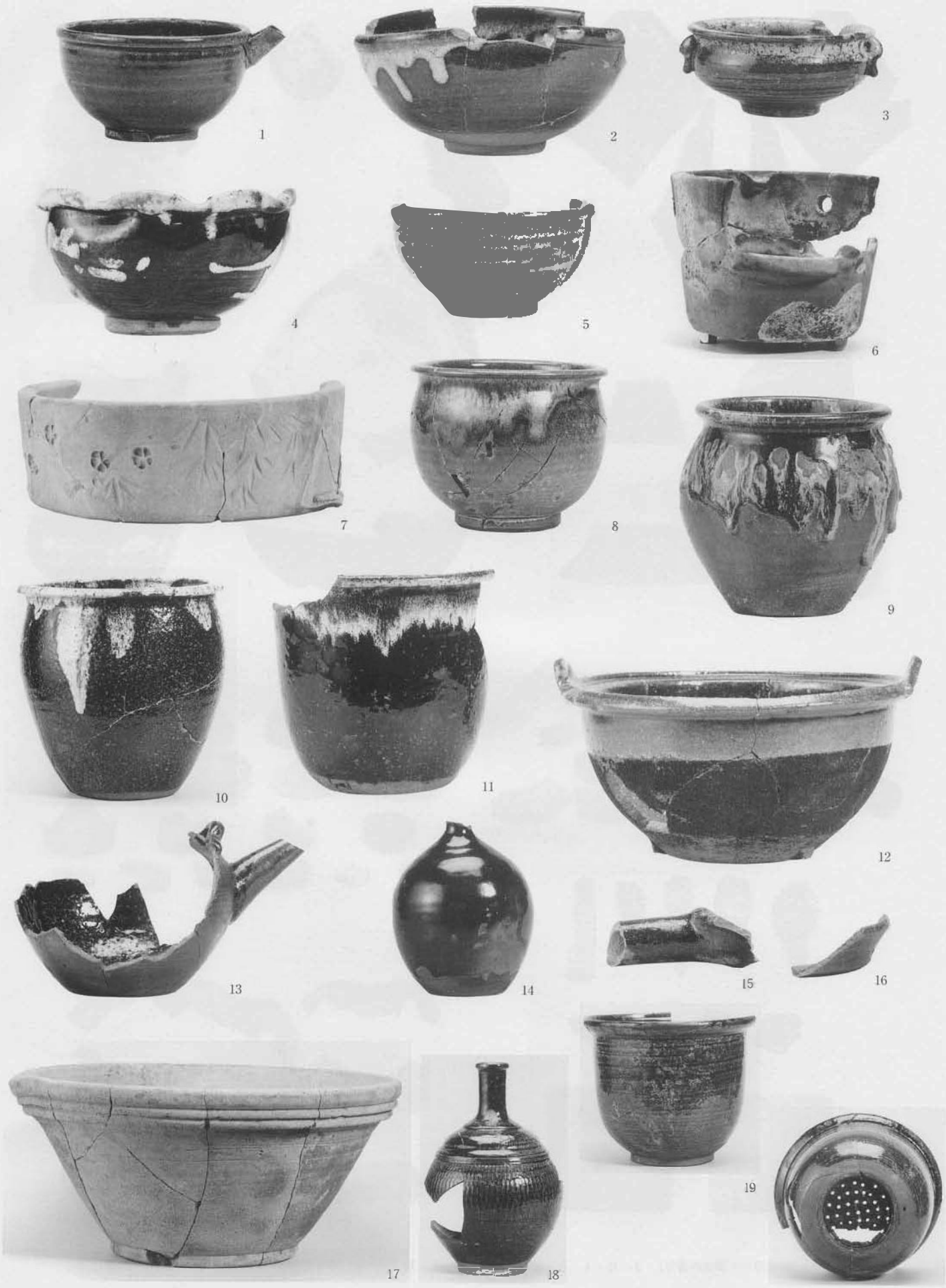
SR01窯跡全景（西から）

SR01窯跡部分拡大（南から）



1：47－3（挿図番号－挿図内番号）　2：47－5　3：47－7　4：47－9　5：47－1　7：47－6　（縮尺1/3）

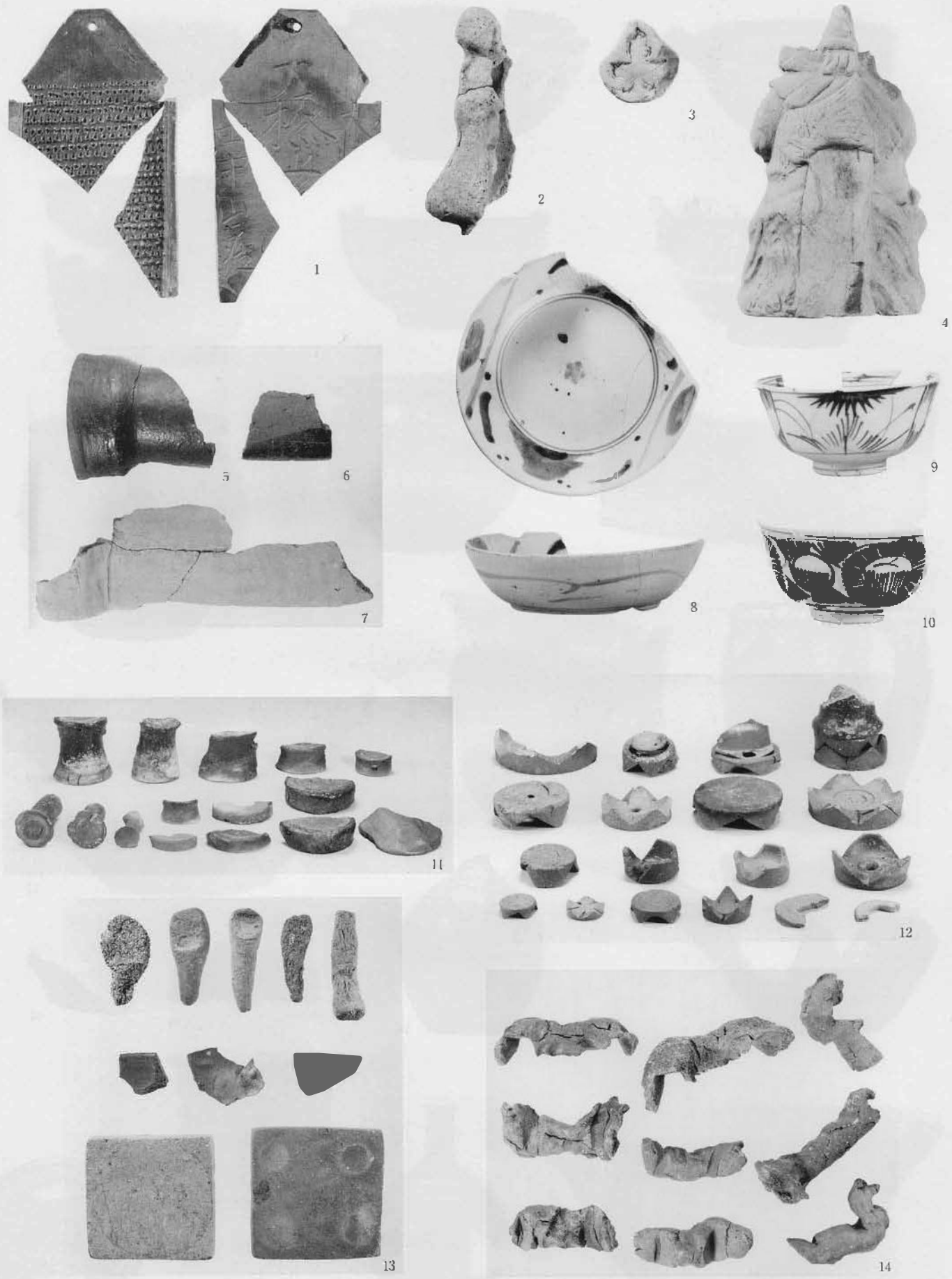
図版12　　出土遺物（陶器1）



1：47−10（挿図番号−挿図内番号）　3：47−11　4：47−13　6：47−15　7：47−14　8：48−19　9：48−20　10：48−21　11：48−22
12：48−24　13：48−27　14：48−31　17：47−16　18：48−32　19：48−23　（縮尺1～5・7～9・11～16：1/3、6・10・17～19：1/6）

出土遺物（陶器2）

図版13



1：48−33（挿図番号−挿図内番号）　3：49−1　8：50−3　9：50−1　10：50−2（縮尺1〜4・8〜10：1/3、その他：任意）

図版14　出土遺物（陶器3・窯道具・磁器）

郷主内遺跡
ごうしゅうちい せき

目　　次

第１章　遺跡の概要 ……115
　１．遺跡の位置と地理的環境
　２．周辺の遺跡と歴史的環境
第２章　発掘調査 ……117
　１．調査に至る経過
　２．調査方法
　３．発見された遺構と遺物
　４．埋納遺構
第３章　考察とまとめ ……125
　１．埋納遺構と出土遺物について
　２．まとめ
引用・参考文献 ……128
付編　１．保存処理 ……129
　　２．郷主内遺跡出土密教法具の蛍光Ｘ線分析法による材質分析 ……131
写真図版 ……135

調　査　要　項

遺　跡　名：郷主内遺跡（ごうしゅうちいせき）、宮城県遺跡地名表登載番号03195、遺跡記号ＳＵ
　　旧名　郷主内館跡（ごうしゅうちたてあと）、宮城県遺跡地名表登載番号03034
　　旧名　辻館跡（つじたてあと）、宮城県遺跡地名表登載番号03110
所　在　地：宮城県角田市島田字郷主内、枝野字辻・南小原
調 査 原 因：県営ほ場整備事業
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課　　岩見和泰、高橋栄一
　　角田市教育委員会　　齋藤彰裕、尾形真也
調 査 期 間：2000年（平成12年）３月６日～15日
調査対象面積：約21ha（210000㎡）
調 査 面 積：930㎡
調 査 協 力：宮城県大河原農林振興事務所、東北歴史博物館、隈東土地区画整理組合
調査参加者：遠藤豊子、大槻幸一郎、菅野二三子、加藤昌雄、佐藤きぬ子、佐藤幸一、高橋　均
　　藤野時弘

第１章　遺跡の概要

１．遺跡の位置と地理的環境

郷主内遺跡は角田市枝野字辻・南小原、島田字郷主内に所在する。市の中心部から南東に約３㎞の地点にあり、丸森町との町境から約１㎞北に位置している。

遺跡は、伊具盆地のほぼ中央を縦断し北へと流れる阿武隈川の東岸、川岸から約400～500ｍの距離にあり、阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地する（中川他 1986）。東には阿武隈山地の北端をなす標高200～300ｍの鹿狼山地があり、東の丘陵と西の阿武隈川に挟まれた平野部のほぼ中央に遺跡は位置している。

遺跡の周辺は一部宅地となっているが、大部分は水田・畑地として利用されており、現況では緩やかな微地形が認められるものの、標高14～16ｍのほぼ平坦な地形となっている。

２．周辺の遺跡と歴史的環境

郷主内遺跡は従来、辻館跡（１）と郷主内館跡（２）として知られており、周辺には、律令期の伊具郡衙と推定されている角田郡山遺跡（６）があるほか、古墳時代の遺跡には郷主内古墳（３）・光目内古墳群（４）などがあり、古代の遺跡には角田郡山遺跡の瓦供給地であった今泉瓦窯跡(21)・桜井瓦窯跡(24)・山中瓦窯跡(25)などの窯跡群が知られている。中世の遺跡では、南に光目内館跡（５）が、南西には郡山館跡（９）、東には島田館跡(15)などが近接しているほか、南側約２㎞の地点には戦国時代に伊達輝宗・政宗による相馬攻めの拠点であった矢ノ目館跡(73)がある。また、江戸時代に仙台藩の南半部における本山派修験の中心であった東光院と宗叶院がそれぞれ阿武隈川の東岸と西岸に位置している(註1)。

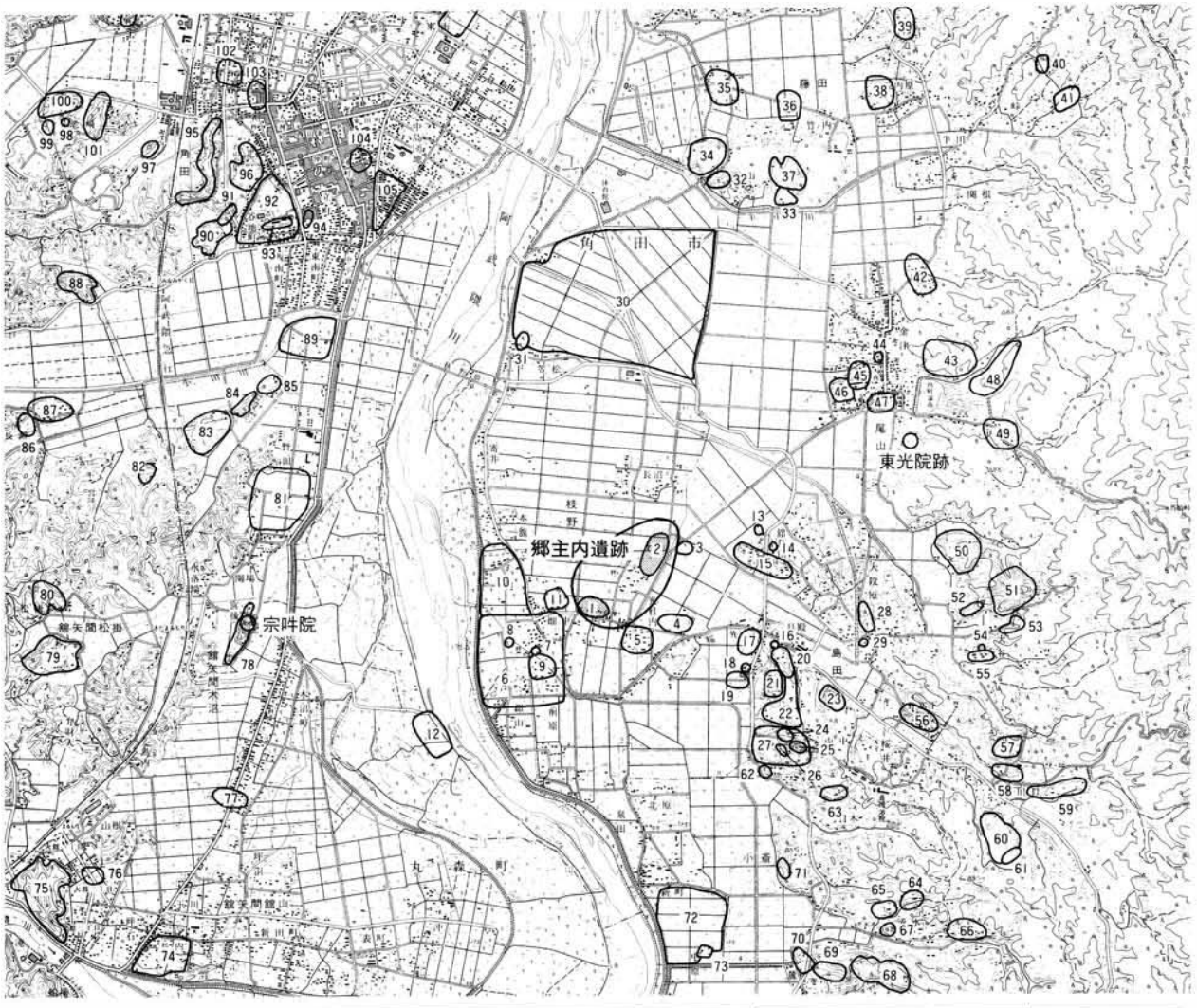
郷主内館跡は、江戸時代延宝年間（1673～81）に作成された『仙台領古城書立之覚』に「島田村、江主内城、東西七拾六間、南北六拾三間、四千七百八拾八坪、右城主と申ハ無之候共相馬陣之節政宗取立之要害之地ニ御座候」と記されている館跡である。1962（昭和37）年にその一部が発掘調査され、館跡は二重に水堀を巡らした方形に近い平城で、内郭は一辺約90ｍのほぼ正方形を呈し、内堀は幅８～10ｍ、深さは２ｍあり、外郭は南北が170ｍ・東西340ｍの長方形と推定されている(註2)。また、郷主内館跡の近くには周囲に堀を巡らす小規模な屋敷地がみられ、館跡に関連する屋敷地と推定されている(註3)。辻館跡は郷主内館跡に関連する屋敷地と推定される遺跡で、現在は西側の堀だけが残っているが、西・南・北の三方に「コ」字状の堀が以前存在していたことが知られている(註4)。光目内館跡も一部堀が確認でき、位置的に近接することから辻館跡と同様の性格のものである可能性が高い。

註１．東光院は現存せず、明治時代初め頃まで寺院があったという場所が伝えられている。東光院については安達俊男氏からご教示を賜った。

註２．藤沼邦彦(1981)「宮城県」『日本城郭大系　第３巻　山形　宮城　福島』（新人物往来社）の363・364頁。

註３．註２文献に同じ。なお、志間泰治氏には現場を視察していただき、屋敷地や堀跡の位置についてご教示を頂いたほか、旧地籍図による堀跡の推定作業についてもご指導を賜った。

註４．志間泰治氏のご教示による。また、地元の方々からも同様の説明を頂いた。



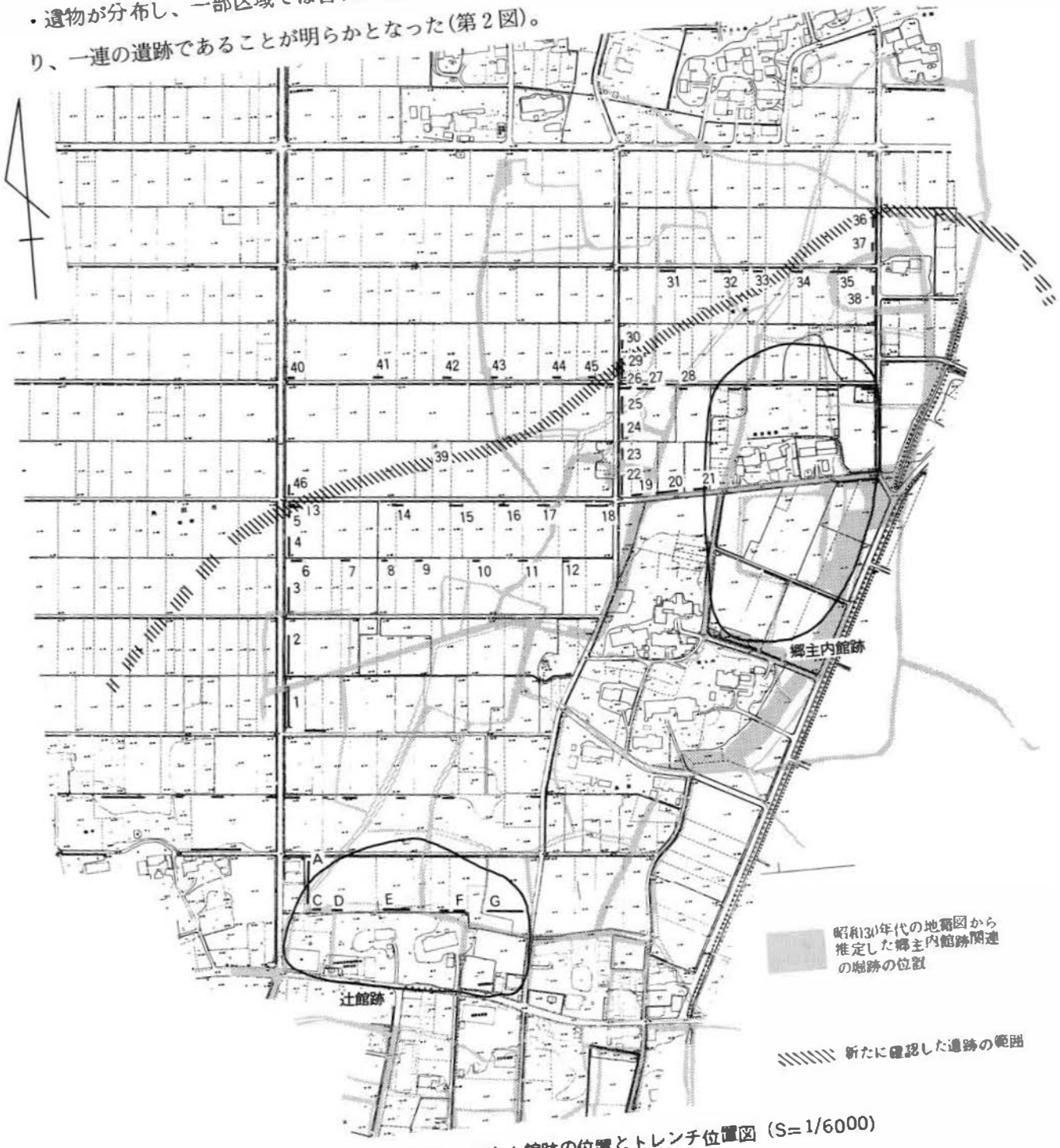
No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	辻館跡	城館	中世	36	竹ノ内遺跡	散布地	縄文中	71	篠崎横穴墓群	横穴墓	古墳後・平安
2	郷主内館跡	城館	中世	37	大久保古墳群	円墳	古墳後	72	矢ノ目遺跡	集落	古墳～中世
3	郷主内古墳	円墳？	古墳後	38	松前館跡	城館	近世	73	矢ノ目館跡	城館	中世
4	光目内古墳群	円墳	古墳後	39	杉迫遺跡	散布地	古代	74	長内遺跡	散布地	古代
5	光目内館跡	城館	中世	40	鹿野窯跡	窯跡	平安	75	大楯館跡	城館	中世
6	角田郡山遺跡	官衛・散布地	古墳・奈良・平安他	41	仙石遺跡	散布地	縄文中？	76	大門前遺跡	散布地	弥生
7	狐塚古墳群	古墳	古墳後	42	稲葉館跡	城館	中世	77	塚合遺跡	散布地	縄文晩・弥生
8	上沼尻古墳	円墳	古墳	43	山根遺跡	寺院・散布地	縄文・古代・中世	78	宮後古墳群	円墳	古墳後～奈良
9	郡山館跡	城館	中世？	44	代官所跡	代官所	近世	79	宮ノ下城跡	城館	中世
10	品濃遺跡	集落	古墳中～平安	45	荒町遺跡	集落・散布地	古墳前・中世他	80	禿山館跡	城館	中世
11	梶賀遺跡	散布地	古代・中世	46	尾山城跡	城館	中世	81	野田遺跡	散布地	中世
12	上中島遺跡	散布地	古墳後	47	上大門遺跡	散布地	縄文後	82	専福寺窯跡	窯跡	古代
13	新墓古墳	円墳	古墳後	48	八竜城跡	城館	中世	83	鱸沼遺跡	散布地・城館	縄文・弥生・中世
14	館島田古墳	円墳	古墳中	49	大條氏居城跡	城館	近世	84	鱸沼古墳群	円墳	古墳中
15	島田館跡	城館	中世	50	北小屋城跡	城館	中世	85	観音堂館跡	城館	中世
16	今泉古墳	円墳	古墳後	51	小屋城跡	城館	中世	86	世ヶ崎B遺跡	散布地	古代
17	桜井館跡	城館	中世	52	大槽古墳群	円墳	古墳	87	世ヶ崎遺跡	散布地	縄文中・古代
18	関野田古墳	円墳	古墳後	53	引田横穴墓群	横穴墓	古墳・古代	88	小田城跡	城館	中世
19	三島遺跡	集落	古墳中	54	引田古墳	古墳	古墳	89	住社遺跡	集落・古墳	古墳前・後
20	今泉遺跡	集落	縄文中	55	引田遺跡	散布地	縄文晩	90	松ヶ枝館跡	城館	中世
21	今泉瓦窯跡	窯跡	奈良	56	石川口遺跡	散布地	古墳・古代	91	沼小屋横穴墓跡	横穴墓	古墳・古代
22	山中古墳群	円墳・方墳	古墳後	57	関ノ入古墳群	円墳	古墳後	92	臥牛城跡	城館	中世・近世
23	八重田瓦窯跡	窯跡	古代	58	稲葉前遺跡	散布地	縄文中	93	牛館横穴墓群	横穴墓	古墳・古代
24	桜井瓦窯跡	窯跡	古代	59	池田館跡	城館	中世	94	牛館遺跡	散布地	平安
25	山中瓦窯跡	窯跡	古代	60	香山館跡	城館	中世	95	長泉寺古墳群	前方後円墳・円墳	古墳中・後
26	山中横穴墓群	横穴墓	古墳・古代	61	東稲荷田横穴墓群	横穴墓	古墳後	96	田袋遺跡	集落	縄文前・中
27	山中桜井遺跡	製鉄	古墳・古代	62	碇遺跡	散布地	縄文前	97	裏林窯跡	窯跡	奈良
28	作田遺跡	散布地	古代	63	小佐田遺跡	散布地	弥生・古代	98	老ヶ崎経塚	経塚	中世
29	島内古墳群	円墳	古墳後	64	羽山横穴墓	横穴墓	平安	99	老ヶ崎廃堂跡	寺院	中世
30	大坊遺跡	集落	古墳・奈良	65	羽山遺跡	散布地	弥生	100	老ヶ崎遺跡	散布地	縄文中～晩・弥生
31	笠松古墳	円墳	古墳	66	小斉清水遺跡	散布地	縄文中～晩・弥生	101	老ヶ崎館跡	城館	近世
32	薬師廃堂跡	寺院	中世？	67	鹿島神社遺跡	散布地	古代	102	寺前遺跡	散布地	古墳中
33	館ノ山城跡	城館	中世	68	柴小屋館跡	城館	中世	103	新丁遺跡	散布地	古墳
34	医王城跡	城館	中世	69	古舘窯跡	窯跡	平安	104	横田町遺跡	散布地	古代
35	福田遺跡	散布地	古代	70	北向遺跡	散布地	縄文前・後	105	田町裏B遺跡	集落	古墳・奈良

第1図　郷主内遺跡の位置と周辺の遺跡

第２章　発掘調査

１．調査に至る経過

本調査は角田市枝野地区の県営ほ場整備事業に伴い実施されたものである。事業計画では、整備範囲が周知の遺跡である辻館跡・郷主内館跡などに及ぶため、関係機関と協議し、事前に遺跡の範囲や遺構・遺物の有無を確認することにした。確認調査は、平成11年11・12月に角田市教育委員会が、平成12年３月に宮城県教育委員会と角田市教育委員会が行い、その結果、広範囲にわたって中世の遺構・遺物が分布し、一部区域では古墳時代の遺構・遺物が確認され、遺跡は途切れることなく続いており、一連の遺跡であることが明らかとなった(第２図)。



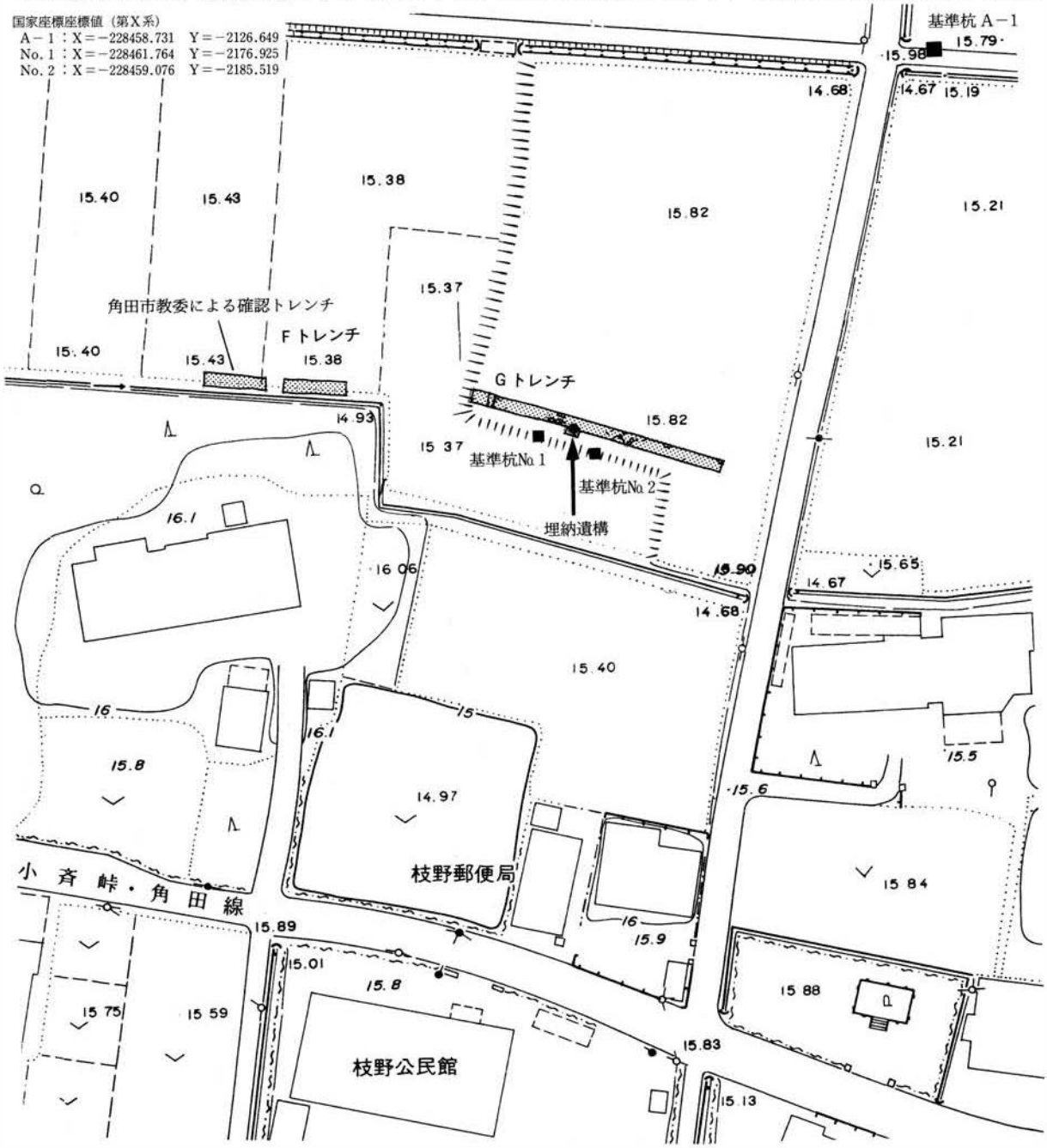
第２図　辻館跡・郷主内館跡の位置とトレンチ位置図（S＝1/6000）

この結果を受けて関係機関と再度協議を行い、遺跡の破壊を最小限に抑えるべく設計の変更がなされ、排水路などの調査は平成12年度から角田市教育委員会が行うこととなった。

本報告は、宮城県教育委員会が主体となって行った確認調査の成果をまとめたもので、その概要と辻館跡周辺の調査区で発見された密教法具埋納遺構について報告するものである。なお、遺跡の全体については平成12年度以降に行われる角田市教育委員会の調査報告にまとめて行うこととなっている。

2．調査方法

角田市教育委員会が平成11年11・12月に行った確認調査をもとに、遺跡の範囲と遺構の分布状況を確認するため、ほ場整備が行われる遺跡の一部とその周辺を対象に、トレンチによる調査を行った。調査は水路部分を中心に、幅1.7mのトレンチを計52ヶ所設定し、辻館跡周辺はA～F、これ以外は1～46の番号を付け、遺構の掘り下げは行わずに平面での確認のみを行い、平面図と土層模式図を作成し



第3図　Gトレンチの位置と基準点（S＝1/1000）

た。なお、Gトレンチ（第3図）を掘り下げていた際に、調査区南断面に埋納遺構とこれに伴う青銅製品・木製品の一部を検出した。そのため、埋納遺構については、トレンチを南側に東西約2m・南北約1mの範囲を拡張し、精査を行った（第4図）。

遺構平面図は遺構の種類等に応じて縮尺を1/100、1/20、1/10とし、断面図は精査を行ったG区で作成しており、縮尺1/20と1/10で記録した。写真撮影は35㎜と6×7白黒・カラースライドを使用した。

3．発見された遺構と遺物

確認された遺構は埋納遺跡1基、井戸跡8基、土壙15基、溝跡63条、柱穴多数である。分布密度は異なるものの、1～29、34～38・42、A・C～Gトレンチで検出されており、辻館跡と郷主内館跡の間は途切れることなく遺構が広がっていることが明らかとなった（第2図）。

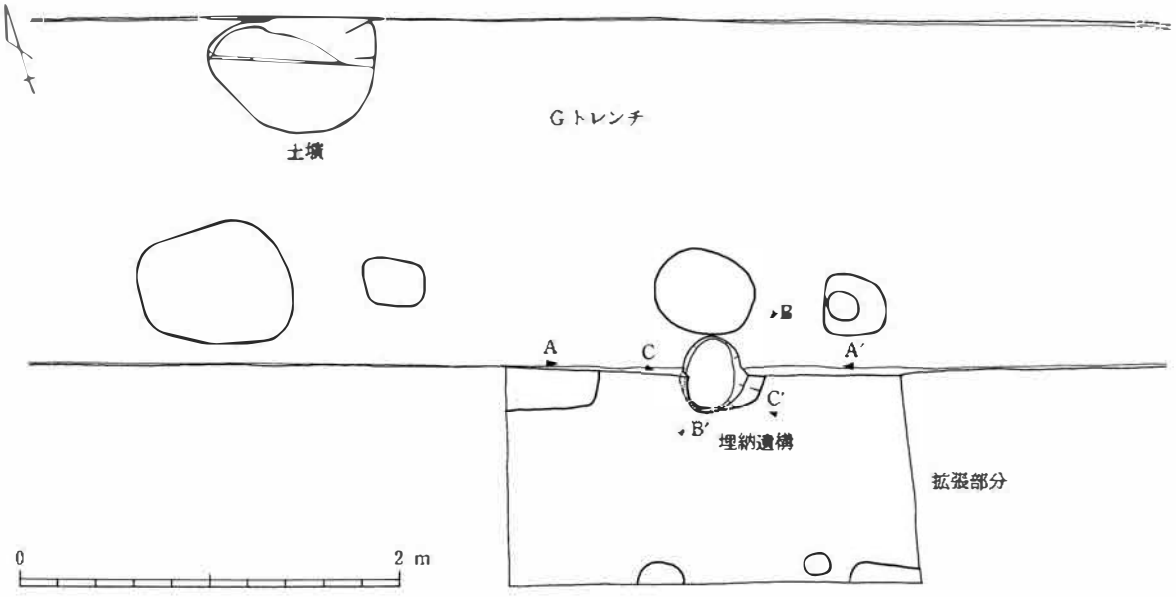
柱穴がまとまって検出されたのは2・3トレンチと10・11・12・14トレンチ、38トレンチで、これらの地点では建物群の存在が想定される。特に2・3トレンチではピットの密度も高く、井戸跡も4基見つかっている。区画溝または堀跡と考えられる規模の大きい幅2～3mの溝跡は、東西方向の溝跡が1・2・21・A・C・D・Eトレンチで、北東-南東方向の溝跡が11・17・27・32・Aトレンチで、南北方向の溝跡が4・15・19・42トレンチで検出されている。また、Gトレンチからは埋納遺構1基と火葬遺構と考えられる土壙1基、井戸跡2基、柱穴などが確認されている（第3・4図）。

これらのうち、1・3・7・12・15トレンチから中世陶器の破片が出土しており、3トレンチで片口の摺鉢、12トレンチでは渥美産の甕、15トレンチの大溝からは常滑産の摺鉢の破片が出土している。柱穴も径の小さい円形のものが多く、遺構の多くは中世またはそれ以降の年代が考えられる。なお、1トレンチで古墳時代前期の土器が見つかっており、1・37・Eトレンチからは古墳時代または古代の土器片が若干出土している。

4．埋納遺構

【規模と出土状況】埋納遺構は重機で掘削した際に北側の3分の2ほどが失われているが、南側の残存部分から推定すると東西45㎝程の不整形を呈する土壙と考えられ、底面の平面形が東西26㎝・南北38㎝程の楕円形を呈することから、埋納遺構の平面形も南北に長かったものと推定される。旧表土面から掘り込まれており、地山面を底面とし、底面はほぼ平らである。現地表面から掘り込み面である旧表土面までは約50㎝あり、土壙の深さは旧表土面から46㎝程で、西と南の側面は急に立ち上がり、東の側面は緩やかに開きながら立ち上がる。東側で柱穴1個と重複しており、これよりも新しい。

調査区南壁の断面観察により、深さ38㎝前後のところで曲物の底板が検出された。曲物は直径24～25㎝あり、側板は高さ10㎝程まで残存し、樺皮の一部も残っていた。調査によって曲物内から出土した密教法具は飯食器2点、六器鋺1点・台皿2点、火舎破片数点で、飯食器は2点とも伏せた状態で曲物側板に沿って置かれており、曲物底板には伏せて置いたことによってついた口縁部の円形の痕跡が認められた。同様に置かれていた六器鋺のものと考えられる痕跡も残っており、曲物底板の中央部は炭化して窪んでいた。火舎は猫脚の付いた破片など数点が、逆さまになって断面にめり込むような



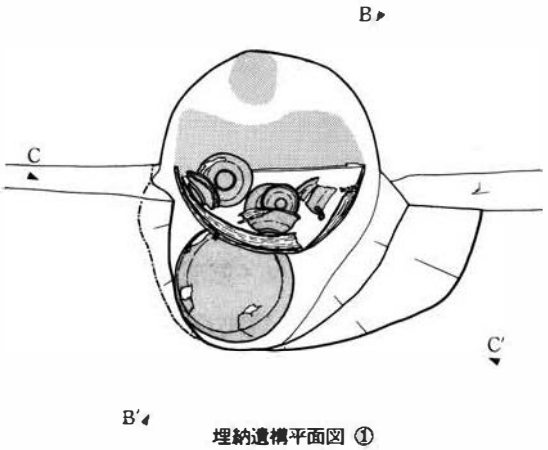
第4図　Gトレンチ埋納遺構周辺平面図

状況で検出された。重機で掘り下げた際に、五鈷鈴や独鈷杵、花瓶2点、手錫杖、六器鋺が4点重なったもの、火舎の破片や、曲物の底板と側板の破片などが見つかっており、曲物が北へ傾いていることから、出土した青銅製品の中には、曲物内からこぼれ出たものもあったと思われる。

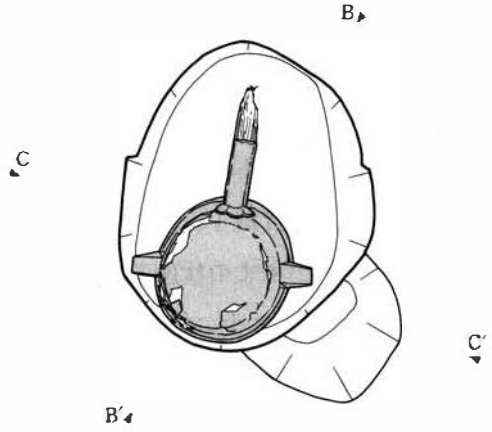
銚子は堆積土を挟んで曲物の下から出土しており、曲物は銚子の体部北側部分が薄い堆積層を挟んで重なるような位置に置かれていた。銚子は両口のもので、注ぎ口をほぼ東西に、把手を北に向けて埋納遺構の底面に伏せた状態で置かれており、銚子底部周辺の傷みが激しいものの、把手の木質部も炭化した状態で一部残存しており、ほぼ完全な状態であった。

埋納遺構内の堆積土は8つに分けられ、5層は曲物内にのみ認められる自然流入土である。これ以外は地山ブロックを含む人為的に埋め戻された埋土で、1～3層、4層、6・7層、8層の大きく4つに大別することができる。8層は埋納遺構の底面に薄く分布しており、埋納するための穴を掘った際に底面付近に残っていた土か、底面を平らにするための置き土と考えられる。6・7層は銚子を埋めた土で、銚子を埋めた段階で一旦平らにし、この上に密教法具を入れた曲物を置いたものと判断される。4層は曲物の周囲に入れられた埋土であり、曲物と同じ高さまで埋め戻されたと考えられ、東側でやや曲物内に入り込んでいる状況が認められた。1～3層は曲物を覆うように埋め戻された土で、曲物部分に認められた空洞部分から判断すると、曲物が腐朽し、土圧によって本来曲物があった部分にも入り込んでいると考えられる。

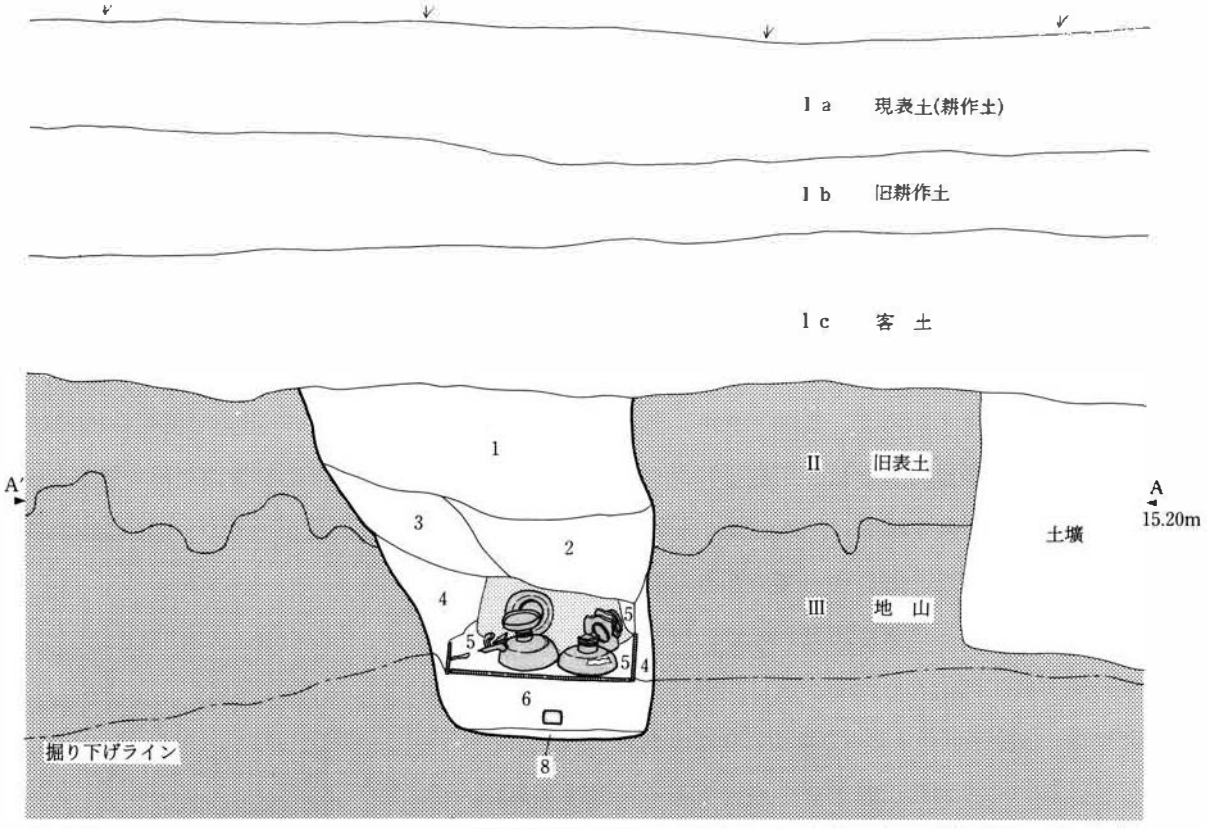
なお、本遺構に伴う塚や建物などの施設については、断面観察や拡張した範囲を含む平面観察を行ったが、確認できなかった。



埋納遺構平面図 ①

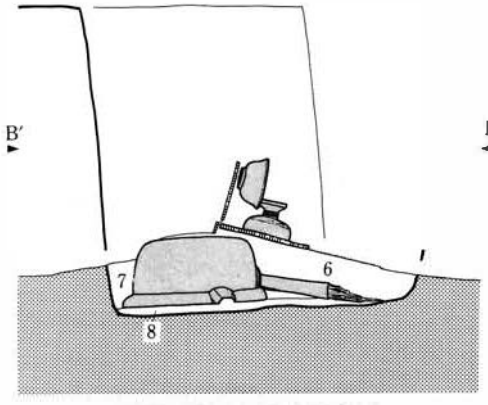


埋納遺構平面図 ②

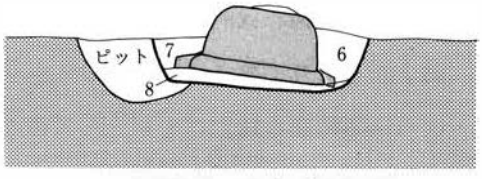


埋納遺構断面図 ①

1：暗褐色(10YR3/4)シルト
2：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
3：黒褐色(10YR3/2)シルト
4：黒褐色(10YR2/3)シルト
5：黒褐色(10YR2/3)粘土
6：褐色(10YR4/4)シルト
7：黒色(10YR2/1)シルト
8：暗褐色(10YR3/4)シルト



埋納遺構断面図 ②（南北断面）



埋納遺構断面図 ●（東西断面）

第5図　埋納遺構平面図・断面図（S＝1/10）

【出土遺物】出土した遺物は、重機で掘削した際に出土したものも含めると、青銅製品が独鈷杵１点、五鈷鈴１点、火舎１点(破片多数)、花瓶２点、六器鋺６点・皿台５点以上、飯食器２点、手錫杖１点、銚子１点の計20点以上、木製品が曲物底板と側板の破片である。独鈷杵と五鈷鈴、花瓶１点、六器鋺１点・台皿各２点、飯食器１点、手錫杖１点、銚子１点は比較的遺存状況が良好である。

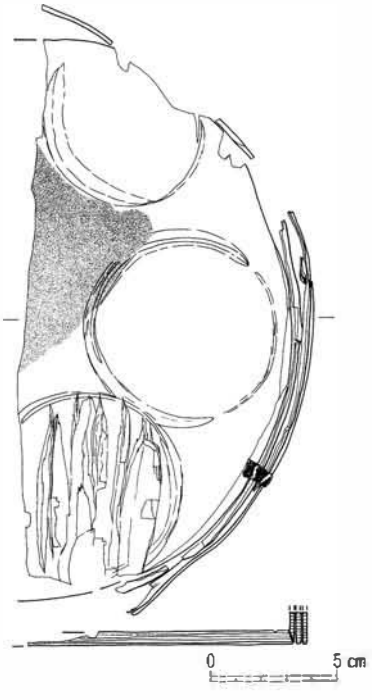
独鈷杵はほぼ原形のままの状態を留めており、長さは14.5cm、鈷部各4.7cm・把部5.1cmで、鈷部の幅は中程で0.7cm、把部中央の径が1.5cmである(第７図２)。把部は中央が鬼目式で、大きな楕円形を呈する張出しの弱い鬼目を四方に配し、両側には五鈷鈴と同様の二線の約条で締めた重弁八葉の蓮弁飾りが認められる。鈷部は五鈷鈴の中鈷と同様に細身で先端部が四角錐状を呈する。

五鈷鈴は、脇鈷基部が一部破損し脇鈷の一部が歪んでいるものの、他はほぼ原形を留めている（第７図１)。大きさは高さ14.0cm、鈷部4.1cm・把部4.9cm・鈴身部5.0cmあり、幅は鈷部3.1cm、把部中央の径1.5cm、鈴身端部の径6.1cmである。鈷部は中鈷が細身で先端部が四角錐状を呈し、脇鈷には小さな嘴形が認められる。把部は中央が鬼目式で四方に配された鬼目は横長でやや張出しが弱く、鬼目の上下には二線の約条で締めた重弁八葉の蓮弁飾りが認められる。鈴身部は紐帯をめぐらすだけの素文鈴で、鈴身口縁部は立ち上がりが小さく、狛の爪形を呈する。鈴身内に残っていた舌は長さ5.4cm・幅0.3〜1.3cmあり、X線写真によると鈷・把と鈴身は別鋳で、第７図１の断面模式図のように接合され、舌は方形の環によってつなげられている。把部下側の蓮弁飾りが約条を挟んで蓮弁の位置がずれているのは鈷・把部と鈴身部をつなげる際に生じたものと考えられる。

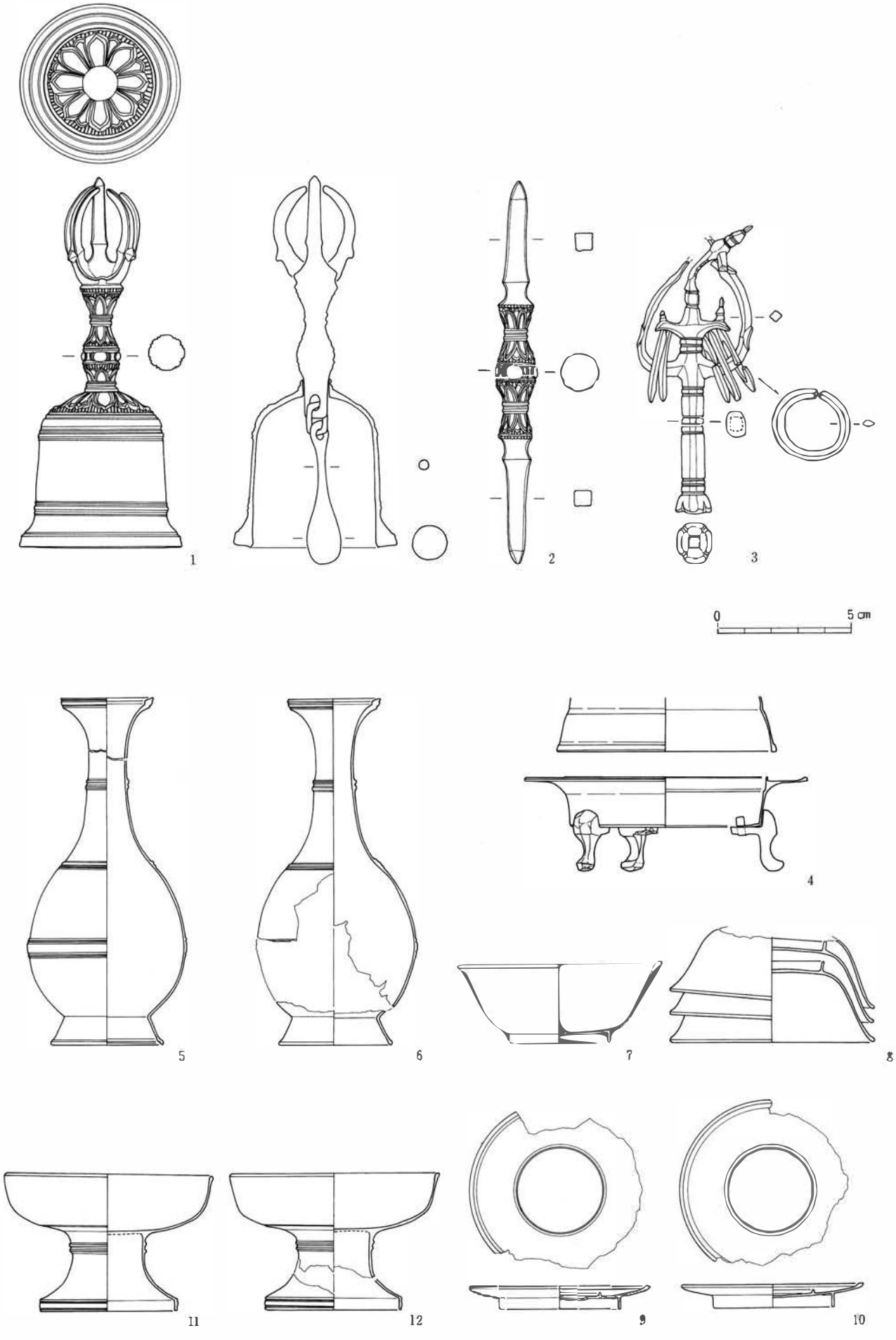
火舎は原形を留めておらず、脚部と火炉、蓋の破片十数点があり、これらを図上で復元したのが第７図４である。火炉は大きさは、口縁部径が10.6cm・底部径が7.2cmで、脚部も含めた高さは3.7cmである。火炉の形態は強く湾曲して外に開くもので、内部には受け状の浅い段がめぐり、幅1.4cmの鍔の端部は僅かに肥厚する。鑢によって成形された痕跡が残る３つの猫脚が付き、猫脚がある火炉底面内には、固定するための直径２〜３㎜の鋲が各１個認められる。蓋は口縁部から下段のくびれまでの破片で、口縁部径は8.2cmである。今回の調査では甑の破片が出土していないことから、単層式の火舎である可能性が高い。

花瓶は徳利形のものが２点出土しており、頸部で破損しているが接合し完形となるもの（第７図５）と胴部下半が欠損しているもの（第７図６）がある。大きさは口径3.5cm・胴径6.0cm・高台径4.2cmで、高さは13.1cmある。いずれも轆轤挽き仕上げの素文のもので、口縁部・頸部・肩部に二線の紐帯、胴部に子持三線の紐帯が施されており、各紐帯に微妙な違いがある。また、高台端部に違いが見られ、第７図５は内面に面取りと沈線が施されているのに対し、第７図６は丸くおさめられている。

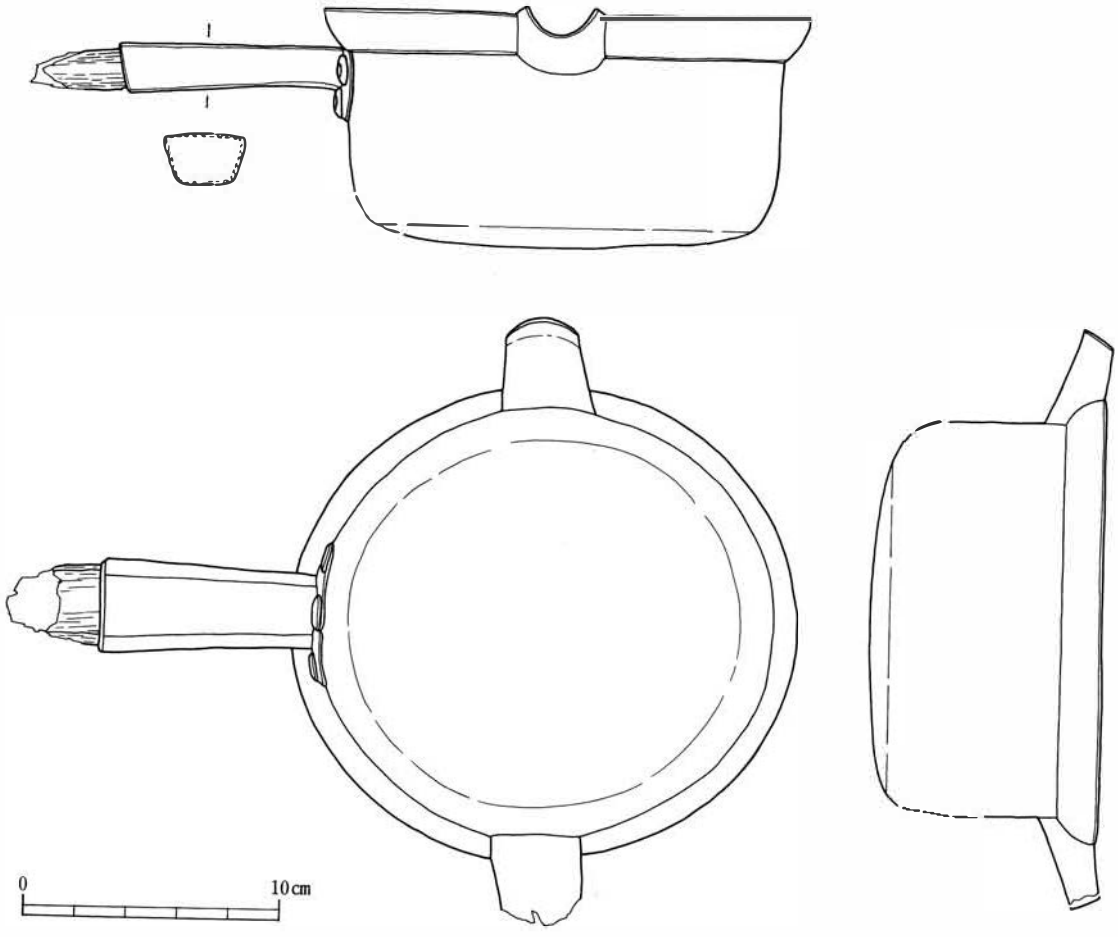
六器鋺・台皿は轆轤挽き仕上げの素文形式のものである。鋺は、完形のもの１点（第７図７）と３点が重なったもの（第７図８）



第６図　埋納遺構から出土した遺物 (1)



第 7 図　埋納遺構から出土した遺物 (2)



第８図　埋納遺構から出土した遺物 (3)

のほかに、２点が破片で出土しており、第７図７は口径7.7cm・高さ3.0cmで、高台は直径3.8cm・高さ0.4cmである。体部は腰の張りが弱く逆台形を呈し、口縁は反り気味に開き、端部が僅かに丸みを持つ。台皿は器形がわかるものが２点(第７図９・10)、他に多数の破片があり、高台部の破片から５点以上あったものと判断される。大きさは口径6.8cm・高さ0.9cm、高台径4.5cm・高さ0.5cmである。口縁は僅かに内湾し、端部は上側を面取り風に仕上げている。

飯食器も轆轤挽き仕上げの素文のもので、２点出土している。鋺部が破損しているが全体の形を留めているもの（第７図11）と台脚部を破損しているもの（第７図12）があり、大きさは口径7.8cm・台脚径5.2cm・高さ5.2cmである。台脚上部に二線の紐帯を廻らし、端部外面には２条の沈線が施されている。

手錫杖は杖頭部が出土しており、全体的に腐蝕が進んでおり遺存状態が悪く、輪部上端が破損している(第７図３)。輪部の左右上下に三日月形を付し、頂には宝塔を置いており、中央には同様の宝塔状の意匠を表現して左右に宝塔または水瓶と考えられる意匠を配している。穂部には輪部内に２箇所と下部に３箇所の計５箇所の紐帯を配し、下端は四葉の花弁風に仕上げている。柄部を受ける孔は４×５㎜の長方形であった。遊環は一方に３個、他方に２個現存している。

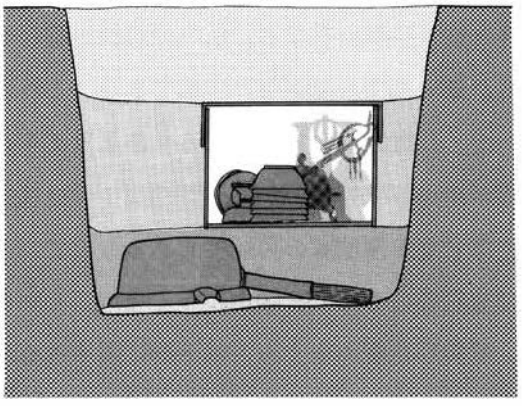
銚子は両口のもので、底部周辺が欠損しているものの、他は原形を留めており、把手の木質の一部も炭化して残っていた(第８図)。大きさは現存長30.4cm、本体の直径は19.0cm、青銅製の把手の長さは9.1cm、高さは9.2cmである。本体と把手は３個の鋲で留められている。

第3章　考察とまとめ

1．埋納遺構と出土遺物について

【埋納遺構の復元】

埋納遺構は平面形が長軸45cm以上の不整形で、底面が長軸38cm・短軸26cmの楕円形を呈する土壙で、旧表土面から掘り込まれており、深さは46cmである。調査の結果、埋納遺構は底面に青銅製の銚子を伏せて埋めた後、密教法具を収めた曲物を埋納したことが明らかとなった。



第9図　埋納遺構の復元模式図（南北断面図より作成）

埋納遺構の堆積土の状況から埋土は4つの層に大別され、I層は底面に薄く分布する埋土で、土壙を掘った際に底面付近に残った土か、底面を平らにするための置き土と考えられる。II層は銚子を埋めた土で、III層は曲物の周囲に入れられた埋土であり、曲物と同じ高さまで埋め戻されたと考えられる。IV層は曲物の上に最後に埋め戻された土である。以上のことから、埋納手順は①埋納するための穴を掘り、把手を北向きにした銚子を伏せて底に置き、②銚子を埋め、③この上に密教法具を入れた曲物を置いて、④曲物を埋める、と復元できる。

検出した際、密教法具が納められた曲物は北側へ傾いていたが、これは本来水平に置かれていたものが、南側の銚子本体と重なっている部分は変化することはなかったが、北側の把手部分は木質部が腐朽したり、時間の経過とともに埋土が締まっていくなどして傾いたものと推定される。

曲物内の密教法具の配置は、出土状況から南半部は側板に沿って西側に飯食器1点(第7図12)、南に飯食器1点（第7図11）が口縁を下に伏せて置かれ（第5図平面図①、写真図版1－5～8）、東には曲物底板に残っていた痕跡（第6図）から六器鋺が口縁を下に伏せて置かれていたと考えられる。六器鋺には3点が重なった状態で見つかっているもの（第7図8、写真図版4－5・6）があるが、本来は6点が重なっていて、飯食器側に持たれかかるような状況で確認された六器鋺（第7図7）は一番上に重ねられていたものが何らかの原因で外れ、検出された位置に残っていたと想定される。破損が著しい火舎（写真図版4－1）と六器鋺・台皿は、重機で掘削した際に引きずられるなどして破損したと考えられ、重機で掘削した際に曲物の中央を分断しており、調査区南壁際において破片で検出した火舎は断面にめり込むような状況の破片が見つかっていることから、火舎は曲物中央に、六器台皿は飯食器の西側に立てかけるように置かれていたと推定され、他の遺物は北半部に置かれていたと考えられる。

【出土遺物の検討】

ここでは、密教法具について個々に検討し、その特徴や類例から製作年代を考えていきたい[註1]。

独鈷杵は、鈷部が細身で鋭さを留め、把部中央の鬼目は横長で大きいことから、古い様相を呈するが、鬼目の張出しがやや弱く、鈷部の長さが把部よりも僅かに短い特徴はより新しい様相とされており、13世紀代のものと考えられる。五鈷鈴は小振りのもので、鈷部の中鈷や把部の鬼目や蓮弁飾りが独鈷杵と似た特徴を有する。鈷部の脇鈷の張りや把部中央の張りが弱く、鈷部と把部が華奢な印象を受ける。鈷・把部と鈴身部は別鋳であり、これらの特徴から、出土した遺物の中では最も新しい様相を持つが、13世紀代にはおさまるものと考えられる。火舎は火炉の形態が強く湾曲して外に開くもので、甑が出土していないが、火炉内面に受け状の窪みがあり、蓋も高さがあることから、鎌倉時代以後に主体となる重層式の可能性もあるもので、おおよそ鎌倉時代の範疇におさまるものと考えられる。花瓶は徳利形のもので、類例が多くないことからどこまで遡るかは不明な点が多い。本遺跡出土のものは、徳利形花瓶の中でも古い一群に属するものと考えられ、13世紀代の年代が想定される。六器は鋺・台皿とも高台が低く、口縁端部が玉縁とならずに僅かに肥厚するもので、鋺は口縁部が外に開き、鎌倉時代の典型的な特徴を有し、出土遺物の中では最も古手の様相を持つものである。飯食器は鋺部の径が比較的大きく浅いもので、台脚部は長脚化しておらず、他の遺物とほぼ同じ時期のものと考えられる。手錫杖はこれまで見てきた法具類と大きな年代的な差はないと考えられる。

以上、遺物を個別に見てきたが、遺物により小さな年代差はみられるものの、鎌倉時代に位置付けられ、おおよそ13世紀代のものと考えられる。

【密教法具出土遺跡の検討と埋納遺構の性格】

郷主内遺跡で発見された金剛杵・金剛鈴と飯食器、一面具の一括埋納遺構は、東北地方で初めての発見である。金剛杵や金剛鈴を含む密教法具が遺構から出土した例には、経塚や城館跡、寺院跡から出土した例が知られており、これらの多くは密教法具が個々に少数出土しているのみである。

密壇具や一面具などの密教法具がまとまって出土している遺跡は、管見では全国で22遺跡知られており(註2)、これらの遺跡をまとめたのが表1である。内訳は埋納遺構とその可能性のある遺跡が8遺跡、経塚や山岳関係の祭祀遺跡が6遺跡、寺院・寺院跡が5遺跡、城館跡1遺跡、不明2遺跡で、これらのうち明確な遺構に伴っているのは9遺跡である。埋納遺構とその可能性のある8遺跡のうち、埋納遺構と確認されているのは佐賀県五右衛門谷遺跡のみで、他は調査時に遺構が不明であったり、田畑などを耕作中に偶然発見されたものである。

郷主内遺跡の出土遺物の構成で特徴的なものは手錫杖と銚子である。22遺跡の中で錫杖が出土しているのは、経塚・祭祀関連遺跡が3遺跡、寺院関連遺跡が3遺跡の計6遺跡で、銚子と同様に液体を注ぐ遺物である提子が出土しているのは2遺跡である。また、銚子は、類例が東北地方では岩手県陸前高田市軍見洞遺跡から1点出土している(相原康二 2000)。これらのうち、郷主内遺跡の遺物構成と最も良く似ている遺跡は新潟県くつがた遺跡で、郷主内遺跡と同じく曲物内から発見されており、独鈷杵・五鈷鈴・火舎・花瓶（徳利形）・六器・飯食器のほか、提子が出土し、個々の遺物においても似た特徴が認められる。くつがた遺跡では、法具など1点1点が梵字の種子が墨書された和紙に包まれており、郷主内遺跡で見つかった繊維質も同様のものであった可能性も否定できない。くつがた遺跡

表１　密壇具及び一面具等を出土した遺跡一覧

№	遺跡名	所在地	出土遺構	出土遺物	備考	性格	年代
1	郷主内遺跡	宮城県角田市	埋納遺構	火舎1・五鈷鈴1・独鈷杵1・六器6・飯食器2・花瓶2・手錫杖・銚子	銚子以外は曲物内に納められていた。	埋納遺構	13c後半以降
2	上之国勝山館	北海道桧山郡上ノ国町	不明	火舎・香炉・金剛鈴・六器・飯食器・数珠	硯石・合子が共伴。	不明	不明
3	リュウガイ遺跡	茨城県那珂郡那珂町	不明	火舎・五鈷鈴・金剛盤・六器6・飯食器2・花瓶1・塗香器2・鰐口2	鰐口に紀年銘（応永18年・応永20年）。	埋納遺構	15c
4	男体山山頂遺跡	栃木県日光市男体山	経塚	三鈷杵・独鈷杵・花瓶・鏡・鈴・鈴鐸・三鈷剣・錫杖・鰐口・柄香炉等	経筒に紀年銘（承久3年・安貞3年等）。	祭祀・経塚	古代～近世
5	延命寺跡	群馬県吾妻郡嬬恋村	寺跡	火舎4・五鈷鈴2・五鈷杵1・三鈷杵1・金剛盤2・花瓶4・鏡・銅鋺・燭台皿・錫杖等	木製仏像・神像・光背・厨子・銅等出土。	埋没遺跡	18c
6	小山出土品	埼玉県坂戸市小山	不明	五鈷鈴2・独鈷杵1・金剛盤1・飛鉢1・香水杓1・鋺1		不明	室町
7	冒聖寺跡	新潟県加茂市黒水	寺跡	五鈷鈴1・五鈷杵2・六器・花瓶・木製三鈷杵	瓷器系壷・鋺・皿が共伴。	不明	室町
8	木崎山遺跡	新潟県中頸城郡柿崎町	不明	五鈷鈴1・六器（碗）・台皿5・飯食器3・花瓶1	古瀬戸四耳壺(13c)と共伴	埋納遺構(地鎮)	14c
9	くつがた遺跡	新潟県新井市栗原	不明	火舎1・五鈷鈴1・独鈷杵1・六器12・飯食器4・花瓶2・提子1	曲物と青磁皿2点出土。	埋納遺構か	14c
10	五智国分寺	新潟県上越市五智	不明	火舎1・三鈷杵2・独鈷杵2・錫杖1・羯磨杵2		鎮壇具	不明
11	宮森廃寺	富山県礪波市宮森	不明	独鈷杵1・金剛盤1・塗香器1・灑水器1・閼伽桶1・提子1		不明	不明
12	関平遺跡	長野県更埴郡戸倉町	不明(経塚)	火舎1・五鈷鈴1・六器6・花瓶2		祭祀・経塚?	中世
13	修善寺裏山出土	静岡県田方郡修善寺町	不明	火舎1・独鈷杵1・六器・花瓶・水晶数珠玉	火打鎌・砥石も出土。	不明	10c
14	大竹遺跡	静岡県掛川市水垂	不明	五鈷鈴・三鈷杵・独鈷杵・金剛盤・飯食器・二器・水瓶	周辺から永楽通宝等の古銭大量出土。	鎮壇具か？	16c後半
15	京都大学構内遺跡	京都府京都市左京区聖護院	土坑	火舎1・六器1・鋺1	白磁(壺・碗・水注)・青磁（碗）等も出土。	不明	13c末～14c初
16	金峯山経塚	奈良県吉野郡天川村山上ヶ岳	経塚	三鈷杵・独鈷杵・錫杖	経筒・鏡像・懸仏も出土。	経塚	11～13c
17	大峰山頂遺跡	奈良県吉野郡天川村山上ヶ岳	経塚	三鈷杵・独鈷杵・六器・錫杖・磬・柄香炉	経筒・経軸端・仏像・鏡像等も出土。	祭祀・経塚	9～13c
18	根来寺坊院跡	和歌山県那賀郡岩出町根来	谷部包含層	独鈷杵・六器・花瓶・錫杖	銅鈴・金銅毛抜・金銅火箸等も出土。	包含層	16c後半
19	那智経塚	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町	経塚	火舎・五鈷鈴・三鈷鈴・独鈷鈴・塔鈴・宝珠鈴・五鈷杵・六器・花瓶・錫杖等	経筒・金銅仏・懸仏等の遺物多数出土。	祭祀・経塚	7～13c
20	三山口遺跡	鳥取県八頭郡八東町山口	不明	火舎・五鈷鈴・五鈷杵・金剛盤・六器・飯食器・花瓶・二器・塗香器・灑水器		埋納遺構	14c
21	上竹経塚	岡山県浅口郡金光町上竹	経塚	五鈷杵・三鈷杵・六器・飯食器	経筒蓋が共伴。	経塚	不明
22	五右衛門畑遺跡	佐賀県藤津郡塩田町	埋納遺構	五鈷鈴・六器・二器	褐釉壷に埋納。古銭と木製大黒天出土。	埋納遺構	19c

では青磁皿３点が共伴しており、法具の特徴や青磁皿の年代から14世紀前後に位置付けられている。

埋納遺構の性格については、霊山信仰による登攀修行に伴うものとする見解（佐野大和 1972）や地鎮の説などがある。新潟県くつがた遺跡の検討を行った金子拓男氏と宮腰公健氏は「追善供養を時代の主流とする中世にあって十三仏を基礎として埋納する一型態」とする考え方を示している（金子・宮腰 1977）。また、三谷巍氏は「来世に備えた法具の土中埋納」や周辺の中世寺院と関連した「加持祈禱」による可能性を指摘し（三谷巍 1980）、三輪喜六氏は仏法護持的性格を持った埋納遺構の法具塚と位置付け（三輪喜六 1977）、静岡県大竹遺跡の研究を行った足立順司氏は密教とは異なる仏具も出土していることから一種の地鎮めとする考えを示している（足立順司 1981）。

郷主内遺跡の埋納遺構は、周辺の遺跡との位置的関係を踏まえると、他の密教法具出土遺跡の検討から、中世の館跡や修験の寺院との関連が想定される。今回遺構が見つかった周辺からは、遺構の性格を明らかにするようなものは発見されていないが、密壇具ともいうべき独鈷杵・五鈷鈴と飯食器、一面具が一括埋納され、手錫杖と両口の銚子が共伴している事実は、中世における密教法具のあり方の一端を示しており、密教法具の多様性を物語っていると言えるだろう。

註１．出土した密教法具の独鈷杵・五鈷鈴・花瓶・六器鋺については、奈良国立博物館の阪田宗彦氏、東京国立博物館の原田敏一氏に実見して頂き、多くのご教示を賜ったほか、遺物の観察方法についても有益なご助言を頂き、合わせて関連する資料を実見させて頂いた。また、文献・資料については、安達訓仁氏から多くの提供を受けた。

なお、密教法具の部分名称については、金剛鈴・金剛杵は『特別展　密教工芸神秘のかたち』（奈良国立博物館 1992）に従うこととし、これ以外のものについては、阪田宗彦『日本の美術282　密教法具』（至文堂 1989）に従った。

註２．表１については、『考古学論究』第５号（立正大学考古学会 1999）をもとに作成した。

２．まとめ

1950年代後半（昭和30年代前半）の地籍図をもとに、池や堀、水路、細長い水田部分を堀跡等の施設と推定し、郷主内遺跡とその周辺をみてみると（第２図）、堀跡・溝跡は広範囲に及んでいると考えられ、いくつかのトレンチで堀跡や溝跡が確認された(註1)。郷主内館跡がある旧嶋田村は、江戸時代に

在郷屋敷・家中屋敷を有する家臣・給人が14氏知られており（齋藤悦雄 1986)、これらの在郷屋敷・家中屋敷などの一部が含まれている可能性も否定できない。

郷主内館跡は平城であり、『仙台領古城書上之覚』の記述通り、伊達氏が相馬氏との伊具郡領有をめぐる争いに際し、前線の拠点である矢ノ目館の後詰として築いたとも考えられるが、今回の調査で中世の遺物が確認されたことにより、中世から存在した館跡を改修・拡張した可能性が高くなった。

今回、埋納遺構が見つかった区域も、郷主内館跡と関連する区域である可能性が高く、茶毘に関連する遺構も見つかっていることから、寺院などの存在も想定される。密教法具埋納遺構が見つかった地域の小字名は「寺田」となっており、以前に寺院があったことを示しているとも考えられる。また、伊具郡内には、仙台藩における本山派修験の仙南地域の中心であった、伊具・名取・宇多３郡を霞地とする東光院と柴田・刈田郡を霞地とする宗吽院があり、これらとの関連も想定される。今後、これらの可能性を踏まえた周辺の調査により、地域の歴史に新たな光が注がれることを期待したい。

註１．1950年代後半の地籍図については、角田市生涯学習課文化財保護係を通じて角田市税務課所有の資料の提供を受けた。

<引用・参考文献>

相原康二　2000　「銚子(さしなべ)と提子(ひさげ)　―奥州藤原氏の酒器―」『岩手県立博物館だより』No.84　岩手県立博物館

足立順司　1981　「掛川市大竹遺跡の研究」『森町考古』16　森町考古学会

石田茂作　1977　『仏教考古学論攷』５　思文閣

角田市史編さん委員会　1984　『角田市史１　通史編(上)』　角田市

角田市史編さん委員会　1986　『角田市史１　通史編(下)』　角田市

金子拓男・宮腰公健　1977　「くつがた遺跡出土の密教法具」『月刊文化財』７月号

齋藤悦雄　1986　「仙台藩の成立と角田」『角田市史2　通史編(下)』　角田市

佐々　久　1961　「仏教史」『宮城県史12　学問宗教』　宮城県史刊行会

佐野大和　1972　「二荒山」『神道考古学講座』第５巻　雄山閣

『新版　仏教考古学講座』第５巻　1984　雄山閣

鈴木規夫　1989　『日本の美術283　供養具と僧具』　至文堂

阪田宗彦　1989　『日本の美術282　密教法具』　至文堂

東京国立博物館　1967　『東京国立博物館図版目録　経塚遺物篇』

東京国立博物館　1990　『東京国立博物館図版目録　仏具篇』

中川久夫他　1986　『土地分類基本調査　角田』　宮城県

奈良国立博物館　1992　『特別展　密教工芸　神秘のかたち』

阪田宗彦　1989　『日本の美術282　密教法具』　至文堂

藤沼邦彦　1981　「宮城県」『日本城郭大系」第３巻　新人物往来社

三谷巍　1980　「三山口遺跡出土密教法具の研究」『鳥取県博物館研究報告』17　鳥取県立博物館

宮城県　1970　「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32　宮城県史刊行会

立正大学考古学会　1999　『考古学論考』第５号

付篇 1

保　存　処　理

東北歴史博物館 研究員　及　川　　規

1　事前調査

土砂が付着したまま搬入された銅製遺物・有機質遺物の残存状態をX線などにより観察した。

銅製遺物は、比較的良好な状態で残っているもの（独鈷杵や花瓶など）から、金属質を喪失し、薄く、わずかの力が加わっただけで破損しそうなもの（六器など）まで、様々な劣化状態を示していた。表面のサビも、目視で判断する限り、緑青に覆われて丈夫な保護層を形成しているものと、ブロンズ病と思われる緑灰色を呈しているもの(錫杖頭など)があり、一様ではなかった。

有機質遺物では、法具を収めていた曲物の底板など3～4点が比較的良好な残存状態だった。そのほか、炭化した木質破片や腐敗・劣化した繊維質などが見られた。花瓶内部の土砂中にも繊維質が残存していた。処理前の状態を図1～図4に示した。

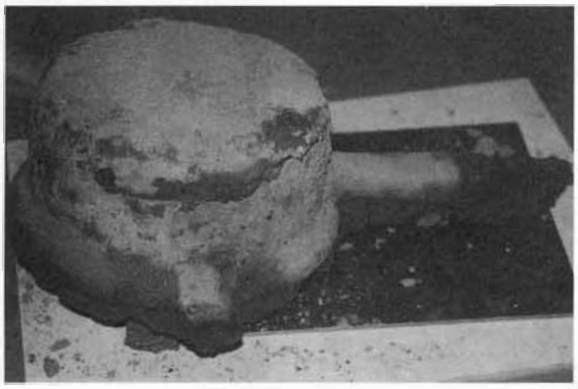


図1　両口銚子（処理前）

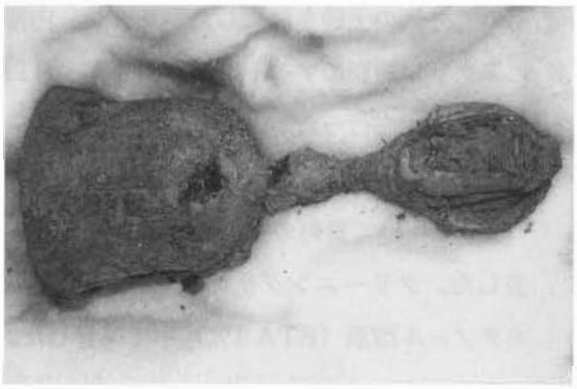


図2　五鈷鈴（処理前）

図3　六器（処理前）

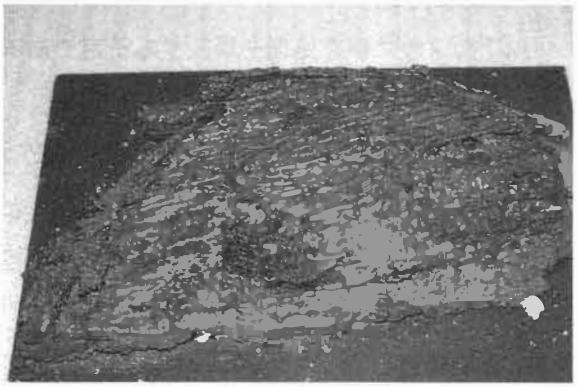


図4　曲物底板（処理前）

2　前処理

①　銅製遺物

腐食・劣化の進行を防ぐ応急的な処置として、土砂が付着したままの遺物をベンゾトリアゾール（BTA)のエタノール溶液（1％）中に浸漬（両口銚子にはパスツールピペットを用いて繰り返

し滴下)し、脱水ならびに防錆処理を施した。数日間浸漬して風乾するという操作を5回反復した。クリーニング処理を開始するまで、エタノール溶液（BTA 1%)中で保管した。

② 有機質遺物

曲物の底板は、土砂が付着したままの状態で水溶性アクリル樹脂溶液（1%）を繰り返し噴霧して仮強化を行った後、密閉容器中で湿潤状態を保持して保管している。

曲物以外の有機質遺物は水中に4週間（1週間毎に水替え）浸漬した後、エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム塩（EDTA2Na）水溶液中で脱鉄した（3回反復)。その後、水中に浸漬してEDTA2Naを除去し(3回反復)、ホウ酸－四ホウ酸ナトリウム(混合比＝7：3)水溶液(0.5%)中に浸漬して保管している。

3 クリーニング

① 両口銚子

X線を用いて劣化状態や遺物内部に残存物が無いことを確認した後、エタノール溶液（BTA1%）を滴下しながら、メス、竹串、ブラシ等を用いて外側の土砂を除去した。その後、内部に土砂を残したまま、外側にアクリル樹脂のアセトン溶液（1%、BTA 0.5%混）を繰り返し塗布して仮強化を行った。

② その他の銅製品

X線を用いて資料の状態を確認（図5）した後、上と同様に土砂を除去した。クリーニング後の資料は、実測、写真撮影等が終了するまでエタノール溶液（BTA 1%）中で保管した。

図5 X線写真（五鈷鈴）

4 今後の方針

以下のように保存処理を継続する予定である。

① 銅製品

両口銚子は、外側をアクリル樹脂で強化しながら、内部に残存している土砂を除去する。その後、クリーニングを終了した他の銅製品とともに、脱塩（必要性や方法等については、資料担当者や東北芸術工科大学保存科学研究室等と協議しながら判断する)、樹脂含浸（BTAを添加したアクリル樹脂を使用)、接合の順で処理を行う。

② 有機質遺物

曲物底板の土砂を除去した後、他の有機質遺物とともに、脱鉄、ポリエチレングリコール水溶液含浸、真空凍結乾燥、表面処理、接合の順で処理を行う。

Gトレンチを西からのぞむ（ほぼ中央がGトレンチ）

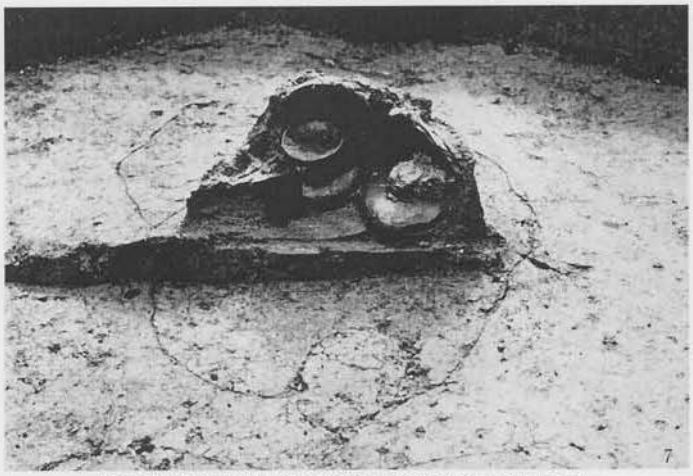
Gトレンチで検出した火葬遺構（左）と土壙（右）（南から）

掘り下げ前の埋納遺構断面（北から）

掘り下げ後の埋納遺構①（北から）

掘り下げ後の埋納遺構②（北西から）

掘り下げ後の埋納遺構③（上から）



周囲を掘り下げた段階での埋納遺構①（北から）

周囲を掘り下げた段階での埋納遺構②（北西から）

写真図版 1

周囲を掘り下げた段階での埋納遺構③（北東から）

周囲を掘り下げた段階での埋納遺構④（南から）曲物側板と銚子底部

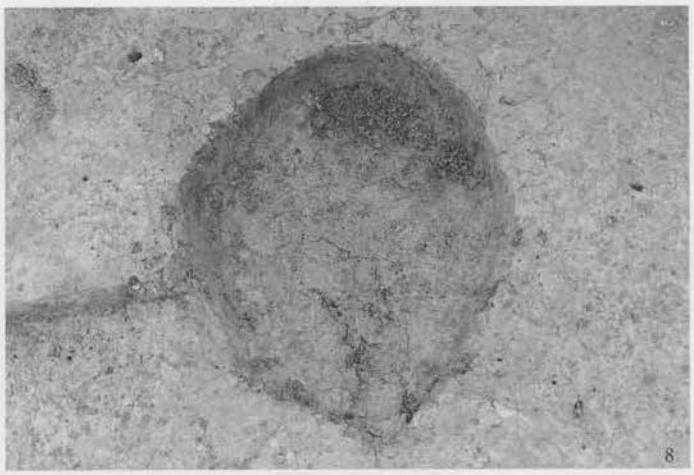
周囲を掘り下げた段階での埋納遺構⑤（上から）

密教法具を取り上げた状況（北から）

曲物底板を取り上げた状況（北から）

銚子の検出状況①（北から）

銚子の検出状況②（北東から）



完掘状況（北から）

写真図版 2

1

2

3

写真図版 3

写真図版 4

一本柳遺跡・小沼遺跡

目　　次

Ⅰ　はじめに ……141
Ⅱ　発掘調査の成果 ……142
　1　発掘調査の方法と経過
　2　基本層序
　3　発見された遺構と遺物
Ⅲ　ま と め ……148

調 査 要 項

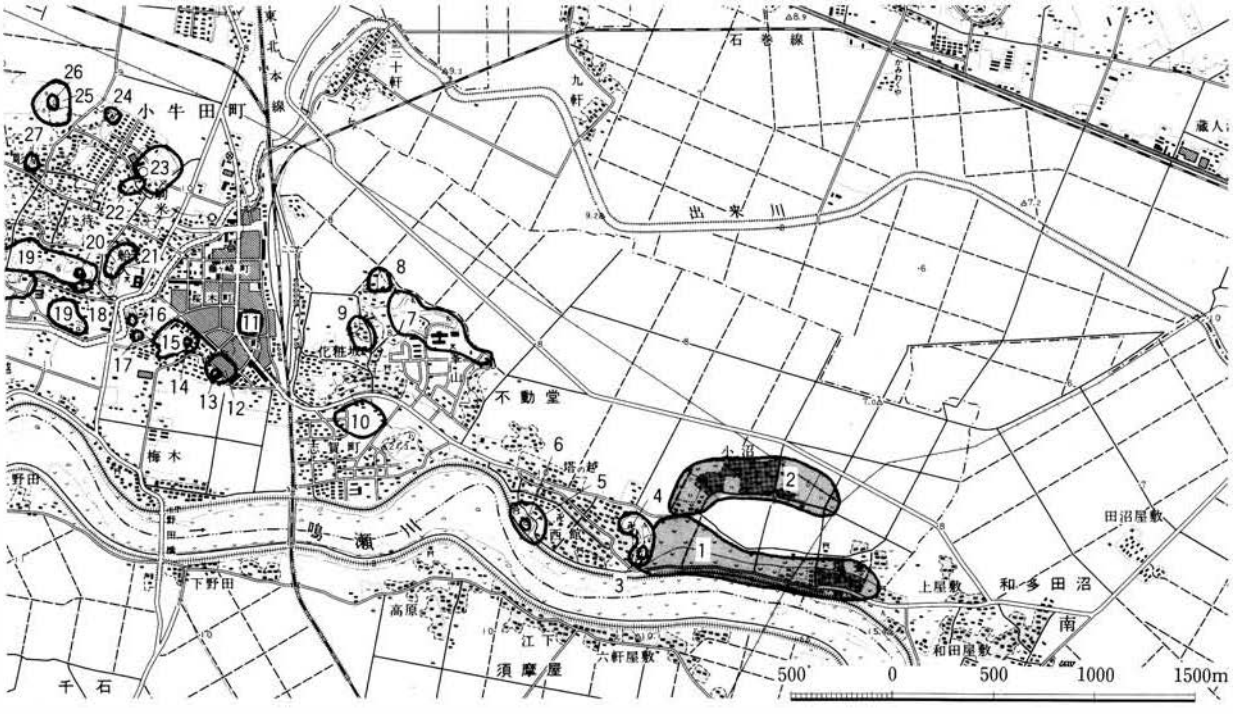
遺 跡 名：一本柳遺跡（いっぽんやなぎいせき）
（宮城県遺跡地名表登載番号：39044、遺跡記号：ＩＺ）
小 沼 遺 跡（こぬまいせき）
（宮城県遺跡地名表登載番号：39033、遺跡記号：ＴＮ）
所 在 地：宮城県遠田郡小牛田町一本柳・小沼　他
調査原因：出来川右岸地区（担い手育成）基盤整備事業
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
高橋栄一、引地弘行
調査期間：2000年（平成12年）11月13日～12月７日
調査対象面積：3,640㎡
調査面積：1,750㎡（事前調査 790㎡、確認調査 960㎡）
調査協力：小牛田町教育委員会、宮城県古川産業振興事務所、小牛田町土地改良区、大場建設

Ⅰ はじめに

一本柳遺跡は、遠田郡小牛田町一本柳・新一本柳・塩釜に、小沼遺跡は同町小沼・勘堂・二ツ壇に所在する。これらの遺跡は小牛田町役場の南東約3km離れた不動堂地区にあり、南郷町と境を接している。地形的には、崑岳丘陵と大松沢（鹿島台）丘陵が最も接近し、大崎低地が狭くなる東縁部にあたり、鳴瀬川左岸の自然堤防上に立地している。（第1図）

一本柳遺跡は、奈良・平安時代、中世、近世にいたる東西1km、南北0.3kmにおよぶ遺跡である。平成7年から5ケ年間にわたって、建設省東北地方建設局による鳴瀬川の堤防改修と中流堰建設計画に伴う発掘調査が行われた。奈良・平安時代では掘立柱建物群が規則的・継続的にあり、官衙的集落であった可能性が高い。また、中世では道路跡や掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡が検出された。溝で区画された屋敷地が12以上確認され、そのうち東西70m、南北40mの規模をもつ屋敷地は在地領主クラスの武士の屋敷地であったと考えられている（山田・伊藤：1998、茂木・岩見：2001）。

小沼遺跡は、これまで土師器・須恵器、青磁・白磁が発見されており、古代・中世の集落跡と考えられている（茂木：2000、小牛田町史編纂委員会 1970）。



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	一本柳遺跡	集落	奈良・平安、中世、近世	10	志賀堂城跡	城館	中世	21	船入遺跡	散布地	縄文後期
				11	京錦塚古墳	前方後円墳	古墳中期	22	八幡古墳群	円墳	古墳後期
2	小沼遺跡（狐山遺跡を含む）	散布地	古代・中世	12	鑓塚遺跡	散布地	古代	23	駒米遺跡	集落	縄文、古墳中・後期、奈良・平安中世、近世
				13	鑓塚古墳	円墳	古墳後期				
3	皎善寺古墳	円墳	古墳	14	貝殻塚古墳	円墳	奈良				
4	皎善寺館跡	城館	中世	15	宗山貝塚	貝塚	縄文早期	24	東谷地古墳	円墳	古墳後期
5	西館跡	城館	中世・近世	16	保土塚古墳	円墳	古墳中期	25	坪沼遺跡	散布地	古代
6	鶴頭山古墳	古墳	古墳	17	後藤神社古墳	円墳	古墳中期	26	坪沼古墳	円墳	古墳
7	宗山遺跡	散布地	縄文晩期、古代	18	蜂谷森横穴墓群	横穴墓	古墳後期	27	彫窟遺跡	散布地、古墳	縄文前・中・後期古墳、古代
8	小町井遺跡	散布地	古代	19	彫窟七城跡	城館	中世				
9	化粧坂遺跡	散布地	古代	20	蜂谷森古墳	円墳	古墳中期				

第1図　一本柳・小沼遺跡の位置と周辺の遺跡

II　発掘調査の成果

1　発掘調査の方法と経過

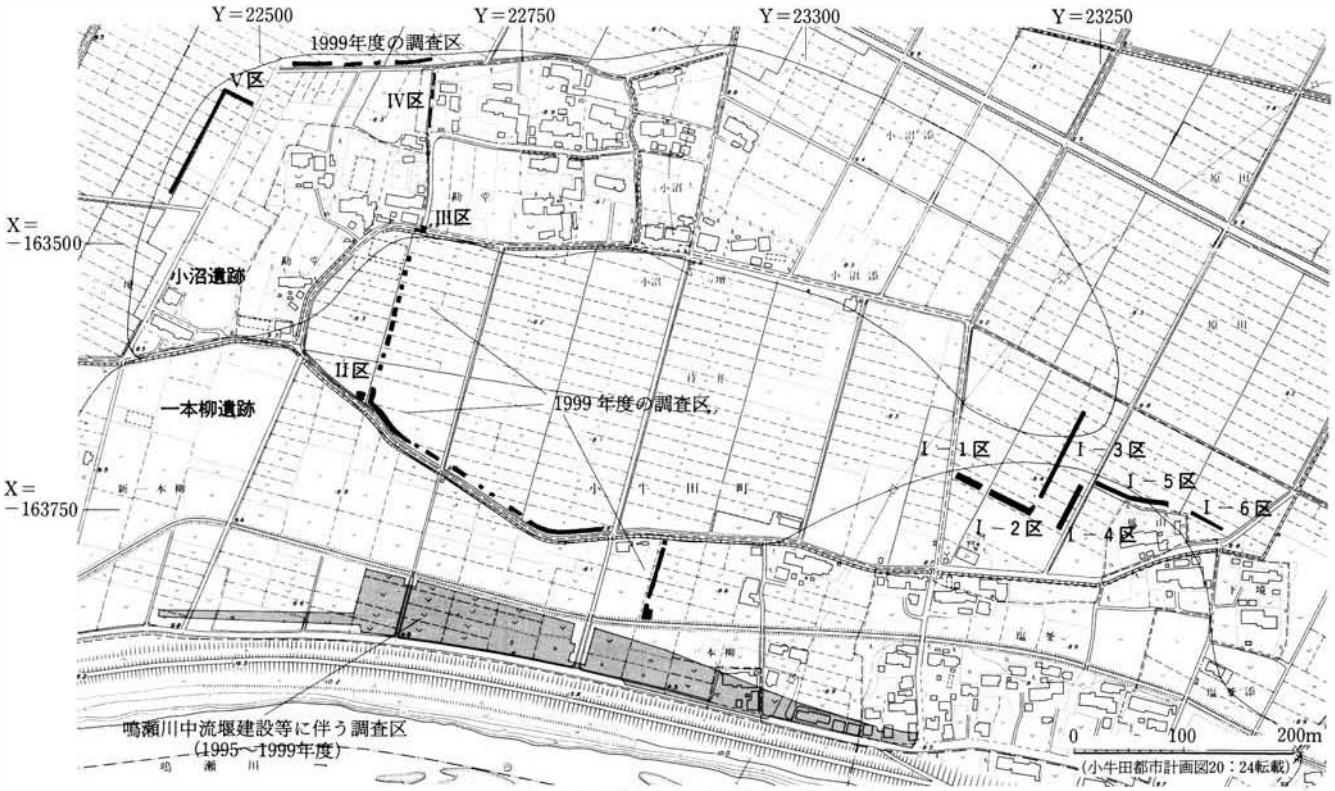
今回の一本柳・小沼遺跡の発掘調査は、宮城県古川産業振興事務所が主体の出来川右岸地区（担い手育成）基盤整備事業に係る第２次調査である。

平成11年度の調査では一本柳遺跡において古代・中世の建物跡、土壙、溝跡、畦畔状遺構が検出されたが、小沼遺跡では遺構・遺物は発見されなかった。今回の第２次調査では、用水路・揚水機設置部分及び道路部分を対象に行った。調査区は一本柳遺跡の北東部をＩ区、中央北部をII区、小沼遺跡の南部をIII区、北部をIV区、西部をＶ区とした（第２図）。その結果、Ｉ区では土壙、溝跡、小溝状遺構、畦畔状の高まりを検出したが、II区では遺構は検出できなかった。一方、III・IV・Ｖ区で土壙、井戸跡、溝跡が検出された。

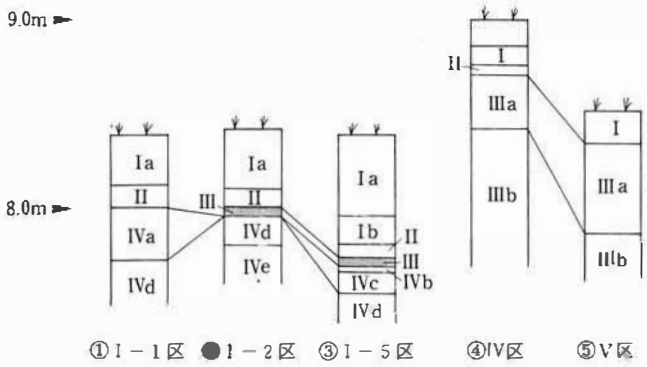
検出された遺構の平面図や調査区の位置などの記録に際しては、国家座標を基準としてＩ－１・２区は1/20の縮尺で、その他は1/100の縮尺で作成した。また、断面図は1/20で適宜作成した。写真記録は35㎜、６×７モノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いて作成した。

2　基本層序（第３図）

一本柳遺跡の基本層序は、Ｉ層は暗褐色の表土・耕作土、II層は黒褐色粘質土、III層は灰白色火山灰（10世紀前半）の一次堆積土、IV層は５つに細分され、ａ層は褐灰色～にぶい黄褐色粘質土、ｂ層は黄灰色粘土、ｃ層は５区のみにみられる浅黄色粘土、ｄ層はオリーブ灰色粘土、ｅ層は灰オリーブ色砂である。IV層上面で遺構確認を行った。基本層序第III層の堆積状況から、１・２区、３区北部は微高地で３区中央から４・５・６区にかけて低くなる。



第２図　調査区の位置と周辺の地形



一本柳遺跡

層	土色	土性	備考
I a	暗褐色(7.5YR3/4)	粘質シルト	表土・耕作土
I b	褐色(10YR4/4)	粘土	旧水田
II	黒褐色(7.5YR2/2)	粘質シルト	
III	灰白色(10YR8/1)	シルト	灰白色火山灰
IV a	褐灰色(7.5YR4/1)～にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘質シルト	酸化鉄
IV b	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	
IV c	浅黄色(2.5Y7/3)	粘土	I－5区のみ
IV d	灰色(5Y4/1)～オリーブ灰色(5GY6/1)	粘土	
IV e	灰オリーブ色(7.5Y6/2)	砂	

小沼遺跡

層	土色	土性	備考
I	灰黄褐色(10YR4/2～5/2)	シルト	表土・耕作土
II	黒褐色(10YR3/2)	シルト	下面に灰白色火山灰ブロックが部分的にみられる
III a	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	
III b	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂	

第3図　基本層序

小沼遺跡の基本層序は、I層は灰黄褐色の表土・耕作土、II層は黒褐色土、III層は2つに細分され、a層はにぶい黄色～にぶい黄橙色の粘質土、b層はにぶい黄橙色砂である。II層下面に灰白色火山灰（10世紀前半）のブロックが部分的にみられる。III層上面で遺構確認を行った。なお、II層は一本柳遺跡のII層に対応する。

3　発見された遺構と遺物

(1)　一本柳遺跡の遺構と遺物

I区（第2図）では、土壙14基、溝跡10条、小溝状遺構4面、畦畔状の高まり5条を検出した。遺物は土師器・須恵器が出土した。

A．土　壙

土壙は1・2区西側で14基検出した。土壙2・3、土壙9～11は小溝状遺構3・4と重複し、これより新しい。規模は長軸が1.7～4.5mで平面形が楕円形、溝状または不整形のもの（土壙4～7・11～14）、0.7～1.3mで平面形が楕円形のもの（土壙1～3・8～10）がある。断面形は皿状のものが多く、深さは11～23cmである。堆積土は焼土・炭を含む褐灰色粘土を主体としている。

［土壙3］1区西側で検出し、小溝状遺構4より新しい。平面形は径1.6mのほぼ円形で、深さは23cmである。断面形は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に細分され、1・3・4層は焼土・炭を含み、2層は人為的に埋め戻されている。

遺物はロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。土師器坏（第5図1）は底部に回転ヘラケズリが施され、須恵器坏（第5図2）は底部が回転糸切り無調整である。

［土壙9］1区西側で検出し、小溝状遺構4より新しい。平面形は長軸4.5m、短軸2m以上の不整形とみられ調査区南に延びている。堆積土は焼土を含む褐灰色粘土である。遺物はロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。須恵器坏（第5図8）の底部は回転糸切り無調整である。

［土壙14］1区西側で検出した。平面形が長軸0.7m以上、短軸0.35mの楕円形とみられ調査区北に延びている。深さは11cmで、断面形は皿状を呈するとみられる。堆積土は炭を含む褐灰色粘土である。遺物はロクロ調整の土師器坏（第5図7）が出土しており、底部に回転ヘラケズリが施されている。

これらの土壙の出土遺物をみると、土師器坏はロクロ調整で口径に対する底径の比が小さく、器高

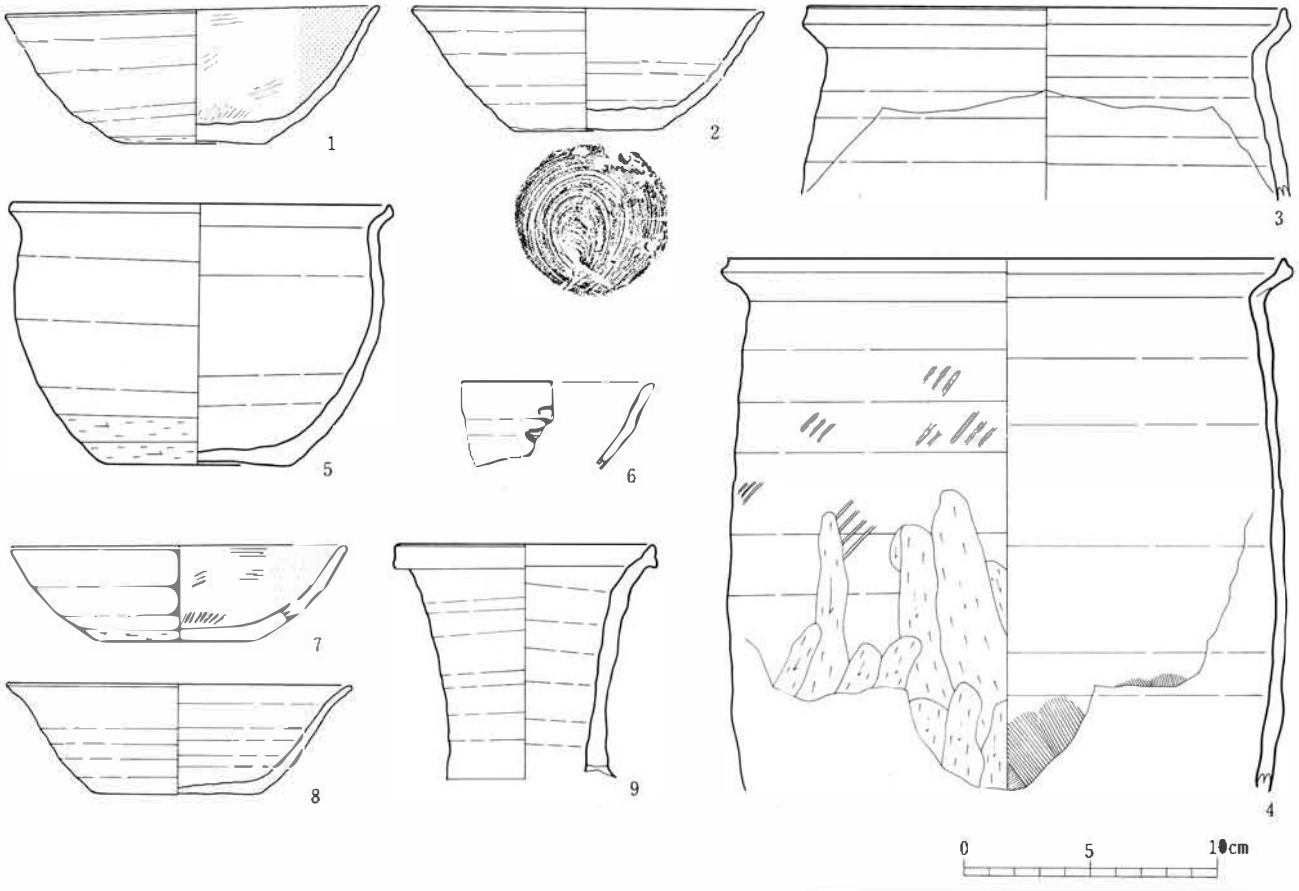
2・3・8B・8C）がある。

［溝1］1区東側で検出した南北方向の溝跡で、規模は上幅0.6m、下幅0.2m、深さ11cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に細分され、自然堆積である。遺物は出土していない。

［溝5・6］溝5は1区中央、溝6は3区南側で検出した南北方向の溝跡で、一連の溝跡とみられる。溝4より古く、検出長は約40mである。規模は上幅0.6～0.8m、下幅0.3～0.4m、深さ10～20cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は2～6層に細分され、自然堆積である。遺物は、非ロクロ調整の土師器甕、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・高台坏が出土している。須恵器坏の底部の切り離しにはヘラ切りと回転糸切りがあるが、図示できるものはない。

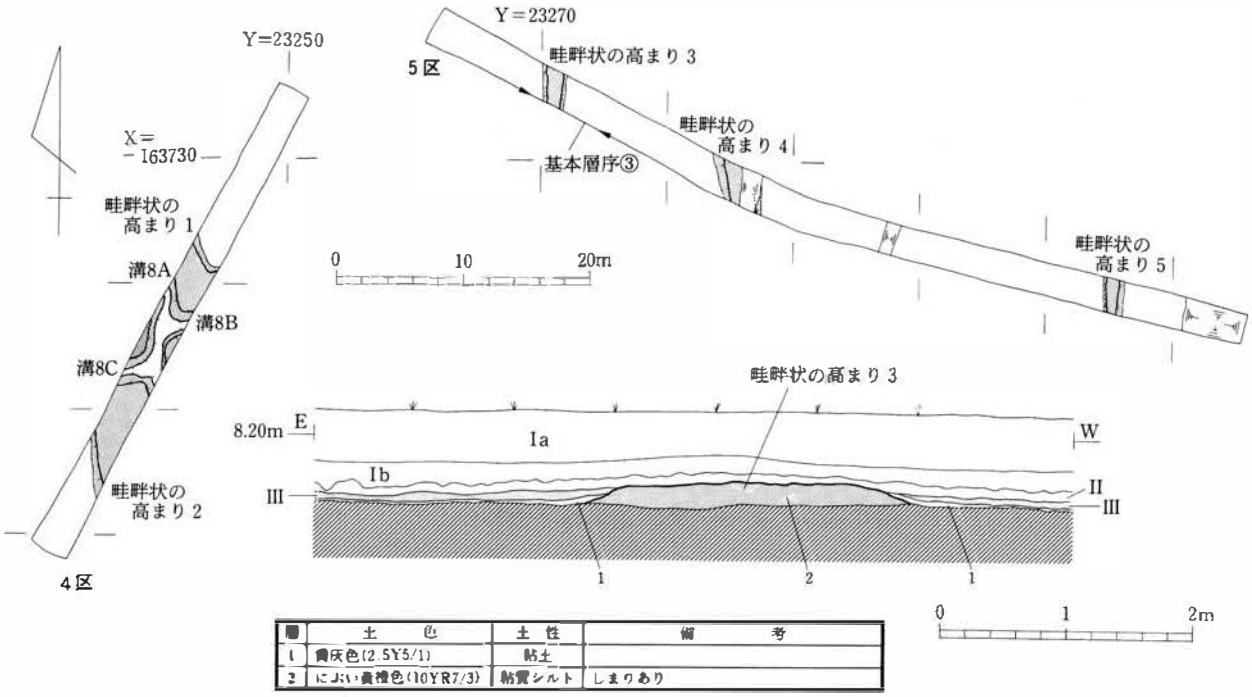
C．小溝状遺構

畝跡と考えられる溝状の掘り込みである小溝状遺構は4面検出した。1区西側では南北方向（小溝状遺構2）より東西方向（小溝状遺構1）が新しい。2区西側では土壙2・3、9～11より古く、東西方向（小溝状遺構4）より南北方向（小溝状遺構3）が新しい。規模は上幅が15cm～40cm、深さが5cm～18cmであり、断面形はU字形を呈する。遺物は小溝状遺構4からロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。須恵器坏の外面体部に墨書がみられる（第5図6）。



No.	出土遺構	種別	備考	口径	底径	器高	残存率	写真
1	土壙3	土師器・坏	外：ロクロナデ→体部下端回転ヘラケズリ、底：不明→回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ→黒色処理	14.8	5.9	5.5	1/3	2－8
2	土壙3	須恵器・坏	内外：ロクロナデ、底：回転糸切り→（周縁ナデ）	13.9	6.0	5.0	4/5	2－7
3	土壙3	須恵器・甕	内外：ロクロナデ	(19.0)	－	－	(口)1/4	
4	土壙3	土師器・甕	外：ロクロナデ→平行タタキ→体部ヘラケズリ、内：ロクロナデ→ナデ	(21.4)	－	－	1/4	
5	土壙3	須恵器・甕	外：ロクロナデ→体部下端回転ケズリ、底：回転糸切り→周縁ナデ、内：ロクロナデ	(15.0)	(7.4)	10.4	1/5	
6	小溝状遺構4	須恵器・坏	墨書「□」				小破片	2－12
7	土壙14	土師器・坏	外：ロクロナデ→体部下端回転ヘラケズリ、底：不明→回転ヘラケズリ、内：ヘラミガキ→黒色処理	(13.2)	6.0	3.8	1/3	
8	土壙9	須恵器・坏	内外：ロクロナデ、底：回転糸切り、無調整	(13.6)	(6.9)	4.4	1/4	
9	遺構確認面	須恵器・甕	内外：ロクロナデ、一部に自然釉が付着	10.0	－	－	頸部のみ	

第5図　I区出土遺物



層	土色	土性	備考
1	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	
3	にぶい黄橙色(10YR7/3)	粘質シルト	しまりあり

第6図　Ⅰ－4・5区遺構平面図・断面図

D．畦畔状の高まり

4区では溝8に沿って2条（畦畔状の高まり1・2）、5区では3条（畦畔状の高まり3～5）検出した。畦畔状の高まり1・2は上幅2.2～4.5m、基底幅3.4～5.0m、高さ10～20cm、畦畔状の高まり3～5は上幅0.7～1.8m、基底幅1.4～3.2mである。最も残りの良い畦畔状の高まり3は上幅1.2m、基底幅1.8m、高さ40cmである。遺物は須恵器坏が出土しているが図示できない。

(2)　小沼遺跡の遺構と遺物

Ⅲ区では、土壙1基を検出した。

［土壙1］調査区の南側で検出した。平面形は東西6.0m以上の楕円形を呈するとみられ、深さは60cm以上である。遺物は出土していない。

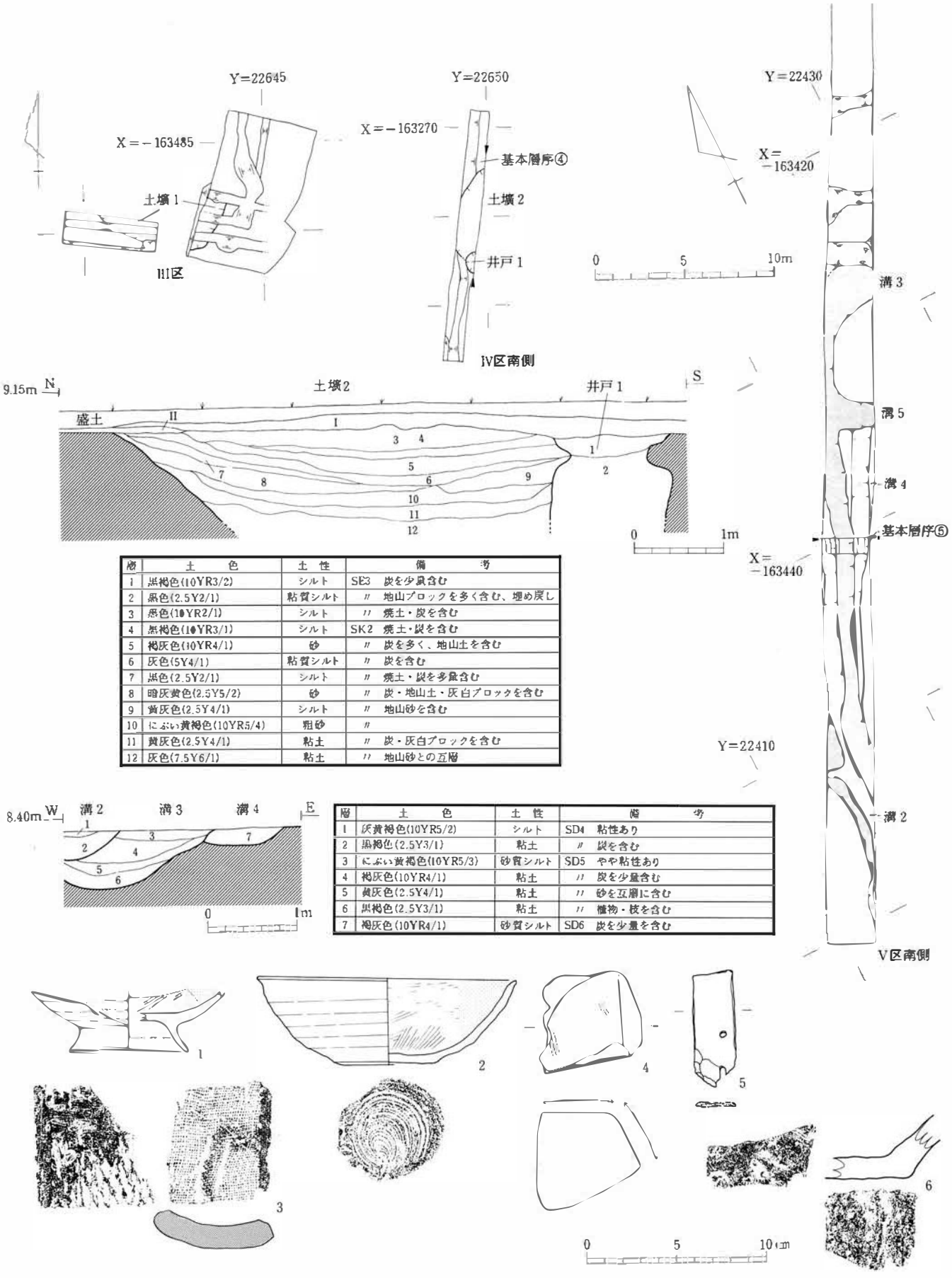
Ⅳ区では、土壙1基、井戸跡1基を検出した。

［土壙2］調査区南側で検出し、井戸1より古い。平面形は南北5.0m以上の楕円形を呈するとみられ、深さは1.0m以上である。堆積土は10層に細分され、自然堆積である。9層には灰白色火山灰のブロックが含まれる。

遺物は、非ロクロ調整の土師器甕、ロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕、瓦、石製品、木製品が出土している。土師器坏（第7図2）は底部が回転糸切り無調整で、口径に対する底径の比が小さく、口縁部が外反し、器高が高い。平瓦（第7図3）は一枚作りで凸面に縄タタキが施されている。

［井戸1］調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。土壙2より新しい。平面形は径1.3mの円形を呈するとみられ、深さ90cm以上である。断面形は円筒状である。遺物は出土していない。

Ⅴ区では、溝跡5条を検出した。南側で検出した溝2は溝3より新しく、20m分を検出した。規模は上幅1.1m、深さ32cmである。溝4は溝3より古く、16m分を検出した。規模は上幅1.0m、深さ20cm



層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	SE3 炭を少量含む
2	黒色(2.5Y2/1)	粘質シルト	〃 地山ブロックを多く含む、埋め戻し
3	黒色(10YR2/1)	シルト	〃 焼土・炭を含む
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	SK2 焼土・炭を含む
5	褐灰色(10YR4/1)	砂	〃 炭を多く、地山土を含む
6	灰色(5Y4/1)	粘質シルト	〃 炭を含む
7	黒色(2.5Y2/1)	シルト	〃 焼土・炭を多量含む
8	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂	〃 炭・地山土・灰白ブロックを含む
9	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	〃 地山砂を含む
10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粗砂	〃
11	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土	〃 炭・灰白ブロックを含む
12	灰色(7.5Y6/1)	粘土	〃 地山砂との互層

層	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	SD4 粘性あり
2	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	〃 炭を含む
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	SD5 やや粘性あり
4	褐灰色(10YR4/1)	粘土	〃 炭を少量含む
5	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土	〃 砂を互層に含む
6	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	〃 植物・枝を含む
7	褐灰色(10YR4/1)	砂質シルト	SD6 炭を少量を含む

No	出土遺構	種別	備考	口径	底径	器高	残存率	写真
1	土壙2	土師器・高台坏	外：ロクロナデ、底：不明→ロクロナデ、内：ヘラミガキ→黒色処理	−	6.5	−	1/4	
2	土壙2	土師器・坏	外：ロクロナデ、底：回転糸切り、無調整、内：ヘラミガキ→黒色処理	14.4	5.8	5.1	ほぼ完形	2−9
3	土壙2	平瓦	凸面：縄タタキ→手持ちケズリ（一部）、凹面：布目→手持ちケズリ（一部）、側面：手持ちケズリ、一枚作り				一部	2−10
4	土壙2	石製品・砥石	砂岩、二面使用、長さ：(4.9)cm、幅：(3.8)cm、厚さ：(2.9)cm、重：180g				一部	
5	土壙2	木製品・折敷？	柾目、孔2、長さ：(6.3)cm、幅：2.1cm、厚さ：0.3cm				一部	2−13
6	溝3	中世陶器・壺	外：下端ナデ、内：緑灰色の自然釉、常滑産				一部	2−11

第7図　III・IV・V区遺構平面図・断面図・出土遺物

である。北側で検出した溝1は上幅1.0m、深さ9㎝である。

［溝3］南側で検出した南北方向の溝跡で、溝2より新しく、溝4より古い。方向は東へ約18°偏している。溝5が接続し、北側で東に曲がる。長さ約40m分を検出した。規模は上幅2.5m、深さ65㎝である。断面形は逆台形を呈するとみられる。堆積土は4層に細分され、自然堆積である。遺物は、常滑産の中世陶器甕（第7図6）が出土している。

Ⅲ　ま　と　め

1．一本柳遺跡では古代（灰白色火山灰降下以前）の土壙・溝跡・小溝状遺構・畦畔状の高まりが検出された。Ⅰ－1・2区では、小溝状遺構群（畑跡）の後、土壙群がつくられる。Ⅰ－4・5区では、明確な耕作土や小畦畔は検出されなかったが、畦畔状の高まりが検出され、水田が存在した可能性が考えられる。これらの遺構の年代は、灰白色火山灰に覆われること、出土遺物から概ね9世紀代のものとみられる。この調査により遺跡東部の範囲が北側に拡大することが分かった。

2．小沼遺跡では古代・中世の土壙・井戸跡、溝跡が検出された。Ⅴ区で検出した大溝は、東側を区画する中世の区画溝と考えられる。なお、遺跡の東部で土師器・須恵器が採集されたことから、遺跡の範囲が南へ拡大することが分かった。

引用・参考文献

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状『考古学論叢』Ⅱ　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

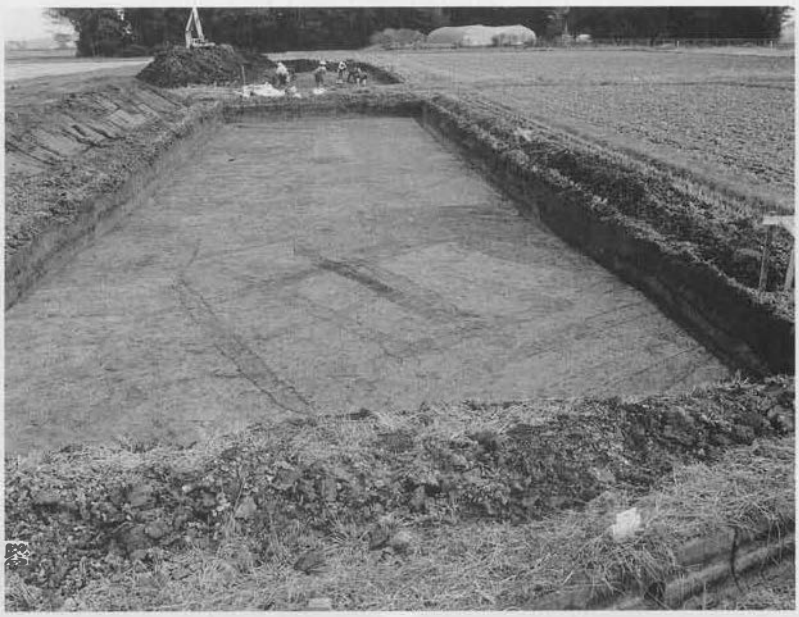
小牛田町史編纂委員会（1970）：『小牛田町史』　上巻

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所

茂木好光（2000）：「一本柳・小沼遺跡」『名生館遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第183集

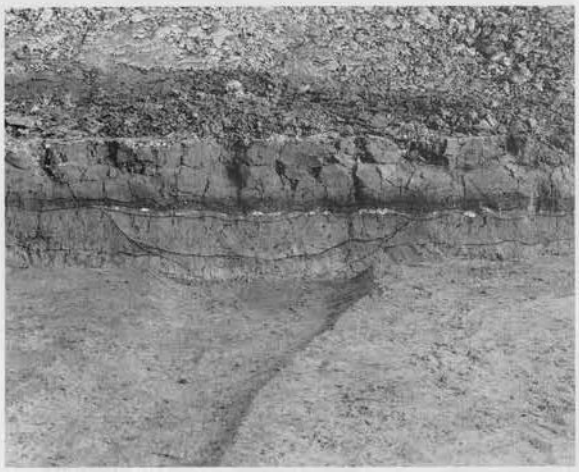
茂木好光・岩見和泰（2001）：『一本柳遺跡Ⅱ』　宮城県文化財調査報告書第185集

山田晃弘・伊藤　裕（1998）：『一本柳遺跡Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第178集



1．Ⅰ－1区全景
（北西から）

2．Ⅰ－2区全景
（北西から）



3．Ⅰ－2区溝5断面（南西から）

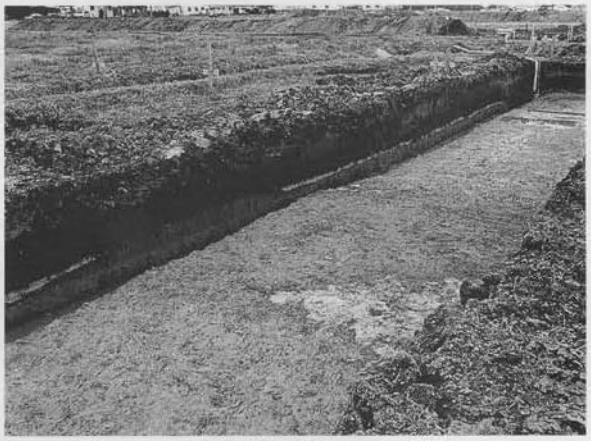
4．Ⅰ－2土壙3断面（南西から）

図版1

1．Ⅰ－3区全景（南西から）

2．Ⅰ－4区全景（南西から）

3．Ⅰ－5区全景（北西から）



4．Ⅰ－5区畦畔状の高まり3（北東から）

5．Ⅳ区土壙2断面北半（北から）

6．Ⅴ区溝2・3・4断面（南西から）

7

8

9

10a

10b

11a

11b

12

13

図版2

淀（よど）　遺（い）　跡（せき）

調　査　要　項

遺 跡 名：淀遺跡（よどいせき）　宮城県遺跡地名表登載番号：49022　遺跡記号：TP

所 在 地：栗原郡志波姫町沼崎道崎

調査原因：住宅地造成

調査主体：志波姫町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

古川一明、山田晃弘

調査期間：平成12年11月27日～11月29日

調査対象面積：20,000㎡

調査面積：　3,000㎡

調査協力：JA 栗っこ

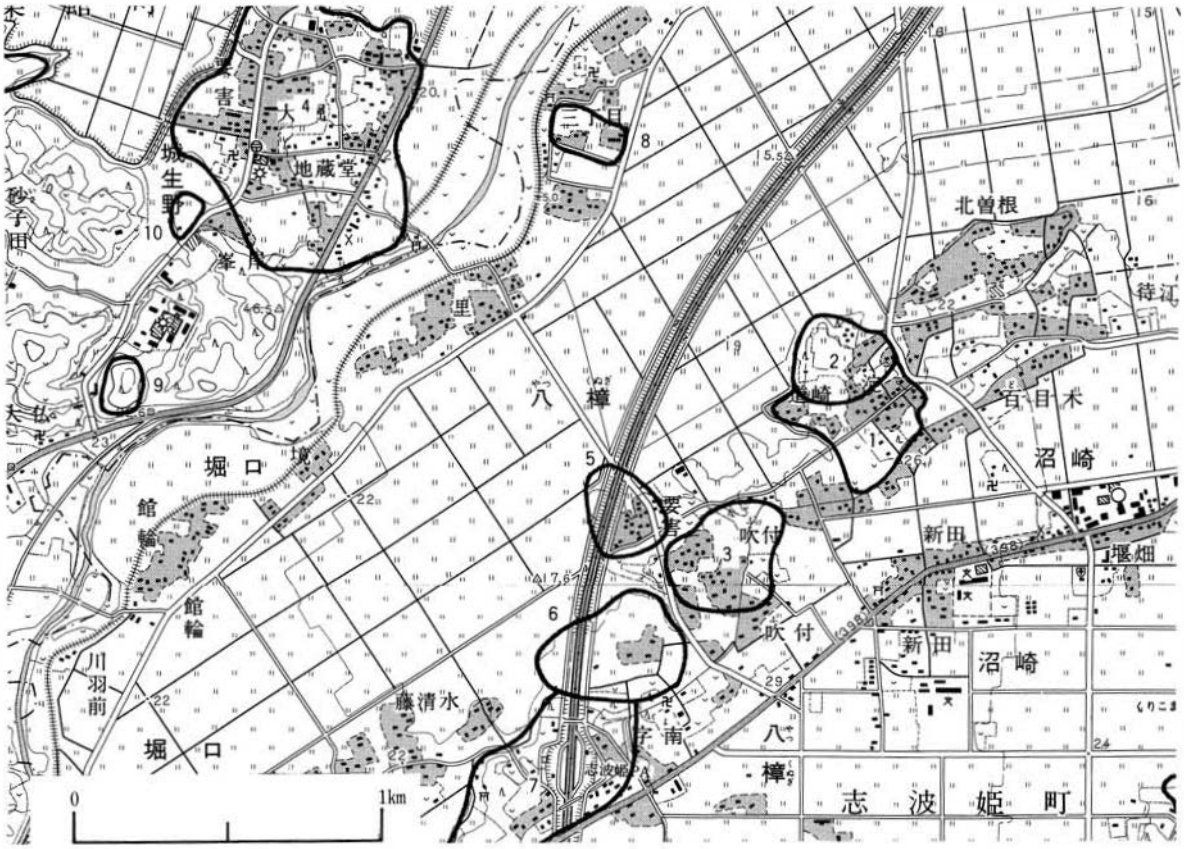
I．は じ め に

淀遺跡は栗原郡志波姫町沼崎道崎に所在する。遺跡の北部は、迫川及びその支流である一迫川によって形成された沖積地が広がり、南部は奥羽山脈から東に延びる築館丘陵が横たわる。遺跡は一迫川によって形成された河岸段丘の北縁部に立地する。

周辺の古代の遺跡をみると（第１図）本遺跡の北西約1.5kmには神護景雲元年（767年）に設置された古代城柵・伊治城跡が存在する（築館町教育委員会：1999他）。また本遺跡が立地する段丘北縁部には、御駒堂遺跡、宇南遺跡、鶴ノ丸遺跡、吹付遺跡など、奈良・平安時代の大規模な集落跡が連なっている。これらの遺跡は一迫川を挟んで伊治城跡と対峙する位置にある。

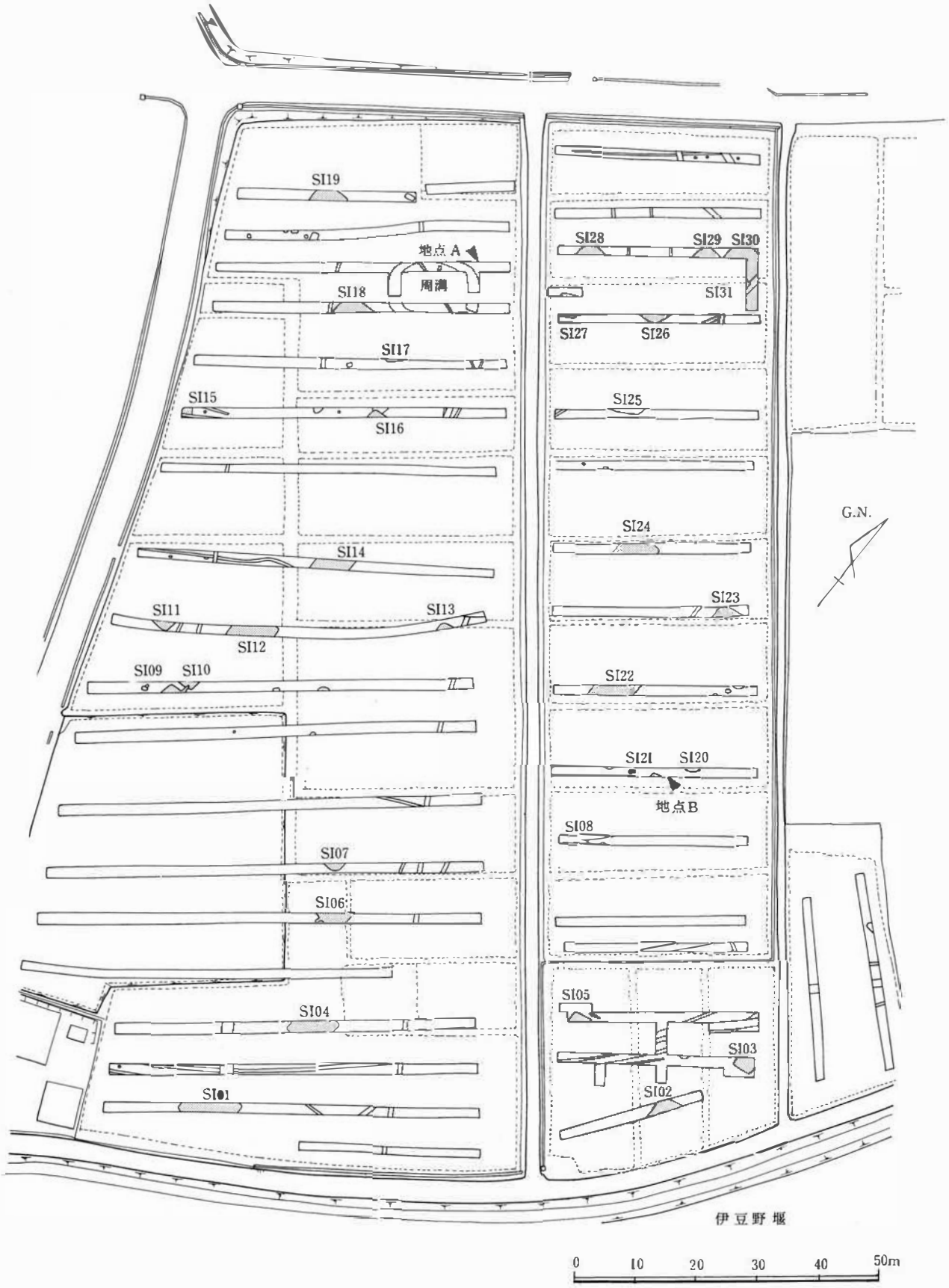
II．調査の方法と経過

平成12年、「JA 栗っこ」が、淀遺跡内の南部において住宅地の造成工事を計画したため、JA 栗っこ、志波姫町教育委員会、宮城県文化財保護課の三者で協議し、確認調査を実施することにした。調査は、対象地内の全域に６～９ｍ間隔で、幅1.8mの任意のトレンチを設定し掘り下げた（第２図）。その結果、竪穴住居跡31軒をはじめ多数の遺構・遺物が対象地全域で発見され、遺構の密度は希薄であるが、遺跡の範囲は対象地の四周に広がることがわかった。



No	遺跡名	立地	種別	時代	No	遺跡名	立地	種別	時代
1	淀遺跡	段丘	集落	旧石器・奈良・平安	6	宇南遺跡	段丘	集落・城館	縄文前・晩・弥生～近世
2	日良館跡	段丘	城館	中世	7	御駒堂遺跡	段丘	集落	縄前・弥生・古墳～近世
3	吹付遺跡	段丘	集落	奈良・平安	8	刈敷館跡	丘陵	城館跡	中世
4	伊治城跡	段丘	城柵	古墳前・中・奈良・平安・中世	9	大仏古墳群	丘陵	古墳	古墳
5	鶴ノ丸館遺跡	段丘	城館・集落	縄文晩・弥生～近世	10	長内屋敷遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡


SI19
地点A
周溝
SI18
SI17
SI15
SI16
SI14
SI11
SI13
SI12
SI09
SI10
SI07
SI06
SI04
SI01
SI28
SI29
SI30
SI31
SI27
SI26
SI25
SI24
SI23
SI22
SI21
SI20
地点B
SI08
SI05
SI03
SI02
G.N.
伊豆野堰
0
10
20
30
40
50m

第2図　遺構分布図

これらの調査結果をもとに、上記三者で再度協議した結果、「JA 栗っこ」側が、工事が遺跡に及ぼす影響を最小限にとどめるよう設計・工法・施設の配置などを検討することで合意した。

なお、調査区および発見された遺構の位置は、1/500の工事計画図に記入して記録とした。

III. 調 査 の 概 要

調査地区は、現況が水田、畑地、荒地で、地形的には南から北へわずかに傾斜しており標高25〜26 m である。遺構確認面は表土下20〜40cmのローム層上面である。

発見された遺構として竪穴住居跡、柱穴群、土壙、溝跡などがある。竪穴住居跡は31軒で、調査区全体に散在し、重複するものは少ない。住居の方向は、いずれもほぼ真北方向で、平面形は方形を基調とし、規模は一辺 3 m 前後の小型のものから10m 前後の大型のものまである。堆積土中に灰白色火山灰が認められるものが多い。掘立柱建物跡を構成するとみられる柱穴は西側のトレンチを中心に多数検出された。土壙・溝跡も多様な規模・方向のものが各地で検出された。

出土遺物には、土師器・須恵器・旧石器がある。土師器・須恵器は、8 世紀後半から 9 世紀にかけてのもので、ロクロ調整の土師器坏・鉢・甕、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕・壺などがある。図示できた遺物は第 3 図に示した。

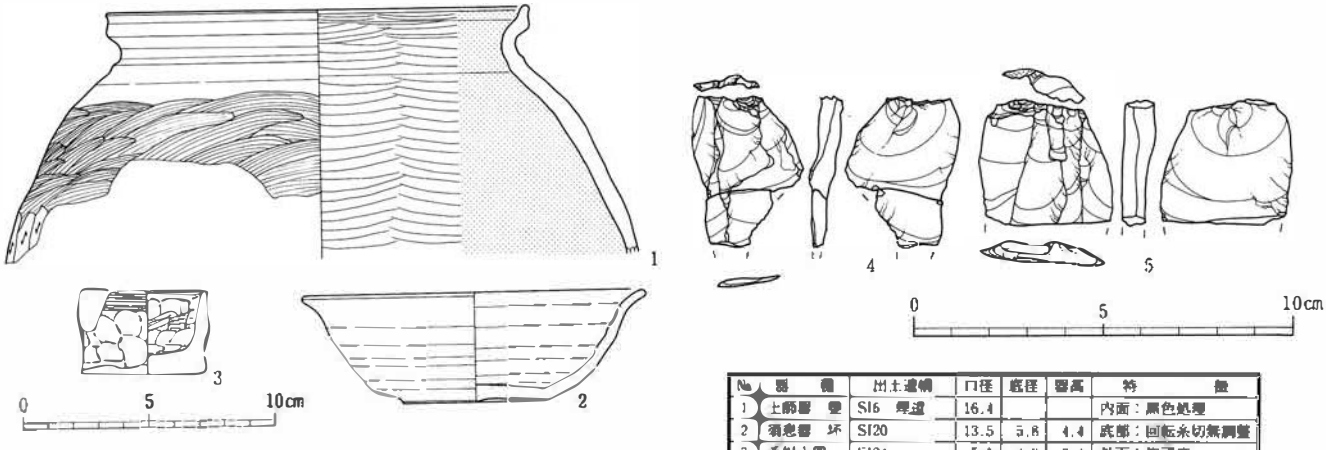
IV. ま と め

1．淀遺跡は一迫川南岸の段丘北縁部に立地している。

2．確認調査の結果、竪穴住居跡31軒、土壙、溝跡、柱穴などが検出され、土師器・須恵器・旧石器などが出土した。

3．遺構の年代は、出土遺物から奈良・平安時代と考えられる。

4．住居跡は広範囲に点在しており、奈良・平安時代の大規模な集落跡であることが確認された。



No.	器種	出土遺構	口径	底径	器高	特徴
1	土師器 甕	SI6 覆土	16.4			内面：黒色処理
2	須恵器 坏	SI20	13.5	5.8	4.4	底部：回転糸切無調整
3	手捏土器	SI24	5.1	4.9	3.4	外面：指頭痕
4	剥片	地点 A				良質珪質頁岩
5	微細剥片	地点 B				良質珪質頁岩

第 3 図　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	みょうだていせき
書名	名生館遺跡ほか
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第187集
編著者名	阿部博志・古川一明・須田良平・岩見和泰・吉野　武・引地弘行・稲毛英則
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL022-211-3682
発行年月日	西暦　2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
みょうだていせき 名生館遺跡 おおさきかまあと 大崎窯跡	みやぎけんふるかわしひがし 宮城県古川市東 おおさきあざまうだて 大崎字名生館	042048	27018 27206 ⋮	38度 36分 34秒	140度 53分 27秒	20000410～ 20000727 20001002～ 20001213	10,113 830	ほ場整備事業に伴う事前調査
ごうしゅうういせき 郷主内遺跡	みやぎけんかくだしまだ 宮城県角田市島田、 えだの 枝野	042281	03195	37度 56分 30秒	140度 48分 34秒	20000306～ 20000315	930	ほ場整備事業に伴う確認調査
いっぽんやなぎいせき 一本柳遺跡 こぬまいせき 小沼遺跡	みやぎけんとおだぐんこご 宮城県遠田郡小牛 たまちいっぽんやなぎこぬま 田町一本柳、小沼	045039	39044 39033	38度 31分 26秒	140度 05分 42秒	200001113～ 200001207	1,750	ほ場整備事業に伴う事前調査
よどいせき 淀遺跡	みやぎけんくりはらぐんしわ 宮城県栗原郡志波 ひめちょうゆまさきあざみちさき 姫町沼崎字道崎	045292	49022	38度 45分 20秒	141度 03分 45秒	20001127～ 20001129	3,000	住宅地造成工事に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名生館遺跡	集落跡	縄文、弥生、古代、中世	塀跡2、掘立柱建物跡27、竪穴住居跡10、井戸跡8、溝跡166、土壙389	土師器、須恵器、硯、縄文土器、弥生土器	名生館官衙と密接に関わる集落、関東系土師器出土
大崎窯跡	窯跡	近世～近代	窯跡1、井戸跡2、溝跡、土壙	陶器（皿 椀、鉢、甕、鍋、瓶、水注、蓋、卸金、土管、瓦）、窯道具、窯壁、磁器	幕末～明治にかけて日常雑器(陶器)を生　産た窯
郷主内遺跡	集落跡 館跡	古墳前期 古代 中世	埋納遺構1、井戸跡8、溝跡63、土壙15	土師器、中世陶器、密教法具（独鈷杵、五鈷鈴など）、曲物	中世の密教法具が一括出土
一本柳遺跡 小沼遺跡	集落跡	古代	土壙16、溝跡10、小溝状遺構4、畦畔状の高まり5、井戸跡1	土師器、須恵器、瓦、石製品、木製品	
		中世	溝跡5	中世陶器（常滑）	
淀遺跡	集落跡	旧石器（後期）、古墳、古代	古墳跡1、溝跡17、竪穴住居跡31、掘立柱建物跡8、井戸跡1	旧石器、土師器、須恵器	古代の大規模な集落跡

宮城県文化財調査報告書第187集

名 生 館 遺 跡ほか

平成13年3月25日印刷
平成13年3月30日発行

発 行 宮 城 県 教 育 委 員 会
仙台市青葉区本町3丁目8番1号

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24-24